
らき すと 我が家に大集合! ? “ 幸せをありがとう ”

十波 悠真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき すた 我が家に大集合！？ “ 幸せをありがとう ”

【Nコード】

N 5 6 4 1 G

【作者名】

十波 悠真

【あらすじ】

だから俺たちは今を笑った……。みんなを思い出した時が笑顔であるように……。さよなら、みんな……。そして……。幸せをありがとう……。

第1話 夏といえは（前書き）

彼方からの光の続編です

第1話 夏といえば

「つかさー、そろそろ行くわよー」

「ふえっ!?! お姉ちゃんもう行くのー!?!」

いやもうって…。

あんた今何時だと思ってるのよ……。

「ちよつと待つてええ〜」

我が妹が子犬のようにバタバタと走る。

「はいはい、待つててあげるから転けないように気をつけなさいよ」

「う、うん。 えと、えと、サイフに携帯にお菓子に水着にそれから……うわあぁっ!?!」

「……………」

ああ……やっぱり転けちゃった…。

玄関にたどり着く前に廊下に伏せてしまふ相変わらずなつかさ。

私は近づいて手を差し伸べる。

「つかさ大丈夫?」

「う、うん。 ありがとうお姉ちゃん」

「……………」

そんな無邪気な笑顔を見せられると逆に照れくさくなる…。

しかしかさのドジッぷりは十八年間散々付き合わされて来たためすっかり慣れてしまったわね。

ドジッぽいところが直るまで私が見守ってなきゃなんだか不安だわ…。

「ほら、行くわよつかさ」

でも、そういうところがつかさの可愛いところでもあるんだけどね。

「うん」

天気は快晴。

雲は一つもない。

そして今日の私は気分がいい。

なぜかって？

ふふ、それは今からある場所へ出かけるから

「だる…」

夏休みに入ってから三日目…。俺はずっと家にいる。

あ、いや何も外に出たくない訳ではないぞ。

俺は時期を狙っている。

蝉がギヤーギヤー鳴いているこのクソ暑い時に、いつ涼しくなるかを見極めているのだ。

だがなかなかスッキリした日が来ない…。

今は圧倒的に夏だからな。

ああそくだよ認めるよ。

俺はみんなが思っている通り引きこもりさ。

結局俺はアリですら仕事を頑張っているのにも関わらず家に引きこもっているだらしない奴さ。

などと適当に一人会話を脳内でしていると、

ピンポン。

「つーばきくーん!!」

インターホンと同時に俺の名を呼ぶ声外で響き渡る。

「……………」

おいちよつと待て。

なんだこのギャルゲーみたいな呼び方は…。

近所迷惑+俺がめっちゃくちや恥ずかしいじゃねえか。

普通インターホン押すだけでとどまっておくのが常識なんじゃないのか？

「…………てかこんな呼び出し方を試みるのは一人しかいねえ」
泉こなた…。

ちよつと前に俺の彼女だったやつだ。

しかしちよつと訳があり一日でその関係は終わってしまい、今は友達として成り立っている。

「どうせあいつのことだ。 夏休み利用して遊びにでも来たんだろ
うな」

「さすが椿君、よくわかってるじゃん」

「そりゃあな、なんだってあいつは……………」

俺は言葉を失う。

何かおかしいよな…。

今は一人暮らしの部屋から女の子の声がするなんてことは…。

冷静な表情をしながらも声がしたドアを見る。

そこには扉以外のものが瞳に反射した。

「やほー」

「……………」

ごしごし。

なぜかこなたがそこにいるように見える。

あーこれはきつと幻なんだろう。

念入りに目を擦ったらきつと治っている。

ごしごしごしごし。

はい、治った！

「…………？」

「……………」

おかしいな。

こなたがそこにいるってことはまだ目の調子が悪いみたいだ。

あ、これが節穴というやつか？

「ってんなわけあるか！！」

俺はツツコミを自分自身にいれる。

「なんで勝手に入って来てんだよ！？」

「えー、今までだって普通に入って来たんだからいいじゃんかあ
そりゃ以前のことじゃねえか。

「前とは事情が変わってんだからダメに決まってるだろっ」

「まあまあ叫ばない叫ばない お詫びにサービスするからさ」

「色気ゼロの姿してんだから無い胸を突き出すな」

「な、なにをー！」

こなたが突撃してきたので右手でこなたの頭を押さえる。

つたく、昼だからって鍵を開けっ放しにしてたら危ないな。

今度からは気をつけないと。

「陵桜大プール？」

「そ、高校最後の夏休みに突入したんだしみんなで楽しみたいじゃない？」

いやだからそこで無い胸を突き出すなって。

けどようやくこなたがここに来た理由がわかった。

みんなでプール、こいつにとってそういうのはいいことだ。

こなたは基本インドア派だから外に行かないとな（人のこと言えないのになぜか上から目線）。

しかしいきなり言われてもちよつと困る。

まあこなたはマイペースだから仕方ないっていったら仕方ない…。けどこういう風に接してくれるからこいつの周りの空気は和むんだよなあ。

「だから今からみんなと」

「つて和んでる場合じゃねえ!!」

直ぐ様こなたに反対の意見を提出する。

「俺は絶対に行かないぞ!」

「えーっ!?!」

こなたがブーイングのサインを出す。

しかしそれに怯まず俺は言葉を発する。

「なんでよりによってあそこのプールなんだよ!!」

「え、だって近いし大きいしいろんなのあるから楽しいじゃん」

「……………」

も、最もな意見だ……。

確かにこの真夏の中、近くにプールがあるのにも関わらず、わざわざ遠くのプールに行くなんてバカだ。

それに陵桜大プールといえばここらじゃ一番有名で子供、大人、そしてカップルなどに大人気な場所だ。

そんないいところに行かないならどこに行けばいいんだってことになる。

つまり俺は間違っている。

だがあそこのプールだけは絶対に行きたくない…。

もし“あいつ”がいたら…。

“一年のくせに調子乗ってんじゃねえぞこら!!”

「……………」

過去の嫌な記憶が蘇る。

「頼むこなた！　どこか別の場所のプールにしてくれえええ！！」

「え、で、でももうかがみたちと約束しちゃったし、多分みんなもう陵桜大プールに集まってきたると思うよ？」

「うう……！！」

みんなを待たせているならここで場所を変える選択肢はなくなってしまった…。だ、だがまだ別の手がある…！

「そ、それなら俺は行かないってことにしといてよ」

しかしこなたは反発する。

「それはダメだよっ！　みんな椿君を待つてるんだから！」

「いやだけど……。あ！　なんか急に頭が痛くなってきたなー！

これはもうプールには行けないなー！　あー本当に残念だなー！」

「ハイハイ、じゃあ行こうね」

ガシッ。

こなたはしつかりと俺の手首を掴む。

「え、いやだから俺は頭が」

グイッ！！

「イテテテテッ！？　ギ、ギブ！　ギブアップ！」

こなたが強引に腕を捻るあまり、思わず叫んでしまった。

「行くよね？　椿君」

振り返った後にニッコリとこなたが笑いかける。

しかしその裏ではどす黒いオーラが充満していた。

同時に俺の勘が危険警告のブザーが鳴り響いた。

「は、はい、喜んで…」

結局俺はこなたと行くんじゃない、連れていかれる形になった……。

第2話 子供と大人の境界線

「椿君、急いで急いで！」

「そ、そんなこと言われても……もう……足がしんどい……」
自転車で陵桜大プールまで約二十分。

しかし俺はその二十分ですらもたなかった。

こなたは俺の先に行くが時々俺をチラッと見ては俺の方ばかり伺う。
多分こいつは気を遣ってくれてるんだろ……。

やつぱりいいやつだよな……。

「ねえ椿君」

俺が感謝の気持ちでいっぱいになっているとこなたが話しかけてくる。

「なに？」

「今さら言つのもなんだけどさ、服、パジャマのまんまだよ？」

「……………え？」

俺はこなたの言葉を頭の中で復唱する。

パジャマのまんま？

俺はそこで自分の服装に気がついた。

サーーーーッ……………。

一気に血の気が引いた。

ヤバいとかそういうレベルじゃない。

ヤバすぎる！！！！

「ぎゃあああああつ！！」そういえばこなたに強引に連れてこられたせいで着替えすら忘れていた！
つてか俺水着すら忘れてるぞ！！

持つてきているのはサイフと携帯、そしてパジャマ！！
少なくとも今からプールに行きますって状況じゃない！！

「いやー、私も最初っからおかしいと思ってたんだよねー」
こなたがニヤニヤしながら言う。

「じゃあ最初から言えよ！！」

「まあまあ、可愛いからいいじゃん。ほら行こっ」

「~~~~~っ！！！！」

顔を真っ赤にしながら俺は天に叫んだ。

「くそつたれえええーっ！！！！」

「あ、お姉ちゃん。こなちゃんと椿君来たよー」

つかさは人差し指を二つの自転車……いや、一つの自転車に向ける。

「な、なんで二人乗り？」

かがみは目を凝らしてよく見る。

なぜか椿がこなたの自転車の後ろで気絶している。

いったい何があったというのだろう……。

「ごめーん！ ちよつと椿君連れてくるのに時間かかった」

こなたが汗をかきながら自転車を止める。

するとゆたかは後ろで白目を向いてる椿について恐る恐る聞いてみる。

「お、お姉ちゃん。何で椿君が気絶してるの？ それにこの服って……」

ゆたかは見覚えのある椿の服装に注目する。

「……たしかこれってパジャマだったんじゃない……」

みなみちゃんもそれに気付く。

二人とも家でこのパジャマ姿を何度か見たため覚えていたのだ。それはつかさ、みさお、かがみ、パティ、ひよりも同様だった。

「いや実はね、椿君もさつきそれに気づいていきなり“帰る！！”とか言い出してさー。でもそんなことしたら時間が勿体無いから私が逃がさないようにパジャマの襟を引っ張ってたら椿君いつの間にか気を失って、

「へ、へー……」

かがみさんの顔がひきつる。

それで椿君が自転車乗れなくなったからその自転車はそこら辺に止めて二人乗りでここまで来たって訳ね…。

「と、とにかく大変だったみたいですね」

みゆきさんが苦笑いしながら氣遣う。

「それより早く椿君を起こして中に入らないと遊ぶ時間が減るんじゃない……」

「あやのの言う通りだぜえ」

「そ、それもそうね。おーい、椿君起きろー」

かがみが椿の耳元で命令するが、
「……………」

全く反応はない。

「マツタく才かないみたいデスネ」

「じゃあ今度は私が」

ひよりがかがみの次に近寄る。

そして一言呟いた。

「私のもんになっちゃいなよ……」

ガバッ！！

椿が勢いよく体を起こす。

「やったッス！」

ひよりは嬉しそうにガッツポーズ。

対するかがみはというと……。

「……………」

ちよつとショックを受けていた。

「うーん……」

男の着替え場で俺はずっと考えていた。

「なんだかずっと寒気がする……」

俺が気絶している間に何かされたのか？

いやしかし体を見る限りではどこにも異常はない。

じゃあこの変な鳥肌は何が原因なんだ？

「むう……」

やはり考えても仕方がないか。

俺は着替え場で女性陣と分かれる際にこなたから預かった袋を開ける。

なんでもここに俺の水着を用意しているらしいが、ふとここで疑問がまた一つ。

「あいついつの間に俺の水着とか用意してたんだ……？」
だがやはりない脳ミソで考えてもラチがあかない。

ネタがわからないマジック。

人はこれをこなたマジックと呼ぶ……。

「それにしてもまさかここにくるなんて……」

俺はここには何度か来たことがある。

だから楽しい場所だってこともよく理解している。

だが“あいつ”がここで働き出したのなら話は別だ。
なのになののやつ……。

「……ちくしょう……」

とりあえず“あいつ”にだけ会わなかったら大丈夫だ……。
うん、大丈夫……大丈夫。俺は自分によく言い聞かせた。

着替えが終わっていざ表へ。

しかし外に出た瞬間、バカみたいに元気な太陽が現れた。

「うわ……あつ……」

これはさすがに洒落になんねえ……。

暑いのは上だけじゃなく下もだった。

太陽からの熱が伝わって裸足では歩けない地獄のコンクリートとな
っていた。

「だけど我慢しなきゃな……」

ここは男を見せようと勇氣ある一歩を今……、

踏み出そうと……、

した瞬間に……！

「椿君隙あり」

「とおりゃー！」

「うお！？ とつとつ！？」

ザブーンッ！！

こなたとみさおに後ろから勢いよく背中をタックルされてそのままプールの中に突っ込んでしまう。

「ぷはっ！」

ハアハアッ！ あ、あんにやろーどもが！

プールから顔を出してあの二人を睨みつけると、

「……………え？」

かがみさんが二人を叱っていた。

いや、それだけなら別にいつもと変わらない。

けど目線を下にやると……。

「ビ、ビキニ？」

あまりにも予想外。

かがみさんがビキニ姿になるとはこれっぽっちも思っていなかった。

そのかがみさんが二人から離れて俺の元にやってきて、

「椿君大丈夫？」

手をさしのべてくれた。

思わず俺はその手に掴まりプールからあがる。

「あ、ありがとう」

なんたるこのドキドキ感……。

いつもみたいにやり取りができない……。

つてか直視できない……！

でも何か言わないと……！

似合ってるとか何か……！

何かかがみさんが喜びそうな言葉……！

そこで俺は苦し紛れに言う。

「か、かがみさんにビキニはまだ早いんじゃない……」

つてなに言ってたんだ俺は——！？
今さら後悔。

しかしもう手遅れだ。

カチンとキレたかがみさんの手が震えだす。

「胸がみゆきより小さくて悪かったわね——」

刹那、かがみさんのパンチが俺のみぞおちに！

「ゴフウッ！？ ……そ、そんなこと言っていないのに……」

「まあお約束だよー」

こなたがこの状況を楽しみながら言う。

そして俺はまたプールに沈んだ。

第3話 覆う恐怖

「椿君。遊ばないの？」

つかさが影の下で横になっている俺に問いかける。

でも俺は入れません。

なぜなら先程かがみさんの一撃でHPがなくなったからだ。

復活まではもうしばらくかかる。

返事として俺は軽く手を振った。

「椿ー、元気になったらちゃんと入ってこいよー」

みさおがそう言ったことにより俺への絡みは終了する。

みんなは流れるプールの横にある一般的なプールでビーチバレーならぬプールバレーをして楽しそうにしていた。

「ふう……」

小さくため息をつく。

「俺…、なにしてんだろ……」

プールに来たのに入ろうとはしない。

まあほとんど俺のせいだけど……。

「……………」

何もすることがないのでみんなが遊ぶ様子をジーツと眺める。そうなつてくると色々と考えてしまうのが当たり前だ。

「……みゆきさんとパティってやっぱりデカインだなあ」
「……なんというかデカイよなあ。」

つかアレを見て他に感想が出てこない。

「……つてなに見とれてんだ俺は……」

貧乳はステータスって誰かが言ってたじゃねえか。

俺はそれを肯定するようにこなた、ゆたか、みなみちゃんを見る。しかしなんかこう根本的に違うかった。

なんていうんだろ……、色気とは別の可愛いつていうのはあるな……。

うん、それも魅力のうちだ。

「よし」

なんとかフォローしてやったから三人とも許してくれ。

「椿君もうそろそろ遊ぼうよー」

「ん？ ああ、そうだな……」

体も十分に休めたしそろそろ俺も遊ばかな……。

あ、でもその前に、

「悪い、ちよつとトイレ行つてからでいい？」

「うんわかったー」

俺は急ぎ足で少し離れた場所に設置されたトイレへと向かう。

しかしトイレは人が多くて混みぎみになっていた。

「うわっ……めんどくせえな」

こんなに人がいるなら別のトイレに行つた方がいいんじゃないか……。

「……よし、遠いトイレに行こう」

そっちの方が時間短縮になるだろ。

俺は熱いコンクリートを影で避けながら向かう。

そしてやつとのことたどり着いた聖域。

こっちは多少人はいるものの向こう程ではなかった。

つまり当たりクジである。

「さっさと終わらせてみんなと合流しないと……」

そう思った矢先……。

ドンッ！

「いてっ」

誰かと肩をぶつける。

普通ならどちらもバランスを崩してしまうだろう。

しかし向こうはかなり鍛えられているのか、全くバランスを崩さず何事もなかったかのように立っていた。

それに対して俺はあまりの衝撃に尻餅をつく。

「……………」

なんつう肩してんだよ…。

俺が呆気にとられていると、

「……………いてえ」

「…？」

「いてえって言うてんだよ」

ギロリと睨み付けてくる。

その迫力に圧された俺は頭を下げた謝った。

「あ、す、すいません。 ちょつと急いでたもんで…」

これで事を済まそうとするが、

「ん？ お前まさか桃原か？」

ドクンッ

「…え？」

な、なんだこの威圧感は…。

どこかで感じたことがある恐怖…。

まさかこいつは…。

「さ、坂上……………先輩……………」

う、嘘だろ…？

い、いや、ま、間違いない。

短髪に百八十五センチ程の体、そしてこの目付き。

サッカー部の元先輩である坂上あきら先輩以外何者でもなかった。

「久しぶりじゃねえか。 天才君」

俺は目を合わせられなかった。

体が動かずただ硬直してしまう。

「よかったなあ。前みたいに虐めてやりてえんだが、ここじゃ暴力はさすがにまずい」

「……………」

「てめえだけは絶対に許さねえからな…。才能だけで優遇されやがって」

「お、俺、トイレに行きたいんで…」

そう言っただけで逃げるように口実をつくと後ろから脅しの声が聞こえてくる。

「俺はあんときの恨みを絶対に忘れねえからな…」

そう言い残して足音がだんだんと遠くなる。

ゆっくりと後ろを振り返るとそこには坂上先輩の姿はなかった。

「……………」

この時、俺の脳裏にまたあの言葉が響く。

“一年のくせに調子乗ってんじゃねえぞこら！！”

「なんで……………」

なんで今にもなっただけで手が震えてるんだよ…。

俺がビビってるってことか…？

もう五年も前の話だってのに…………？

俺はその場から離れようとしたがまだ動けずにいた。

嫌な過去が冷や汗をかかせる。

空を仰いでも気分は華やかにはならなかった。

「……………いつまで俺は坂上先輩から逃げなきゃなんねえんだよ……………」

俺は平静を装いながら皆の元に戻る。

けど手の震えは一向に止まらない。

「……………」

さつきまで楽しかった気分はもうどこにもなかった。

「椿君遅いよ」

「…………え？」

こなたが頬を膨らませていた。

そうか…。

そっぴやみんなと遊ぶんだった……。

なんかすっかり忘れていた……。

「椿君どうかしたんですか？」

みゆきさんが顔を覗いてくる。

「あ、いや……」

俺は動揺を隠す。

コイツラに言っても心配をかけるだけだ。

ならこのまま黙っていよう。

「べ、別になんともないよ」

「……………そうですか。それならいいんですけど」

そう言いながらもみゆきさんは何か引つ掛かりがあるような表情をしていた。

またみゆきさんには嘘をついてしまった…。

昔も似たような嘘をついたことがある。

だけど今回だけはみんなを巻き込みたくない。

坂上先輩は何をするかわからない人だし、これは俺個人の問題だ。

今日ではできるだけ坂上先輩に合わないよう細心の注意を払わないと……。

“あんときの恨みを絶対に忘れねえからな……”

「……………」

でももしかた会ったその時…、俺はどうしたらいいんだ…。
俺は拳を見つめる。

ケンカが強かったらビビることなんかないのに…。

「……………」

この時ばかりは力の無い自分を恨んだ…。

第4話 そこに山があるから登るのです

皆と合流した俺は現在水中バレーで盛り上がっていた。

チームはみんなが初めに決めており、かがみさん、みゆきさん、ゆたか、パティ、あやのさん、そして俺が加わって六人。

相手はこなた、つかさ、みなみちゃん、みさお、ひよりの五人チーム。

状況はあと一得点でこっちが勝つという切迫詰まった展開だ。

「椿君パス！」

「よっしゃまかせろっ」

あやのさんからのトスに俺が合わせた。

振り抜いた手は綺麗にビーチボールに当たる。

ボールはそのまま真っ直ぐ飛ぶが、

「さーせーるーかああー！！」

胸まで水があるにも関わらず素早い反応でみさおが端っこに行くボールを右手で防ぐ。

「ナイスみさきち」

こなたがそれを拾って最後には、

「……決めますっ」

みなみちゃんが高い身長を生かしてかがみさんのガードをすり抜けた。

「やばっ！」

「任せてください！」

しかしそこはみゆきさんがカバーする。

「よし！」

今度はこっちの番だ！

次はゆたかがトスをしてパーティに回ってくる。

「コレでキめなきやオトコじゃないネ！！」

いやどっちにしてもオトコじゃないから。

漫画にあるセリフを適当に言いながら放ったパーティの球はつかさのちやうど真ん中に行く。

「つかさっ！」

こなたがつかさの左に位置する。

しかしそこにちゃんとつかさがレシーブできるか……。

「ふわあっ！？」

やっぱりだめだったか。

つかさがレシーブしたボールは後ろに位置するひよりに渡る。

「よし任せるツス！」

ひよりがちゃんとフォローしてボールをトスする。

そこには再びみなみちゃんが。

「…今度こそっ」

みなみちゃんは狙いを絞る。

だが視界にたまたまゆたかの姿が入った。

「……っ！（ゆたかのところにボールを打つたらししたら頭に当たって気絶するかも……！）」

みなみちゃんは体を捻って無理矢理ゆたかの位置とは逆の右を狙う。しかしそこには、

「さっきのお返しよっ」

かがみさんがブロックに入っていた。

両手に当たったボールはみなみちゃんの横に落ちた。

「「やったー！！」」

パーティとかがみさんが手を合わせる。

後ろではみゆきさんとあやのさん、そして俺も近くにいたゆたかと喜びを分かち合う。

対する向こうも…。

「いやー惜しかったねー」

「まったくだぜえ」

「……すいません。私に変なとこに打ったせいで負けてしまい……」

「そんなの気にしないでいいよー　みなみちゃんの優しいところも見れたしね」

「そうツスよ。　楽しめたからそれで十分ツス。（別訳：今のはネタになるから逆によかったツス）」

「わたしも楽しかったー」

つかさも笑顔でいた。

いや、つかさだけでなくみんなが楽しんでいた。

やっぱり勝ち負け関係なく楽しめるっていいことだよな…。

「ふう…　なんか小腹空いてこないツスカ？」

「確かにそうだな…」

この水中バレーは楽しいのもあるが激しい運動を要する。

その為お腹がかなり減ってくる。

ちようどん売店もあるしお金もかなり余裕ある。

ここは一つおごらせてやろうかな。

「俺が買ってくるよ。　みんな何がいい？」

「ツバキもしかしておごってくれるんデスカ!？」

「ああ、今日は特別だ」

「じゃあ私は焼きそばがいいツス！」

「私はぜってえにカレーだー！」

次々に注文されるメニューをメモメモ…。

一人じゃ持ってこれないのでこなたとかがみさん、あやのさん、そしてみゆきさんが一緒に来てくれることになった。

「じゃあ行ってくるよ」

俺たちは体を少し乾かした後、サイフを取り出し歩き出す。

場所は案外近い場所にあるので行くのには時間はかからない。

だが、並ぶのには多少待たなければならぬ。

お腹が空いたのは俺たちだけじゃないからな…。

「それにしても……」

列に並び始めて五分。

俺は目の前の小さい背中に注目。

かがみさんやあやのさん、みゆきさんは十分高校生の範囲内だ。ただど一人だけなんか小学生がいますと思えてもしょうがない。

貧乳はステータスだとしてもここまで背が小さいとステータスとかの問題じゃないよなあ…。

それにこのアホ毛を見てると抜きたくなってくる。

つてか抜けるんじゃないだろうか？

もし抜けたらこいつのバカが治るかも？

俺はそつとこなたの頭に手を添える。

そして……！

「おりやつ」

バカの一本釣り！

「あいてててっ！？」

こなたの髪の毛がググツと上がる。

「いきなりなにするの！？」

「あれ、やつぱり抜けないね」

「抜けるわけじゃないじゃん！」

「いや抜けたらバカが治るかな？つてふと俺の好奇心プログラムに核心ついたんだけどなあ……」

「核心つて言わないよ！まさかの思い間違いだよっ」

こなたはちよつと涙目になっていた。

思いつきりは引っ張ってないんだけど冗談にしてはやりすぎたかな…。

「ごめんごめん、ホントについ手が出たんだって」

「まったくっ！女の子に対してやることじゃないよっ」

プンスカと頬を膨らませて怒りを表していた。

しかし言わせてほしい。

そこに山があるから登るようにアホ毛があつたら抜きたくないと。

第5話 兄と妹

食事が済んで小腹を埋めたところにこなたが、

「ねえねえ！ みんなでアレ乗らない！？」

やけにテンション高めに叫ぶ。

「あの、泉さん。アレというのはいったい……」

「アレだよアレ！」

こなたが指先を頼りに辿っていくとそこには陵桜大プールの大人気アトラクション、“大スクリーンスプラッシュウォーター”が聳え立っていた。

このアトラクションは確か高さ二十メートル程のところからぐねぐねと三つの曲がりくねった管みたいなのを滑って下まで行くアトラクションだ。

お尻を痛めないように水も一緒に流れ落ち、そしてスピードは体勢によって自在に調整できる。

こういう系はなかなかの人気をキープしているのだが、敢えて言うおう。

俺はこのアトラクションには苦い思い出がある。

別に嫌いなわけではない。

ただ辛い思い出があるだけだ。

今から八年前くらいのことだろうか、俺は友達とここに遊びに来ていた。

そしてこのアトラクションで競争しようという話になり、俺は正々堂々と勝負を受けた。

三つの管の中から俺は一番右の管を選んだ。

そしてスタートの合図をみんなでかける。

そこまでは至って普通、日常よくある展開だ。

いいスタートも切れて勢いもある。

このアトラクションは姿勢を伸ばして仰向けで滑るとかなりのスピードが出る。

逆にスピードを落とすときは体を起こして滑り台を滑るような体勢にすればよい。

だが俺はそんなブレーキなど一切しない。

勝つためには常にトップスピードじゃなければならないからだ。

そんなにスピードを出して落ちはしないのかと心配する人もいるだろう。

だがそこは設計ミスがない限り大丈夫なのだ。

しかし落とし穴はいきなり現れた。

最終的には三つの管は一つの専用プールに落ちる。

ゴール近くになると減速するように滑る前の看板に表示してある。

なぜなら管からプールに行くときスピードがあるとかかなり痛いらしい。

だが、俺は勝負に拘るあまり、スピードを出しすぎてしまった。こうなったらもう手遅れだ。

専用プールに飛び込むような勢いで一気に滑り落ちた。

ドバーンというでかい音と同時に俺の体は水に包まれる。

とさらに同時に俺のはいていたパンツが脱げてしまった……。

プカプカと浮かぶパンツに従業員どころか他人ですら大笑いしてかなりの恥辱を受けた。

実はそれ以来このアトラクションには来ていなかった。

顔を覚えられてると思って恥ずかしかったからだ。

だがさすがにもう忘れてくれてるだろう。

「俺はちよつと行きたいかな…」

高いところはあまり好きじゃないんだが二十メートルだったらまだ余裕だ。

「んじゃみんなで行こー！」

こなたが動き出すとみんなも足を動かし始める。

「……………」

二十メートルの高さにまでは階段で自力に行かなければならない。その階段の一步目の横には小さい看板が。

そこに書かれているのは、

“ スタートの高さが二十メートルから二十四メートルにアップ ”

……………聞いてませんよ？

なに二十四メートルって？

罰ゲーム？ これはなにかの罰ゲームですか？

「うおーっ！ 高さアップだってよ！」

俺とは裏腹にみさおがやたらハイテンション。

「なあなあ！ 早く行こーぜ行こーぜー！！」

「ハイハイ、二回も言わなくていいから落ち着きなさいって」

かがみさんもワクワクを隠せないのか、ちよつと楽しそうな顔でみさおを宥める。

二人が先に階段を登りだしそれに続くようにこなたやパティなど第二軍が元氣よく駆ける。

だが第三軍はそんな風にはいかなかった。

階段を上がる毎につかさとゆたかの不安な顔が目立ってくる。やはり怖いのだろう。

その気持ちはよくわかる。
なんせパンツが脱げちまうかもしれないからな……。

遂にたどり着いた頂上。

だがさすがは大人気アトラクション。

順番待ちが多く、長いこと待たなければならなかった。

その間、こなたたちはこの二十四メートルを利用して景色を楽しんでいた。

でもつかさとゆたかはそこまでの余裕はなかった。

「つかさ、ゆたか、大丈夫か？」

「私はなんとか大丈夫かな……」

「わ、私も……」

「……………」

つかさはホントに大丈夫そうだ。

しかしゆたかは泣きそうな顔で言うから逆にほっとけない……。
しかし参ったな……。

ここまで頑張つて登ったのに中断っていうのは勿体無い……。
けどやっぱり無理はしない方が……。

どうするか迷っていると、ここで働く従業員が声をかけてくる。

「どうかしましたか？」

「あ、それがこの高さに足がすくんじゃったみたいで……………」
従業員に状況を説明する。

「あら、そういうことならその妹さんとお兄さんが一緒に滑つても
よろしいですよ？」

従業員が俺とゆたかを見て一つの提案を出す。

「はいっ!？」

い、一緒につてそんなムチャな！
そもそも俺たちは…！

「あ、あの俺たちは別に兄妹とかそんなんじゃない！」

ギュッ…。

「……！？」

ゆたかが俺の腕にしがみつく。

「ゆ、ゆたか？」

「お、お願い……い、一緒に滑っ……て……」

かなり強くゆたかはしがみついてくる。

その腕は怯えた子犬のように震えていた。

こうなつてしまつたら断ることはできない……。

「……はあ……」

ゆたかの手を握る。

それが俺の返事だつた。

第6話 妄想男子と変わる空色

「えっ！？ ゆうちゃん椿君と滑るの!?!」

後ろを振り返りこなたの目が大きく見開く。

「そ、そうだけど……」

「そんなのありかよ!?! んじゃ柊一緒に行こうぜー!」

「あ、みさきちズルい!! かがみは私と滑るんだよ!」

「いーや! 私とだ!!」

「私とだ!!」

また始まった…。

ホントによく飽きずにやるよな…。

そしていつもみたいにじゃんけんをしますが、かがみさんもこのやりとりに疲れたらしいな。

スタスタとつかさの元に行き、

「つかさ、一緒に滑らない?」

ガガーンツ!!!

こなたたちの頭上に見えないものがのし掛かる。

つておいおい。 女の子がそんな酷い顔をするな。

「え、で、でも、私はいいよお…」

つかさは苦笑いしながら断る。

しかしかがみさんは諦める様子はなく、つかさの耳元で誰にも聞こえないように囁く。

「あんたホントは怖いんでしょ?」

「え? な、なんでわかったの?」

「何年一緒にいると思ってるのよ。」

あんたが無理してることくら

い手にとるようにわかるわ」

「ご、ごめんねお姉ちゃん……。嘘ついちゃって……」

「いいわよ別に。それよりどうするの？一緒に行く？」

「う、うん。ありがとう」

会話が終わったらしく、二人は並んで列に戻る。

あの様子からして一緒に滑るようだ。

つかさも笑顔を取り戻していてよかったはずなのだが……、

「かがみに……、かがみにフラれた……」

「しかも柊妹にとられるなんて……」

見る方が辛くなるくらいの落ち込みようだった。

別にフラれたわけじゃないのに大袈裟な。

「うう……」

「ん？ゆたか、どうかしたのか？」

「だ、だって……、まだ少し不安で……」

ああ、そういうことか。

確かに一緒に滑るって行っても完全に不安がなくなるわけじゃないから。

「……大丈夫だよたか。ちゃんと椿君が守ってくれるから……」

「う、うん……。ありがとうみなみちゃん」

長いこと日光に当たってようやく順番が回ってきた。

まず滑るのはパティ、みなみちゃん、ひよりの一年生組。

「……それじゃゆたか、行ってくるね」

「うん……。気をつけてね」

二人の視線がキラキラと交差する。

「……………」
こういうのを眺めてると恋愛系のテレビによくある別れのシーンを
思い出すよ…。

桜が散る駅に電車が来た。

それを見たみなみは握っていたゆたかの手を離して電車に乗る。

「じゃあ……私、行くね……」

夢を持つみなみは一人で上京するため、愛する人に別れを告げた。

「みなみちゃん……」

「……そんな悲しい顔を見せないで。……私はゆたかが泣いてる顔
より笑ってる方が好きだよ……」

「でも……！　みなみちゃんがいないと私は笑顔になんてなれない
よ……！」

「ゆたか……」

ゆたかの涙に胸が痛くなる。

今自分は大切な人を泣かしている。
護るはずの私が……。

「みなみちゃんのそばに……ずっといたいよ……！」

「……………」

「あの時約束したのに……！　何があってもずっと隣で笑ってるって
約束したのに……！」

「……ごめん。でも私にはどうしても叶えたい夢があるの……。」

だから……」

「どうしても……ダメなの？」

「……うん」

「ならまた約束して……」

「え？」

ゆたかはスッと小指を出す。

「また会うつて約束…」

「……っ!!」

信じられなかった。

身勝手な私にまだ心を寄せてきてくれる人にみなみはただ漠然とする。

「こ、こんな私でも…ゆたかは好きでいてくれるの…?」

「当たり前だよ…。だって……、私はみなみちゃんが世界で一番好きだもん…!」

「……っ」

ただみなみは幸せに包まれた。

こんなにも私を想ってくれる……。

「私の好きな人がゆたかで本当によかった…」
ドアが閉まり、二人に境界線ができる。

発車する電車に合わせてゆたかも走った。

「私、絶対会いに行くから…!!」

「…ゆたかつ!」

「絶対…!! みなみちゃんに会いに行くから…!! だから約束だよ…!!」

ゆたかは小指を高々と上げる。

それに対して私も小指を天に向けた。

それはゆたかには直接見えなくとも想う気持ちがあれば繋がって見える愛の系になっていた…。

「ゆたかとの約束……絶対守るよ……」

「……」

バカか俺は……。

「それにしても一年生組はすごいわね」

椿君に引っ付いてるゆたかちゃんは除くけど…。

かがみはつかさと手を繋ぎながらみなみちゃんたちを笑顔で見送る。三人は怖がらずにスピードを出しているのか、あっという間に後ろ姿はかがみの視界から消えた。

「じゃあ次の方準備してくださいーい」

「行くわよつかさ」

従業員の指示に従ってかがみとつかさが一つの管に行こうとするが、

「……………」

ぴたりとつかさの足が止まった。

「ん？ どうしたのつかさ」

かがみが不思議に思いながら近づいていく。

「………… お姉ちゃん、私、やっぱり一人で滑るよ」

「えっ？」

なんてと言いたげなかがみにつかさは言う。

「だっていつまでもお姉ちゃんに頼ってちゃダメだもん。 だから

……………」

「……………」

そっか…………。

そうだよね…………。

もうつかさも子供じゃないもんね…………。

つかさが最後まで言い切る前にかがみさんはその気持ちを汲み取った。

「ふう…分かったわ。 あんたがそこまで言うなら引かなきゃね…」

つかさは少しずつ大人になっている。
なら私も少しずつ妹離れしないといけないわね…。

かがみはトンとつかさの背中を押す。

「つかさ、頑張れ」

「うんっ」

笑顔で答えたつかさは従業員の言われた通りに準備する。

その光景を眺めているとつくづく思う。

「……なんか……寂しいわね……」

ずっと私を頼りにしてきたからつかさはいつもそばにいた。
そんな日常に慣れてしまっていた自分がいるからこんな気持ちにな
るんだろうか…。

“お姉ちゃん！！ 宿題教えてーっ！！”

“わあーっ！お姉ちゃんすごーい！！”

「クス…」

かがみは自然と笑みをこぼす。

あの時のつかさは可愛かったな…。

私の背中ばかり追いかけてて…。

でも今は……。

かがみはつかさの背中を見る。

それは以前なんかとは比べ物にならない強い心か視えた……。

第7話 友達

つかさとみゆきさんが単独で滑っていく一方で、頂上では次のスタンバイをしているのだが、

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ねえ」

「どしたのかがみん」

「何で私があんたと滑らなきゃならないのよ…」

「だってつかさが一人で滑るから空いたじゃん」

「だからってあんたが来なくていいじゃないっ」

「いいじゃん別に！。せっかくみさきちににらめっこで勝ったんだから」

「にらめっこ……………」

こなたが最強を誇る分野で勝負するなんてみさおも愚かだな…………。あんな顔に勝てる奴はそうそういない。

「というわけで楽しく滑ろうよ」

「ええーいっ！ 分かったから頬をすりよせてくるな！」

これ以上は後ろの客に迷惑がかかるのでかがみさんは観念してこなたと一緒に滑ることに。

しかしこの時の光景がまたよくできていた。

端からだとしさいこなたが妹、かがみさんはその姉にしか映らなかった。

対するみさおとあやのさんペアはもう普通の友達にしか見えない…。

だからこそだろうか。

一緒に滑ることに何の違和感も感じられなかった。
だが俺達ときたら…。

「はぁ…」

ゆたかという小さい子と滑るなんて悪くてロリコン、良くて兄妹に見えるんだがさすがに抵抗を感じる。

由佳という彼女がいるのにドキドキしていいんだろうか……。
後で由佳にぶつとばされないかな……。

「では二人で行く方に説明しますね」

従業員がその場で真似をしてみせる。

「まずは滑っている最中の二人の位置ですが、最初に一人が座って両足を少し開きます。もう一人はその空いた股に挟まれる感じに座ってください。それが二人で滑る時の体勢です」
なるほど…。

股に挟まれる感じが…。

じゃあゆたかの方が小さいからゆたかが俺の股に……。

「つてええええええつ!？」

思わずビツクリ。

いやビツクリしないほうがおかしい。

「後は一人で滑るのと同じです。では後ろが混雑してますので準備ができたら早めに行ってください」

「う…」

他の客には迷惑かけたくはない。

そう考えたら仕方のないことなんだが…。

「~~~~~っ……!!」

ゆたかの顔もさすがに真っ赤になっていた。
そりゃ恥ずかしさはやっぱりあるよな…。

「ゆ、ゆたか…。 やっぱやめようか…?」

ブンブンブンッ!!

思いっきり拒否…。

ゆたかは力強く首を横に振っていた。

「じゃあ……やるしかないか……」

ゆたかはコクリと重く頷く。

こうなってしまったからにはしょうがない……。

覚悟を決めるか。

……恥ずかしいけど。

まず始めに俺がスタート位置に座り足少しを開いた。

そうすると俺の足の間、つまり股にゆたかが座るスペースができる。

「……し、失礼します……」

ゆたかはそこにゆつくりと埋めにかかる。

「……っ！……！！！！！！」

やたらと大きく心臓が鼓動する。

そして震えながらゆたかは股に座った。

わ、私……こんなに椿君に接近するなんて初めてだよ……！

で、でもやっぱり男の子は体が大きいな……。

私なんかとは全然違う……。

足伸ばしても椿君と同じくらいだもん……。

あ、そういえば椿君ってなんかいい匂いがする……。

それに……。

プニ。

「あ……」

椿の太ももに指先が触れる。

やっぱりだ…。

椿君の肌って柔らかい…。
まるで女の子みたいな…。

「……………」

実は女の子？

でもそんなわけないよね…。

確かに椿君ってちょっと女の子っぽい可愛い顔してるし声もまあまあ高いし肌もスベスベだけどあり得ないよね…。

「……………」

ところで腰に当たってるこの固いのって何だろ…。

さっきまではなかったのにいきなり棒みたいなのが現れて…。

椿君なんかズボンに隠してるかなあ…。

「……………っ！！」

や、やばい…！

ゆたかが座るとこまでは良かったけどゆたかに触れて俺のアソコが反応してる…！！

しかも太ももにゆたかの柔らかい手が触れてるからさらに…！！

「では頑張ってくださいーい」

従業員がOKの合図を出すと同時に俺は体を少し倒して滑り出すが、

「ま、また…！」

体を倒したらゆたかともっと密着する。

た、頼むからこれ以上はもう…！！！！！！

こなた、かがみペアはスイーと人並みペースで行く。

ポジションはもちろんこなたが前でかがみの股に挟まれている状態だ。

「いやー 幸せってこういうことを言うんだろっねー」

「私の胸触りながら言うな!!」

ゴンッ!

激しい音と共にこなたの頭にタンコブが一つ。

「い、痛い…」

「自業自得でしょっ」

全く、油断も隙もありやしない。

「でも実はかがみ私と滑れて嬉しいとか思ってたんじゃないの?」

「なっ!? そ、そんなわけじゃない!!」

「ほんとうかなあ?」

ニマニマとこなたがすりよる。

「だ、だから触るな!!」

一方もう一つの管ではみさお、あやのペアが滑っているのだが、

「なああやの…」

「ど、どうしたのみさちゃん。 なんか落ち込んでるみたいだけど

…」

「あたりめえだろっ!」

いきなり表情を変えてあやのに突っかかる。

だがその怒りはすぐに収まった。

「なんだって柊はあんなチビッコとばかり引つ付いちまうんだよね……」半分泣きべそ状態……。

「きつと柊は私らといるのに疲れちまったんだ……」

まあみさちゃんが変わなことばかりするからだと思っけど……。

「いったい私らの何がダメなんだよ……」

自覚ないんだね……。

「やっぱりさ……」

急に真剣な顔つきになりあやのに問いかける。

「柊はチビッコのこと好きなのかな……」

「……………」

ずっと付き合いが長かった友達……。

みさちゃんはそれを失うのが怖いんだね……。

その気持ちはよくわかる……。

けど……。

「みさちゃん、一つだけ間違ってるよ」

「んあ……？」

「柊ちゃんにとってみさちゃんは大事な友達だよ。友達に一番も

二番もない。みんなが柊ちゃんは大好きなんだよ。だからああ

やって好かれてるんだと私は思うな」

「……………」

一番も二番もない……か。

「確かにそうかもしれないけど……」

「納得できない？」

「……………」

みさおは黙って頷いた。

「じゃあ別の言い方にするね。みさちゃんといるときの柊ちゃん、

嫌そうな顔してた？」

「……………」

みさおは過去のやり取りを思い出す。

“ホントにバカね”

“あーもう！ いい加減にしなさい！”

「してた」

「……………」

してたんだ……………」

あやのは冷や汗をかいてなにを言えいいか考える。

「でも……………」

“ありがと、みさお”

“あんたのそういうところが羨ましいわ……………”

「あの笑顔は本物だった……………」

「……………」ならもう答えは分かっているじゃない」

「……………」ああ」

私といるときの笑顔もチビッコといるときの笑顔も椿といるときの笑顔も全部本物……………」

間違ってたのは結局私だった……………」

柊はどこに行っても柊だ……………」

だから……………」

そう思っていたその時、ちょうどあなた、かがみペアが横の管で滑っているのを見る。

「ちよっこなた！ 抱きつくな！」

「いいじゃん別にー 減るもんじゃないんだしさ あ、かがみの

お腹柔らかーい」

「きゃっ！？ お腹はやめなさいって！……！」

「……………」

「……………」

みさおとあやのはただ呆然としていた。

「……………渡さねえ」

「……………え？」

なんか嫌な予感……………。

「ぜってえチビッコなんかには渡せねえからなー!!」

「……………はあ」

結局こうなっちゃうんだね……………。

第8話 終わりと始まり

「あゝ楽しかった〜！」

こなたがおもいつきり背伸びをする。

しかし小さいのに変わりはない。

「あれ、椿君元気ないけどどうかしたの？」

「聞かないで……」

言ったら由佳に殺されちゃうよ…。

そしてあつという間にロリコンという汚染称号がついてしまう…。

「そろそろ疲れが溜まってきたし、もう帰ろっか」

かがみさんが時計を見ながら言う。

「そだねー。アニメも見なきゃいけないし」

「……そういや新しいアニメがあつたな」

相変わらずチエックはかかしてないところがこなたらしいよ……。

というわけで俺達はそれぞれの更衣室に入って着替え始める。

男子は俺一人だからちよつと寂しいが…。

「よくよく考えたら男子一人っておかしいよな……」

普通なら男女は均等くらいいるのだが、今の状況はそれを覆していた。

男子一人、女子十人。

んなバカなことがあっていいのだろうか…。
ロッカーを開けて自分のタオルを取り出す。
髪の毛をちゃんと拭いてさっぱりしたところに後ろから声が伝わってくる。

「随分と楽しそうだな…」

「…っ！」

冷たい視線が送られてくる。そして間違えるわけがない声。坂
上先輩だ…。

俺は正面を向いて震える口調で聞く。

「ま、まだ何か用っすか」

「用なら腐るほどあるが…、今ここで手を出しちまったらバイトが
おじちゃんになっちまう。だな……」

一瞬言葉が途切れて足音が響く。

そして次の一秒後には坂上先輩の拳をみぞおちにくらっていた。

「がっ…！」

もろに入って苦しくお腹をおさえる。

「いつかお前の幸せを削り取ってやるよ……。昔お前が俺にした
みたいにな……」

「……！！！」

「こなちゃんってやつぱり髪の毛長いねー」

「まーね」

「バツサリ切らないの？」

「まあ切ってもいいんだけど私ってショートヘアはあんまり似合わないしお父さんがこの髪型好きみたいだから多分切らないかなー」

こなたはタオルを変えて体を拭き始める。

でも髪の毛長いと難点がでてくるんだよねー…。

例えば風が吹いた時に横にいた人に髪の毛が直撃して気まづくなるとか、シャンプーするのに相当時間がかかったりとか手入れとかその他諸々…。

その点男の子は楽そうだよな。

坊主にすれば髪の毛洗う必要ないからすぐに終わるし。

私も男の子に生まれてれば良かったなあー。

お父さんには悪いけど……。

「ふう……」

俺は腹の痛みを堪えながら門の前でみんなを待つ。

坂上先輩は一発入れた後、すぐに仕事に戻っていったのでこれだけで済んだが…。

「どうしたらいいんだよ……」

あの目は本気だった…。

坂上先輩は必ず俺に復讐してくる。

昔の俺が坂上先輩の幸せを壊したように…。

やはりあの報いは受けなければならぬのだろうか…。

「椿君待ったー？」

「ん…？」

中からぞろぞろと知っている顔が流れてくる。

「ごめんね椿君、私が携帯なくして探してたらちよつと遅くなっちゃって…」

つかさが両手を合わせて謝罪する。

「あ、いや、別にいいよ…」

「…？ 椿先輩元氣ないッスけどどうかしたんスか？」

「タシかにHAPPYな力オじゃナイネ」

「そ、そうか？」

気をつけてはいたのだが表に出てしまったのだろっ、ひよりとパティが心配の声をかける。

「あ、あの…もしかして私のせいで…」

「ゆ、ゆたかは関係ないよ。むしろ幸せだったっていうかなんていうか…。とにかく俺は疲れただけだよ」

「……そっか。 ならいいんだけど……」

「とりあえずもう暗いしみんな帰ろ」

空はもうすぐ闇に包まれそうになっていた。

夏だから夕方の時間でも明るいがさすがにこれ以上は親が心配する。俺は門から右に曲がるが、

「あ、椿君の家ってそっちだっけ」

「ああ、そっぴや皆は駅だから向こうになっちゃうのか」

つい最近まで一緒に暮らしていたから感覚がおかしくなってしまう…。

「じゃあここでお別れですね」

「バイバイ、椿君」

「また遊びに行くかなー」

「…さようなら」

皆が手を振りながら帰っていくのに対し、俺も小さく手を振る。

「気いつけて帰れよー」

っていつても駅はすぐそこだからあんまり心配はしないんだけどな……。

それに向こうよりこっちに問題がある。

「こなたが乗ってきた自転車と俺の自転車どうしたらいいんだよ……」
こなたが使っていたのは俺の家にあった予備の自転車だ。
つまり二つ運ばなければならない。

ホントに最初から最後まで身勝手な奴だ…。

俺は一つの自転車に乗って家に帰る。

そして徒歩でまたプールに行き残った自転車で帰ろうとしたが、

「……………」

自転車がパンクしていた……。

おそらくこなたが捨てた際にやってしまったのだらう…。

結局帰りも俺は徒歩となった……………。

第9話 小さな寝息

「デート？」

「うんデート」

「でもお前体調はいいのか？ 退院したばっかなんだから安静にしていた方が……」

「椿うちと一緒にいるほうが気分は良くなるの」

「……………」

こいつはまた恥ずかしいことを平気で…。

もうすぐ夏休みが終わろうとしている今日この頃、由佳は夏休み前に事故で入院していたため宿題をする時間があまりなかった。

女子サッカー部も大変らしく休みなどは満足にない。だから早く終わらせるために一人よりも二人ということでちよくちよく宿題を俺の家でしていた。

もちろん俺も手伝った。

じゃないとあまり意味がないからな。

だが問題が難しすぎてあまり役にも立てず……。

由佳は、

「気にしないでいいよ」

と言ってくれたが気にしないわけにはいかない。

せっかく由佳に喜んでもらえると思ったのに全然ダメだったんだ…。

けど、それでも由佳が俺の家に来て宿題をするのは嬉しかった。

好きな奴が隣にいただけで今は幸せだからだ。

「明日どうせ暇でしょー。だからデートしようよー。デートデートー」

「何回も連呼するなっ」

「じゃあ行こー」

「……どこに行きたいんだ」

「それは後で決める」

「アバウトだな…、まあいいけどさ…」

「決まりだね。じゃあ明日は部活が午前からだから二時くらいに私の家に迎えに来て」

「……はいはい…」

「よし、んじゃ私そろそろ帰るね」

由佳は勉強道具を片付けて立ち上がる。

時刻は午後六時。

辺りはまだ完全に暗くはないし女子高生ならもつと夜遊びするのだが、由佳の両親は少しだけ厳しいらしく早めに帰らなければならぬらしい。

「送ってくよ」

彼氏としての役目を務めるために俺も立ち上がる。

「椿っちってそういう女心はわかってるんだね」

「ま、まーな」

実は由佳と少しでも長い時間一緒にいたいなんて恥ずかしくて言えないのが事実である。

俺は明日をそわそわと待ち遠しく思いながら由佳を家まで送った。

ピピピピ、ピピピピ、ピピピピ、ガタンッ！

早起きするための最終兵器である目覚まし時計が鳴り響き、俺は右手でそれを止める。

「……フフフ」

しかし俺にはそんなもの必要なかった。

何故なら今日のデートを楽しみにしていて一睡もしていないのだから。

あ、くそ……。今になって眠気が襲ってきやがった…。

しかし俺は負けんぞ…。

由佳とデートする……た……め……に………。

「うゝん…、はっ！」

パチッと勢いよく目が覚める。

そしてまず時計を見た。

「い、一時ジャストか…」

危ない危ない…。

こういうパターンはたいてい寝坊するからな…（ギャルゲーで得た知識）。

由佳の家には二時に行けばいいんだったな。

まだ時間は十分あるんだがそろそろ準備するか。

サイフに携帯、あとは……。

「あいつチヨコボール好きだったな」
一応持つていくか。
デートには絶対不必要な物だけど…。

ピンポン。

インターフォンを押した後、ちよつと背筋を伸ばす。
あの両親にはだらしないとこ見せれない。
だが、ガチャリとドアが開いた先にいたのは……。
「なんか用」

由佳の妹のゆいだった。

つい先日まで韓国に旅行へ行っていたらしい。
ちなみに俺とゆいは微妙な仲だ。

「由佳いる？」

「姉になんか用なの」

「別に用ってわけじゃないけど…」

「用がないならとつとと帰れ」

「……………」

くそ…、相変わらずの毒舌だな…。

ゆいは俺より二歳年下の高校一年なんだしおもいつきり言い返して
やってもいいんだが、必ず百倍返しされてしまう…。

顔は相当可愛いのもったいない奴だ…。

こうなったら用件をさつさと済みますか…。

「由佳を呼んでくれないか」

「だからなんで」

「…………デートの約束してるからだ」

こう言えばゆいも素直に呼びにいつてくれるだろう。

そう予測していたのだが、

「えっ、デ、デート？」

「ああ」

「それってホントに今日？」

「間違いない。 八月二十九日午後二時に萩野家に集合。 そのあ
とどこに行くかは知らんが…」

俺が言い終わるとゆいがチラチラと家の中を覗く。

「どうかしたのか？」

「いや、ちよつとね…」

「んで由佳は？」

「ん」と……」

「……？」

なんだってんだ？

由佳になんかあったのか？

「あ……、とりあえずさ、中に入って」

「畏じゃないだろうな」

「そんなことしないわよ！！」

「じゃあここで言えよ」

「…… たぶん見た方が納得できる」

なんじゃそりゃ…。

そんなに説明しづらいつてのか？

「とにかく早く入って」

ゆいはそう言い残して玄関を開けっ放しにする。

さてどうしようか…。

ゆいが見ればわかると言うがいったいどんな状況やら…。

「…… はあ」

まあいいか。 なんにしても由佳に会わなければ話が進まない。
俺は萩野家に足を踏み入れた。

「あー、こういうことか」

「納得できた？」

「そりゃもう百パーセントに……」

ゆいが案内した場所、それは由佳の部屋だ。

飾り付けには女の子らしいぬいぐるみなどがあり可愛いんだが、左端にベッドがある。

そこに由佳は豪快に爆睡していた。

「部活が終わって家に帰ってきた途端二階に走ってっただけで、後でご飯呼びに行ったら……」

このありさまだったってわけか…。

着替えはしてるけど疲労が溜まって限界だったんだな…。

「起こした方がいい？」

ゆいは俺に気を遣って図太い英和事典の角を由佳の頭にロックするが、

「いや……、このままでいいよ」

由佳の寝顔を見るのも久しぶりだしな…。

それにゆっくりとした時間を過ごすのも悪くはない…。

ってその英和事典で起こすのはどうかと思うぞ。

「ねえ……」

「あん？」

「こんなだらしのない姉見て幻滅とかしないの？」

ゆいは夢の世界に取り込まれている由佳を差した。

「幻滅ねえ……」

確かにだらしのないと思うしヨダレも垂れている。

けどそんなのは今さらだろ。

「別にしないよ…。だってこれが本当の由佳だしな」

ありのままの姿を知っている俺にとってはむしろこの姿が可愛いと思う。

「……あ、そ。んじゃ私は一階にいるからなんかあったら呼んで」

「りょーかい」

「それから、姉に変なことしないでよ」

「するかっ」

俺は完全否定する。

でも彼氏なんだからしてもいいんじゃない？。

午後六時、由佳はようやく目を覚ました。

「ど、どうして起こしてくれなかったの〜!？」

由佳は俺とゆいのせいにする。

「だってあまりにも気持ち良さそうにしてたから」

「それにお姉ちゃん寝過ぎ。昼間に六時間ぶっ通しで寝るなんてあり得ないよ。人間じゃないみたい」

「そ、それはその…」

ゆいのキツイ毒舌に身を縮めた由佳。

「でも俺的には由佳の寝顔が見れたから満足なんだけどね」

「むーっ、椿っちの意地悪」

「どうでもいいけどお姉ちゃん早くその寝癖直したら？ 彼氏の前でみっともないよ」

「ふぁっ!？」

由佳は慌てて髪の毛を押さえる。

だがそれだけじゃ直るわけがない。

「ゆい〜！　なんとかして〜！」

「もうっ。　しょうがないなあ」

ゆいは由佳の髪を優しく手入れする。

その光景はとても平和な雰囲気を漂わせた。

「ハハ……」

相変わらずこいつらといると楽しいな……。

何か心が和むっていうか……。

こうして萩野家での平和な日が緩やかに過ぎていった……………。

第10話　ダダダイエツツ!!

「おはよー」

「おう、久しぶりー」

夏休みが終わり新学期、校門前では周りがしばらくぶりに会う友達に挨拶を交わす。

中にはかなり焼けている者もいた。

「椿君ー」

む、誰かが俺を呼んでいる。

俺は後ろを向くと、

プニツ。

「へ？」

俺の頬つぺたにつかさの指先が触れていた。

「うわぁっ！ ホントに女の子みたいなもちもち肌だ〜！ ゆたかちゃんの言った通りだね〜！」

何故か歓喜の声をあげる。

「……………」

なんなんだこれは……。

つていつまでもプニプニと人の頬つぺたを触るなっ。

俺はつかさの手から逃れるため身を引く。

しかし、みさおが

「椿ー、私にも触らせろー！」

「ええい！ だから女の子が気安く男の頬つぺた触るなっ！」

朝のホームルーム。

黒井先生の顔はなんだか久しぶりに見たが、実はこなたと黒井先生、そして俺はネットゲ仲間なのだ。

しかし、夜中に時々入ると常に黒井先生がいたのはなぜだろう…。いい大人がずっとネットゲしてるはずがないんだが…。

「えー、夏休みはどうせ旅行やら友達と遊んだりしたと思うけど、そんなおまえらに言いたいことが一つあるんや」

「……………」

「男を紹介してくれ!!」

全く関係ない話だ。

「ウチも旅行行こうとしたんやけど彼氏おらんから一人じゃ寂しいんや…!! ンでしゃーなしに先生方呼ぼうとしたら既に旅立って…!! もうウチは孤独なんや…!!!!」

新学期早々泣く先生は世界中探しても黒井先生だけだろう…。

クラス全員の顔はかなりひきつっていた。

「来る日も来る日もネットゲ三昧で充実はしとった…! お金もあまり困ってない…! でもウチはそんなんより望んどるもんがあるんや…!!」

「……………」

ああ…、ダメだ。

もう俺達には哀れみしか感情が出てこない…。

とりあえずこんな大人にだけはならないでおこう…。

夏休みが終わって一週間が過ぎた頃、思わぬ情報が手に入った。
それは昼休みの食事中、

「え、かがみさんがダイエット？」

「うん、なんか体重がまた気になりだしたんだって」

つかさは姉のかがみさんのことを話す。

するとこなたはその状況を楽しむように、

「まあ乙女心ってやつだね」

「……………乙女心ねえ……………」

悪いがそういうのは全く理解ができない。

たいてい女の子は体重が少し増えたら痩せようと頑張る。

見た目さえ変わってなかったらいいんじゃないかと男を代表して言う
ってやりたい。

「それではかがみさんは今日のお昼は食べないつもりなんでしょう
か？」

みゆきさんはこなたと違ってちょっと心配気味だった。

だが俺もみゆきさんと同じだ。

食事はちゃんと取らないと逆に太ってしまうし、体力が衰えて体調
が悪くなる場合だってある。

「うん…。私は食べた方がいいって言ったんだけど…」

聞く耳持たずか。

変なところで頑固だもんなあ…。

「でもこれって止めた方がいいんじゃないか？」

「大丈夫だよ椿君。いつもみたいに一日二日で脱線するから」
もう失敗すると分かりきっているようだった。

だったら別にいいんだけど…。

「かがみさんの今日の朝食はなんだったんですか？」

「えっとね…、あんパンの上に乗っかってるゴマの部分を一口…」

「……」

ほぼ絶食作戦か…。

危険極まりない道のりだな…。

そこまで痩せたいのか女の子…。

「かがみんがどれくらい我慢できるか予想してみない？ 私は二日だけ」

「私もそれくらいかなあ」

「確かに今までの方がありますし…」

みんなは二日で終わると思っっているらしい。

だが俺だけは違う意見だ。

「俺は五日以上は行くとと思う」

「い、五日っ！？ あのかがみが!？」

信じられないみたいなの顔をするこなた。

でも俺はこの短い期間、かがみさんを見てきたけどそこまで意志が弱い人には見えなかった。

もつと志が強くてしつかりとしたイメージがある。

だから俺は五日以上という答えを出した。

そして五日後、

「オーッス、弁当食べよう」

かがみさんはC組から普通に弁当片手にやって来た。

「か、かがみさんダイエットやめたんだ」

「…？ やめてないけど？」

「え、でもその弁当…」

俺の目線はかがみさん専用の弁当にまっしぐら。

「ああ、これ？ やっぱりご飯はちゃんと食べて運動でダイエットしようかなあって思ったの」

「な、なんだ、そういうことだったのか」

俺は二つの意味で安心した。

一つはかがみさんが無理なダイエット方法を中断したこと。

それによって体調の心配が取り除かれたからだ。

もう一つはかがみさんがダイエットを途中で投げ出さなかったこと。俺が持っていたイメージと同じで嬉しかった。

少し勝手だが、もし簡単に諦めていたら俺は少しかがみさんを幻滅したかもしれない…。

「ぬう…、今回のかがみは一味違うのう…」

「ホントだよね」。いつもなら“明日から”って言って結局失敗してたのに」

「真面目にかがみさんもやる気になったってことですな」

「あはは、まだやり始めたばかりだけどね」

かがみさんは苦笑いしながら言う。

「お姉ちゃん、私応援してるね」

「私もです。頑張ってくださいね」

つかさとみゆきさんはかがみさんをやる気付ける。

でもいったい何キロ痩せるつもりなんだろ…。

今でも十分細いのこれ以上細くなったら骸骨かがみさんになるんじゃないか…？

そしたら挨拶するときも…。

“ 椿君おはよ…、ググ…。グゲケ…、ケ…、ケ…、ケケケー！！！！”

完全にモンスター化してるじゃないか…！

外見は不気味だしかがみさんに話しかけづらくなる…。

いやむしろ話しかけても骸骨なのだから、

“返事がない…。ただの屍のようだ…”

という意味不明な文字が画面下に表示されるようになるかもしれない…。

そうならもう色々な意味でダイエット失敗だよ…。

第11話 エネルギー

「ふう……」

夕方六時、かがみはランニングを行っていた。コースは分かりやすくするために近くの川を沿っていく。だがまだ慣れていないせいか、両足が筋肉痛となり辛い状態だったが筋肉痛は運動すれば痛みを感じなくなるらしい。

実際やってみるとホントに痛みは引いたのだ。

「よし、あと少し頑張ろっかな」

かがみさんは止まった足を再び動かし始める。

「ただいまー」

ランニングを終えたかがみはタオルで汗を拭き取りながら帰宅。今日はいつもより長く走ったのでお腹はけっこう空いていた。

「お母さんただいまー」

「かがみおかえり」

返事したのはかがみの姉であるまつりだった。

「あれ、お母さんは？」

「醤油買いに行った」

「ふーん…」

「あ、かがみ、あんた今日の晩御飯何か知ってる？」

「知らないけど？」

そう答えるとまつりは嬉しそうに言う。

「買い物に行く前に聞いたんだけど今日はステーキだつてさ！」

「ス、ステーキ！？」

ダ、ダイエットしてるこんな時期に！？

「しかも普通のステーキじゃないって！ 百グラムなんと三千円！
！」

さ、三千円！？

よりによって！？

「いやあ、今日はHappy dayだわ」

「……………」

どうしよう…。

今日くらい沢山食べてもいいかな…。

だけでもしこれがきつかけでダイエットに失敗したらまた体重が…。
でも百グラム三千円は捨てがたい…。

“頑張ってください”

「う…」

みゆきは私を応援してくれてる…。

なら私はそれに応えなければみゆきに悪い気がする…。

かがみは喉まできた本音を隠して言う。

「私はお肉あんまりいらない」

ここはやはり我慢しよう…。

当然食べると予想していたまつりはかがみの答えに問う。

「え？なんで？」

「ん…、あんまり食欲湧かないの」

しかしその言葉は頼りにせず、まつりは目を細めながら、

「……あんた、もしかしてまたダイエット？」

ぎくっ……！

図星を突かれてかがみは黙りになった。

「……はあ、やっぱりね。最近のあんたの食事とか見てたらだいたい分かるわよ。少しずつ量が減ってるし毎日ランニングしてるし」

「……………」

やはり姉妹ということか…。

まつりはかがみのしている行動からその狙いを簡単に読み取った。かがみは観念して頷く。

「それにしても今度は本気みたいね。いつもならすぐに終わるのに」

「わ、悪かったわね」

「んで？好きな男でもできたの？」

「なっ！？ち、違うわよ！！」

「あれ、違うの？」

「当たり前でしょ！」

「でも実は…ってオチじゃない？」

「そんなオチないわよ！……たぶん」

かがみが付け足したように言ったことによりまつりは食い付く。

「ってことはいるんだ、好きな男」

しかしかがみはまつりの言葉を言い直す。

「好きって程じゃないわよ……。でも……………」

「でも？」

ズイツとまつりは身を乗り出してくる。

まつり姉さんに言うべきか言わないべきか…。

でも人生を長く歩いている分、少しは参考になるかもしれない。

それにまつり姉さんはこういうのは真剣に聞いてくれる。

「……ちよっと気になってた男の子に彼女ができたの…。それで

その人、彼女からメールが来る度に嬉しそうにして…。それで会う時は子供みたいに笑ってて…。好きな人ができたらあんなに幸せそうな顔になるんだなって思った。それが少し羨ましかった…。私も椿君みたいに幸せな恋愛をしてみたいの…」

「それでダイエツト？」

「そうよ。いつか好きになった男の子のために痩せとかなないと。お腹がぶよぶよだったら恋愛なんかできにくいじゃない」

「……………そうかなあ。私は今のかがみがちょうどいいって思うんだけど」

「……………」

「ま、どうせやるんだったら最後まで頑張りなさいよね」

「……………わかってるわよ」

「ハアツハアツ」

今日も夕方になるといつものように走っていた。

より多くの汗を流すためにも距離を少しずつ伸ばしていったが、ここまで続けていると精神的にも辛くなってくる。

だが体重が増えてくる食欲の秋にダイエットしておかなければ去年の二の舞になる…。

かがみは自分にムチを叩いて強引に走り続けた。

とにかく目標数字に達するまでは自分に厳しくしないと…。

ゴールまであと三キロの減量。

それは近そうに感じて遠いものだ。

「ハアハアツ……………フウ……………」

今日はこれくらいでいいか…。

かがみは限界を感じて走るのを止めてゆっくり歩き始める。

ここでピタリと足を止めると明日は筋肉痛間違いなしだ。

だから歩くことによって筋肉をほぐして明日もいい状態で走れるようにしておく。

そのクールダウン中、

「あら、かがみちゃんじゃない」

「あ、古河のお母さん、こんにちは」

走っているとたまに知っている人に声をかけられることがある。

「最近ランニングしてるんですってね。勉強も大変なのに凄いわねー」

「いえ、そんな…」

「じゃあおばちゃんがいたら邪魔になるだろうからこれで失礼するわね」

古河のお母さんは一礼して最後に言った。

「頑張ってたねーっ」

それがかがみを動かす原動力になった。

第12話 苛立ちの眼

t r r r r、t r r r rガチャツ。

「ふあい…」

「あ、もしもし由佳か？」

「どうしたの椿うち…。こんな朝早くから…」

午前六時二十分、普通なら完全に寝ている俺だがどうしても気になることがあり由佳に電話したのだ。

「一つ聞きたいことがあるんだけどいいか？」

「うん？」

「あのさ、女の子って自分の体重気にするもんなのか？」

「あー…」

由佳は少し考える時間をとる。

「人によるけど大抵は気にしてるかなあ」

「……もしかして由佳も気にしてる？」

その大抵の中に自分の彼女が入っているのだろうか。

「私は気にしてるよ。それに椿うちと付き合い始めてから前よりもっと気にしだしてるもん」

気にしていたのか…。

なんか意外だな。

由佳ってそういうことはどうでもいいって思ってるかと勘違いしていた。

「……別に細かな体重はあまり関係ないと思うんだがな。大事な

のは中身だろ。 由佳がちょっと太っても俺は絶対に由佳と別れることなんてないし」

「それでもやっぱり気にするんだよ。 女の子は外見から力を入れてく子が多いから」

「そっか……。 悪かったな、早く起こして」

「後でアイスね」

「はいはい……」

変な約束で電話が終わり俺はまたベッドに寝転ぶ。

考えることはもちろん女の子の神経構造。

外見に力を入れてくのはわかる。

男も髪の色を変えたりワックスをつけたりしているものだから。 だけど僅かに体重が太っただけで嘆くのは納得できない……。

たかが一キロ二キロだろ……？

全く、女の子って難しいな……。

「行つてきまーす」

誰もいない我が家に挨拶をする。

死んだ両親にいつも言おうと最近心がけた。

こうすると父さんも母さんも俺の健康な声を聞いて安心してくれると思つたからだ。

今日は由佳に電話したため早起きをしたから目覚めがいい。

いつもより余裕をもって出ているからのんびりと登校できる。

スタスタと自販機で買いたいちごオレを飲みながら歩いていると、

「HallOツバキー！」

「あ、パティ、おはよ」

アメリカからの留学生が相変わらず元気の塊を見せていた。

「そのイチゴオレ、スコシもらってもイイデスカ？」

「え、あ、こらっ」

パティは許可を貰う前に俺の手からいちごオレを奪ってストローに口をつける。

「なっ…！？」

か、間接キスじゃねえか…！

しかも平然と飲み続けているということはこいつまさか気づいてないのか…！？

「プハアツ。 やっぱりイチゴオレはサイコーネ！」

気づいてないみたいだ…。

けっこうこいつも鈍感なんだな…。

「それではワタシはニツチョコなんでオサキにデス！」

「ん？ ああ、そっか、んじゃまたな」

走るパティの背中を見送る。

だが、途中でパティは振り返り叫んだ。

「カンセツキスのことはワスれてクダサイネー！」

がくっ。

あ、あんにゃろ…。

やっぱワザとだったのか…。

パティの姿は消えてまたのんびりと歩き出す。

すると前方に見覚えのあるツインテールの女の子が電信柱に寄りか

かっていた。

「……あれ？」

もしかして………かがみさんか？

なんであんなところで足を止めてるんだろ…。

気分でも悪いのかな…。

「おーい、かがみさーん」

「……………あ、椿君」

「……………」

心なしか、いつもより元気がない。

それに顔色もちよつとよくないようだ。

かがみさんの周りは誰もいない。

一緒に登校してくるはずのつかさもいなかった。

いったいどういうことだろうか…。

つかさがただ寝坊しただけか、それともかがみさんが少し早めに来ているのか…。

どちらにしても今はかがみさんの体調が心配だ。

「かがみさん大丈夫？」

様子がおかしいので気遣うが、

「だ、大丈夫よ…。ちよつと目眩がしただけ…。これくらい何ともないわ…」

そう言つて電信柱から手を離して学校へと向かおうとする。

しかし、

「あれ…」

「危ないっ」

倒れかかった体を俺が鞆を投げ捨て支える。

「ご、ごめんね。なんかしんどくて…」

「……………やっぱり大丈夫じゃないじゃないか。今日は家に帰った方が…」

安静にしておくために俺は家に引き返すのを後押しするが、

「だ、大丈夫…」

かがみさんはあくまで大丈夫と答えた。

だがそこで引くわけにはいかない。

「でもかがみさん、この状態じゃ…」

俺はしつこく絡もうとしたが、

「大丈夫だつて言つてるでしょ!!」

「っ!!」

いきなりの変わりように俺は心底驚いた。

周りにたまたまいた仕事に行く人や散歩中の人、そして同じ制服を着た奴等は俺達に注目する。

「か、かがみさん？」

しつかり者で冷静な判断ができる。

それが俺の知っているかがみさんだ。

でも今そこにいるのはかがみさんではなく別人に見えた…。

「ごめん……。でもお願いだからほつといて…」

「……………」

かがみさんは俺の目の前をゆっくりと去って行った。

第13話 忠告のアラーム

「そっか…。お姉ちゃんが……」

朝のホームルーム前につかさにかがみさんの変わりようを報告した。

「珍しいですね…。かがみさんが椿君にそこまで言うというのは……」

「実はお姉ちゃん、学校行く前も様子がおかしいの…。昨日のお肉は残すし朝食もパン一つ食べきってなくて……」

「なるほどな……」

たぶんストレスが溜まっているのだろう……。

それもかなり無理している……。

ランニングとかご飯の量を減らすにはかがみさんにとって相当な苛立ちをもたらす。

だから今朝もちよつとしたことであんな……。

「んー…さすがにこれは止めなきゃまずいよね」

珍しくこなたも真剣に考える。

それほどの事態になっているということだ。

「そうですね。今からでも言いに行きますか？」

「う……」

今からか……。

さっきのこともあるしなんか気まずいな……。

「い、一時間目が終わってからにしない？ もうすぐチャイム鳴るし」

「……分かりました。では一時間目が終わりましたら皆さんでC組に行きましょう」

キンコンカーンコン。

一時間目終了のチャイムが鳴り響く。

これで授業は終わりなのだが、

「えー、この公式はこの場面でも活用され、そして……」

担当の先生は一向に止める気配がない。

むしろ次の時間も占領しそうな勢이었다。

「そしてこの式はまた別の式を用いる。いいかー、ここ試験問題に出すぞー」

あゝもう！！ 試験問題に出るのはわかったからいい加減にしろって！！

「それじゃ授業はこれで終わるが予習復習はしっかりしとけよー」

先生が廊下に出ると同時に俺達も後ろのドアから廊下に入。

四人揃っているのを確認してC組へと向かう。

だが…、

「あれ？ いないね」

こなたに言われて俺も気が付いた。

かがみさんはC組にはいなかったのだ。

いや、かがみさんだけでなくみさおとあやのさんもだ。

あの三人っていつも教室にいるはずだよな。

他にあいづらが行く場所なんかあったっけ…。

「かがみさんがいないのなら仕方ありません……。 次の休み時間にしましょう」

「そうだね」

「しょうがない……」

この時間は諦めて二時間目終了後に出直すことに。

「あ、またお姉ちゃんいないよ」

「また？」

次の休み時間に俺達はまたC組の前で顔を覗かしているのだが、つかさによるとまたかがみさんがいないらしい。

「しかし日下部さんと峰岸さんはいますね」

「あ、ホントだ。　しかもみさきちのおでこにばんそうこが貼ってあるよ」

それはどうでもいい。

「とにかくかがみさんがどこに行ったか二人に聞いてみるか」

ドアを開けて一直線に二人が話し合いをしているところへ急ぎ足で行く。

俺達に気づいた二人はあまり気分がいいとは言えない表情をしていた。

それでも普通に会話をする。

「おう、珍しいな椿達がこっちに来るなんて」

「ああ、ちよつとな…。　かがみさんどこ行ったか知らないか？」

「「あ……」」

二人は顔を見合わせて動揺する。

「どうかしたの？」

こなたが聞いてみるとあやのさんが困った顔をしながら言う。

「実は……」

「そ、早退!？」

「お姉ちゃんが!？」

「なにゆえ!？」

「どうしてですか!？」

「と、とりあえず落ち着こうよ…」

あやのさんは俺達を宥める。

そ、そうだな…。確かに冷静にならないとな…。

「それでなんで早退なんか…」

「一時間目の途中に黒板に書かれた問題を柊ちゃんが解くことになったの。でも黒板に向かう途中でよろけて座ってたみさちゃんのおでこと柊ちゃんのおでこが…」

「ゴツツンてわけ」

みさおは前髪を上げてばんそうこを見せる。

「その時、授業が終わったんだけど、柊ちゃんの体調が不安定なのを心配した先生は保健室に連れていった方がいって言ったから私とみさちゃんが行ったの」

「じゃあさっきの休み時間にいなかったのは保健室にいたからか…」

「うん、それで天原先生に事情を説明したら早退して体を休めた方がいいってことで柊ちゃんは家まで天原先生に送っていつてもらったの」

あやのさんの説明によりだいたい状況は掴めた。

しかし一つわからないことがある。

なぜ自分の体の危険を背負ってまで痩せようとするのか…。

乙女心とみんなは言うだろうが何かが違う…。

まるで痩せることによって幸せが手に入るかのような…。
少なくとも俺にはそう見えた…。

「みなさん、放課後にかがみさんのお見舞いに行きませんか？」
「お見舞い？」

昼休みにみゆきさんが箸を止めて俺達に言う。

「そうだね、ダイエットをやめるように言わないといけないし」
こなたは軽々と賛成。

俺もその案に文句はない。

「つかささん、よろしいですか？」

「うん、私はそっちのほうが助かるよ」

つかさは笑顔で答えた。

双子なんだからかがみさんの性格がもう少しつかさよりならダイエットしなくていいんだけだな。

でも代わりにあのがかみさんが勉強ダメになるのか…。

そんな姿もちよつと見てみたい気がする。

等々余計なことを考えながら残りの授業を受けた。

第14話 裏の裏

「かがみ、大丈夫？」

「……………」

早めに家に帰ったまつりはかがみの看病をしていた。

「ほんとにビックリしたじゃない。帰ったらあんたダウンしてたから」

かがみは体を反転させて顔を合わせないようにする。

「たぶん無理しすぎてこうなったんだと思うけど頑張りたまに毒だよ」

「……………」

「ちよつとかがみ、聞いているの」

「……………聞いている」

「はぁ…。とにかく安静にしてなよ」

まつりはそう言って部屋から出た。

一人になったかがみはボソリと呟く。

「ウザい……………」

ピンポン。

ん？ 誰か来たのかな…。

かがみは布団から出て耳を澄ます。

「はあい」

インターフォンにまつりが反応してドアを開けた。

そこから聞こえてくる声は、

「お忙しいところすいません、私かがみさんのクラスメイトの高良みゆきと申します。 かがみさんが早退したということでお見舞いに……」

みゆきか…。

わざわざお見舞いに来てくれたのは嬉しいことだ。

けど今は一人にしてほしい…。

苛立ちを隠せない今だけは…。

じゃないとみゆきに八つ当たりしてしまいそう…。

かがみは布団に戻り横になる。

コンコン。

「失礼します」

みゆきはドアノブを引いて入ってくる。

足音からして一人のようだ。

椿君やあなたは来ないのだろうか…。

みゆきには悪いけど、とりあえず今は寝たフリをして済まそう…。

「寝てるみたいです」

「……………」

やはりみゆきは寝ていると信じ込む。

そこはそれでいいのだが、みゆきを騙していると考えたら心が痛んだ…。

「失礼しますね」

ギイという音が小さく響く。

椅子に座った音だろうとかがみはすぐに理解した。

……………

空白の時間が流れる。

こういう状況はじつと座っているみゆきよりも寝たフリをするかがみの方がよっぽど辛い時間だ。

寝ているのがバレないようにかがみは寝返ったり寝息を立てたりとする。

とりあえず動かないと身が持たなかった。

時計の音だけが聞こえる空間にみゆきが独り言を言い始める。

「……かがみさん、もう止めた方がいいですよ」

独り言、しかしこれは私に向けられた言葉だった。

「椿君や他の皆さんも大分心配しています」

「……………」

かがみは意味なく一人の男の子とアホ毛の女の子を思い浮かべる。

「それに……、日に日にかがみさんの顔が悪くなっていくのを見ていると正直私は“怖い”です」

怖い？

それはどういう意味だろ…。

かがみはみゆきの表現に引っ掛かる。

「私はこの高校生活でかがみさんがどういう方かだいたい知っているつもりでした。 芯がしっかりとしていてやるときはやる、そして妹であるつかさんの面倒もみて優しいお姉さんと解釈していました。 多少素直じゃないときもありましたがそれもかがみさんらしくて素敵です」

「……………」

な、なんかそうストレートに言われると照れるわね…。

かがみはちよつと顔を赤らめる。

しかし怖いという意味はここからだ。

「しかしダイエットに専念するあまり、かがみさんは椿君の声を聞かなくなってしまうって全くの別人になっちゃいました…。このままかがみさんが無理矢理ダイエットを続けると更にかがみさんは変わっていきそうで…」

ああ…そうか……。

だからみゆきは怖いって言ったのか。

いつもの私じゃなくなるかもしれないから…。

でもやっぱりダイエットはしたいな…。

体重増えてきたらちよつと嫌だしそんな自分は好きになれそうになりから…。

だからみゆき、もうちよつとだけ待ってね。

ちゃんとダイエットに成功したら元の私に戻るから……。

「そろそろ歯医者さんの時間ですので帰りますね」

「……………」

当然かがみはバイバイとかありがとうとかは言わない。

寝たフリを突き通すつもりだ。

「後で椿君達がお見舞いに来ると思いますのでその時は寝たフリはやめてくださいね」

「っ！」

き、気付いてたの!?

僅かにかがみの体がビクンと動く。

しかし心の中では思いつきりバクバクと外にまで聞こえるくらい心臓が鼓動を上げていた。

みゆきはニコリと笑って部屋から出ていった。

やっぱりみゆきには嘘はつけないわね……。

「やっぱりダイエット……、やめた方がいいのかな……」

みんなに心配かけたくない。

ただどこまで頑張ってきたのにやめるなんて……。

「どうしたらいいんだろ……」

“最後まで頑張りなさいよね”

“頑張るのはたまに毒だよ”

“頑張ってくださいね”

“もう止めた方がいいですよ”

「……っ」

所詮他人事だからみんなはその場に应じた言い方をする。

それが気配りと言えば聞こえはいいだろう。

しかし応援してくれていたはずが急に事情が変わったからといって前言撤回して私を止めようとする。

みんなに心配をかけさせないためにやりたいことを我慢しなければならぬのだろうか……。

第15話 理想の自分

コンコンッ。

また誰か来た…。

「どうぞー」

「よ、元気そうだなにより」

椿君だった。

ああ、そういえばさっきみゆきが後で来るって言ってたっけ。

椿君も私にダイエットをやめるように言うんだろっか…。

「かがみさんの部屋って初めて見た」

「感想は？」

「普通」

かがみはこれを聞いて少しムカッとする。

もうちょっと女の子らしいとか可愛いとか言ってくれてもいいのに…。

「でも……」

「でも？」

「本とかけっこうあってかがみさんらしいかな」

優しい笑顔を見せてくれた。

こういう顔を由佳ちゃんにも見せてるんだろうか…。

そう考えると由佳ちゃんが羨ましい…。

なんか幸せまっしぐらって感じで……。

「ところでかがみさん、ダイエットはどうするの？」
きたっ。

唐突だったからビクッとしたがかがみは待ってましたと言わんばか

りの目をしていた。

しかしもう向こうの答えはわかっている。

百パーセントやめた方がいいとか言うのだろう。

「……椿君はどう思う？」

聞いても無駄だろう。

答えは明白なのだから……。

「俺か？ 俺はやめたらいいと思うよ」

やっぱり…。

結局みんなは私を止める。わかっていたけど……辛いな……。

「だけど……本音を言うとき、続けた方がいいと思う」

「……え？」

い、今なんて言ったの…？

「別に太ってるようには見えないけど、かがみさんは痩せたいって思ってるならしたらいいじゃん」

「え、ちよっ、ちよっと待って！ 何でそんなこと言うの！？」

「そ、そんなこと？」

椿君からしてみれば私の言っていることは矛盾している。

けどどうしても聞いておきたかった。

「だって私のダイエットのせいで椿君とかに心配かけて…！ 普通止めるじゃない…！ なのに何で椿君は止めないの！？」

いったい私は何をしてるんだろ…。

せつかく私を応援してくれる人を見つけたのに…。

ホントバカだ…。

バカ過ぎて…。

笑っちゃうよ…。

「え、止めないとダメなの？」

椿は呆氣にとられる。

よほどかがみの言っていることに驚いたのか、意外そうな顔をして

いた。

「ダ、ダメじゃないけど…」

「でしょ？ だいたい理想の自分に近づくことはいいことじゃん。憧れているから頑張ってるかがみさんを止めるなんておかしいだろ」

「で、でもそれでみんなにいつぱい迷惑かけちゃったら」

「いいんだよ」

「…え？」

「もつと迷惑かけていいんだよ。それが友達だろ？」

「あ…」

この言葉に私は救われた気がした。

不安とか全部消えて心が軽くなって……。

「かがみさんは少し頑張りすぎただけだよ。だからこんな風になっただけ。誰もかがみさんがダイエツトをするのを嫌がってるわけじゃない。ただ、過度な頑張りだったから止めた方がいいとか言うんだよ」

「頑張りすぎ……」

「だから今度は適度に頑張ってみたら？ そしたら反対の声は絶対応援に変わるから」

「そうかな…」

「ああ、絶対に」

椿君ってここまで断言するだ…。

なんか会ったときより遅くなってる。

あの時はまだ幼く見えただけ今はずっと頼もしかった…。

「そっか…、じゃあもう少しだけ頑張ろっかな」

「うんっ」

このとき私はどんな顔をしているのかな…。

笑ってる？ 怒ってる？ たぶん違う。

安心した顔をしてると思う。

だって…、たった一人だけ私の味方を見つけたから……。

次の日。

「みんなおはよ」

かがみはB組に顔を出した。

「おーかがみじゃん。もう体調はいいの？」

こなたはからかうことなく接してくる。

「うん、大丈夫よ」

「そっかそっか」

ならこれで安心して世界史の宿題写せるね」

「

またこいつは私の宿題写す気か。

宿題ならみゆきに頼めばいいのに…。

あ、そういえばみゆきで思い出した。

「みゆき」

「なんででしょうか？」

「私、やっぱりダイエツト続ける。このまま途中で終わるの嫌だし体調も気をつけなきゃいけないから前みたいな無理はせずに適度な程度にやっていこうと思うの」

「言えた…。

ちよつと怖かったけどなんとか言うことができた…。

あとはみゆきがどんな反応をするか。

「……そうですか。分かりました。そこまで強い意志があるんですしたら止めるのも失礼ですね」

みゆきが笑顔で言うことで私は心底ホッとした。

「ごめんね、心配してくれてるのに」

「いえ、いいですよ。ただかがみさんの体が健康なら私はそれ

で嬉しいですから」

「まあかがみんがちゃんとダイエットできるとは思わないけどねー」

「こ、こなちゃんそれはひどい…」

「なんとも言いなさい。今回のダイエットは絶対に成功させるんだから」

そして一ヶ月後、俺達は冬服に着替えて学校へ通うようになった頃くらいにかがみさんは体重計に乗った。

結果は本人以外誰も知らないという。

その本人に聞いても秘密と言って誰にも教えることはなかった。

俺は正直気になったが、余計な詮索はやめた。

だってかがみさん、めちゃくちゃ幸せそうに笑っているんだもん…

…。

第16話 文化祭

「そういえばもうすぐ文化祭だね」

つかさは外からの日光に当たり気持ち良さそうに机に凭れていた。ふにゃんとした油断だらけの顔がまた可愛い…

「ウチのクラスは何すんだろっね」

こなたもつかさの後ろの席で同じようにぐったりとしていた。

いくら席替えて日向の当たる場所になったからってだらけすぎだろ…。

「それは今日のホームルームで決まるはずですよ」

みゆきさんはさすがにこいつらとは違っていた。

シヤキツとしていて天と地の差だ。

「みなさん何かやりたいことがあったら言ってくださいね」
やりたいことか…。

別にないしそもそもクラスがまとまるかどうか不安だよ…。

特にこの二人を見たら…。

「「どうでもいいやあ」」

協調性ゼロ、いやその前にコイツらは今をのんびりとしたいだけなのか…。

「ホント二人とも幸せバカの顔だな…」

その時、俺の携帯が振動する。

それは由佳からの電話を示していた。

「もしもし由佳か？ うん、うん、えっ！ 今度の日曜日！？ 行

く行く！ 大丈夫だって！ 由佳のためなら俺朝の三時に行くって！ うん！ うんわかった！！ じゃあまた日曜日！」

電話を切って俺は机の上に立つ。

「いやったー！！！！！」

由佳とデート！！

前は行けなかったけど今度こそは！

「神は今、俺の味方だー！！！」

「すごい幸せバカの顔してるね……」

「ええかー、このホームルームはただのホームルームとちゃうでー。文化祭でなにするか決めるんやからちゃんと意見ださな時代劇やらせるからなー」

それだけはいやだ。

「んじゃ後は高良に任せるさかい頑張りいや」

「あれ、黒井先生はどこに行くんですか？」

ホームルーム中に堂々と教卓から離れるので白石が思わず口に出す。そのおかげで俺が言わずにすんだ。

「どこって高良の席に決まっとるやないか」

……何故？

「な、なんでその席に……」

「そりゃ寝るため……やなかった、お、おまえらと一緒に混ざって何するか決めるためやないか」

この人絶対寝る気だ……。

みゆきさんの席は一応日の当たるところだから狙ってやがったな……。

「ウ、ウチのことはどうでもいいからはよせんかい」

無理矢理話題を変えやがった…。

こんな人に教師が務まるなら案外楽な職業かも。

「え、えー、では文化祭で何をするか決めたいと思いますので、まず自分がやってみたいことがある人は挙手してください」

………

………

………。

「はい、時間切れですので時代劇にしましょう」

『いやいやいやいや！！！！！！！！』

クラス全員が反対する。

こういう時だけは団結力があるのはいいいことなんだろうか…。

このあと色々相談していくがこれといった案も出ずに終わった。

このままじゃヤバイと思ったのか、今まで寝ていた黒井先生が生徒等に言う。

「こうなったらしゃーない。これで決めるか」

黒井先生はどこから出したかわからないがクジ引きを用意した。

ホントあの人はアバウト過ぎて不安になる…。

「おまえらの名前を書いたクジをウチが一枚引いて当たった奴が強制的に決めなあかん。それでどないや？」

当然みんなはブーイング。

「な、なんやえらい反対するんやな。それやったらこれやったらええやろ」

今度は小さい紙を用意する。

それも普通の紙だ。

「これを今から配るから自分のやりたいことを書いていき。それで書いたやつから帰ってええぞー」

まあそれだつたら常識範囲内だな。

俺はペンを片手に持ち、前から配られた紙と向き合う。
自分がしたいこと。

今思えばそれが無いから困ってるんじゃないのか？

「はいできた！　じゃあ先生さよならー！」

一人の生徒が手を挙げて素早く教室から出ていった。

「俺もできた！」

「私も！！！」

「僕も書けました！」

「えっ？　えっ？」

次々と立ち上がる奴等に驚いた。

な、なんでこんなに早く書けるんだ！？

みんな何も案がないんじゃないのか！？

この時、俺は気付かなかった。

コイツらは早く帰りたいがために適当に書いていたことに。

残ったのは俺、こなた、つかさ、みゆき、その他三名、そして……、

「アイツら適当なことばっか書きおつてからにー！！！」

この紙を見て激怒する黒井先生だ。

「みんななんて書いてるんですか？」

俺は興味を持つて黒井先生のとこまで行くと、

「お化け屋敷…、お化け屋敷…、喫茶店…、麻雀…、チョコバナナ

店…、お化け屋敷…、バトルロイヤル…、錬金術店…、メイド喫

茶…、なんか後半危ないもんばっかだな…」

「でもメイド喫茶とかは賛成」

こなたがニヤニヤしながらやってくる。

「でもみんなが快くやるとは思えないですね」

「そうだな…」

つてことでこれはボツ。

悩みに悩んでいると残った三名が何やら相談し始める。そしてその
内の女の子が話を持ちかける。

「あの…、演劇なんてどうでしょうか…？」

「「演劇？」」

こなたとつかさが綺麗にハモる。

「はい、実は演劇ちよつとやってみたいんですけど……ダメですか……？」

「演劇か……。別にいいんじゃない？ なあみゆきさん」

「そうですね。私は賛成です」

「私は楽しかったら何でもいいや」

「私も演劇でいいと思うよー」

みんなが演劇に同意する。

あとは…。

「ええんちゃうか。演劇も中々おもしろそうやしな」
全員が一つになった。

というわけで俺達のクラスは演劇をすることに。

「あ、そういえば名前なんだっけ…」

「うわっ椿君クラスメイトの名前忘れるなんて非道だね」

「う、うるさい。ならこなたは知ってるのかよ」

「そりやもちろん えーと林さんだっけ」

「ふ、古河です…」

こなた一発退場。

一文字も合ってねえじゃねえか。

「「……………」」

「…？ ゆきちゃんと黒井先生どうかしたの？」

二人は何かを思い出すかのような難しい表情をしていた。

「い、いや古河なんて生徒おったかな思て…」

「私もです…」

言われてみれば確かに…。

この古河とかいう奴と後ろの二人は全く見覚えがない…。

何故だ…？

普通クラスメイトなら一度は必ず見たことがあるはずなのに…。

「おつかしいな…。顔と名前は一学期に覚えたはずやねんけど…」
黒井先生はもう一度出席簿と顔写真を見る。

そこにはちゃんと古河芽衣、そして後ろの男子二人の名前、佐伯彰と水波朋也がちゃんとあった。

「何でみんな忘れてるんスか」

「全くだよ」

佐伯と水波は怒っている様子だが古河さんは、

「べ、別にいいんです。私達はその…、影が薄いですから」

あははと苦笑い。

あまり気にしてない感じだった。

「そ、それでは私達はこれで失礼しますね」

古河さんはあたふたと帰る準備をして三人一緒に教室を出た。

「あ、ちよつと待って」

あの三人、何かおかしい。

俺は三人が出た二秒後に廊下へ足を踏むが、

「…………え？」

もう三人の姿はどこにもなかった……。

第17話 謎の三人組

“い、いや古河なんて生徒おったかな思て…”

「絶対おかしい…」

「どしたの椿君。授業中にぶつぶつと」

「こなたはおかしいと思わないのか？」

「だから何が？」

「あの三人だよ」

俺はこつそりと指差す。

「なんで黒井先生やみゆきさんまであの三人を知らなかったんだ？」

「忘れてただけなんじゃないの？ 先生もう歳だしみゆきさんもう

っかりしてただけとか」

パーンッ！！

「いでっ！？」

こなたのおでこに向かって飛んできたチョークが粉々に砕けた。

「誰が歳やって？」

「な、なんでもないです…」

「……………」

そんなコントなどに構っていられずに俺は隣の奴に聞いてみる。

「なあ、お前古河って生徒知ってるか？」

「古河？ 古河って同じクラスの古河芽衣？」

「……っ！」

し、知っているのか。

「……なら単に黒井先生や俺がボケてただけ」

「パーンッ！ パーンッ！ ドカーンッ！！」

「誰がボケてたやて？」

「な、なんでもないですはい……」

ぜ、全弾命中……。

さ、三発は酷すぎる……。

しかも最後の音が普通じゃない……。

「せや、みんなに言わなあかんかった。　ウチのクラスの文化祭は演劇に決まったからそこんとこええか？」

「演劇ー？　なんかめんどくせえな」

「そうだよなー。もつと楽なやつがいいよねー」

クラスの殆んどは愚痴を言い出す。

しかし次の一言でその愚痴を言っていた全員が静かになった。

「うーん、これは古河の希望なんやけどみんなが反対するんやったらしゃーないか……」

ザワッ！！

『なっ、なんだって！？　あの古河の希望！？』

あのっでどのだよ……。

「そ、そういうことならしゃーねえな」

「み、みんな頑張ろ」

と、古河の名前が出てきただけで反対意見が消滅した。

ますます怪しいな古河芽衣……。

俺は古河の方をチラ見すると、

「っ！」

こっちを見ていた古河は顔を赤らめながら慌てて下を向く。

「……？」

俺、なんかしたか……？

放課後、演劇の分担をするためにクラス全員が教室に残った。

その前に重要なのが劇の内容なんだが、古河はどうしてもやりたい劇があるという。

それはシンデレラを改造した、シンデレラであってシンデレラでないものだそうだ。

俺達にはよくわからなかったが大体のあらすじを古河は話してくれた。

要するにシンデレラっぽい話だが要所要所でシンデレラとは違うってわけだ。

題名はそれほど重要ではないため後で考える。

台本は古河と台本係りが作っていくが少しオリジナルになってくるので時間がかかるだろう。

しかも係りは台本だけでなく道具作りの係りや役者、効果音担当など思っていたより大変なものだった。

みんなが話し合いをすること一時間、やっと配役等が決まって俺は幕の上げ下げとなる。

みんなに比べてなんとも楽な仕事だよホント。

ボタンを押すだけでいいんだもんな。

こなたと古河、つかさは役者となり、

みゆきさんは進行係りとなった。

あと古河にいつも付き添っている佐伯と水波は照明係りになったが、本人達は演劇などどうでもいいように思える。

ただ古河が喜んでいればいいみたいなそんな雰囲気をしていた。

それと黒井先生が魔法使いで出たいと言いつ出したので特別に参加することになった。

「それでは準備等は明日にして今日はもう帰りましょう」
最低限のことを達成したみゆきさんは時計を見ながら言う。
時刻は既に五時近く。

部活をやっているものにとっては早く練習に参加しなければなら
ない。

そういった連中を配慮した指示だった。

みんながおつかれと言い合って教室を離れていく中、例の三人は教
室から出る気配を感じさせなかった。

「古河たちは帰らないの？」

「わ、私達はその……」

ゴニョゴニョと口ごもり何を言っているのかわからない。

しかもまた下を向いて照れくさそうにしていた。

そこで水波がフォローするかのように、

「俺達はまだ用事があるんで先に帰っててくれ」

「そうですか。では鍵のことは任せますね」

「りょーかい」

「……………」

俺は教室を出るときふと古河の切ない顔に気づいた。

なんだろう……。

前からだがこの三人からは何故か妙な違和感というか、変な空気が
漂っている……。

どこか寂しそうなそんな空気が……………。

百貨店とかに寄り道していると辺りはすっかり暗くなっていた。

「ただいまっ」と…」

こういう時は独り暮らしの長所と言えるだろう。どんなに遅くなっても怒られないから気楽だ。

それはある意味学生の夢だが、

「やっぱ…、ずっと一人じゃやるせないな…」

靴を脱ぎ捨て静まった階段を上がる。

ギシギシと傷んだ音が鳴り多少不気味に思えるのは俺だけじゃなかった。

前につかさが言っていたが夜中にトイレに行くときのこの階段の音にビクビクして、階段から転げ落ちたことがある。

以来つかさは夜中にトイレには行かなくなったとか。

二階へ上がって自分の部屋に入るといきなりベッドへそのままダイブ。

両親がいたら着替えなさいとか口うるさく言うのだろうが、ここにそんな定理は存在しない。

だが長所は逆に言えば短所となる。

一人は誰にも気を遣わず気軽だが孤独感の方が大きい。

さすがに慣れてきたがやはり家には誰がいてほしいものだ。

またみんなで暮らしたらそれでいいのだが…、

「そんなの無理だよな…」

由佳をほっというこなたたちと住むなんて最悪だ…。

由佳も呼べたらそれでいいんだがあいつの親はけっこう厳しいからなあ…。

「そんなことよりアイツらだ」

アイツらとは古河、水波、佐伯のことなんだがいったい何者なんだ？

“俺達はまだ用事があるんで先に帰っててくれ”

「用事ってなんなんだよ…」

何もない教室で別に用事なんかないだろ。

それにもう一つ気になる。

古河の寂しそうな表情だ。

やりたいことができるのだからもっと喜べばいいのに何であんな顔を
するんだよ…。

第18話 思わぬ方向へ

“このお話のスタート地点は普通のシンデレラの話と一緒になんです。

意地悪な姉たちに虐められるシンデレラ。

舞踏会等は違ってきましたが流れに関しては似ています。

でも決定的に普通のシンデレラとは違うところがあります。

それはラストのシーンなんです。シンデレラは虐められる苦痛に耐えきれず家を出ていつて姿を消します。

それもただ消えるだけではないんです。

みなさんが持つ自分に関する記憶を消してからいなくなるんです。

つまりシンデレラがいたという存在をそのままなかったことになるんです。

そして王子もシンデレラのことを忘れてしまい、結婚しないまま終わるというちょっと悲しい物語なんです…”

歯磨きしている途中に古河の話した劇の内容を思い出していた。

それは明らかにバッドエンドで終わる劇だ。

なぜ古河はそんな悲しい劇を選んだのだろう…。

「わからん…」

はあ、考えるのはもうよそう。

早くしないと学校に。。

「…………あれ？」

時計から放した目をもう一度時計に向ける。

おかしいな、いつもは八時前に出ているのに。

俺は何度も見直す。

しかし故障部分は見当たらず俺は今の時間を確かめるために携帯を開くと、

なんだ壊れてないじゃん。

「ヤバい！！遅刻だ！！」

乱れた制服でパンを口にくわえて片手に鞆を持ち、勢いよく外に出た。

こんな格好をこなたが見たら今にもフラグが立ちそうって絶対言うだろうな。

学校前の直線百メートル。ギリギリ間に合うかどうか……！！

しかし、その百メートルの間に立ち止まっている生徒がいた。

間違いない。

あいつ何してるんだ？

「おい古河、何してるんだよ。遅刻しちまうぞ」

古河は俺の声に反応しなかった。

これを一般的に言えば無視と表せられるだろう。

L

「私はここにいることを許されてないんでしょうか…」

「え…?」

突然古河は口を開く。

それでも意味不明なことを言い出した。

「え、あ、も、桃原さん、いらしたんですか」

古河が俺の存在に気づいてオロオロと慌てふためく。

「いやいたけど……、なに、さっきの言葉」

「ささ、さっきの? い、いったいなんのことでしょうか?」

あははと苦笑いする古河。

どうやらさっきのは誰にも見られたくない一人の世界に入っていたらしいな。

だったら食いつくのも可哀想だからスルーするか。

「いや、やつぱりなんでもない」

言いたくないことを聞くのも失礼だから俺は見なかったことにした。

「そ、そうですか。 な、なんでもないですか。 紛らわしい言い方しないでくださいよお」

お前が紛らわしい態度をとるからだろうが…。

「ささ、早く学校に行かないと遅刻しちゃうま」

古河が最後まで言い切る前にチャイムが鳴った。

「げっ! ホントに遅刻しちゃう! おい行くぞ古河!」

もう間に合わないかもしれないがそれでも悪あがきをと思い、俺は古河の手を掴んで校門まで一気に走る。

「あ…」

「なに!?!」

古河が小さく言葉をこぼした。

「い、いえなにも…」

また顔が赤くなった。

今度は下じゃなくチラチラと握っている手を見ていた。

「そ、それより桃原さん、私そんな早く走ると…！」

「え！？　なんか言った！？」

「だ、だからそんな早く走ると　」

ビタンツ！

「うわっ！？」

ビタンツ！

「……駆けちやいます」

「忠告は走る前に頼む…」

古河が転けてしまつて古河の体が俺の背中に当たり俺まで同じように地面に伏してしまつた。

そしてその目の前で、

「はい遅刻」

ガラガラガラガラ…。

遅刻指導を務める先生の手により校門がゆっくりと閉められた。

「えー、皆さんにまだ言つてなかつたんですが配役が大変まずい状況です」

みゆきさんはまた放課後にクラス全員を集めた。

しかしあのみゆきさんが険しい顔をしてるってことはかなりの非常事態なのだろうか。

「……実は王子様が決まっています」

うん、全く非常事態じゃなかった。

とりあえず俺は幕の上げ下げのタイミングをとる練習しとくかな。

「それで誰かに王子をやってほしいんですが」

あれ、そついや幕の上げ下げの場所って二階だっけ。

いちいちめんどくせえなあ。

「多数決で決めてもよろしいでしょうか」

あそこの階段ちよつと上りにくいんだよな」。

それにギシギシとうるさいしなんとかしてほしいよ。

でも二階から劇を拝見するのも悪くないかもな。

前の奴の頭が邪魔で見えないなんてこともないし。

あれ、よく考えたら超S席じゃん。

これは絶対に幕の上げ下げの仕事は譲れないな。

「椿君」

「ん？ なにみゆきさん」

「（王子に）決まったので頑張ってくださいね」

「ああ任せてよ！ この仕事（幕の上げ下げ）には相当自信あるから！」

「そうですか。 そこまで言うてくださるなら心強いです。 では

（王子役を）頼みましたよ」

みゆきさんはかなり俺に期待しているみたいだな。

まあ幕の上げ下げなんて練習しなくてもいけるだろ。

第19話 ああロミオ…

ある昼休み、事件は起きた。

ご飯を黙々と食べているとみゆきさんが、

「椿君」

「なに？」

「王子役の件なんです、台本が出来たので練習しておいてください」

「……………ん？」

「え、今なんて？」

「ですので王子役を練習しておいてくださいと」

「なんで俺に？」

「だって王子役じゃないですか」

「誰が？」

「椿君が」

「なにゆえ？」

「昨日の多数決で決まったのですが覚えてないですか？」

「うんまったく。みゆきさんには頑張ってくださいとしか」

「だからそれですよ」

「へ？」

みゆきさんがスイツと身を乗り出してくる。

「王子役頑張ってくださいって言ったことは覚えてるじゃないですか」

「え、あれって幕の上げ下げを頑張ってることじゃ……」

しかしみゆきさんは横に首を振る。

じ、じゃあ昨日の頑張ってるっていうのは……！

「ええええええええええーっ！！！！？」

「ちよっ、いきなり大声出さないでよー」

隣にいたこなたがダルそうに耳を塞ぐ。

「いやだって王子役なんて無理だよ！」

「でも決まったことですし……」

「絶対にやらない！ そんな恥ずかしいこと！」

「椿君」

「なんだよこなた」

ニンマリとするこなたは携帯のメールの部分を見せる。

「由佳ちゃんからのメッセージ」

「っ！？」

こなたから携帯を奪って間近で確かめる。

“文化祭の劇で王子役になったんだってね！ 椿っちの王子様役楽しみー〇（ ）〇 絶対に見に行くからカッコいいとこ魅せてよね！”

「だつてさ」

由佳が見に来る……。

彼女が見に来る……。

愛する人が見に来る……。

俺のために……！

「し、仕方がないな。 ちよっと嫌だけど王子様は俺がやってやるか」

「椿君やけににやけてるよ」

「い、いいからっ……！」

「ああロミオ、あなたはなぜロミオなの？」

「こなた、一応言つとくけど劇はロミオとジュリエットじゃないかな」

「わかつてるよ。ちょっとボケてみただけ」

放課後になるとみんなは道具作りなどそれぞれの仕事をする。

俺達は体育館の舞台を借りて練習。

今回の劇でこなたがやるのは意地悪なお姉さん一号、そしてつかさが意地悪なお姉さん二号だ。

しかしこの二人がお姉さんってなんかやだ…。

「では最初のシーン、シンデレラ役の古河さんが姉達にいじめられている所から始めてみましょう」

「え、いきなり劇するの？」

「いえ、泉さん達は最初は台詞だけを言ってください。台詞を覚えてきたら動きなどを入れていきますので」

なるほどな。でも古河も大変だな。主人公だから覚える台詞がたくさんあるし…。

俺は後半しか出番ないから暇だなあ…。

とりあえず練習だけしとくか。

ピラピラとページを捲っていく。

あれ、よく見たらけっこう量あるな。

動きとかもオリジナルが入ってるからやりにくそうだし。

これは思ってたより大変そうだな…。

「……ん？」

これはいったい何なんでしょう…？
ピタリと手が停止する。

そして震えた。

「ま、まさかこれをしろつてのか…！？」
そこに書かれていたお約束の言葉。

シンデレラは王子様とキス！！

「んなもんできるかー！！」

「ど、どうしたんですか？」

みゆきさんが様子をうかがってくる。

「どうしたもこうしたもないよ！ 何でシンデレラの劇をやるのに
する必要のないキスが入ってるの！？」すると俺の叫び声を聞いた
古河が、

「そ、それはちょっと訳ありで…」

またか…。

古河はボツとリンゴ色になる。

毎度毎度古河は顔を赤くするけど何でなんだ？

みんなと話している時は普通なのに俺の時だけなんて…。

「す、するフリでいいんです。 ですからその…」

「……………するフリって言われても……………」

きつと由佳も見に来ると思うし彼女の前でそういうことはあんまりしたくない。

「別にいいじゃん。ホントにやるわけじゃないんだしさ」
こなたは他人事のように言う。

「そっぴゃこいつともキスしたことあったな…」。

「はあ…、わかったよ…。するフリだったらやるよ…」

「あ、ありがとうございますっ」

ペコペコと何度も頭を下げられる。

由佳には前以て言つとかないと大変なことになりそうだ…。

「はいOKです」

「ふいー、つかーれーたー…」

舞台上で大胆に大の字で寝転ぶこなた。

今日は少し本格的で空気も張りつめていたため、見ているこっちゃんにも疲労が溜まった。

「お疲れさんこなた」

さつき自販機で買ってきた飲み物をこなたとつかさ、みゆきさんに渡す。

そしてラストのもう一個を古河に渡そうとすると、

「ひっ!?!」

「え?」

俺の手と古河の手が触れた瞬間古河が身を引いた。

「ふ、古河?」

「い、今俺避けられたよな…?」

「あ、ご、ごめんなさいです。せっかく持ってきてもらったのに

…」

「……………」

ちよつと涙目気味になる古河。

なにもしてないのに罪悪感を感じてきた…。

「わ、私、ちよつとお手洗いに行ってきますっ」

「あ…」

な、なんなんだいったい…。

第20話 突然の事件

「古河」

今日の劇の稽古が終了すると疾風のごとく古河に声をかける。

「ちよつと話があるんだけどいい？」

「え、あ、はい」

戸惑いながらも古河は了承した。

俺はとりあえず体育館裏に連れていく。

「……それで話なんだけど」

「は、はいっ」

いやそんな緊張しなくても…。

「俺さ、古河になんかしたかな？」

「……へ？」

口をぽっかり開けて呆然とする。

「俺が話しかける度に古河顔を反らして話すから……」

「い、いえ、こ、これは違うんです！ そ、その…！ お、乙女の
気まぐれなんです…！」

「き、気まぐれ？」

そんな気まぐれが実在するのか？

「ホ、ホントなんです！ け、決して桃原さんの笑顔と優しさに触
れてあなたのことを“好き”になっちゃったわけではないんです
！」

.....

.....

.....。

「え？」

い、今古河なんて言った……？

「ふえっ！？ お、思わず口にしてしまいました…！」

「あ、いや、それよりさっきの好きって……」

「わ、忘れてくださいー！！そ、その事はもう忘れてくださいー！」

これ以上ないくらい真っ赤に染まった。

古河はビュンと突風のように走り去って行く。

だが朝と同じようになにもないところで転けてしまった。

その姿をここからでもしっかりと確認できた。

「……………」

さっきの好きってどういう意味なんだろう…。

友達として好きって意味なのかな…。

それとも俺のことを男として…。

「ふう……」

微小のため息を地面に向けて吐いた。

深く考えるのはやめよ…。

あれはきつと友達として好きって言ったんだろ。

うんきつとそうに違いはない。

俺なんかがそうモテルはずないもんな。

「あ、いたいた椿君ー。今日はもう終わりだから帰ろー」

つかさが俺の鞆を持って待っていた。

「わかったー」

気持ちを切り替えてみんなのところに走っていく。

「言っちゃったです…！ 私桃原さんに好きって言っちゃったです」

古河はいつものメンバーである水波、佐藤と一緒に夜道を帰っていた。

先程起こったことを二人に話したら、

「バアカ、そんな好きって言っただぐらいで気にしすぎ」

佐藤がキツい言い方で言う。

「で、でもお…」

「向こうはもしかしたら友達として好きって思ってるかもしれないだろ？ あ、でもそこまで鈍い奴はいないだろうけど。もしいたらそいつは人間じゃないな。ヒューマンと呼ぼう」

「お前それどっちも人間じゃねえか」

水波が的確にツッコむ。

「えっ！？ そうなの！？」

「そうだよ。ま、お前は英語二点だから仕方ないが」

二人がコント的なことをしている中、古河は一人空気を重くしていた。

「はあ…」

言っちゃいました…。

好きって…桃原さんの目の前で…。

もう胸がどうしようもないくらい熱いです…。

そのとき、ポンツと古河の肩に水波の手が置かれた。

「大丈夫だ古河。たぶん桃原は見た感じ相当鈍いから気づいてな

い

「そつでしようか…」

「お前は小さいことに気にしすぎなんだよ。ほら、さっさと帰ろうぜ」

水波と佐藤は一步前へ行く。

古河は無言で後ろについていった。

次の日の朝、登校中に校門前で珍しく三人と鉢合わせになった。

「よつ、桃園」

「ああおはよう、水波に佐藤。それから…」

「っ…!」

俺が古河の方を向いたら、古河はビクリと反応する。。

「古河、おは」

「~~~~~っ…!…!」

挨拶が済む前に古河は一目散に教室まで逃げていった。

「……?」

なんでだ?

休み時間

「おーい、古河ー」

ドヒュンッ!!

「なんで逃げる……」

昼休み

「古河、ちょっといいか？」

ガタガタ！ ドヒユンツッ！ゴチンツッ！

「……あー……」

あれは痛い……

古河は机から飛び退いて教室のドアまで一直線に走ったがコンクリートの柱にぶつかり頭をさすっている。

そのあと声をかける暇なくすぐに走り去った。

「はあはあ……」

ど、どうしたらいいんでしょう……

体が勝手に反射して桃原さんから逃げてしまいます……

ちゃんと話さなきゃダメなのに……

「……怖いです……」

どんな顔をすればいいかわからないです……

でもこのままじゃ皆さんが頑張っている劇がダメになってしまいます……

いくら向こうは意識してなくても私は……

「あ、いたいた、古河ー」

「……え！？」

こ、この声って……！？

「こんなとこで何してるんだよ」

キ、キヤアアアアッ!?

な、なんで!?! なんて桃原さんがいるんですか!?

「なあ、さっきからなんで逃げるんだよ。俺、やっぱり古河に気の触ることした?」

「い、いえ、その…」

「……………」

「……………」

一瞬二人は黙りになるが椿は、

「古河、ホントは俺のこと嫌いなんじゃないか…?」

「……………え?」

嫌い? 嫌いになるわけがないです…。

むしろ私は椿君のことを…。

「今も俺とは目さえ合わせてくれないしさ…」

それは違います…! ただ私は好きな人の目を見るのが恥ずかしいだけで…!

「あの時の友達として好きって言ったのも、俺のことを嫌ってるって悟られるのを防ぐためだろ?」

「そ、そんなことは…」

否定しようとするが最後まで喋ることができない…。

古河が詰まっている間に椿は言う。

「ごめんな…、気付いてやれなくて」

違います…。

「俺、鈍いから嫌ってたとか分かんなくて…」

違います…!

「でももう大丈夫だから。俺、できるだけ古河には近づかないでいるよ」

違います…!!

「だから…放課後の劇にはちゃんと出てこいよ。みんな待ってるから」

椿は踵を返して離れていく。

「…なんですか…!？」

足が崩れて膝をつく。

ぼそりと呟いた言葉は背中を向けて去っていく人には聞こえなかった。

違うんです…! 私は桃原さんのこと嫌いじゃないです…!

「私は…!！」

桃原さんのことが…!!

そう言えば誤解は解ける。でも言えなかった…。

私にはそんな勇気がないから…。

私は… ホントに臆病だ…。

第21話 自分のために

「行っちゃうよ、君の大切な人」

声が聞こえた。

どこまでも透き通りそうな綺麗な声。

そして蒼い光が背を向けて歩いていく椿と古河の間に現れた。

しかし椿の体は時間が止まったかのように動かない。

「追いかけていいのか？」

この蒼い光の仕業なんでしょうか…。

「今ならまだ間に合うよ？」

「もう…無理です……」

私みたいに鈍くさくてまともに話すことのできない人に桃原さんに何を言っても……。

「そんなのまだわからないよ」

「わかります……」

私から背を向けてしまったんですから今頃前を向いても…。

「………似ているね」

「何がですか…？」

訪ねると形のない蒼い光が小さく微笑んだのを古河は見逃さなかった。

「昔、君と似ている人を俺は知っている」

「………その方はどんな方だったんですか？」

「…………とても小さい奴だったかな。あとアホ毛が特徴的だった」
あんまり説明になってないんですけど……。

「でも……あいつは誰にも負けない強い心を持っていた」
蒼い光が少し寂しそうな声に変わった。

「心……」

「そいつは恋をしてはいけない奴を好きになってしまったんだ……」

“ありがとう……ヤミちゃん……”

「それで今のお前と同じように好きな奴の背中を見ていた……」

“私の初恋は終わったんだよ……”

「俺はそれを黙っていたらなくなっただけでそいつに言ったよ……。あ
いつを行かせていいのかって……」

「……………」

「そしたらそいつなんて言ったと思う？」

“素直な気持ちを伝えるなんてただの自分の身勝手だよ”

「…………身勝手」

「…………俺は無力だった。その言葉に圧されて何もできなかった……」

「…………」

「凄い人なんです……」

私なんかとは大違いです……。

何もかも……。

「でもそれは間違っているんじゃないかって今は思う……」

「どうしてですか……？」

「相手側を思ってるのはけっこうだが、そのために自分の気持ち
を押し殺さなきゃダメなんておかしいだろ。身勝手？ 迷惑？」

そんなの関係ない。これは取るか取られるかの世界だろ。なら
遠慮せずに奪えばいい」

「で、でもそれじゃ相手側は…」

「落ち込むだろう。でもそうしなきゃ自分が辛くなる。もしこ
こで身を引いたらお前はこれから笑っていけるのか？」

古河は横に首を振る。

「なら頑張れよ。好きな人のために尽くせよ。それが今のお前
にできることだ」

「あ…」

時間が再び動き出した。

“ただの自分の身勝手だよ…”

その人には悪いけど言わなきゃ…！

私は後悔を残したくない…！

私の正直な想いを桃原さんに…！

時間がない私の最後のチャンス…！

「桃原さん…！」

ようやく叫び声が届いた。

そしてそのすぐあとに、

「あの！ 私と」

「それでは短い昼休みですが劇の練習を始めたいと思います。古河さん、泉さん、つかささん、昨日と同じ場面を練習しましょう」

「ほーい……ってあれ？ 古河さんいないよ？」

こなたが古くなった階段から見下ろしながら言う。

「あ、ホントだ。それに椿君もいないね」

「まさか二人はこっそりと抜け出して本能の赴くままに……」
「変な想像すんなっ」

演劇の様子を見に来たかがみが久々にツツコミを繰り出す。

「どうしたんだろうね」

「いやだからつかさ、あの二人は茂みの中で寄り添って終いには椿君がナニをズボンから出し」

「いい加減にしなさいっ！ しかもナニと言うなっ！」

たんこぶがこなたの頭上にぶつくりと出来る。

冗談なのに酷いよかがみい…。

「あ、来たよみんな」

つかさが体育館の入り口に向かって言う。

二人は走って疲れたのか、顔が少し赤い状態で並んで入ってきた。

「わ、悪いみんな、遅れた」

「す、すいません」

頭を下げる二人にこなたが、

「いいっていいって 二人が何してたかはバツチリ分かってるか
ら」

「全然分かってないでしょうがっ！」

「……………」

なんでこなたが叱られてるのかわからんが多分いつもみたいにこなたがわるいんだろ…。

自業自得というやつだ。

「時間がありませんので早速練習に移りましょう。古河さん」

「は、はいっ」

「今日はシンデレラと王子が初めて出会うシーンから行きますがよろしいですか？」

「わ、わかりました」

古河はパタパタと配置につく。

するとこなたが不思議そうに聞いてくる。

「……ねえ椿君」

「なんだこなた」

「古河さんってホントにウチの学校の生徒なのかな」

「へ？」

いきなり何を言い出すかと思えばまたわけのわからんことを…。

「出席簿とかに載ってただからウチの学校に決まってるだろ」

「……………やっぱそうだよね」

こなたは自分に言い聞かすような口振りで言う。

はあ、こいつの考えてることはホントによくわからん。

いや…………、

“短い間だけ桃原さんのことまだ好きでいさせてください……”

あいつの考えてることもだ…。

俺は古河を見つめる。

先程古河は俺に告白した。

当然彼女がいる俺は断ったんだが、古河は文化祭が終わるまで好きでいさせてくださいと言ってきた。

もう叶わない恋なのになんでこいつは…。

あーくそっ、わからないことだらけだな。

一度だけ乙女の気持ちになってみたいよ。

第22話 消えかかる未来

「……………」

「どうした古河」

演劇の練習が終わって下校中、古河は自分の手を見て小さく呟いた。
「消えかかっている…」

一瞬だけ古河の手が“ぶれた”。

水波と佐藤は不思議には思わない。

何故なら三人はこの世にはいることのできない人間だから…。

「ああ、そうか、もうすぐ時間だな…」

俺達の期限は文化祭だ…。

それまでこいつの演劇を出来るかどうか…。

「大丈夫だってそんなの」

深刻な空気をもものもしないくらい陽気な人が一人…。

「佐藤…、えらい気楽だな…」

「え？ そんなの当たり前じゃん」

「そう言い切る根拠が知りたいよ」

「だって三人で誓ったろ。“絶対に夢を叶える”って」

「……………」

「だから俺達はまだ消えないって」

「……………」

ホントにこいつは…。

バカだけど何だかんだで必要な存在だよな…。

「そうですね…。 私達はまだ消えるわけにはいけません」
「……………ああ」

もう少しだけ長くはできないのだろうか…。
この世にいられる時間を……………。
あと…少しだけ……………。

「お、おお、なんと美しい…。 えつと…、そ、その姫、ぼ、僕
と踊りませんか？」

「カットカットー！ なんや桃原それは！？」

「え、何って王子のセリフだけど…」

「んな拳動不審な王子おるか！」

そ、そんなこと言われても恥ずかしいから上手くできない…。

「全く、ウチの演技する魔法使いをちゃんと見習え！」

「…「え？」「…」」

みんなはキョトンとする。

その気持ちを代弁するかのようになたとつかさが、

「先生って出演するんだ」

「すっかり忘れてたよー」

「お前らメインキャラなんかいなくなればいいんやー！」

黒井先生は泣きながらどこかへ行ってしまった。

ああ…そういえば黒井先生出演するんだっけ…。

なんかすっかり忘れてた…。

「椿君、王子になりきったら上手にできると思いますよ」

みゆきさん、それはわかってるんだけど相手が古河っていうのが一番の問題なんだよ…。

目もまともに合わせれないし前より口数が減っているから気まずさが…。

「ではもう一度」

「お疲れ様でしたみなさん」

「お疲れ様」

「バイバイ椿君」

こなたたちは先に帰宅して体育館に残ったのは俺と古河、そしていつもの二人。

今日噛み合わなかった俺達は自主的に残ったのだ。

文化祭まで時間がない…。

なんとかしないとみんなに申し訳ないと思い、まずは練習で慣れていこうとしたが、やはり進展はなかった…。

理由は分かっている。

分かっているけどどうすることもできない。

「くそっ……」

王子役を辞めるか？

こんな状態の俺よりも誰かがやった方がスムーズに行くかもしれない。でもそんな急に代役は出すことはできないだろう。

王子役がいなかったから俺がしているのだから。

何より今までの苦勞が水の泡になることが好ましくない。

「……あの、水波さん、佐藤さん、少し席を外してもらえませんか？」

「え？」

「なんでさ？」

「……二人で話し合いたいんです」

「……」

顔を見合わせた二人は少し考えた後に立ち上がって、

「じゃあ俺ら先に帰っとくよ」

と、鞆を持って体育館から出ていった。

「……」

「……」

静まる空気。

聞こえるのは外で鳴いている虫や俺のため息。

古河がどういう目的で二人きりになったのかは分からない。

話し合つと言つても何を話したらいいのか……。

「すみません……」

「え？」

古河が突然口を開いて空気を変えた。

「私がその……変なことさえ言わなかったらこんな事態にはならなかったはず……」

「い、いや古河のせいじゃないよ。ただ俺が下手くそなだけで……」

「……」

また眠るように静まった。

古河が言いたいことはわかる。

だがキツパリと割りきれない自分にも落ち度はある。

これは一人演技ではない。

みんなで行つ演技だ。

だから私情に揺らされず真剣にやらなければならない。

「あ、あの…桃原さん」

「……？」

「もし、私がいなくなったら桃原さんはどう思いますか…？」

「へ？」

唐突な話題の変換にまぬけな声をだしてしまった。

俺は誤魔化すために急いで繋ぎをいれる。

「ど、どう思いますかって言われても…」

「悲しいですか…？ それとも寂しいですか…？」
いきなりだな…。

しかもこのタイミングで…。

に、二択どちらかで言うならば俺は…。

「両方かな…」

どちらかの感情しか出てこないわけじゃない。

だから俺は両方と答えた。

「そうですか……」

しかし古河は下を俯き気味になる。

また沈黙が続いて暫くすると夕焼けもなくなった。

「………」

「………」

「桃原さん……」

「な、なに？」

「手を繋いでもよろしいですか？」

「はっ!？」

動揺して思わず声が張り上がる。

しかし古河は落ち着いた表情でいた。

「お願いです」

「…えっと……」

手を繋ぐ。

それをする事によって何かが起きる訳でもない。

俺には古河が何をしたいのかわからなかった…。

でもここで手を繋がらなかったら前に進めない…。

そんな気がしたから俺は……。

「……わかった」

そつと触れた古河の掌。

それは驚くほどに熱かった…。

俺と同じように顔を真っ赤なって…。

その時の顔がとても可愛くて…。

「……夢を見たんです」

「え？」

古河は手を握ったまま話し始める。

「私と水波さんと佐藤さんが乗っていたバスが交通事故に遭う夢…」

「……あまりよろしくない夢だな……」

「それで他の乗客は亡くなった方もいて、血が飛び散っていました……。重症者は数人、その中に私達三人は入っていました。ま

だ微かに息がある状態で……。急いで病院に運ばれてそこからは覚えてないんですが……とても怖かったです……」

「……」

「目の前で亡くなった方のあの顔は……今でも覚えています」

「……」

「私はいなくなるということが怖いです……。夢の中の水波さんも佐藤さんも血をたくさん出して……。手を触っても握り返してはくれなくて……。もう会えなくなるんじゃないかって……。体が恐怖に支配されて震えることしかできませんでした……」

「で、でも夢だろ？」

あまりの迫力にのまれそうになった。

古河が言つと夢がホントにあったことのように思えてしまう。

「はい、夢です……。でも私はもう大丈夫です……。こうやって手を繋いでいますから」

「……」

ギュツと力を入れてきた古河。

「私、男の人と手を繋ぐの実は初めてです。 えへへ…」

実はって言うてるけど見た目通りで驚けないんだが…。

「す、すいません、フラれたのにこんな未練がましいことして…」

「あ、いや…」

「でももう少しだけ好きでいさせてください…。 もう少しだけ…」

「……………」

古河のワガママには何か不思議な物を感じた。

それが何かはわからないが……。

「…………… 古河…、あのさ…」

俺が発言をしようとした時、僅かに古河の手が“ぶれた”。

「っ！？」

「あ……！！」

咄嗟に古河が握っていた右手を隠す。

「……………！？」

な、なんだ今の……！！？

一瞬古河の手が消えかけた……！！？

い、いや、でもそんな現象が生身の人間に起きるわけ……！！

「…………… え、えつと……あのっ……………」

肝心の古河はパニックっていた。

この様子だとさっきの現象は初めてじゃないようだ……。

こいつ……いったい何を隠してるんだ……。

第23話 君は来ない

文化祭当日。

「みなさん、いよいよ私達の演劇です。緊張している方もいらっしやると思いますが頑張りましょう」

みゆきさんの激励がみんなに飛ぶ。

未だ古河の現象は謎だけどとにかく今日は劇に集中しないと…。演劇は昼の二時から。

今はまだ九時半だ。

時間としてはまだまだ余裕があるからそこら辺でもブラブラしているか。ちょうど由佳もそろそろ来るはずだしな。

「あれ？ 椿君どこいくの？」

「ちよつと由佳を迎えに行ってくる」

えつと、校門前で確か待ち合わせしてたっけ。

早く行かないとアイツ絶対奢れとか言いそうだしな…。

二歩ずつ階段を降りていき少しでも早く行きたいと思った矢先にズラリと人混みが流れていた。

「げっ…最悪だな…」

校門までいるんな出し物が用意されている。

客足はそれを目当てとして集まっており通り道は隙間なく埋め尽くされていた。

「あの、すみません、ちよつと通してください！」

止まってる暇はないので少しずつ掻き分けていきながら前進を試みる。

が、客は常に動いているため思った以上に前に進まない。

キリがないので強引に間を抜けていきやつと校門まで辿り着いた。

「フウ… やつと脱出できた」

体力を使つたため俯いて息を整えていると、

「遅いわよバカ」

「わ、悪い、かなり混んでて前に行けな……」

ん？　なんか今の口調は由佳じゃないような気が…。

パツと顔を上げると頭にちらついていた予想通り、由佳はそこにいなかった。

代わりにいたのはさっき俺にバカと言つた口の悪い妹…。

「何でゆいがいるんだよ」

「いちゃダメなの？」

「いや、そういうわけじゃないけど由佳は？」

「来れなくなつたつてさ。　んで携帯壊れてるから私が代わりに言いに来てやつたの」

言いに来てやつたつて…。

その上から目線のしゃべり方はなんとかならんのか…。

「とりあえず由佳が来れないなら仕方ない…。　一人で楽しむか」

引き返してまた人混みの中に飛び込もうとすると、

「ちよつと！　私を置いていく気！」

「はあ？　お前帰るんじゃないのか？」

「せつかく来たんだから楽しみたいじゃん」

「んじゃ楽しんでこい」

「だから一人じゃ楽しめないの！」

「……………」

それはつまり俺に案内しろということか…。

俺のことバカとか言つてたくせに図々しい奴だ。

どうせ一緒にいるつてのは来れなくなつた由佳にお願いでもされたんだろうな。

本人は隠してるみたいだけどゆいは姉のこと大好きだし嫌とは言えなかつたんだろう。

「一応訊いておくが俺にどうしろと？」

「姉の代わりに私が一緒にいてあげる」

うん予想範囲内の返答だ。

「けっこうだ、じゃあな」

これで万事解決。

ゆいに背を向けると、

「ちよっ、待ちなさいよっ」

「なに？」

「なにじゃない！ 私が一緒にいてあげるって言うてんの！」

「だから断ったじゃんか」

「断るなっ！」

いやそれじゃ選択肢が一つしかなくなるじゃん。

しかしこいつ怒った顔まで由佳に似てやがる…。

そうなつてくるとなんか由佳の機嫌を悪くしてるみたいを感じるな

…。

「お前ってほんとわけわかんないよ」

ゆいには届かないように呟く。

「え？ 今なんか言った？」

計画通りゆいにはなにを言ったか分からなかったみたいだ。

「別に。それより俺は昼までゆいといなきやなんねえのかよ…」

「気安く名前を使うな」

「……………じゃあお前でいいか？」

「別にいいんじゃない？ 私は下僕って呼ぶし」

「……………」

こいつに常識を教えたい…。

つつか日常会話で下僕って単語は初めて耳にしたぞ。

「いやなの？ じゃあ私はあんたのこと何て言ったらいいのよ？」

「んなもん好きにしろ」

つてか今まで通りにしてくれたら一番楽なのに。

「じゃあべータ？」

「い、いやそれはちよつと勘弁してほしい…」

そもそも俺は王子じゃないしスパーサ ヤジンとやらにもなれない。

それにあんな筋肉はないし髪型もあそこまでファンキーじゃない。

「んー、じゃあ……」

ゆいは周りを参考にするためキョロキョロと見渡す。

その中から一つの呼び方を発見した。

「お兄ちゃん」

「ぶっ!？」

あまりの伏兵にふいてしまった。

これはただのお兄ちゃんじゃない。

かなり妹っぽい声質のお兄ちゃんだ。

なので威力は倍増。

まさかこいつのこんな声が聞けるなんて…。

あ、ヤバイ、興奮してきた…。

「私知ってるのよ。 こういうのを萌えって言っんでしょ？」

「さ、さあな…」

「こんな声で“お兄ちゃん”って言われて萌えた？」

「も、萌えるかつ!」

実は萌えてます。 それはもう異常なくらいに萌えてますよ。

だってしょうがねえだろ。 由佳にそっくりな顔してるから黙って

りやかなり可愛い部類だ。

そんな奴からお兄ちゃんなんて言われてみる。

思考回路がこつぱ微塵になるに違いない。

実際俺はなりかけた。

「ふふん、効果は抜群みたいね」

こ、このやろ…。

普段口喧嘩してる仲なのにプライドとかはないのか…。

いや、あるわけがない…。

何故ならゆいは俺をいじめるためならどんなことでもしてくる…。

「だが…！ 俺を甘く見るなー！」

「お兄ちゃん」

「はうあっ！？」

「お兄ちゃん大好きー」

「や、やめてくれ…」

完敗…。

多分俺はこいつに一生勝てないだろうな…。

「さて、からかうのも終わりにしてさっさと案内してよ。 お兄ち

ゃん」

この小悪魔が未来の妹になるって考えただけでも疲れる……。

第24話 シンデレラであってシンデレラでないもの

三年E組の喫茶店でゆいと寛いでいると、

「おっと、もうそろそろ行かなきゃ」

演劇まであと一時間。

最終チェックもしたいしゆいとはおさらばだな。

「あんた……じゃなかった、お兄ちゃん演劇に出るんでしょ？」

「いやもうそれいいから」

そもそもキャラが全然違うぞ。

「何の役やんの？」

「……………」

し、知らなかったのか…。

なら尚更言いたくないな…。

「ちよつと聞こえてんの？ それともあんたの耳もう消費期限切れてる？」

「食べ物と一緒にすんなっ」

「あんたが答えないからでしょ」

「……ったく、王子役だよ」

これ以上黙っていたら心底傷つくことを言われそうだったので観念してゆいに伝えた。

「王子？」

「王子」

「玉子じゃなくて？」

「んなわけあるか！」

「ふーん。あんたが王子ねえ……」

ゆいは俺の全身を見定めるように確認する。

そして、

「ぷぷつ、ククク……。アハハハハハハッ！」

馬鹿笑い……。

「な、なんだよ！ そんなに笑うとこじゃねえだろ！」

「だ、だって！ あ、あ、あんたが王子って！ わ、笑いが……止まらないアハハハハハッ」

「~~~~っ！ もういい！」

バンと勢いよく席を立ち、ズタズタと足音を鳴らす。

あんにやるーめ……！ 昔から疑問に思ってたけどあいつ本当に由佳の妹かよっ。

料金を払ってE組を去ろうとしたとき、

「頑張んなさいよ」

後ろからさっきまで笑い飛ばしていたゆいが声援を贈ってくる。

「…………言われなくてもわかってるっつつの」

たった一人の励まし。

何気無い一言だがそれは俺に力をくれた。

「皆さん、集まりましたか？」

「はあ……集まったのはいいんだけど……」

全員がみゆきさんの頭に注目する。

「その冠はなに？」

「あ、これですか？ その、実はミニゲームコンテスト上級者部門

で優勝してしまつて…」

その証しつてわけか…

相変わらず変なところで能力発揮してるなあ…

「で、では各自最終チェックに入ってください。衣装の方も出来たらしいのでそちらのチェックも忘れずをお願いします」

あ、そういや本番は衣装着なきやダメなのか。

練習では普通に制服でやってたから忘れてた。

それにしても王子の衣装つてまさか…

「椿くん！ 椿君の衣装物凄いよお！」

つかさが目を丸くしていた。

そんなに凄いのか…

でもだいたい想像はつくなあ。

どうせ白馬の王子みたいに全身真っ白のスーツに決まつて

「ほらっ！ 全身真っ黒！」

「ブーッ！？」

ま、また思わずふいてしまった…！

つてそれよりなんだそのスーツは！

王子だろっ！？

王子だよなっ！？

玉子じゃなくて間違いなく王子なんだよな！？

なんで白じゃなくて黒なんだよ！？

王子のイメージ真っ二つじゃねえか！

いくらオリジナルに直したからつてそこまで本場を否定しなくても

…！

「オオー！ 椿君の衣装カッコイイ！ まるでホストみたいだね」
最下位だろうけどな…

「これが原因でファンクラブできちゃうんじゃない？」

こなたが無駄に囁き立てる。

カッコいいのはわかる。

だがこれが王子の衣装として認めるのだけは嫌だ。

着替えを拝見している際に古河の付き添いみたいな感じの水波と佐藤は俺を見て、

「「はあ、そうやって普通に捕らわれてるからいつまでたっても歴史を変えられない人になるんだよ」」

「哀れむように言っなっ！」

「……………」

「どないしたんや古河」

衣装を着て台本を読み直す配役達だが、古河がボーツとしているのに気付いた黒井先生が背中を叩く。

「さっきから元気ないけどもしかしてびびっとるんか？」

「……………違います」

「でも手え震えてんで」

「……………」

「安心せえ。もし失敗してもあいつがなんとかしてくれる」

黒井先生はジッと椿を見つめる。

「はい……………」

黒井先生が何を言っても古河は顔を上げなかった。

「……………ウチもうちよつと魔法使い練習してくるわ。あ、古河、無理やったらちゃんと言っんやで」

コクツと小さく縦に動く。

しかし古河がその時に流した涙は誰にも見えなかった。

二人のクラスメイトを除いて…。

『軽音部、ありがとうございました。 続いては三年B組の演劇です。 準備に多少時間がかかりますのでそのままお待ちください』
放送が体育館全体に響く。

それは舞台裏にいた俺達にも聞こえていた。

「いよいよですね」

「ああ」

「こなちゃん足震えてるよ…」

「そ、そういうつかさだって」

「なんやだらしないな。 シャキッとせんかい、シャキッと」

「……………」

「古河？」

ずっと喋らない古河に俺は不安を抱く。

「は、はい、なんででしょうか？」

「お前大丈夫か…？」

「も、もちろんねす…」

噛んで言われても説得力がないぞ。

それに足も震えてる。

よほどのプレッシャーが古河の上に乗っかってるんだろうな。

「安心しろ。 絶対に成功する。 だろ、みんな」

全員が力強く目を合わせる。

「……………」

「だからお前も頑張れ。 悔いのないよう最高の演劇にしよう」

「最高の演劇……そうですね……」

割りきった顔をみんなに見せる。

「私も頑張ります」

キリツと目付きが変わる古河を見て俺も心の準備を整えた。

「よし、いくぞっ」

「はいっ」

三年B組による“シンデレラであってシンデレラでないもの”は今、幕を開けた。

第25話 そんな劇はありえない！

これね。 あいつが王子やるって言ってた劇は。 椿と喫茶店で別れたゆいが体育館にやって来た。 理由は簡単。

あいつの面白いところを見るために 幕が開いてついに演劇が始まる。

辺りが真っ暗になるとステージだけを照明の人が照らす。

「姉に恥じないようにしつかりやんなさいよ……」

ゆいは皮肉なことは言わず、ただ心から応援した。

『それでは三年B組で“シンデレラであってシンデレラじゃない”です。 どうぞ』

「……………」

変なタイトル…。

ナレーション 「遠い昔、あるところにシンデレラという美しい少女がいました。 シンデレラはいろいろな重い事情を抱えて継母と継姉にいじめられる日々を過ごしていましたが、シンデレラは心根が美しいので頑張って暮らしていました。 そして今日もお腹が鳴るのをがまんして一生懸命に働いていました」

こなた 「シンデレラー、どこー？」

継母と継姉が登場してシンデレラを探す。

「うわっ、あのアホ毛の継母ちっさ。 リボンの継姉もドジッ子に

しか見えないじゃない…」

ゆいは思ったことをそのまま吐き出す。

しかし仕方がない。

アホ毛の子とリボンの子では役が成り立っていないのだから。

ナレーシヨン 「ああ、今日もシンデレラはいじめられるのでしょうか…」

「……ふーん」

でもナレーシヨンの人はけっこう上手いわね。

部分部分でナレーシヨンしてくれるから分かりやすいわ。

つかさ 「シンデレラちゃんどこですかー？」

いやあんたいじめ役なのになんでそんなのんびりしてんのよっ。

古河 「わ、私はここです」

照明がシンデレラ役に移る。

こなた 「あ、いたいた。今からコミケにいかない？」

古河 「はい？」

つかさ 「ち、違うよこなたちゃん。アドリブはいいつて言われるけどそこまでいくとみんなわかんないよー」

確かに継姉の言う通りだわ…。

私にも何言ってるかわかんない。

ってか今リボンの子、名前言ったわよね…。

つかさ 「え、えっと、夏祭りに着ていくドレスはできたの？」

うわぁ…小さい子と同じレベルできたか。

夏祭りにドレスはないでしょうが。

古河 「あ、い、いえ、まだです」

あまりのアドリブにシンデレラ役の子もストレートに困惑してんじやない…。

つかさ 「そ、そっか。じゃあ慌てずゆっくりケガのないようにね」

んな心配してくれる継姉がシンデレラの話に出てきたっけ…。

こなた 「じゃーねー」

もうおもいつきり脱線してるじゃない。

ナレーシヨン 「意地悪な継母と継姉は今日中に作れと無茶なことを言いました」

そこはちゃんとシナリオ通りに言うんだ…。

これってホントに演劇なの？

古河 「どうしましょう…。私も舞踏会に行きたいです…」

夏祭りじゃないんだやっぱり…。

古河 「でも私に服を作るなんて技術はありませんし…」

ナレーシヨン 「シンデレラは悩みました。このままではまた意地悪な継母と継姉にいじめられてしまいます。するとそこに一人の魔法使いがやって来ました」

黒井先生 「おおーきにー！ やつとウチの出番やなっ」

「……魔法使いって関西弁だったんだ……。しかもあの人少し老けてるけどもしかして先生？」

黒井先生 「こおらそこっ！ 誰が老けとるやって！？」

聞こえてたんだ…。

なんて地獄耳……。

ナレーシヨン 「ち、ちょっと魔法使いさん！ セリフセリフ！」

ナレーシヨン がわざわざ指摘する。

黒井先生 「ああ、そうやったな。ゴホンッ。えっと…あんた

の願いを叶えにきたんや。なんかないか？」

古河 「は、はあ…」

またシンデレラが困惑してる…。

まあ気持ちは分かるけど。

あんな関西弁で言われてもね…。

ナレーシヨン 「シンデレラは何を願うのでしょうか」

古河 「あ、あの、素敵なドレスを二着程用意してください」

「……………」

何だかんだあのシンデレラだけはまともなのよねえ…。

魔法使い 「分かった。ウチに任しとき。シュバラギコメモギ

ナガラパナー」

ナレーシヨン 「魔法使いは気持ち悪い呪文を唱えて」
魔法使い 「誰が気持ち悪いねんっ！」

今ちよつとナレーシヨンの本音出たわね…。

ナレーシヨン 「コ、コホンッ、呪文を唱えてドレスを二つ用意しました」

こなた 「シンデレラー、コミケに着ていくドレスできたー？」
あんたらはいったいどこに行くつもりだ…。

ナレーシヨン 「継母と継姉が様子見に来ました。魔法使いは慌てて姿を隠れました」

つかさ 「シンデレラちゃんでき……うわぁー！ 凄く綺麗なドレス！ しかもちゃんと二つあるー！」

こなた 「うゝん…、でもコミケには動きやすい服の方が…」

ナレーシヨン 「継母さん、そこは我慢してください。あと行くのはコミケじゃなくて舞踏会です」

つかさ 「ありがとう！ あ、シンデレラちゃんも一緒に来る？」

古河 「あ、いえ、私はその……遠慮します」

まあ話の進行上しうがないわよね。

こなた 「そつか、じゃあ私たち行ってくるねー」

ナレーシヨン 「継母と継姉はシンデレラを冷たくあしらって舞踏会へ向かいました」

黒井先生 「ふう… やつと行ったか」

古河 「あ、魔法使いさん」

黒井先生 「あんたは行きたないんか？」

古河 「行きたいです…。でも舞踏会に相應しい服がないです…」

ナレーシヨン 「シンデレラは諦めかけていました。その時、魔法使いさんが驚くべきことを言います」

魔法使い 「よし、ウチが今着とる服貸したるわ」

ナレーシヨン 「こ、これは予想外です。恐らく先程の呪文が相当恥ずかしかったらしい。しかしそれもわかります。あんな子供っ

ばくてわけのわからないセリフを普通なら一回も言いたくない。それを魔法使いは一度言ってしまったているのですから今は相当恥ずかしい気持ちになっているでしょう。

魔法使いは黒い服を脱いでシンデレラの前に出す。

それに対してシンデレラはどうする？ どうするー？」

古河 「あ、ありがとうございます……」

ナレーション 「受け取ったー！ シンデレラがなんと真つ黒の！ ドレスでもなんでもない安物の服を受け取ったあああー！
「！！」

……なにこのコント的な劇は。

継母とか魔法使いとかがオリジナルなキャラになり過ぎてついていけない……。

それプラスあいつが王子ときたらこれはもはや劇ではなく、お笑いね。

第26話 天駆ける夢

「…………ふう、もうすぐ俺の出番か……」

舞台ではシンデレラの古河は魔法使いの黒井先生が用意した力ボチヤの馬車で城に向かうシーンに突入していた。

馬車が城に着くと照明などが全て消えて俺や踊りに来た人達が暗闇に乗じてステージにいる古河と入れ替わるという方法を取るようになっていた。

その場面まであと少し。

気持ちの整理をして心を落ち着かせようとしたその時、古河の言葉がちらつく。

“私はここにいることを許されてないんでしょうか……”

「……………」

あれはいったいどういう意味だったんだろう……。

「ちよつと、椿君。もうすぐ出番だよ」

「あ、ああ、わかった」

……………古河のことは後だ。

今は劇に集中しなきゃ。

そう意識を高めた時に照明などがパツと消える。それは俺達がステージに上がる合図だった。

「よし、いくか」

古河が俺とすれ違う。

その瞬間、古河の姿がぶれたことに関しては暗闇のせいで誰も気付かなかった…。

ナレーシヨン 「シンデレラが向かっているお城。そこでは舞踏会が開かれています。実は舞踏会が目的ではなかったのです。いつまで経っても結婚しない王子様のために舞踏会を利用して婚約者を選んでもらおうという王様の計らいで開かれたのです」

王子様の友達 A 「おい、あの子めちやくちや可愛いじゃん。お前ちよつと誘ってこいよ」

椿 「……何でナンパみたいなセリフなんだよ。そもそも俺はダンスが苦手なの」

ナレーシヨン 「王子はヘタレなのか、誰とも踊ろうとはしません」
椿 「誰がヘタレだ！」

ナレーシヨン 「玉子……じゃなかった王子、ちゃんと用意されたセリフを言ってください」

椿 「王子と玉子を間違えるお前が言うな！」

ナレーシヨン 「ツツコミはいいので早く誰かと踊ってください」

椿 「だから踊らないっての！」

ナレーシヨン 「王子はやはりヘタレでした。会場の皆様もこのヘタレっぷりにはさすがにブーイングしています。しかしそこに、シンデレラがついに城へ着きました」

ナレーシヨンと共に古河は舞台に現れる。

衣装はもちろん黒だ。

古河 「ここが舞踏会場のお城……。とても素敵なところです…」
ナレーシヨン 「シンデレラは城の中へと入っていきました。それに気づいた王子はシンデレラの美しさに心を奪われダンスの誘いに行きます」

行かなきゃダメなのか…。

しかもこのセリフは俺が何回もNGした場面。
もう失敗は許されない。

椿 「え、えつと、おお、なんと美しい。その姫、僕と踊りませんか？」

よし頑張った俺！

古河 「は、はい」

ナレーシヨン 「シンデレラは差し伸べられた王子の手に捕まり一緒に踊りました。それを見た継母と継姉はシンデレラを恨みました」

つかさ 「わあっ！ なんだかとてもお似合いだねえ！」

こなた 「そだねー」

全然恨んでねえじゃねえか…。

ナレーシヨン 「シンデレラは心から喜んで踊っていたその時、魔法使いと約束した十二時の鐘がなっていました。シンデレラは仕方なく王子と別れるのです」

古河 「……………」

椿 「……………？ おい古河？」

セリフを言わない古河に問うと、

古河 「良かった……間に合って…」

椿 「え？」

声が小さすぎて何を言ったのかわからなかった。

古河は魔法使いが着ていた服を引きずりながら俺から離れる。

ナレーシヨン 「シンデレラは足早に城を出ていくのですが、階段で靴が脱げてしまいました。シンデレラは靴を拾おうか迷いましたがそんな時間は無く、片方脱げたまま馬車に乗って家へと帰りま

した。それを追った王子は名残惜しそうにシンデレラの背中を見送ることしかできませんでした」

椿 「……………あ、あれ？」

今、一瞬古河の背中がぶれたような…。

気のせいかな…？

ナレーション 「その数日後、王子は靴を頼りに街へ寄ります。

一軒一軒回っていたのですがその靴にピッタリと合う人物が現れませんでした」

付き添いの兵士 「おかしいですね。あと一軒しか残っていませんのに未だ一人も合わないとは…」

椿 「と、とにかくその一軒へ行こう…」

ナレーション 「王子は最後の一軒、シンデレラが住んでいる家に行きました。いえ、住んでいたと言った方が正しいでしょう」

付き添いの兵士 「むう、やはりダメかな…」

こなた 「いやー、案外ピッタリこないもんだね」

付き添いの兵士 「この家の者はこれで全員かな？」

こなた 「あと一人残ってるよ」

椿 「む、その者は今どこに？」

つかさ 「そ、それが家を出ていつてしまってもういないんです」

ナレーション 「なんとシンデレラは継母と継姉のいじめに堪えきれず家を出ていつてしまったのです。王子はきつとその者だと信じ、搜索しました」

「もうすぐなんですな…」

消えかかっている手。

自分が幽霊であるということはまだ誰にも言っていない…。

古河は舞台裏で息を整える。

そして照明の方を向いて独り言を言い出した。

「水波さん、佐藤さん、私の夢に付き合ってくれてありがとうございます……」

あなた方のお陰で大好きな演劇をやることができました…。

「そして桃原さん、ありがとうございます……」

私は幸せになることが許されない存在だというのに桃原さんが優しくしてくれて十分幸せでした…。

今まで……本当にありがとうございました……。

第27話 終演の一番星

椿 「探せ探せーっ。 どこも見落とすんじゃないぞ」
声を張って兵士達に指示を送る。

だが俺は劇を演じることよりも違うことを気にし始める。

「……………」

なんだ…？ さっきから嫌な予感がする…。

周りが妙にスローに感じた。

こういう時は決まって並じやないことが起こる。

ゲーム世界の時もこんな感じだった…。

今までの経験からして今回もまさか…。

ナレーシヨン 「王子は国のほぼ全域を探しましたがシンデレラは見つかりませんでした。 シンデレラがいなくなってから三日後、

王子は南の端まで来てみましたが無駄足となりました」

椿 「仕方ない、もう諦めよう…」

ナレーシヨン 「馬を操り城の方向へ向かおうとしたその時」

兵士 「お、王子！ いました！」

椿 「なに！？」

ナレーシヨン 「指を差された海岸に王子たちは注目します。 そ

こに映るのはただ一人の美しい女性でした」

椿 「確かにあの女性だっ」

ナレーシヨン 「シンデレラは家を飛び出して数百キロ離れた遙かな南の地にいました。 王子は慌てて声をかけてシンデレラを呼び止めます」

ここまでではよかった……。

アドリブばっかだけど上手く流れに乗っている……。

でもここから先は用意されていた“俺が思っていた台本”の全てを否定した形となった……。

椿 「シンデレ……ラ……」

ナレーション 「……なっ……!？」

「う、うそ……」

「なにあれ……」

こなたとつかさは絶句する。

いや、それは俺達も同じだった。

なぜなら登場した古河が消えかかっていたからだ。

この現象に全員が混乱する。

「な、なにがどうなってるの……」

「古河さん、あなたはいつたい……」

観客席からはかがみさんと峰岸さんの驚嘆な声が聞こえてきた。

「古河…、お前それ…」

「ごめんなさい……、私みんなを騙してた……」

「……え？」

騙してた…？

何をだ…？

「本当は私は死んでいた身なんです…。 三年前の交通事故で…」

“……夢を見たんです。 私と水波さんと佐藤さんが乗っていたバスが交通事故に遭う夢…”

「っ！！」

前に古河は夢を見たと言っていた…。

アイツまさか…。

「辺りは血が飛び散っていて意識が朦朧となっていました…。 最後

に見たのは水波さんと佐藤さんの血塗れの手です……」

「水波…佐藤…！？」

一番古河の身近にいた人物二人。

俺はハッと気づいて照明ライトに目を向ける。

だがそこにいるはずの水波と佐藤の姿まで見えなかった。

「次に目を覚ましたら私は今年の三年B組の教室で文化祭で何するかを決めていました…。 その時、声が聞こえたんです…。 文化祭までが限度、それ以上経つと姿は消えてしまっ…って」

文化祭まで…。

それはつまり今を示しているのか…。

「訳が分かりませんでした但しこれだけははっきりと覚えていました…。 三年前に私は死んだのだと…。 だったら何故私はここにいるのか…。 考えられるのは一つ…。 やりたいことをやってから成仏しろって神様がチャンスくれたのだと…。 そこで三年前に興味を持っていた演劇を提案したんです」

「……………」

過去を振り返れば俺もこういう非科学的なことは実際に経験している身だ。

だからなぜ古河達が今を生きていられるのか、その原因の心当たりはある。

古河の言う“神様”も…。

おそらく正体は“彼方からの光”であることに間違いないだろう。

その光が古河達を一定時間存在させた。

でもその期限がもうすぐ切れてしまう。

だから古河の体は消えかかっているのだろう。

まるで幽霊のように…。

そして彼方からの光が原因なら全てに納得がいく。

黒井先生やみゆきさんがクラスメイトを忘れていたことも今古河が消えかかっていることも。

「ホントにごめんなさい……」

「……」

体育館内が沈黙した。

これは演技ではない。

そんなことはこの場にいる全員がわかっていることだ。

「え、ちよつと待ってください。古河さんはさっき“消える”と言いましたよね？」

みゆきさんが慎重に質問する。

「はい……」

「それは…ただ消えるということではないですよね…？」

「あ……」

俺は古河が言っていたこの物語のストーリーを思い出す。

“このお話のスタート地点は普通のシンデレラの話と一緒になんです。

意地悪な姉たちに虐められるシンデレラ。

舞踏会等は違ってくるが流れに関しては似ています。

でも決定的に普通のシンデレラとは違うところがあります。

それはラストのシーンなんですがシンデレラは虐められる苦痛に耐えきれず家を出ていつて姿を消します。それもただ消えるだけではないんです。みなさんが持つ自分に関する記憶を消してからいなくなるんです。つまりシンデレラがいたという存在をそのままなかったことになるんです。

そして王子もシンデレラのことを忘れてしまい、結婚しないまま終わるというちょっと悲しい物語なんです…”

「記憶が……なくなる……？」

俺の呟きに古河は頷いた。

「そんな……！　じ、じゃあ古河と一緒に劇をしたことも全部俺達は忘れるってことかよ！？」

「はい……」

「な、なんでだよ！？　なんとかできねーのかよ！？」

「それは無理です……。私はここにいてはいけない存在……。ただの不要な人物なんです……」

「……っ！」

そんなこと……！

「そんなことねえよ！　古河は俺達の友達だ！　不要なわけない！」もう演劇などどうでもよかった。

古河達がいなくなるというのにそんなことをしている場合ではなかったからだ。

「桃原さんは優しいですね……。その優しさに私は惹かれました……」

とても好きになりました……」

古河は一步步近づいてくる。

俺はそれに対して一步步逆に距離をおいていった。

「桃原さん……？」

「……っ」

最後のシーンにはキスが投入されている。

だが俺はやつとシンデレラにはないはずのキスがある理由を知った。
「もし…、俺がここで劇を続けたら……、キスをしたら……お前は
すぐに消えちまうんだろ……」

「はい……」

「だったら俺はしたくない……!」

「どちらにしても私はもうすぐ消えてしまいます……。 延びる時間
も僅かしか……」

「それでも……! 俺は少しでも長くお前らといたいんだよ……!」
「……………」

もう何がなんだかわからなかった……。

コイツラがすでに死んでいることも、幽霊になってしたかったこと
をやりに来たことも、もうすぐ消えてしまうことも……、全部夢だ
つたらしいのに……。

こんな辛いことがあつていいのだろうか……。

こんな悲しいことがあつていいのだろうか……。

俺達の周りはいつもそんなのばっかだ。

いくら乗り越えてもまた壁が行く道を邪魔して……。

こんなの……堪えられるわけがない……!

俺は古河達が消えてしまふという運命に涙を流した……。

「桃原さん……お願いです」

「イヤだ……!」

演劇を続けたらコイツラの記憶がなくなつてしまふ。

そんなの絶対にイヤだ……!

するとステージのど真ん中に魔法使い役の黒井先生が来た。

「桃原、ウチには信じられんけど今出来ることをするんや……。
でないと古河らが後悔して涙を流すことになんねんぞ……」

「でも……!」

「お前は古河らを困らせたいんか!? ちゃうやろ!? せやつた
らちゃんとやらんかい……!」

「……………」

それはわかっている。

だけど俺は…！

「桃原さん…。覚えてますか？ 私の手を引いて走ったことを…」

…」

“だ、だからそんな早く走ると”

ビタンッ！

“うわっ！？”

ビタンッ！

“……転けちゃいます”

“忠告は走る前に頼む…”

「……ああ」

「…桃原さんについて告白したことを……」

“け、決して桃原さんの笑顔と優しさに触れてあなたのことを“好き”になってしまったわけではないんです！”

「……ああ」

「なら忘れないで下さい…。そしたら私達はずっと桃原さんと一緒です。えへへ…」

「……っ」

なんでだよ…。

「なんでお前はまたそんな笑顔を見せるんだよ…。もうすぐ自分はいなくなるってのになんでだよ…。！ お前言ってただろ…。！ いなくなるのが怖いって言ってただろ…。！」

「はい…。でもそのあと言ったじゃないですか……」

古河は握手のように手を差し伸べる。

俺はそれに引き寄せられしつかりと古河の手を握った…。

その手はとても冷たく感じたが、古河の温かい想いが伝わってくる。

“もう大丈夫です。　こうやって手を繋いでいますから”

「あ……」

古河はギュツと抱きしめてきた。

「……………私のこと、忘れないでくださいね」

両人は静かに目を閉じた。

キスをするフリじゃなかった。

古河は最後の勇気を振り絞って俺の唇と重ねる。

「えへへ……、これじゃ桃原さんに怒られますね……」

「ふ、古河……」

「でも……、最初で最後の演劇が皆さんとできて本当に良かったです

……………」

だんだんと色が薄くなっていく……。

そして最後まで古河は最高の笑顔を見せて消えた。

同時に俺達の頭の中で何かが弾けて散った……。

『以上で三年B組のシンデレラであってシンデレラでないものを終わります。　ありがとうございました』
舞台幕がゆっくりと閉じられた。それを確かめたら衣装を脱いでス

テージ端に行く。

「ふう…疲れた」

「椿君お疲れ様ー」

こなたが労いの言葉を渡す。

「もう演劇は二度とやりたくない…」

「あはは。でもなんか変だったよね。シンデレラの劇なのにシンデレラ役が出演しなかった劇なんてさ」

「そういえばそうだな……」

なんで主役のシンデレラを俺達はやらなかったのだろう…。

配役が足りなかったとか？

でも普通主役は最初に決めるからそれはないよな…。

じゃあ何で……。

「……………まあいいんじゃない。無事に劇は成功したんだしさ」

「あ、ああ…。そうだな…」

なんだこの違和感…。

俺は誰かを忘れていたような気がする。

シンデレラ役で出演していた人物…。

記憶を辿るが全くわからない…。

そういえば少し前、誰かにこんなことを問われたような気がする…。

“もし私がいなくなったら桃原さんはどう思いますか…？ 悲しいですか…？ それとも寂しいですか？”

「……………」

俺に話しかけるのはいったい誰だ…？

「……………くそ…ダメだ……。全然思い出せない…」

胸がモヤモヤしてスツキリとしない。

だがいくら考えても答えを見つけないことはできなかった…。

でも俺が忘れていることはとても大切なこと。

それだけは覚えていた……。

“ ありがとうございました ”

今も不思議な声が俺の中で生きている……。

第27話 終演の一番星（後書き）

文化祭編はこれで終わりです。

ちよつと今回の文化祭編はあまり自信がないのでみなさんのコメントを聞いてみたいです。

よかったら書いていってください〇） （〇

第28話　メリークリスマス!!

「メリークリスマス!!」
「パンッパンッ！」

クラッカーが我が家のリビングに散る。

十二月二十五日、世間は冬休み&クリスマス。

由佳と過ごそうと思った今日だったが、家族で旅行に行くため俺は一人ポツンとクリスマスを潰そうと予定を立てていた。しかしここで黙っていないのがこなたたち三年生組六人、ゆたかたち一年生組四人、そして由佳が家族旅行だからクリスマスの日は俺一人と言いつらした永森さんと八坂さん…。

合計十二人がやって来た。

しかも全員が泊まるらしい…。

そんなバカなことがあっていいのだろうか…。

「それじゃまず今日の寝場所を決めようか」

こなたがサントのコスプレ姿で仕切り役をする。

「椿君、一階の部屋はやっぱり使っちゃダメなの？」

「あー、別にもういいよ」

かがみさんが言う一階の部屋とは俺の親が使っていた部屋だ。

あそこは俺にとって大事な部屋だがコイツラが使うなら気にはしなかった。

「ってことは二階の三屁やと一階の一部屋、それから……」

「リビングで俺が寝るってことだな……」

この計算なら一部屋三人で寝れば問題はない。

布団は母さんが人を招くのが好きだったから大量にある。

三人で二つの布団を使えば絶対に足りるだろう。

ああ、さらば…、フワフワのマイベッド…。

「じゃあ私がかみとつかさで」

こなたは指名した二人の手を取る。

しかしそれを黙って見過ごすみさおではない。

「おいちよつと待てチビツコ！ 柊はウチとあやのの三人で寝るんだっ」

「いやいや、宇宙の大法則でかがみはウチと寝るのだよ」

「いや、ウチとだ！」

「ウチとだ！」

「もういい加減にしなさいよ…」

かがみさんは呆れながら言うが、ちよつと本人は顔を赤らめていた。いつまでもこんな低争いは見苦しいので、毎度お馴染みのじゃんけんでかがみさんの行方を決めることに。

「よっし！ 勝負は一回だかなっ」

「勝った方がかがみと寝れる！」

やっぱりかがみさんの意思は無視なんだ…。

二人はじゃんけんで勝つために無駄なストレッチをし始める。

別にストレッチしたからってじゃんけんに勝てるわけじゃないのに…。

ホントこいつらの考えることは小学生並だな…。

「あ、先輩、ちよつと待ってくださいッス」

ひよりが火花散らす二人の間に割って入る。

「二人には悪いんですけどみんなでじゃんけんしないッスか？ 私も実はかがみ先輩と距離縮めてみたかったんすよ（別訳：かがみ先輩の近くにいたらかなり百合ネタができそう）」

「それはそれでなんか面白そうだね。 私もかがみ先輩のこと知りたいですっ」

八坂さんが後輩の言うことに便乗する。

「私も久しぶりにお姉ちゃんと寝たいかもお」

「ひよりグッドアイデアネ

!!」

「いやあそれほども」

グッドアイデアでもなんでもないと思うんだが…。

かがみさん抜きで盛り上がる中、たった一人だけその輪から外れていた。

「ふう…、なんで私ここにいるのかしら…」

猫にそっくりランキング一位の永森さんだ。

彼女はテーブルの一番はしっこの椅子に座ってみんなをただただ見ていた。

「……………」

気まずいのかな…。

よく考えたら永森さんはそれほどこなたたちとは仲良くない。

まともに話せるのは八坂さんぐらいだ。

おそらく今日ここに来たのはその八坂さんが無理矢理連れに来たに違いない。

でもこれをきっかけにみんなと仲良くなれたら…。

「あの永森さ」

「永森さん！ 早くおいでよー！」

俺が言う前にこなたが誘いの舟を出す。

「え、あ、私はいいです」

永森さんは突然声をかけられて戸惑いながら断る。

しかしつかさは手を差し伸べた。

「おいで、永森さん」

「……………」

ふと思いついた…。

俺がみんなと仲良くなったのはこんな風にこなたやつかさが声をかけてくれたからだ…。

それに対して俺は少なくとも後悔なんて感情はない。 むしろ嬉し

いと思っている。こなたたちに声をかけてもらえなかったら今の俺はないから…。

「だから私は」

「永森さん」

そういう幸せがあるんだってことを知ってもらいたい。

そんな想いが俺を動かした。

「混ぜてくれば？ これを機会に仲よくなっていけばいいだろ」

「ほら、永森さん」

みんなが作った輪に一人のスペースが開けられる。

それは永森さんのための空間だった。

「……わかりました」

永森さんは照れながら入った。

「よしよし」

これで万事解決だ。

さて、俺は関係ないから風呂に入る。

輪の後ろを通ってリビングから洗面所に行こうとすると、

「あれ？ 椿君どこいくの？」

ゆたかがひき止めてきた。

「俺は風呂に入ってくる」

「なんでですか？」

続いてみゆきさんまでもが聞いてくる。

「いやなんでって言われても風呂に入るのに理由なんかないだろ」

「そうじゃなくて、椿君もじゃんけんしなきゃダメなんだよ」

「………は？」

「だから早くっ」

強引に腕を引っ張られて再びリビングに戻る。

「お、おいこなた！ 俺は」

「んじゃ全員揃ったとこでいくよー！」

「話を聞けー！！」

『じゃーんけーんほーい……!』

第29話 監視下にあり

一つ疑問に思うことがある。

それは何なのか…。

答えはこのじゃんけんで勝てば俺はかがみさんと寝なければならな
いということ。

だがこの十人以上いる中で俺が勝つなんてそうそうあるもんじゃな
い。

そもそも俺とかがみさんは異性が違う。

“もしものこと”を避けるためにも簡単に寝るのはよくないだろう。
それにかがみさん自体が納得するはずがない。

だからこのじゃんけんに勝っても大丈夫だ。

うん大丈夫だ。

そう思っていたのに……。

「ちよっと、じろじろ見ないでよ」

なんで横でかがみさんが寝てるのー！？

「ほらほらお二人さん、早く寝ないと朝起きれないよ」

くそ…、こなたは俺たちがちゃんと寝るかどうか確かめるために同
伴してやがるし…。

そもそも布団二つにかがみさん、俺、こなたの順に入るのって間違ってるだろ…！

なんで俺が真ん中で二人が両サイドなんだよ…！

普通俺がどっちかにねるのが正しいんじゃないのか…！？

「なあこな」

「なに？」

「うわあああつ！？」

かがみさんの方から逆に体を反転させたらこなたの顔が目の前に現れた。

俺は反射で起き上がる。

「おまつ！？　なななんでもこんな近くまで寄り添ってたんだよ！？」

「そりゃあチエックするためだよ」

「ち、近すぎだ！　チエックするんならもう少し離れてもできるだろ！」

「まあ小さいことは気にしない気にしない　それより声張り上げすぎたらみんな目を覚ましちゃうよ？」

「う…」

時計はすでに午前零時。　みゆきさんやゆたかとかは就寝しているだろう。

「とにかく　今日は椿君と由佳ちゃんについて語り合おうではないか」

「お前さつき早く寝ないと明日起きられないとか言ってたかったか…？」

「い・い・か・らっ」

こなたはさらに体を寄せてくる。

俺はススツと逃げるように反対側の布団に行く。
しかし、

「あ、私もそれには興味ある」

かがみさんが話をよく聞かためたために俺の方向へ…。

「ちよっ、お前らそんなに引つ付くな！」

「ふっふっふ　それでぶっちゃけ由佳ちゃんとはどこまでやったの？」

「ホントにぶっちゃけるわね…」

「まったくだ…」

「だって気になるじゃん　それでどこまで？」

「……………絶対に言わない」

「だいたいそんなことこいつらに言う必要がない。」

「あれ、そんな意地張っていいのかな？　今日のこと由佳ちゃんに言っちゃうよ？」

「なんだよ今日のことって。　お前家が泊まりに来たことはさっき電話で言ったぞ」

「じゃあ言っちゃおっかな。　椿君が私たちと同じ布団で寝たって「なっ！？」」

「こ、こんなにやる…！」

「こういう時だけ悪知恵を働かせやがって…！
そういうのは勉強にだけ使えよ！」

「さあ、椿君はどこまでやったのかな？　かな？」
「何故二回も言う…」

「そこまでして彼氏彼女の話が聞きたいならあやのさんのところに行けつての。」

「しかし言わなければめんどくさいことになる。
それだけは勘弁だ。」

「こなたとかがみさんの圧に負けてできるだけ聞こえないように言った。」

「……………キ、キス程度…」
「「えっっっ…」…」

「二人のテンションが急降下する。」

「な、なんだよ、別にいいだろう！　俺たちがどこで止まっていようが！」

「いやそうだけどさ…、5ヶ月付き合ってキスだけってありなの

かな」

こなたがかがみさんに問う。

「どうなんだろう…。私たち彼氏いないから正確には分かんないけど、私的にはその……もうちょっと先を望むっていうか…」

「……………」

照れながら言うかがみさん萌え。

ってそんなこと言ってる場合じゃない。

「椿君やっぱヘタレ？」

いきなりこなたからの右ストレート。

「ヘタレ言っなっ」

「じゃあ女の子の体に興味ないの？」

今度はかがみさんからの左アッパー。

「い、いやそういうわけじゃないけど……………」

手を出したらなんか嫌われるかもって思ってしまった…。

それに由佳の裸なんて考えただけで…………。

「あ、椿君の顔が真っ赤になった」

「なんかいやらしいこと考えてんじゃないでしょうね」

こんな会話でいやらしいこと考えないほうがおかしいつつの。

会話が少し弾みがついてきた途中、こなたが小さいため息を吐く。

「はあ、エロゲーならどんなヘタレな主人公でも手は出すのに、何もしなかったらエロゲー以下の存在になっちゃうよ」

「……………ほっとけ」

「なんなら私が練習相手になってもいいけど」

こなたの誘惑に俺は即答する。

「断る。由佳とこなたじゃ胸とか身長が月とすっぽんだからな」

「え、じゃあかがみとならないの？」

「「ぜ、絶対ダメ！」」

かがみさんときれいにハモった。

それほど気持ちがシンクロしていたのか。

そろそろこの体勢に疲れたからうつ伏せになろうと体を動かす。

その時かがみさんと目が合って瞬間に思ったことを尋ねる。

「……………そういえばかがみさん何で彼氏いないの？ レベル高い方なんだから誰か適当に告ればすぐにできそうなんだけど」

「あー、ダメダメ椿君。 かがみんには私がいるからそうというのはわざと作らないでいるん」

ガンッ！！

俺を間に挟みながらもかがみさんの鉄拳がこなたの頭上に。

「何であんたが関係してんのよっ」

「うゝゝ、じゃあ何で作らないのさゝ。 私も椿君の言う通りかがみってエロゲーでも上ランクキャラなのに」

またエロゲーに例えるのか…。

だがそのジャンルをやったことのある俺としても同感だが。かがみさんは所謂ツンデレツインテール。

エロゲーなら人気も相当あるから文句の言いようがない。

ならなぜ彼氏がないのか。

答えは一つ。

「かがみさんって男よりも女の方が好」

「違うわよ！！」

冗談なのにずいぶん強く否定するんですね…。

あとなんでビンタをくらっている俺がいるんだろう…。

自業自得にしてはちよっと辛い…。

第30話 ♪切 恋ばな そして少女の夢い願い！！

「かがみ先輩となりたかったツス…」

かがみ争奪じゃんけんに負けたひよりは二階の一番端の部屋に寝場所をしたのだが、その隣にはこう先輩とパティという馴染みのある二人。

「こら！ そんなこと言ってる暇があったら早く原稿仕上げるっ！」

「ううゝ…、もう眠たいツス…」

うつらうつらとなりかけるところにパティが、

「ダイジョウブネひより！ ニンゲンはしんだアトにたっぷりネれるからアンシンアンシン！！」

「いやそれ安心通り越してるから…」

「ほらまた手が止まってる！ ♪切近いつてわかってるのっ！？」

「遊びに来てるのにこんなのってひどいツスゝ……」

二階真ん中の部屋。

ここは天然リボンとロリッ子妹、そして猫目ツインテールが借りているのだが、

「永森さーん、お菓子食べる？」

「いえ、私はけっこうです」

「じゃあゆたかちゃんは？」

「あ、いただきます」

ゆたかがとことつかさからチョコレートを貰いに行く。

そこからつかさたちは適当に駄弁っていると、話題は変な方向に転がっていった。

「それにしてもゆたかちゃんってしつかりしてるねえ」

「そ、そんなことないですよ」

「そんなことあるよ」。だって勉強できるし誰とでも仲良くなれるし可愛いもん」

「……………」

最後の可愛いはいしつかり者と関係あるのかしら…。

やまとはポツリと気にかけたが黙って二人の会話を続けて聞く。

「つかさ先輩だって料理できてすごいですよ」

「そんなことないよ」。あ、それに私よくこなちゃんに天然って言われるから“脳トレ”始めたんだ」

「……………」

天然は脳トレで治せたっけ…。

またやまとは引つ掛かりを感じたがスル…。

「それでね、頑張ったんだけどなかなか治らなくて…」

そりゃそうでしょうね…。

「でももうちょっと頑張った成果ですよ！」

ゆたかが無駄に励ます。

「そ、そうだね。もう少し頑張ってみるよ」

二人はすっかり意気投合していた。

「……………」

しかしツツコミがないせい、苛立ちが少しくる。

やまとは付き合ってられなかったのか、早々と布団の中に入った。

「あれ？ 永森さんもう寝るの？」

つかさがポツキーをくわえながら言う。

「そうですけど」

「えゝ、もうちょっとお話したいんですけど……」

やまとが布団に潜ろうとした時、ゆたかがひき止める。

「う……」

なんだろ……この子のうるうるとした丸い目を見ると何故か心が痛む……。

「もう……分かったわよ……。でも何か話すことあるの?」

「恋ばな」

「……へ?」

「やっぱり女の子は恋ばなだよねえ」

「はい」

「……」

ああそうか……この二人はド天然なのか……。

女の子が集まったらすることはこの二人にとって恋ばなしかないのね……。

「それで永森さんは付き合ってる人いないの?」

「いないわ」

「じゃあ好きな人とかは?」

「これっぽっちもない」

「……」

「……」

「……」

暫し沈黙。

しかしこの沈黙でやまとはわかったことがある。

この二人は彼氏いないんだ……。

どっちもこんなに可愛いのに。

「あ、あの、私いいですか?」

ゆたかが空気を変えようと必死に手を挙げる。

こういうところがまた可愛いらしい。

「えと、えと、好きになってわけじゃないんだけどちょっと気になる

人がいます。その人は見た目がカッコいいとかそういうのではないんですが……」

“いつも正直で素直で……誰にも真似できない思いやりを持ってて……”

「私のこと助けてくれたり励ましたりしてくれたり……」

“それになんかゆたかといったら心が和んで、癒されて、嫌なことなんかどこかにいっちゃって悩みを忘れさせてくれる”

「ちゃんと私のこと理解してくれて……」

“そんなゆたかの存在に、俺はずっと……憧れていた”

「とても……とても素敵な人です」

「……」

ゆたかの話が終わるとさつきとは違う和やかな居心地になっていた。
「あ、でもホントに好きじゃないんです。ただ一緒にいたいだけっていうかその……」

柔らくなつた流れに乗じてつかさは自分の思っていることを言う。

「それ、ちょっと分かる気がするな」

「え？」

「……だって、私にもいるもん。そういう人……」

“つかさはお前等をかばったんだぞ！？だから今を泣いているんだろうが……”

今も忘れないあの姿……。

慣れてない暴力を奮って必死に守ろうとしてくれた……。

勝てないケンカなのに私のために精一杯向かっていつてくれた…。恋とは少し違うけど間違いなく言えるのは私はその人にとっても感謝しているということ…。

「……言われてみれば私の近くにも面白い人いたかも」
やまとは夏休み前に皆が集まったことを天井を見上げながら思い出す。

“これめっちゃめっちゃ美味いよ！”

別に好きじゃない。

でもその人を見ているとなんだか楽しいというか、落ち着けるする
というか、とにかく悪い気分にはならない。

優しいだけじゃない何かがあの人にはあるんだろうな……。

一方、

椿の部屋ではみなみ、みゆき、あやのの三人がペアとなった。しかし…、

「……少し狭いですね」

「そ、そうですね」

「でも三人で一つのセミダブルベッドですから仕方ないね」

椿の話によると大量にあった布団は夏休みに叔父さんと祖母さんが預かったらしく、もう余りは少ししかないらしい。

その少ししかない布団もかがみのこと、つかさのこと、そしてひよりのところに配布されて仕方なく椿が使っているこのベッドを使用することに。

この真冬の時期、仲良しに同じ布団を被っていると温かいのだが、みなみはチラチラとみゆきの胸を見る。

「……………」

狭いのはこの胸があるからなんだろうか…。

あやの先輩も一般並にあるから羨ましい…。

でも私は…………。

「……………」

自分の胸を上から覗く。

そして両手で被るように触った。

ペタペタ。

「……………」

やっぱリプニプニって音じゃないんだ…。

私やゆたかみたいに胸が小さい人は絶対にペタペタの運命を辿るのか…………。

でもきつとみゆきさんは…………。

「…………？　みなみさん、どうかしましたか？」

みなみの視線に気付いたみゆきが話しかけてきた。

「い、いえ、何もないです…………」

「…………？」

みなみはクルリと背中を向けてため息をつく。

「はあ……………」

一度だけでいいから胸に谷間ができてほしい…………。

第31話 紙飛行機

「5
…」

「4
…」

「3
…」

「2
…」

「1
…」

「明けましておめでとう!!」

由佳が派手にバンザイする。

今日は新年を彼女と迎えるために由佳の家へ来ていた。

両親との関係もよく（妹のゆいはやたら睨んでくるが）、今日は泊まってもいいと許可は得ている。

しかし俺の彼女は年が明けたくらいでなんでこんなにテンション上がるんだよ。

「お姉ちゃんはやぎすぎ」

二階の由佳の部屋で一緒にテレビを見ていた妹のゆいもあきれられるほどはっちゃけている姉に指摘する。

「だって一年が過ぎたんだよ！ 今日から新しい私が始まるんだよ！ だったら最初っから元気出していかなきゃダメじゃん！！」
いやそんなスタートラインからぶっ飛ばしてもどうせあとからはて
ると思うんだが…。

「地球よありがとー！！」

由佳はテレビに出演している人の真似をして声を張り上げた。

これって近所迷惑なんじゃ…。

「ほら！ 椿っちもゆいもテレビに向かって叫ぶ！」

「いややらないから」

現在六時ジャスト。

さつきこなたやかかみさんは初日の出を見に行くから一緒に行かないかと電話が来た。

実は俺と由佳もこのあと初日の出を見に行く予定を立てている。

だから後で行くと言えはよかったのだが、言えなかった。

何故なら……。

「くうー……」

「やっぱりね」

「やっぱりだな」

小さな寝息をたてる由佳。

正直、俺とゆいは由佳がこうなることは分かっていた。

「別に友達と初日の出を見に行ってもいいのに」

「まあ確かにそうなんだけど……」

年に一度しかない初日の出。 由佳をこのままにして行くつても
ありなんだろうが……、

「やっぱり俺は好きな奴と一緒にいるほうがいいんだよ」

由佳の顔を眺めながら答える。

……しかしなんかデジャヴだな。

前もデートの約束してたのに寝てたし……。

「うーん……椿っち……」

ん？ 寝言か？

みつともなくヨダレを垂らしながら由佳の口が動く。

「そこは……ダメだよお……」

ゆ、由佳の中でいっただんな夢が広がってるんだよ……。

「……………」

ゆいも状況を察したのか、無言で由佳の寝言に耳を傾ける。

いったい夢の中で俺はどんなことをしているんだろうか。

まさか現実じゃまだやっていない や とか繰り返してた

りして……。

「そ……そこは………んう…… ウオシュレットのボタンじゃないよ

……………」

「……………」

ウ、ウオシュレット……。

か、完璧に勘違いしちゃったじゃねえか……。

「あ、あはは……。な、なんか予想してた夢とは違うみたいだな」

苦笑いで空気を正常にしようとするが、

「……………じゃああんたは何の夢だと思ってたの？」

「え、っ！？」

ズイツとゆいが乗り出してくる。

「なに？ 言えないの？」

「え、えと、そりゃその……ゴニョゴニョ……」

突然のことに口ごもる。

女の子にあんなことやこんなことを気軽に言っではいけないとスト
ップがかかったからだ。

「ま、あんたの考えてることなんか全部お見通しだけだね。 この
変態スケベヤロー」

「だ、誰もいやらしいこと考えてるなんて言ってないだろ！」

「私もいやらしいことなんて一言も言ってないけど」

「変態って言っただろうが！」

「ハイハイ、とりあえず私寝るからおやすみ」

ゆいは姉の布団が乱れているのを直してから部屋を出た。

なんか俺が子供であいつが大人みたいな終わり方じゃねえか…。

「椿っちい……」

ゴロリと寝返りをうつ。

そもそも事の発端はこいつなのにグースカと気持ち良さそうにしや
がって。

「大好きい……」

「…なっ……！？」

肌寒いこの季節。

一気に俺の体温が上昇するのはなぜだろう。

チラつと由佳の顔を覗くとプニツとした柔らかそうな唇に注目して
しまった。

「今キスしても大丈夫だよな…？」

幸いにもお邪魔虫のゆいはいない。

今までキスは何回もしたことあるが人前ではできないのだ。

いざいかと体を寄せて唇を重ねようとしたその時、

「でも……」

「ん？」

「たこ焼きの方が好きい…」

「……………」

たこ焼きのせいで雰囲気が完全に砕かれた…。
許さんぞたこ焼きめ…。

「おおー！ 見事な初日の出！」

「こらこら、私の目の前で叫ぶな。 見えないしうるさい」

こなた、かがみ、つかさ、ゆたかはゆい姉さんに初日の出がよく見える海岸へ連れて行ってもらっていた。

真冬でバカみたいに気温は低いのだが、新年最初の綺麗な朝日のおかげで寒さを忘れさせてくれた。

「なんか普通の日に太陽が昇るの見たも感動しないのになんで今日はこんなに凄いつて思えるんだろうね」

つかさは思ったことをそのまま口にした。

それに対してこなたが答える。

「人間って特別や限定って言葉に弱いからねー」

「それちよつと違う気がするけど」

かがみのツツコミも新年早々出番がくる。

ふう…、それにしてもやっぱり残念ね。

あの二人とも一緒に初日の出を見たかったな…。

あの二人とはかがみの昔からの親友のみさおとあやの。

ここへ来る前、かがみは二人にも連絡したが、あやのは彼氏と一緒に

にいるため無理だそうだ。

みさおは携帯に出ないところからおそらく爆睡中。

「こんなに綺麗だとは思わなかったよー。椿君も来ればよかったのにね」

「あーゆうちゃん、椿君にはそんな必要はないんだよ」

「どうして？」

「何故なら椿君にとって太陽は由佳ちゃんなんだから」

こなたはビシッと親指を立てる。

「いや別にいいセリフとかいらないから」

初日の出が完全に出てくるとこなたは両手を合わせて目を閉じた。

「こなちゃんなにやってるの？」

「願い事」

「そんなの神社でやればいいじゃない」

「とても大事な願い事だからいっぱいしとかないとダメなんだよ」
願掛けをするように強く掌を合わせる。

「……………」

その願いはすぐには叶わないかもしれない。

だけどいつかは叶ってほしい。

この願いだけは……。

「こなたー、そろそろ帰るわよー」

「あ、うん」

こなたは最後に紙に願い事を書いて紙飛行機にして空へ飛ばした。
より神様にこの願いが近づくように……。

先程こなたたちがいた場所にすれ違いでこう、ひより、パティ、そしてやまとが初日の出を見に来たのだが……、
「オーノー！！ やっぱりカンゼンにオヒサマが力オをダしちゃつてマス！！」

パティが残念そうに頭を抱える。

「もー、ひよりが早く起きないから」

「えっ！？ 私だけのせいッスか！？ こう先輩だつて寝坊したのに！？」

「ニホンのハツヒのデをミノガしたバツはオオきいネ……」

「「え？ ハルヒのデ？」」

ひよりとこうはわざとらしく聞き返す。

それに怒ったパティは、

「バカにしてるんデスカ！？」

と、カンカンに眉をキリツとさせていた。

やまとはそんな様子を見て、

「はあ……」

巻き込まれないように避難しとこ……。

争いが勃発する端で小さな足取りで三人から距離をおく。
そこで微かだが弱い風が吹いた。

同時に海岸沿いで海に映るオレンジ色の朝日を眺めているやまとの足に何かが当たった。

「……？ なんだろこれ」

やまとが白い物体を手取る。

「紙飛行機？」

あまり汚れていないところを見るとまだ新しい。

やまとは手際よく元の薄い状態に戻す。

その中央に一言だけボールペンで書かれていた。

“ みんなが幸せになりますように…… ”

「……………」

みんなが幸せに……か。

「やまとー、もうここに用はないし朝のランチ食べに行こー」

「わかった」

たん瘤を頭に膨らましているこうに返事をしたあと、また願い事が書かれた紙をジッと見つめる。

「……………」

みんなが幸せになるのは不可能だって十分理解している。だけど……………。

「いいんじゃない…？　そういう素敵な願いも……………」

やまとはまた紙飛行機に直して飛ばす。

揺れを感じさせないほど真っ直ぐ天に向かう様子を黙って眺める。

そしてそのまま願いを乗せた紙飛行機は上へと進んでいった。
どこまでも……落ちることなく……。

第32話 ヲァツ！

「うゝ寒…」

外の気温は四度。

新年始まってだいたい一週間、明後日から学校が再開する。

とりあえずその登校日に備えて今日は家にとじ込もって防寒だよなあ。

今日は俺が今、手にしている朝のモーニングコーヒーを飲み終えてリビングに設置されているこたつへ潜り込み、平和な一時を過ごすという予定を立てている。

しかし……、

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン。

「……………」

誰だよこんなにインターホンを連打するのは…。

安らぎを邪魔されて自然に舌打ちを何回もした。

それほど苛立っているということだ。

冷えきった廊下から玄関までは恐ろしく寒い。

いちいちその通りに行くのはめんどくさいのだが、客なら仕方ないと踏ん切りをつけた。

「はいどちらさ」

「お邪魔するぜーっ!!」

ドアを開けると突如、女の子の影が俺の横を通り抜けた。
今の声はまさか…。

「み、みさお!？」

後ろを振り返ってその姿を確認しようとするが、

「げっ!？」 もうリビングに行きやがった!」

玄関を閉め直してみさおを追う。

しかしリビングに八重歯っ子はいなかった。

「あれ？ おかしいな。確かにこっちに侵入してきたのに」
最早みさおの扱いがどこぞのスパイのようになっていた。

まあ当然だろうけど。

しかしあいつどこに行ったんだ？

隠れる場所なんてどこにも……。

「……………」

ジーツとある場所を凝視する。

隠れる場所なら一つだけあるじゃないか。

冬にしか活用することのない便利な物。

俺は摺り足で音をたてずに近づいていきバツとこたつ布団を捲りあげた。

「ぬあっ!？」

「はあ… やっぱりここか」

案の定みさおはこたつの中にいた。

こたつに取り込まれたように動かないみさおをそのままにしながら
も一人で来た理由を聞く。

「んで？ 今日はどうしたんだ」

「いやーそれがさー、さつき柊ん家にいったらどつかでかけちまっ
ててよー。そんであやのん家に行ったら家族旅行だし、仕方なくち
びっこのとこで漫画でも読んで暇な時間を過ごそうとしたらこれま
たいなくてよ。おじさんに聞いたらちびっこのさらにちびっこと
買い物に行ったらしくてさー」

「ちびっこのさらにちびっこって……」

心当たりは一つ。

ゆたかのことだろう。

こいつゆたかのことそんな風に言っただけだったのか…。

「もう行くとこねーなーって思ってたらずいぶりに椿の家に行くの
も悪くねえなって閃いたわけ」

「それでわざわざ電車賃払ってここに来たのか…」

「ま、そういうことだな」

「……………」

つくづく思う。

こいつは相当な暇人だと。

「おい椿、見とけよー」

みさおはどこから出したかわからないカップのヨーグルトを取り出
し、そして……………。

「パン工場」

「バカじゃねえのか？」

「バ、バカとはなんだバカとはー！ 言っとくけどこれは柊直伝の
ギャグなんだかなー！」

なんだよ直伝って。

だいたいかがみさんがそんなことするわけがない。

みさおはブーブー文句を言いながら混ぜたヨーグルトを捨てる。

ここから見ると賞味期限が過ぎていることがわかった。

ということはネタをやるためだけにそのヨーグルトを持ってきたというのか。

ホントバカだなあ…。

「ところで椿ー」

みさおが顎をこたつに乗せながら言う。

「なんだよ」

「飯は？」

「……………俺に用意しろと？」

「おう！」

ポカツ。

「あ痛っ！？」

みさおの頭を地面に埋めるように叩く。

そしたら頭ではなく口をおさえていた。

さては舌を噛んだな。

「レディにこんなことするなんてありえねえってヴァ…」

「ああすまん。レディじゃないから手がでちゃった」

俺はこたつから出て外出用の服に着替える。

「んあ？ どこ行くんだ？」

「どこって仕方ないから飯を買い行くんだよ。それにちょうどいい機会だから彼処にも寄りたいたいし」

「彼処？」

みさおはクエスチョンマークを頭の上に出現させる。

「ま、行ったらわかるよ」

「え？ 私も行くのか？」

みさおはマジ顔で驚く。

「まさかお前……外は寒いからって俺だけを行かせようとしてんのか？」

「そんなのあたりま」

ガンッガンッ！！

頭に二発。

しかも今度はさっきの比じゃない。

「いいから来い」

俺は半ば強引にみさおを連れ出した。

「なあ……まだ歩くのかよー……」

歩き始めて十五分。

俺は一メートル程先に歩いてみさおを誘導するが、みつともなく鼻水を垂らしているみさおは坂道に体力を奪われていた。その足取りは次第に遅くなっていたことがよくわかる。

「もう少しだから頑張れ」

適当に繋ぎの言葉を入れてみさおのやる気を保とうとするが、そんなものは応急措置にもならない。

だが本当にもうすぐなのだ。

俺をメロメロにしたあの店が。

「椿」

後ろから弱々しい声。

「なに？」

「疲れた」

「……………」

一応無視。

「私もう眠いよ……………」

あ、こら道端でうとうとするな。

「……ったく、しょうがないな」

引き返して俺はみさおの手を引っ張り、坂をのぼっていく。
引きずる形になってるが気にすることはない。

なんたつてみさおだからな。

だが少々これは俺もキツイ。

いくらみさおが軽くても坂だから体力が…。

足に乳酸菌が溜まってしんどくなる。

しかしあと十メートルで坂は終わりを迎える。

ラストスパートだ。

「ふんぬっ！」

みさおをグイッと押してやる。

そしてなんとか最後の十メートルをクリア。

遂に斜面はなくなつて平らなところまで来た。

そこには俺の思つた通りの店の名前が存在している。

「ほらみさお、着いたぞ」

「ふえ……？」

屍寸前のみさおだったが、俺のオススメの店を見て目を見開いた。

「こ、この店つて……」

第33話 噂のパン屋さん

「桜パン移動販売車、“プローネ”？」

みさおが看板の文字をそのまま言う。

「どっかで聞いたことあるだろ？」

「いやぜんっぜん」

「へ？ そうなのか？」

なんだかんだでみさおも女の子。だから雑誌とかテレビで紹介されたこのプローネはすでに知ってるかと思っていた。

「まあ俺もこのパンは食ったことはないんだけどテレビとかではめちやくちや美味しいって評判なんだ」

「ふーん」

「ちよつと俺買ってくるからみさおはここで休んどいて」

「……………」

みさおは椿が行列に並ぶのを少し遠目から黙って見ていた。

「椿の方が疲れてるのになんでそこまですんだよ……」

もしかしてあいつ、私のこと心配してくれてんのか……。

負担をなくすために一人であんな行列に並んで……。

「ん？」

つてことは私のことを女の子として見てくれてるってわけだよな。

なんだかんだであいつやつぱり半端じゃないお人好しだ。

その部分だけを見たら早々並ぶ奴なんていねえんじゃねえのか？

こついう気遣いがよく行き届いているから女の子は一緒にいて助かる。

だから彼女とか出来るのだろうな！。

「ほいみさお」

「ぬおあぁっ!？」

やにわに名前を発せられて飛び退く。

「な、なんだ椿か。ビックリしただろう」

「それは俺のセリフだ。ほれ」

椿がピンク色のパンを渡してきた。

「なんだこのパン」

「新作の桜メロンパンだつて」

桜メロンパン……。

今は真冬だつてのにか。

当然椿が持っているのも桜メロンパン。

ちよつとこの色が不気味だがせつかく買ってきてくれてんだ。

食べないというわけにはいかない。

パクツと一口いたたくと予想とは真逆の感想が出た。

「う、うめえー!!」

な、なんだこのメロンパン！

みさおはもう一口かぶりつくとよく焼けた外側の部分がカリツという音を出す。

そして中身はしつこくない甘さでキープされておりふわふわのでき

だった。

これは文句のしようがねえ旨さだな。

今までで一番ヤヴァい…。

この桜メロンパン、柊にも食べさせてやりてえなあ。

これ食ったらきつと大喜びすんだろな

「どうした？ さつきからニヤニヤして」

「なんでもねえってヴァ」

このあと私は桜メロンパンをあやの用に一つ、そして柊用に三つ買
ってそのまま椿の家には行かず自分家に帰る。

メロンパンのおかげで明日の学校が楽しみになるといふみさおには
絶対にあり得ない気持ちが膨らんでいた。

みさおと別れた俺はあることを思い出す。

「そっぴやみんなの分を買っておくのを忘れてた…」

せっかく近くに美味しいパンが売ってあるんだ。

移動販売車だからもう食えないかもしれないし、みんなにも食べさ
せてやらないと。

俺はまたプローネに引き返した。

しかし何でみさおあんなにメロンパン買ったんだろ…。

家族にでもあげるのかな。二度目の坂道に疲労が足にくる。
やっぱりキツいなあ…。

そう思いながらも足を動かしていく。

頂上につくやまた同じ行列に並ぶ。

しかし先程の行列よりかはまだマシだったので気が楽だ。
そして用が済むと再び坂道を下る。

そのまま沢山買ったメロンパンをちょうど近くのある店にお裾分けに行った。

「こんにちはー」

自動ドアが横に開いて店内の暖められた空気が外に流れる。

「いいいいいいらっしやいませええええー!!」

眼鏡をかけた店員さんが暑苦しく出迎える。

いちいち受け答えるのが面倒な俺は横を素通りする。

「おおー！ 桃原じゃないか！ 今日はどうした！ もしかして新作のDVD買いに来たのか!？」

奥にはアニメ店長の兄沢命斗。

「これ」

俺は小さな紙袋を手元に差し出す。

「なんだこれは!？ 金でも詰めろっていつのか!？」

強盗か俺は。

「違います…。プローネの桜メロンパン買ってきたんですよ。それでお裾分けしようかと」

「おー！ あのプローネの!!」

「あれ、知ってるんですか？」

「知ってるもなにも女の子なら誰もが知ってる超A級移動販売車じゃないか!! 中でもメロンパンは絶賛らしいな!」

「……………」

女の子なら……。

つてことは実はみさおは男？

「見事な手柄だぞ桃原！ 褒美にこのDVDを二割引にするが」
「だからいりませんって!」

第34話 バカから生まれた勘違い

「あつやのー!!」

「どうしたのみさちゃん。そんなにテンション上げて」
「三学期が始まったその初日。」

「みさおは一昨日に買ったメロンパンをあやのに贈る。」

「ほれ!」

「? この袋は?」

「いいから開けてみるって」

「ニコニコとあやのが袋を開封するところをみさおは瞬きせずに見守った。」

「あ、これって桜メロンパン?」

「おうよ! 今大人気のプレートのメロンパンなんだぜえ!」

「み、みさちゃん、それって確かプローネじゃなかった?」

「あれ? そうだっけ?」

「あはは…」

「あやのは二つの意味で苦笑いする。」

「一つはみさおが名前を間違えたこと。」

「そしてもう一つはあやのの鞆の中に答えがあった……。」

「……………」

「実はこのプローネのメロンパン、さっき椿君からもらったばっかなんだけどなあ……。」

しかし満面の笑みであるみさおには言いづらく、そのまま内緒にしておくことに。

「さーで、次は柊にも……お、来た来た」

登校してきたかがみにみさおは誰よりも早く声をかける。

「おーい柊！プリマハムのパンいらねえか！？」

みさちゃん……もう惜しいとは言い難い間違え方だよ……。
「いない」

かがみの答えは数瞬だった。

それだけにみさおはショックを受ける。

「な、なんでだよー！」

「なんでってあんた忘れたの？ あんた二学期もパンあげるとか言っ
つとして三週間も期限過ぎたやつ渡してきたじゃない。だから絶対に
いや」

かがみは断言したあと、隣のクラス、B組に行った。

「あ、あやのー！ 柊がかき氷のように冷たい……！」

「ま、まあまあ……」

「まったく……なんなのよあいつは」

また同じ手でも通用すると思ってるのかしら。

みさおじやあるまいし学習能力は十分なくらいあるわよ。

「あ、お姉ちゃん」

つかさがB組から手をふる。

「あれ？ こなたと椿君はいないの？」

「椿君はわかりませんが泉さんなら食堂に行ってますよ」

「ふうん……」

こなたのやつ今日はお昼忘れたのかな。

……あれ？

「みゆき、そのメロンパンなに？」

「あ、これは先程椿君にもらったプローネというパン屋さんの桜メロンパンだそうです。なんでも雑誌に載るくらい有名なパンらしいので私達にも買ってきてくれたんですよ」

「へー」

なるほどそういうことか。

確かにみゆきだけでなくつかさも同じメロンパンを持っている。しかしあのプローネのメロンパンを椿君が…。

当然かがみはこの移動販売車を知っている。

今人気の販売車として話題になっているからだ。特に注目されているのがメロンパン。

別格の味とその種類の多さが客にとって魅力的に思える。

でも桜メロンパンがあったのは知らなかったな。

「あ、かがみさん」

どこに行ってたのか、椿君が教室に戻ってきた。

「どこ行ってたの？」

「いやちよつとね。あ、そうだ、かがみさんに渡したいものがあるんだ。きつと喜ぶと思うよ」

「それって桜メロンパン？」

「あれ、知ってたの？」

「さつきみゆきに聞いた」

かがみは親指をみゆきの手にしているメロンパンに向ける。

「そっか…。もう知ってたんだ…」

椿はかがみを驚かせたかったらしく残念そうに笑う。

「でもありがと。私一回プローネのパン食べてみたかったの」

それは突然の出来事だった……。

「くそー……」

「みさちゃんさつきからくそーしか言っていないよ……?」

無意識に言っていたことにあやのが指摘する。

「だってよー、柊のやつせつかく買ってきたパンをいらねえって即答しやがったんだぜ? あいつの喜ぶとこ見たかっただけにさすがの私でも傷ついたよ……」

でも今までのみさちゃんの行動とかからして柊ちゃんの態度は許される範囲内だと思うんだけど……。

みさちゃんからしたらやつぱりキツイよね……。

「ちょっとトイレ行ってくる……」

みさおはマイナスオーラを纏いながら教室を出る。

そしてトイレに行く途中にB組があるのだが、特に理由なく覗いてみた。

するとみさおにとって信じられない光景が網膜に焼き付く。

「なっ!?!」

なんで椿が柊にメロンパンを……!?!

ま、まさかあいつ柊のことが!?!

い、いやそんなわけねえ!

あいつは萩野由佳という全員が公認した彼女がいる!

不器用な椿が二股なんかできるわけねえ!

ということは奴の狙いは別にある!

それはおそらく柊にとって一番の友達になることじゃないのか!?!

いやもうこれは絶対だ!

あいつはその席を狙っている笑顔をしてやがる!

ああやって馴染んでいく作戦か!

そして一番重要なのはこれが私に対する宣戦布告ということだ！！
わざとパンを渡すところを見せびらかすことによって敵意を明らかに
見せている！

「フフフ…」

みさおは不気味に笑う。

そして人差し指を桃原椿へと向けた。

ならばその戦い！ 受けてたつ！

全身全霊をもって柊を私のもんにしてやる！

覚悟しろ、桃原椿！！

第35話 椿vsみさお

「あ、みさお」

昼休み、いきなり椿が奇襲をかけてくる。

しかしその程度の奇襲は私には通用せんぞ。

そして勝つためには先手を取る！

「さつきこなたが呼んでたぞ、なんか用事があるみたい」

なるほど、そう言つといて私を柊の元から離してそのうちに近づこうって魂胆か。

まだまだ甘えな、椿。

「いやあ悪いな、今から柊とご飯食べるんだよ。そう柊と」

「なんで二回言う？」

「チビッコには後でつて言つといてくれねえか」

「……まあそういうことなら仕方ないか。なんかBREWとかいう格ゲー買ったからやらないかとかの話だったんだけど」

「なにっ！！！！？」

ぶぶぶBREW！？ 子供から大人まで全年齢に対応されてて格闘ゲームとしては究極体とまで言われたあの最新ゲームを買ったのかあのチビッコは！？

「じゃあこなたに言つとくな」

「あ、ちよつと待てつてヴァッ！！」

何故か自分の意思とは関係なく椿を止めてしまう。

いや、関係なくはないんだけど…。

けど行かねば…！！

あのB R E Wがもしかしたら今日できるかしんねえんだ…！

暇だったらこれから決闘しよう的な感じになるかしんねえんだ…！
ファンなら行かねばならない…！

ファンなら…！！

それにちよつとくらいなら柵のそこから離れてもいいよな…！？
と、みさおは激しく自分に言い聞かせる。

そして下した決断は、

「ちよつとチビッコのとこ行ってくる」

あつさりと旗を翻した。

「なんかみさおのやつ変に上機嫌だったな」

背中を見送った俺はみさおが座っていた椅子に腰をおろす。
するとふわりとみさおの匂いがした。

どうやらここはみさおの席みたいだな。

「それにしてもみさおとこなたって仲良いのか悪いのかわかんねえ
な」

「仲いいんじゃない？ 喧嘩する程仲が良いって言うし」

確かにみさおとこなたは気がよく合うが小さなことですぐに競争を
繰り広げている。

飽きるくらい言い争って勝負して…。

そして一度戦いが終わったかと思えばまたやりはじめる。

その繰り返しをあの二人はやってきた。

もしかしたらあいつらはそっくりだからなのかもしれないな。
どっちもいい加減で能天気で…。

決定的に違うのはインドア派かアウトドア派かだけだ。
そしたらあやのさんとつかさもそうだな。

二人とも料理好きだし。

あ、でも俺が風邪をひいたときにつかさが……。

“椿君椿君、家にある薬全部混ぜてみたよー”

「……………」

よく考えたら共通するのって料理好きだけだな、うん。

あやのさんは多少ドジなところはあるかもしれないがつかさ程ではない。

つてかあんなドジっ子がたくさんいたら日本は滅んじうなあ。

姉のかがみさんがしつかりしててよかった。

「椿君さつきからニヤニヤして気持ち悪い」

俺はかがみさんの両肩にポンと軽く手を置く。

「かがみさん、君のおかげで日本は救われたよ」

「……………は？」

「くそーっ、チビッコのやろー何で今日は用事があんだよ」

せっかくやりあおうと思ってやる気ゲージMAXにしたのに台無しになっちまったじゃねえか。

私のやる気を返しやがれ。

「ん？」

やけに聞き慣れた笑い声がするな。

B組からC組に再び帰還したみさおは自分の席に行こうとするがその先には、

「あはははっ！ 椿君それ面白すぎ！ お、お腹が痛い！」

腹を抱えて楽しそうに笑っていた。

その横には宣戦布告してきた椿と一緒にいる。

「し、しまったぁー！」

私が行ってる僅かな時間にあそこまで柊を笑顔にするとはぁぁ！

おのれ椿！

なんとという策略を駆使してくんだ！

前世は蜀の大軍師か！！

五時間目の休み時間

「あれ？ あれー？」

かがみが困った表情でさがさと机の中を漁る。

「おつかしいなー。英語の教科書持ってきたはずなのに」

「……………」

ニヤリ。

みさおの口元が不自然に上がる。

なるほど…。柊は教科書を忘れたのか。

ここで私が自分の身をかえりみずに教科書を貸してやれば柊は……………。

“ほれ柊、ウチのを使えよ”

“え、でもそれじゃみさおが…”

“そんなの気にすんな。私は柊が先生に怒られるとこ見たくねえんだ”

“みさお……”

“さ、早くその教科書…持っていけってヴァ”

“うん……ありがとう”

なーんてことになっちまうんじゃねえか！？

そしたら柊の第一親友は私のものだー！

もう椿なんて目じゃねえぜえ！！

つてわけで早速有言実行だぁー！！

声質はちよつとクールにしてつと…。

「おい柊、よかったらウチのを」

「仕方ない。椿君かこなたを頼るしかないわね」
……え？

「早く行かなきゃ休み時間終わっちゃう」

「えっ、ちよつ…」

みさおはテンパってしまつて言葉が続かない。
その間にかがみはパツタリといなくなつた…。

「そりゃねえってウアアアアアアアッ!!!!!」

第36話 生きるか死ぬか

「勝てば官軍！」

「ふわあっ！？ ど、どうしたのみさちゃん？ そんないきなり大声出して……」

みさおは目を輝かせながら次の策に移る。

今度はあたしから行くんじゃないかと柊からこっちに来るようにしてやる。

普段は柊にべったりしてても急に私が来なくなったら柊は絶対に寂しがるはず。

まだかな、まだかなと柊がどんな麗しい目を向けてきても私は絶対に自分から行かぬえ。

んで我慢できなくなった柊は必ず子犬がエサを欲しがるかのように私にくつつく！

エッヘン、完璧な作戦だぜえ！

後は……日程だな。

カレンダーを見ると明日がベストと神様が言っている………気がする。

よし、作戦決行は明日だ。見てろよ椿。

背景キャラの知恵をなめんなよ。

朝のホームルーム。

「……………」

授業の間の休み時間。

「……………」

昼休み

「……………」

放課後……………。

「何にも変わってねえじゃん！　ってか柊は！？
えっ、帰った！？　ちくしょー！！」

みさおは勝手に膝をついてに拳を何度も地面にぶつける。
端から見ればまさに一人芝居の練習にハマっているような光景だった。

「あれ？ あそこにいるのってみさおか？」

「あ、ホントだ」

こなたと帰宅する途中、C組にみさおを発見。

「でもなにやってんだ…？」

ずいぶんと痛々しいみさおの姿にちよつと引き気味になる。

「ウイルスにでも感染されてたりして」

「それは百パーセントありえな」

……待てよ。

「……ん？ どしたの椿君」

「そういやあいつ、昼休みとか様子がおかしかったな。ずっと席で黄昏てたし……」

そしてこの状況。

あいつ何か隠してやがるな。

「まさかホントにウイルスに感染してんのか…？」

「いや椿君それはないない」

自分で言っていたことを真っ向から否定する。

「くそう……」

廊下で意味不明な会話を広げているとみさおが微量の声で何かを言った。

推測から抜け出すために俺とこなたはみさおの言葉一点に耳を澄ます。

「頑張ったんだけどなあ……。やっぱり私じゃ（椿に）勝てねえのか……。明日が（勝負の）分かれ目だな……」

「っ！？」

えっ、ち、ちよつとまで！

今のキーワードから解釈するところいうことだよな！？

“ やっぱり私じゃ（病気に）勝てねえのか…。明日が（命の）分かれ目だな……”

ということとはみさおは重度の病気で明日までしか生きられないってことなのか！？

い、いや！ そんなわけがない！

みさおに限ってそんな似合わないことが起きるわけが……！

「私の（柊と第一親友だった）人生……、長かったようで短かったぜ……」

決定だああー！！！！

間違いなく明日みさおはこの世の人ではなくなってしまう！

今の言葉で確定された！

ってこうしちゃいられない！

早くみんなに知らせなければ！！

俺とこなたは一人泣くみさおから離れて電話を知り合いに片っ端から繋ぐ。

そしてみさおがどんな事態に身を置いているのかを詳しく話した。

次の日

みさおは学校をサボってある場所へと朝早くから来ていた。

朝が苦手なみさおにとって六時起きはかなり辛いものだったが、眠い目を擦りながらも我慢する。
その目的地とは…。

「やっと着いた…」

目の前には車。

そしてそこには“プローネ”という看板が大きく存在する。
そう。みさおが目指していた場所は椿と行った有名移動販売車、プローネ。

かがみのためにとわってわざわざ遠い地から足を運んだのだ。
回りくどいことはやめて当初の予定通り、桜メロンパンをあげよう
というのがみさおの魂胆。

「これで最後だ。絶対に椿なんかには負けねえかな」
今回の作戦には自信がある。

その根拠はみさおのポケットの中身にあった。

「フフフ…これがあれば絶対に椿は喜ぶはずだ」

ポケットから取り出したのは甘いメープルシロップ。

これを買ったメロンパンにぶっかければ美味しさ倍増。
間違いなく私の勝利だ。

「待ってろよ椿！ そして椿！」

勝つのは私だ！！

「……やっぱり今日はみさお休みか」

俺は朝のホームルームが終わってからすぐにC組へ行ったが予想通りになってしまったことに酷く落胆する。どうやら担任の桜庭先生には腹痛で遅れると言っているらしい。

おそらく無駄な心配をかけさせないためだろう。

絶対に生きてまた学校にという思いを込めて…。

だが、俺達がこうしている間にもみさおの命は確実に削られていく…。

俺はなにもしてやることができない無力さを嫌った。

「……………」

みさおは今、泣いているのだろうか……。

それとも、潔く笑っているのだろうか……。

だがそんなことはどちらにしても一緒だ。

みさおは亡くなる。

俺は正直まだそのことを受け止めてはいない。

明日になったらみさおがいつも通りにやってきて、

「それは冗談だってヴァ」って言う。

そんな風に明日が始まるって思ってる。

だけど……やっぱりみさおは……………。

俺が望むようにはきつとならない。

そんなに贅沢な願いなんだろうかと神様に問いたい。

みさおが生きてってことはそんなに難しいことなのかって。

あいつが死ぬなんて似合わない。

感情のない表情なんてみさおには似合うはずがない。

あいつには笑顔が一番だ。

だから……もし帰ってきたらその笑顔をもう一度見せてくれるか？

なあ……みさ。

「ヤッホー！！ ちょっと遅刻しちゃったぜえ！！」

……

……

……

……

『はい?』

.....

.....

第37話 君と明日へ

「な、なんだ…。ただの勘違いかよ…」

みさおから事情をすべて聞いて自分の勝手な思い違いに気付いた俺は安堵の息を漏らす。

そして事の発端となった俺がかがみさんを狙っているというみさおの方の勘違いも無事に解けた。

つてか俺には由佳がいるから狙わないつつつの。

「まあ勘違いで済んでよかったね」

つかさがホッと息をつくが、かがみさんはそうはいかなかった。

「……よくないわよっ！！」

張り上げられた声は隣のクラスまで響き渡っていくぐらいの音量だった。

そのため、C組は全員が口を閉じてかがみさんに注目する。

「ひ、柊…？」

予想外のことにみさおはたじろぐ。

「あんた……私がどれだけ心配してたかわかる！？ あんたの無事をど……れだけ祈ったかわかる！？ 私が……！！ 私……が……！」

だんだんと声がかすれていくのと同時にかがみさんの表情が崩れる。

「私が…… あんたのこと…… どれだけ……」

「柊……」

落ちていく涙をみさおは見ることにできなかった…。

「かがみさん……」

「どれだけ…… 大切に思っているか……」

確かに俺もみさおのことは友達という意味では好きだ。

能天気な性格に憧れる時もあった。

ただどかがみさんは俺以上にみさおのことを思っている。

この涙を見れば誰もが分かることだ。

俺も、こなたも、つかさも、……… そしてみさおも。

「……… 怖かった……」

かがみさんの声が静かに届く。それを邪魔する者は誰一人としていなかった。

「……… あんたが重い病気を持つてるって聞いた時、ビックリした……。ずっと一緒にいたのに……… どうしてあんたが……… 本気で神様を恨んだ……。みさおを死なそうとする神様を……。でも……。近くにいなながら気付いてやれなかった自分を私はもつと恨んだ……！ 私が代わりに死んだらいいの……… 思った……！ …… けどやっぱりそう思ってたって変わらないから……。精一杯みさおの無事を祈ろっつて決めてたのに……。泣き叫ぶ気持ちを抑えて祈ってたのに……。あんたはこっちの気持ちを全く無視して……！」

「……… ごめん……」

みさおはかがみさんを優しく包むように抱きしめる。

それでもう一度みさおは謝った。

「ホントに……… ごめん……」

冗談ではなく真剣な謝罪にかがみさんはどこか嬉しそうな表情で呟く。

「……… バカ……」

たった二文字…。

その二文字には色々な意味が込められているのだろう……。

みさお事件が終わったとある日曜日。

ゆたかはみなみちゃん家へ泊まりに行った。

「あ、チェリーちゃんだ」

ゆたかが御手洗いを済ましてみなみちゃんの部屋に戻ろうと廊下に出たら、愛犬であるチェリーが寝そべっていた。

「やっぱり可愛いなあ」チェリーちゃんって毛がフサフサだからあれを枕にしたら気持ちいいんだろうな。

「……………」

はっ 勝手に他人の犬を枕にしてる自分を想像しちゃったよ！
そんなことしたら多分みなみちゃんもチェリーちゃんも怒っちゃうだろうな…。

うん、ここは我慢して挨拶だけにしとこ。

ゆたかはチェリーちゃんの両手を持って笑顔で一礼。

「こんにちは」

「……………」

無反応。

今度はちよつと眉をキリツとさせて言う。

「こんにちは」

「……………」

また無反応。

でもそつちのほうが大人しくてお利口だよね。

「さようなら、チェリーちゃん」

「クウン…」

あ、今ちよつとだけ鳴いた。

もしかして私と離れたくないのかな。

もしそうだったらチェリーちゃん可愛すぎだよー！！

「ゆたか遅いな……………」

御手洗いに行くって言ってかれこれ十分。

さすがに時間がかかりすぎだ。

何かあつたのかな…。

「……………」

みなみはスツと立ち上がって様子を見に行く。

すると、

「ワンワンワンツ」

「っ！！」

通路の先からか、いきなり犬の鳴き声が聞こえてくる。

犬といえばチェリーしかない。

けどこの鳴き声は犬の類いじゃない。

これは……………。

「ワンワンッ」

「…………ゆ、ゆたか…?」

「わっ!? み、みなみちゃん!?」

後ろから発せられたみなみの声がゆたかの耳に届き、チェリーちゃんからバツと飛び退く。

「え、えと、その、えつと、あのね、これは、えと…!!」

ゆたかは変な手振りをしながら先程のことを誤魔化そうとするが、逆に状況が悪化する。

「み、見ちゃった…?」

少し落ち着いて恐る恐る尋ねてくる。

「うん」

何を見たかはみなみも分かっている。

ゆたかがチェリーの顔に頬をスリスリと寄せて犬の真似をしている場面のことだろう。

「は、恥ずかしいよ…!!」

「大丈夫だよ…。私も今のゆたかみたいにしたことあるから…」

「え?」

「だからそんなに恥ずかしいことじゃないよ…」

「ホ、ホントに?」

ゆたかはちよつと涙ぐみながら見上げてくる。

「うん…、ゆたかがやってたらとても可愛いと思う」

「そ、そんなことないよ」

照れながら否定するその姿は誰もが認める可愛さを誇るにちがいない。

「…もう夜も遅いしそろそろ寝ようか」

「あ、ちよつと待って」

ゆたかは持っていたハンカチをチェリーちゃんにフワッと真上からかける。

「これで寒くないね」

季節は冬、気温はかなり低いため冷たい廊下にいるチェリーが心配

になったゆたかは優しく気遣う。

「……やっぱりゆたかは優しいね」

「え？ なにか言った？」

「ううん…何でもない…」

この時みなみは細く笑った。

とても暖かな光が二人を照らす中で…。

第38話 ハッピーバレンタイン

「はい椿君、ハッピーバレンタイン」

つかさがズイツと目の前にハート型の物体を差し出す。

「へ？ 俺に？」

「うん、そうだよ」

綺麗にラッピングまでされて渡す相手を間違えているんじゃないかと思うが、どうやらその考えが間違いらしい。

でもこれって義理だよな。

つかさも俺に彼女がいること知ってるし。

にもかかわらずこの手の懲りようはいつたいたいなんなんだ……って、うおっ！ 中身もスゲーな！

「えへへ、ちよつと頑張りすぎちゃったかな」

「つかさは変なところで時間かけるからねー」

こなたがニマニマとこっちを見ながらつかさの肩に手をかける。

「あ、ありがとうつかさ」

「どういたしましてえ」

つかさに一礼すると、周りから冷たい視線が。

「かあああああ〜っ！ また桃原かよ！」

「あいつばかりモテやがって！ あんな奴なんかより俺の方が百倍カッコいいってのによ！」

「くそっ、下駄箱にも机の中にもない…。僕は桃原椿なんかに愛しのつかさちゃんの手ヨコを奪われたというのか…」

「……………」

なんかやたらと知らない間に恨まれ度が上がっているようで…。
つかさのことを本気で想っている奴がいるのはスルーしたほうがいいんだろうか……。

「そっぴやこなたは誰かにあげないのか？」

「私？ 私はいいんだよ。貰う側だから」

「何でだよっ！」

「ってことで椿君チヨコ頂戴」

「あげるかつ！」

「むーっ、ならいいよ。つかさに貰うから」

誰でもいいのかお前は。

見返りが早いこなたはつかさの元へ行く。

しかし、

「ご、ごめんねこなちゃん。椿君のに時間かけすぎちゃってこなちゃんの分、作ってないの」

「ぐはっ」

「ぷくく……」

俺は笑いを堪える。

。 自業自得、いい様だ。

「オースッ、……なにやってんの？」

隣のクラスからやって来たかがみさんが泣いているこなたを見て呆然とする。

「かがみ〜、みんながチョコをくれないんだよ〜」

ヒシツとかがみさんの足元にこなたが抱きつく。

「ちよっ、みつともないからやめなさいって」

「やだ〜」

「……………せつかくチョコ作ってきてやったのにあげないわよ」

「えっ!?!」

こなたの見上げた顔が変に輝きを放つ。

「かがみが! 私にチョコを!?! い、いえかがみ様が私にチョコをくださるのですか!?!」

「なによ、その意外そうなりアクションは。しかもいきなり敬語になるなっ」

かがみさんがツツコミしていると、さらに意外なことが背後で起きた。

「椿っち〜」

「?」

「ハッピーバレンタインー」

……………

……………

……………

「え?」

似たようなセリフをさっき言われたが、明らかに違う声主だった。まさか…。

「ブイ」

振り返ると由佳がブイサインをして笑顔。

うん、これは夢だな。

クルリとまた反転。

しかし由佳がわざわざ俺の前に移動する。

まるで自分は本物ですよと言わんばかりに。

そしてまた、

「ブイブイ」

「……………」

はあ…。頭が痛くなる…。

「何でいるんだよ…。潜入は寄せてヤミがいなくなった後に何度も言っただろ」

それにここの警備はこんなに軽いものなのかと毎回思わせてくれるな。

「まあまあ、今日だけは見逃してよ。せっかくのバレンタインなんだしさ」

「なんだ、お前チヨコ作れたのか」

「ううん、買った」

「……………」

「ん？ どうかしたの？」

「いや…なんでもない」

そこは嘘でも手作りと言ってほしかった…。でもそれは無駄な願いか。

あの由佳がチヨコを作ったらどうなるか…。きつと俺が起こしたゼリー事件の再来だないや、ゼリー事件を越えるんじゃないか？

「んじゃバイバイ」

「ああ…」

元氣なく手を振る。

由佳を校門の裏まで連れていき、無事に見送ることに成功。
見つかったらどうなっていたか…。

「バレンタインは男の夢だ」

「……へー」

梨原が珍しくB組に来たかと思うといきなり俺の横の席に座って語りだす。

そんな梨原に適当な返事をしながら飯をパクパクと食べ進める。

「つつわけで僕は今からチョコを貰いに行く」

「……へー」

自分から貰うつてのは情けない話だけど別に梨原だしいつか。

「だからお前も手伝ってくれよ。泉たちからチョコを貰うために」

「………泉たち？」

「そう、泉たち」

「何で複数形なんだ？」

「何でだと思っ？」

「………」

分からないから聞いているのに質問を質問で返されたらもっとわかんねえだろうが。

「それはな………」

言葉と同時に梨原の腕が俺の首に。

そして、

「おまえばかりモテてるからだよー!!」

「ぐえっ!？」

キュツと締められた。

「何でお前のところに女の子が集まっていくんだよ！ このハーレムバカめ！ 彼女がいるのにも関わらずロリオタクにツンデレにドジっ娘りボンに天然巨乳に妹に無口に八重歯におでこにメガネに金髪留学生、しかも他校生にまで独り占めしやがって！」

「ちよっ…とりあえ…ず…離…して……」

い、息が…。息ができない…。

「そんなにいるんなら誰か一人くらいよこせ！ だいたいお前みたいな奴がいるから僕達は孤独組からいつまでたっても卒業できないんだよ！ 僕だって一人でもいいから女の子にキヤーキヤー言われてえよ！ でも無理なんだよ！ お前みたいなモテ男が全部取っていくから！ くそっ、僕にもハーレム経験させろ！ 僕にも青春の一ページくらい書かせろおおおー！！」

「いや…だか…ら…息が………」

こ、このままじゃ死……ぬ……。

………

………

………

がくっ…。

第39話 右手にはチョコ、左手にもチョコ

「……つまりお前は誰でもいいからチョコを貰いたいわけだな？」
梨原がだらだらと愚痴を言いながらも説明したことを簡潔にまとめた。

梨原はそれに軽く頷く。

「ああそのとおりだ」

「だったら方法は一つだ」

「おっ！ なんかいいい方法でもあんのか！？」

「来世に期待するんだな」

「……………」

ゴンッ！

梨原から繰り出された拳は俺の脳天にストライク。

「いつてえな！ なにすんだよ！」

「うるさい！ なんだよ来世に期待しろって！ 無理って言うてる
ようなもんだぞー！」

「言ってるようなんじゃない。無理なんだ」

「……………」

ドスッ！

「ぐふっ！」

今度は腹にめり込んだ。

どうやらカンに触ったらしい。

「見てろよ……。今日中に誰かからチョコをもらってやるからなっ

「！」

「まずは泉からだ」

梨原が図々しくこなたを指差す。

「……………好きにしろ」

あいつが作っているとは思えん。

だから絶対に貰えるわけがない。

だがそれは敢えて言わなかった。

何故ならこういうバカは言っても聞かないだろうから。

「ほらいくぞ」

「えっ？」

俺はグイツと襟首を引つ張られて無理矢理後に来させられる。

「な、何で俺まで行かなきゃならない！」

「当たり前だろ！ お前が一番仲がいいんだから仲介役になれ！」

んなめんどくさいことやっつてられるか！

逃げ出そうとじたばたもがくがその前に、

「泉ー」

梨原がこなたに話しかけていた。

「ん？ 何か用？」

「チヨコをくれ」

率直に言いすぎだ。

いきなりチヨコをくれとか言われたらこなたも困惑するだろうが。

「えつと君って確か梨原君だっけ」

ゲーム世界のときにこなたと梨原は面識があつたため、多少は覚えていたようだ。

しかし初対面でないにしても失礼であることに変わりはない。

「うーん……。君の気持ちもギャルゲーをやってる分、よくわかるんだけどさ、チョコは持ってきてないんだ」

「う、そうなのか……」

出鼻をくじかれて気分は降下する。

ふふ、やっぱり思った通りだな。

「あ、でも実は椿君のはちゃんと作ってるから」

「へ？」

不意をつかれた俺達を横にこなたは鞆の中を漁る。

そして小さな手と同時に出てきたものはまさしくバレンタインチョコ。

さつき皆には作ってない的なことを言ってたがあれは冗談だったのか。

「はい椿君」

「えーつと……」

これをもらっていいのかどうか……。

「ジーーーーー……」

ああ、なんか隣にいるやつからの視線が痛い……。

「ジーーーーー……」

うう……わかっている……、梨原が言いたいことはわかっているんだ……。

「サ、サンキュこなた」

しかし男ならば受け取らなければならない。

すまない梨原。

チラッと横を覗き見ると梨原はひどい眼光をこちらにギンギンと発していた……。

「次は柊姉のほうだ。あの人はしっかりしているから予備を持ってきてくれるにちがいない」

「へー……」

立ち直りが早いな。

それに懲りない奴……。

「そんなにチヨコが食いたいなら自分で買えばいいのによ」

「……………」

梨原は数秒だけ蛇のように睨む。

そのあと小さなため息をついて一言。

「何で僕はこんな鈍感な奴よりモテないんだ……」

「は？」

「いや……なんでもない。ちゃっちゃと行くぞほら」

「ま、また俺も行かなきゃなんねえのか……」

こなたのときは仲介役とか言って連れてかれたけど、全く関係なかった気がするが……。

「柊さん、ちょっといい？」

もう梨原が声をかけちまつたしいつか。

「あ、椿君に梨原俊介君じゃない」

「……………っ！」

梨原がバツと後退する。

「え、な、なに？」

突然の行動にかがみさんがどう対応したらいいかわからずにいる。それは俺も同じだった。

「お、おい梨原。なんで声かけといて下がってんだよ」

「お、覚えてた……」

「は？」

「柊さんが僕のことフルネームで覚えてた…」

「だ、だからなに？」

「覚えてたってことはもしかして柊さんは僕のことを好きなのか！？」

「「んなわけあるか！！」」

二人してツツコミ。

まあ当然だよ。

まだ少しの面識しかないのだから、かがみさんがこいつを好きになるのはあり得ない。

自意識過剰にも程があるぞ。

一騒ぎが収拾されたところでかがみさんに本題を話す。

この時のキリッとした目が怒っているかのように見えるのは気のせいだろうか…。

「つつわけでかがみさん、余ってるチョコがあつたら梨原にあげてくれないかな」

「いや」

返答は一瞬だった。

梨原は納得いかずに尋ねる。

「な、何故…？」

「だってあんたにチョコをあげる義理なんてないじゃない」

「「……………」」

もつともだ。

梨原撃沈。

けどもともと“当たって砕ける”だからいいといえいいんだろう。骨は拾ってやらないけどな。

第40話 恋の竜巻

こなた、かがみが失敗したあと、梨原はみゆきさん、ゆたか、みなみちゃん、みさお、あやの、パティに挑戦したが全戦全敗。その落ち込みようといったら見てられないくらい悲惨だった。

「……………ぐぞう」

「なに泣きべそかいてんだよ」

「うるさいハーマー!!」

「な、なんだよハーマーって…」

「ハーレムを極めた男の称号」

「……………いらねー…」

どうせならもっとカッコいいやつにしてくれよ…。

「あと二人…、絶対に諦めんぞ……………」

ぐつと膝を支えにして立ち上がる。

ふらふらとしながら最後の一年生に期待を持ちながら歩いていった。

「あれが一年生最後の一人か」

「まあ…そうなんだけどさ…」

とりあえず教室の入り口で三年生がこそこそと覗くのは痛々しい感じがする。

「名前は田村ひより。見た目は地味な子だな」

「……………見た目はな……」

でもきつと中身を知ったらビックリ仰天だろう。

「それにしても彼女は休み時間だつてのになにを一生懸命書いてるんだ？」

「多分ネタの整理だろ」

「ネタ？ 彼女はまさかお笑い芸人なのか？」

「違う違う。ひよりは……」

“同人誌を描いている”なんて言ったらこいつどういう顔するだろ……。

見てみたいが今はやっぱりやめといた方がいいのかな。

「漫画家を目指してんだ」

「ほう」

適当に近いものに当てはめた。

「彼女は漫画家、僕はサッカー選手。大きい夢同士で気は合いそうだな」

気が合うのはそこだけだろうけどな……。

「よし、行くか」

一年生の教室に堂々と入る。

もちろん俺も強制的に同行。

みなみやゆたかの時は食堂だったからよかったが、年違いの教室に初めて入るのは抵抗があった。

なんていうか視線が気になって仕方がない。

「うおっ……すげ……」

梨原はひよりが無我夢中に描いている絵に驚く。

それに気付いたひよりは振り返り挨拶する。

「あ、椿先輩、どうも久しぶりッス。……えと、こっちは人は確か……」

「梨原だ」

自己紹介はそれだけだった。

「ネタの製作は順調？」

まずは余談で進行具合について聞いてみる。

「ん…、正直行き詰まってるッス。この前つかさ先輩がネタを提供してくれたんですけど使いにくくて」

「あ…」

なるほどな…、つかさは天然だからだいたい想像はつくよ…。

「……………」

椿先輩ともう一人の友達は何しに来たんだろ…。

遊びに来たってわけじゃないだろうし…。

ひよりは二人の意図が理解できなかった。

「しかしホントにすごいな」

梨原が大袈裟と言っていいほど誉めるので、ひよりは照れながら謙遜する。

「い、いえそんなけないッスよ」

だって私の身近にイメージピッタリの人達がモデルになっているん
スから……。

けどここまで誉めてくれた人はいなかったな……。

椿先輩も誉めてはくれたけど梨原先輩ほどではなかった。

単にこの人がオーバーすぎるっていうのもある。

でもやっぱりストレートにここまで言ってくれると力になる……。

「えっと…田村ひよりだっけ」

いきなり呼ばれて慌てて返事をする。

「あ、はい、そうッス」

答えると梨原はスッと握手を求めた。

「え？」

「僕、君を応援してるからな」

トクン

「あ……」

ひよりの心が大きく揺らいだ。
そして体が急に熱くなる。

「あ、ありがとうございます」

弱々しく言って握手をする。

するとさらに体温が上がったのが自分でもわかった。

「あれ？ ひより、顔赤いけどどうかしたのか？」

椿がひよりの容態の変わりように心配する。

しかしこれは病気でもなんでもなかった。

なぜならひよりは分かっているからだ。

この症状がどんなものか、どんなときに起こるのか……確実にはいが分かっていた。

⌋
⋮
⌋

ヤ
バ
い
・
・
・
・
・
○

私は数分で惚れてしまったかもしれない……。

私の絵をこどものように誉めてくれて、そして初めて私を応援してくれると言った梨原先輩に……。

「パツとしない子だったけど話してみたらいい奴だった」
ひよりのことをだいたい理解したような口調で話す。

「そういえばチョコ貰わなくてよかったのか？ もともとそれが目的だったはずなのに」

当初の気持ちに戻そうとするが、

「いいんだよ。僕と彼女はでかい夢を追いかけている。いわば同志に近い。だからそんな人からチョコを貰うなんて一種の裏切りだよ」

「なんだよ一種の裏切りって……」

「彼女は今も頑張っているというのに僕だけ暢気にチョコなんか貰ってウハウハしてたらだめってことだよ」

「ふーん……」

そういうもんかね……。

とりあえずこれであと一人。

ダルいからさっさと終わらせよ……。

「んじゃラスト、つかさのところに行くか」

「うっ！」

梨原の表情が急に固くなる。

「ん？ どうかしたのか？」

「あ、い、いや、何でもない」

明らかに異常なしという顔じゃなかった。

第41話　つかさLOVE

梨原俊介。

三年A組の委員長でサッカー部の元キャプテン。
金持ちの子供。

性格はお調子者で夢はサッカー選手。

中学の時、ケガでサッカーから引退しようとするが、桃原椿に憧れ
厳しいリハビリをこなし復帰。

そこからはサッカー一筋で生きてきた。

ずっとサッカーのことばかり考えていた。

そんな僕にたった一人の天使が現れた。

そう、あれは高三の秋頃

「キャプテンおつかれっす」

「おう」

冬の選手権が近づくこの頃、僕は悔いをしないためにいつも部活が終
わったあと残って一人練習をしていた。

「ふう、ちよつと水分補給するか…」

喉に潤いを与えるため冷水場へ行く。

グラウンドからはけっこう離れているため、一口の給水にも一苦労だがそんなことで文句を言っていたらキリがない。

「ひゃうつ！」

「ん？」

後ろで変な声がした。

その方向に視線を向けると見たことのあるリボンの女の子が転んでいた。

確か桃原の記憶を取り戻すときにいた柊つかささん…だっけ。

「あいたた…」

お尻を強く打ったのか、スリスリと擦る。

「大丈夫か？」

「あ、梨原君、ありがと」

僕のこと覚えていたのか…。

差しのべた手をつかささんがしっかり掴んで起き上がる。

「ごめんね、私ちょっとドジで…」

「別にいいって。じゃ僕練習があるから」

そう言って立ち去ろうと背中を向ける。

だがつかささんは僕を引き留めた

「あ、頬っぺたに土付いてるよ」

「え？」

頬を触ると確かについていた。

おそらくさっきの練習のせいだろう。

「じつとして、すぐに取ってあげるから」

つかささんは可愛らしいハンカチを手に取って近づく。

「うつ…」

「あ、ダメ、動いちゃ」

言葉に制されて動きが止まる。

ハンカチが僕の右頬に触れたのと同時につかささんの吐息がかかった。

「……………」

か、顔が近い。

だがそれ以上に自分の心臓の音が気になった。
あまりに大きい音を発しているようで恥ずかしい…。

「はい、もういいよ」

パツと離れてつかささんが笑顔を見せる。

「あ、ありがと…」

「うっん、これでおあいこ。じゃあ私帰るね」

「あ、うん…」

つかさんは鞆を片手に帰宅道へ行く。

影が消える前につかさんは僕に向かって叫んだ。

「サッカー頑張ってるね！」クルツとまた背中を向ける。

「あ……」

その小さな後ろ姿がとても可愛かった。

その時からだ。

つかさんのことを気になりだしたのは。

そしていつのまにか目が勝手につかさんを追ってて…。

そしたらつかさんのこといろいろ知って……。

そして気づいたら僕は好きになっていた……。

つかさんのことを……本気で好きに……。

「おかしいな……」

今まで通りに梨原はつかさにチヨコをもらいに行くと思っていた。

しかし俺がつかさの名を唱えた途端に梨原は変に緊張した。

これはいったいどういうことを示すのか。

今思えば疑問に思うことが一つ。

何故あいつはてかさを最後に選んだのか。

同じ教室なんだからこなたが終わったあとに行ったほうが効率がいい。

つかさを避けていた理由。

それってまさか……。

「もしかしてお前、つかさのこと……」

「……………ああそうだよ。誰にも言えなかったけど実は前からつかささんのことが……」

「そうか……」

梨原、お前ってつかさのこと……。

“嫌い”だったのか……。

だから順番を最後に……。

ってか嫌いならチヨコを貰わなくてもいいだろ。

何でそこまでしてチヨコが欲しいのか、全く理解できん。

「……………桃原、ちょっと協力してくれないか？」

「何を？」

「そのつかささんのことだよ」

ああそうか。できるだけつかさと話さずにチヨコを貰いたいから今度こそ仲介役になってくれということか。

これが最後だしやつてもいいか……。

「わかった、できるだけ協力するよ」

こいつとつかさを絶対話しかけさせない。

そう心に決めた。

「梨原、心の準備はいいか？」

「お、おう」

廊下から俺達はつかさを見つめる。

そして二人のタイミングを感じ合って教室に入った。

「あ、あのつか」

ガタンガタンッ！

「あたた」

なにやってんだよバカ…。

梨原が歩み寄った時、椅子に躓いて派手に転けた。

すぐそばにいたつかさはおろおろと戸惑う。

「あ、あの、大丈夫？」

「あっ！」

や、やばい！

つかさが梨原に声をかけている！

梨原はつかさとは話を交わすのを嫌っていた！

なんとかしなければ！

俺は焦ってヤケクソに回し蹴り。

「とおりやつ！」

「うおっ！？」

梨原がサッと俺のそれをかわす。

よし、これで梨原とつかさに距離ができた。

任務は完了だ。

「危ないな！ いきなり何をするんだ！」

「いや、何ってお前つかさのこと嫌っ」

視界の端でつかさが動いたのがわかり、次は右ストレートを放つ。

「ぐへっ！」

ふう…、危ない危ない。

もう少しで梨原とつかさがメートルくらいの距離までつまるところだった…。

ナイス俺だな。

「いやだからなんで邪魔するんだよ!!」

「邪魔してねえだろ。俺はお前をつかさから」

「だ、大丈夫？ はい、絆創膏し、しまった！」

いつのまにかつかさが俺達の真横にいた。

そしてそつと差し出された絆創膏を前に梨原は顔を真っ赤にする。

「~~~~~つつつ!!」

がしっ！

「うおっ!？」

梨原が俺の服の裾をおもいきり引っ張ってつかさから逃走した。

「ううう…、つかさんの前で惨めな姿をさらしてしまった…」
屋上で似合わずにたそがれる。

別に嫌いならそういう姿を見られてもいいんじゃないのか？

「そもそも何でお前は僕に回し蹴りとかするんだよおおー!!」
激しい形相で俺の頭をブンブン揺らして訴えかける。

「だ、だっってお前つかさとあんまり話したくないだろ？ だから…

…」

「僕がいつつかささんと話したくないなんて言ったあああああー

ー！？」

「ち、違うのか？」

「当たり前だろー！ あんな可愛い子と話したくないわけなんてあり得ないだろうがあああー！」

「……………」

可愛い子？ 話したくないなんてあり得ない？

あれ？ つまり…… 梨原はつかさが好きってこと？

なんだ…全然気付かなかった。

……………

……………

……………

って。

「ええええええええええーっ！！！！？」

俺は腹の底から叫んだ。

「お前ってつかさのこと好きだったのおおおおー！！！！！！？」

「気付くのおせえよー！！」

第42話 梨原LOVE

「はあ……」

一年D組では何度もため息が囁かれていた。
クラスのみんなはたった一人の人物に注目。その原因となっているのはひよりだった。

「梨原先輩……」

“ 僕、君を応援してるからな ”

「はあ……」

またため息。

周りからしたらいい加減にしてほしいと思っていることなんだろう。しかしひよりにとったら今ため息をつかずどうしろと言っただという感じがした。

でもまさか一目惚れするとは思ってもよらなかった…。

「ああ…好きって本当にこんな気持ちのことを言うのかな」

そういえば今まで百合とかをネタにしてきたけど、自分のことになったら曖昧になってしまう。
そもそも恋ってなんなんだろう。

少し気になりだしたら恋？

その人のことばかり考えるようになったら恋？
どこに境界線はあるんだろ…。

「……………はぁ」

「ひよりダイジョウブ？」

「パティ…」

「さっきからためイキばかりついてどうしたんですか？　いつも
のひよりじゃないネ」

「いやちよつといろいろあつて…」

「いろいろとはなんですか？」

「う、まあその……………いろいろ……………」

「ヒトにイえないようなコト……………ま、まさかコイですか!？」

「……………それがわからないんだよね」

ひよりは否定も肯定もしなかった。

どこからが恋でどこからが友達か。

簡単なようで難しくて、答えが全然わからない。

誰か詳しい人がいたらご教授してもらいたい…。

「…はぁ」

今日はよくため息が出る……………。

「ひより」

「…なに？」

「わからなかったらコイしてるっぽいヒトにキいたらいいネ」

「…コイしてるっぽい人？」

そんな人いたかな…？

「というわけでちよつとヨんでくるネ」

「えーっと…」

ひよりの目の前にいるのはゆたかとみなみ。

うーん、確かにしてるっぽいけど何かが違うような…。

パーティはもう二人に事情を説明したらしいけど、何でこの二人にしたらんだろ…。

私はネタとかじゃなくて真面目に参考したいんだけどな…。

その事を向こうも理解しているらしく、最初に戦力外であることを通達してくる。

「相談に来てくれるのは嬉しいんだけど、私達じゃあまり力になれないかも…」

「…コクコク」

「うん、ありがとう」

「それで私達に何を聞きたいの？」

「いやそれが恋ってなんなのかなあってこの歳になってわかんなくなっちゃって。だから恋とその一歩手前について教えて欲しいんだけど」

ピシッ…。

あ、何かにヒビが入る音が…。

「……………」

「……………」

そしてなんで二人の表情が固まる？

「……………ごめん、聞いた私が間違ってたよ」

ひよりが深々と謝る。

「ち、ちよつと待って、そ、それはやっぱりあれじゃないかな？

ほら、好きになったら恋みたいなの」

「じゃあどこからが好きってことになるの？ 気になりだしたらそれは恋なのかな？ それとも恋じゃないのかな？」

「あ……………」

ゆたか沈黙。

しかしみなみが言葉を失ったゆたかを代弁するかのように言う。

「……好きって気持ちは知らないうちになってるんだと思う……。だからどこからが恋とかそういうのは誰にもわからない……。ただこの人と一緒にいたい、そばにいて支えてあげたいって思えるようになったとき、すでに自分は恋をしているっ気付けるんじゃないかな……」

「……………」

あまりの力説にひよりは啞然とする。

「「ほえ……」」

ゆたか、パティは揃って口をポカンと開けていた。

でも今のを聞いてポカンとならないほうがおかしい。

「恋はいつのまにかなってるか……」

そうかもしれない……。

いや、考え方はそれぞれ違うんだろうけど私はそう思う。

だったら私はこれからどうしたらいいんだろう……。

「ふう……」

梨原がつかさのことを好きでいることを知った俺は、その事実をどう受け止めればいいのか分からずにいた。

いや友として喜べばいいのだが、お似合いと言っていいのかどうか……。

なんてったってバカとドジっ娘だからなあ。

もし付き合ったとしてもその先が不安だ。

「げ、雨降ってやがる」

下駄箱で靴を履き替えたあとに空がどんよりとなっていることに気付く。

校門では傘を忘れた奴等がザーザーっ降り注いでいる雨を鞆で防ぎながら帰っていた。

俺もあしなきやならないのか…。

だいたい天気予報では明日が雨って言ってたのに。ほんと信用できないなあ。

「つ、椿先輩!!」

「ん？ ひよりじゃん。どうかし……ぐわっ!？」

突然腕を掴まれて校内に引っ張られる。

「な、なんだよいったい!？」

「いいからついてくるッス!!」

「はあ!？」

理由も言わずにどこに連れてくつもりだよ!？
逆走する二人。

帰ろうとする生徒達とすれ違って行く度に、そいつらは俺達を変な視線で見ってくる。

誤解を生みそうな場面だけに仕方がないのかもしれないが。

「ここなら……」

ひよりはピタツと一瞬で足を止める。

上にある表札的なものには“1-D”とあった。

結局、下駄箱から校舎の一年生の教室までUターンという形になってしまったのだ。

「ハアハア…、そ、それでなに？」

息を切らしながらこうなった訳を聞き出す。

「……………実はッスね……………」

「?」

ひよりの真剣な眼。

あれ、なんか予想していた状況と違うな。

俺はてつきりワガママに付き合わされるかと思ったが…。
だが、次の言葉はワガママなんかとは比べ物にならないほどの重い
話だった。

「私、梨原先輩に一目惚れしたかもしれないッス!!」

第43話 ワンツアタック

「今、なんて…？」

激しい雨の音のせいか、うまく聞き取れなかった。

「ああもう…！ だから梨原先輩に一目惚れしたかもしれないんスよ…！」

「……誰が？」

「わ、私ッス…」

「………。マジか…？」

「……はい」

「………」

苛立ち気味に怒鳴りちらすひよりのおかげでようやく状況を把握することができた。

つまり誰にも聞かれたくないからここへ連れてきて、んで梨原の友達であり自分とも親しい俺に相談を持ちかけた。

だいたいこういうことだろう。

ふっふっふっ、どうだ今まで鈍い奴とかキヤルゲーの主人公だとか言ってた者共。本気を出せばこのくらいは余裕なのさ。まあ自信があるのは他人のことだけなんだけど……。

って、今はそんなこと言ってる場合じゃなかった…。

「……梨原のどこを好きになったんだ？」

「…そ、それは言わなきゃダメッスか？」

ひよりがちよっと困惑する。

「あ、いや言いたくなかったら別にいいんだけど…」

「……裏表がなくて、それで他人の夢を応援してくれる……。そう

いうところツスね……」

「……………」

あいつにそんないいところあったっけ…。

「それでなんすけど…梨原先輩って付き合っている人や好きな人とかいるんスか？」

「え……」

ヤバイ…。普通にヤバイじゃないか。ひよりが梨原のこと好きならこのことは絶対に気になることだ。でもあいつはつかさのことが…。

「椿先輩？」

「な、なんだ？」

「なんか汗だくツスよ？」

「い、いや、気のせいだろ……」

適当な言葉を使って誤魔化す。

しかしなんと答えればいいんだ…。

好きな奴がいるって素直に言うしかないのか…。

だが言い方というものがある。

なにかピツタリな感じのもんはないのか？

「それでどうなんスか？ いるんスか？ いないんスか？」

「えーっと……」

手段が見つからずに口ごもっていると遠くから声が。

「ひよりー、今日は一緒に帰るって自分から言ってきたくせに、何してんのよー」

同学年の友達が手を振ってきている。

「あ、すっかり忘れてた。つうわけで椿先輩、この話はまた今度で」
ひよりはすぐさまその友達の元へ走り寄る。

俺は静まった校舎で黙ってうずくまった。

言えなかったなあ…。

言わなきゃいけないのに…。

やっぱり俺ってヘタレだ…。

その日の夜、梨原からメールがくる。

“つかささんに好かれるにはどうしたらいいと思うっ?”

「……………」

このメールが俺の悩みを思い出させる。

ひよりは梨原が好きで梨原はつかさが好きで…。

この関係の中、うまく全員が幸せになればいいのに…。

“積極的にしたらいいんじゃない?”

と、返信してベッドに顔からダイブ。

別にひよりの邪魔をするつもりなんかない。

むしろ応援してやりたい。

だが、梨原がつかさのことを好きである以上ひよりの想いは実らない。

「……………妙な立場に立たされ地まつたなあ……………」

俺はどう動けばいいんだよ……………。

「よう桃原」

「お前最近よくこっちのクラスに来るよな」

「まあな」

「ひょっとしてイジメられてんのか？」

「んなわけあるかよ」

「……………」

えらい上機嫌だな…。

いつもなら

「んなわけあるかつ！！」ってツッコミをいれてくるのに。

イジメられすぎて頭が腐敗したか？

「今日はつかささんに果敢にアタックしていく作戦を三十個考えてきたのさ」

「うわっ…きもちわる…」

「どれもこれも徹夜で作った最高傑作」

「うわっ…きもちわる…」

「おかげで寝不足気味だから気分悪い…」

「うわっ…きもちわる…」

「朝はつかささんもダルいだろうから決行は昼休みからしとくよ」

「うわっ…きもちわる…」

最後の“る”を言う前に梨原がその場を制する。

「ちよっと待てっ！！ さっきからきもちわるって何回言ってたんだよ！！」

「冗談だって。気にするな」

「気になるに決まってるんだろ！！」

昼休み

梨原は一人、B組の廊下前に来ていた。

「よし……よし……」

あとはここをこうしてつと……。

メモ用紙に書いた作戦を書き直していき何度も自分で確認する。

しかしこうやって自信を積み重ねていく裏では、不安と緊張も大きくなっていく。

「……………」

前回みたいに僕はつかさんの前では緊張のあまりうまく話せないでいるのが現状だ。

今のままでは絶対にダメだ。

もっと勇氣と自信を持っていつも通りの俺にならなきゃ……。

「……………うしっ、行くなっ」

一歩の勇氣。

それが入るともうあとは勢いに任せた。

行く先はただ一つ。

自分の好きな人のところへ。

「っ、つかさん！」

「ふ、ふえっ!？」

気合いを入れすぎた第一声につかさはビクッと驚く。

だが梨原はそんなことお構い無しだった。

「あ、あ、あの！　よよかったら今度の土曜日にカラオケにでも行きませんか！　も、もちろんお友達とも一緒にでいいので！」

……………

……………

……………。

大胆かつド迫力の誘いにB組は静寂に包まれる。

「…は、はい……」

つかさは何が起こったかっではないなかったが、勢いにのまれて返事を渡した。

「あ、ありがとう！　そそ、それで詳しい時間等を後に伝えたいのでその……メアドを教えてください……」

ここが勝負の分かれ目だ。

嫌と言われたら敗者。

いいよと言われたら勝者。

つかさんは僕のことをどう思っているのか…。

第44話 真実

「」

クラス全員が試験勉強で苦しむ顔をしているのに対して梨原はルンと鼻唄スキップ。

動くペンを止めてそれを眺める女子が小声で横の席にいる男子に話しかける。

「ねえ、今日は梨原くんすごいご機嫌だね」

「あーなんか隣のクラスの柊つかさだっけ？ そいつとカラオケに行くことが決まったからだろ」

「えっ、それってデートじゃんっ」

「ああデートだな」

「それに柊さんって確か体育祭が終わったあとにちよつと話題になつてた子だよね？」

「ああ、あと停学になつてた……桃原椿だっけ」

「私、絶対に柊さんは桃原君のこと好きだと思つてたのになあ」

「でもあいつめちゃくちゃ可愛い彼女いるらしいじゃん」

「えっ、そうなの？」

「ああ、けっこう前に見たんだかあの可愛い容姿と明るい性格はマジでパーフェクトだった」

「ふーん……。柊さん桃原君に彼女ができたとき、どう思つたんだろうね……」

「さあな……」

「……………ねえひより」

放課後になると校門前でこそと帰宅生徒を目に映しているひよりにこうが尋ねる。

「あんだなにしてんの…？」

「あ、こう先輩、こんにちはッス」

「いや挨拶はいいからさ」

「ち、ちよつと待っている人がいるんすよ」

照れながら言うひよりの様子にこうはピンとくる。

「へー…。ストーカーもほどほどにしなよ」

「ストーカーじゃないっすよ…！」

この背中に向かって叫ぶがあちらさんは全く聞く耳をもっておらず、そのまま立ち去っていった。

まったくこう先輩は。

「…今はそんな文句言ってる場合じゃなかった」

早く梨原先輩来ないかなー。

一緒に帰ろうかなと思って早く来たのに意味がない。

「……………あっ」

来た！

しかも一人！

これは外せないビッグチャンス！

勇気を振り絞っていざゆかん！ 聖地へ！

「あ、あの、梨原先輩！」

「ん？」

「わ、私のこと、覚えてるッスか？」

「えっと…、確か一年生で絵が上手い子だろ？ 名前は……………ひより

だっ たっ け」

「~~~~っ!!!」

緊張の糸が切れたのか、ひよりが満面の笑みになる。
覚えてた！

梨原先輩が私のこと覚えてくるてた！

しかも名前まで！

マイネームイズひよりの“ひより”を覚えてたよー！

「それでどうしたんだ？ 校門前に一人で」

あつ、そうだった、梨原先輩に言わなきゃ。

「よ、よかつたら私と一緒に帰りませんか？」

「……………」

い、言えた…。

しかし梨原が少し困った表情を見せてひよりの安堵はすぐに途切れる。

そして次の言葉はひよりが望んでいたものではなかった。

「すまん…。ここで終つかささんと帰る約束してるんだ」

「……………え？」

つかさ先輩…？ 一緒に帰る…？

「ああ。だから一緒には帰れない」

「え、でも…」

「ごめんな」

「……………」

好きな人にそこまで断られたらもう諦めるしかなかった。

だがいまいち状況が理解できない。

なんで梨原先輩がつかさ先輩と一緒に帰る約束をしている？

二人は付き合っているのか？

でも椿先輩は彼女も好きな人も梨原先輩にはいないと言っていた。
じゃあなんで？

どうして？

もしかして椿先輩は私に嘘をついた？

そもそも梨原先輩とつかさ先輩はいつたいう関係にある？

ぐるぐると脳内で思考が飛び交う。

いくら時間が経ってもそれが解決することはなかった。

昼休み

「真実はいつも一つ」

見た目は子供、頭脳は大人な人が言っていたセリフを物陰でこっそりと吐く。

ひより、現在梨原俊介及び桃原椿を尾行中。

「戦に勝つには何がどうなっているか状況を知らないとダメだからね」

梨原先輩と椿先輩はただの友達。

あ、でももしかしたらB L的な関係……って何を考えてるんだ私はっ！！

と、とにかく二人はただの友達。

重要なのはつかさ先輩がどういった立ち位置にいるかということ。それを判明させることが今回の目的である。

「そういえばさ、つかささんは僕のことなんか言ってた？」

来たっ、つかさ先輩の話題！

「いや、特には言ってなかったな」

「そっかー、まだまだアピールが足りないのかー」

アピール…？　なんでそんなことを…？

「あんまりしつこくすんなよ。つかさってけっこう相手を心配して本音をしまっておくこと多いから」

「大丈夫大丈夫。つかささんのことは全て分かってるからね。……

おっ、この風の流れはきつとつかささんがお弁当を食べ終わって友達と楽しそうに喋っているな」

「……お前ただの変態じゃん」

た、確かに今のはちよつと酷い…。

でもそこが梨原先輩の裏の部分ツスね。

私はちゃんと表も裏も受け止める準備は万端ツスよ。

心の中で勝手に用意をしておくひより。

だが次の会話でそれは脆くも崩れる。

「僕さ、つかささんに会えてよかった」

「な、なんだよ急に」

「だってさ、こんなにも“好き”って思えたことはなかったから」

……………えっ？

ひよりの心が大きく揺れる。

今…、梨原先輩つかさ先輩のことを……。

「とても優しくて可愛くて」

……………好きって言った……………？

「それにつかささん見てると守りたくなるんだ」

何かの聞き間違い……？

「ずっとそばにいてあげたいって思う」

いや……、聞き間違いじゃない……。

「あとさ……」

聞き間違えるはずがない……。

「僕は卒業する前に」

だって……。

「つかささんに好きだって言っよ」

この好きって言葉は……私が梨原先輩にいつか言おうと頭の中で何

回も浮かんだ言葉だから……。

「……っ!!」

ひよりは我慢に堪えきれずその場から離れる。

「ん？」

その時の立ち去る足音に気付いた椿は振り返った。

「あれは……」

見慣れた後ろ姿。

そしてあの髪型。

ゾクツと背筋に寒気が走る。

「……ま、まさか……!!」

「桃原、どした？」

「わ、悪い梨原！ 用事ができた!!」

「へ？」

そう言い残して椿は少女の後を追う。

第45話 心から

「…ひよりっ!!」

なりふり構わず逃げる背中を止めようと声を張り上げる。
しかし二人の差は縮まらなかった。

「……くそっ!」

“ 梨原先輩って付き合ってる人や好きな人とかいるんスか? ”

ひよりが聞いたこの質問。

これに俺は答えることができなかった。

それがひよりのためになるわけでもないのに。

ただその場しのぎに黙っていることしかできなかった。

そして心の端でこのままの状態で終わればいいって思ってた。

そうなったらひよりが報われないのに俺は…。

ひよりは上靴を履いたまま外に出る。

俺も靴に履き替えることなく追いかける。

一分程走ってひよりはピタリと足を止める。

その後ろで息を荒げながら距離を短くする俺がいた。

「ひ、ひよりっ」

「……………」

返事はなかったが、ひよりの肩が大きく上下に揺れていた。
そして僅かに震える手。

女の子の背中はとても悲しみに染まっていた。

「……知ってたんスか？」

「え……？」

「椿先輩は最初から知ってたんスか？　梨原先輩がつかさ先輩のことが好きだったこと……」

「……ごめん」

肯定をするまえに謝った。

それはつまり肯定しているということだ。

「そう……だったんスか……」

クルリとひよりは反転する。

その時の顔は笑顔でもなく怒っている顔でもなく、涙で歪んだ顔だった。

「……………」

ひよりをこんな顔にさせているのは俺が原因だ……。

俺が情けないから……。

「ごめん……。本当にごめん……！」

「椿先輩は謝る必要ないツスよ……」

「……………」

「私が弱いのがいけないんスから……。そして私が梨原先輩を勝手に好きになったから……」

違う……。お前は弱くない……。勝手に好きになってもいいんだよ……。

それは悪いことじゃないんだから……。

そう言えばいいのに言えなかった。

泣いているひよりを目の前にして言えるわけがない……。

「頑張つて……。考えたんだとなぁ……。梨原先輩と何の話をするのか……。食べ物はどうなのが好きとか……。それを一生懸命作つてる自分とか……。いっぱい……。いっぱい……」

ひよりの目元からさらに涙が溢れた。

「あれ……。何で……。涙が……」

ひよりは何度も拭うが涙は尽きることなく地面に弾ける。

「ひぐつ…泣いた…ら…どうにかなるって…えつぐ…思ってるわけじゃないんすけどね……。でも…今だけは…泣いても…ズズ…いいツスよね……」

「……………」

今の俺には罪悪感しかなかった……。

だがひよりは嘘をついた俺を許して、梨原を好きになってしまった自分を許さないでいる。

他人の罪は簡単に許せてしまうのに自分の罪はずっと許さないつもりなのだろう……。

ならひよりは幸せになれるのか……？

「私、梨原先輩を応援するツス……」

「えつ……？」

「梨原先輩の恋が実るように……フォローに回りたいんすよ」

「……………いいのか？」

自分が好きだった人が他の人とくつつくように手伝うのは相当辛い。目の前で自分ではなく違う相手へ行くなんてのは耐え難いことだ。だがひよりはそれを全て承知の上で頷く。

「私…見たいんす……。梨原先輩が幸せになるところ……」

「その気持ちはわかる……。けどそれでひよりは本当に幸せになれるのか？」

「……………」

「他人の幸せを思うことはかまわない。でもそれでひよりの幸せが手に入らなくなるなら遠慮することない。他人を優先にしてまで他

人の幸せを考えることなんてないんだよ」

「じゃあどうしたらいいんすか…？ 他人の気持ちを無視しろとでも…？」

「そ、それは…」

「……もういいんすよ……。梨原先輩はつかさ先輩のことが好き。もう……それでいいじゃないッすか……」

「梨原……」

「ん？ 桃原、何か用か？」

「ちよつと来てくれないか？」

「どこに？」

「……一年生の教室」

「少しここで待っていてくれ……」

俺は廊下に梨原を待たして一人教室に入る。行く先は勿論ひよりのところだ。

「ひより、連れてきたぞ」

「ありがとうッス……」

多少元気はなくとも笑みはあった。

だがそれが本物かどうかなんてのはひよりにしか分からない…。

「梨原」

「ん？」

「ひよりだ、覚えてるだろ？」

俺は隣にいる人物が梨原の記憶に残っているか確認する。

「ああ、覚えてるけど」

「今日から俺と一緒につかさのサポートをしたいって…」

「マジか！ いやサンキューひより」

この時、俺は心底喜べなかった。

今もひよりは泣いている気がしたから…。

「梨原先輩、まだ一度も自己紹介してなかったスね」

ひよりは自然に手を出す。

「田村ひよりッス」

「……………」

でもひより…、お前がそれを望むんだったら俺は全力でサポートする…。

絶対に…………。

そして必ずお前が勝手に勘違いして背負ってる罪を俺が消してやる…。

第46話 俺にできること

ひよりも梨原の恋を応援する側になり、放課後俺達は三人で近場の喫茶店に寄る。

「ふう…寒い寒い」

梨原が手を擦りながら座る。

「いらつしやいませー。ご注文はお決まりですか？」

「えーっと…」

「……………」

「コーヒーっ」

俺とひよりもメニューを開いて目を動かしていると梨原が先にコーヒーを注文する。

それにつられたのか俺も、

「………… コーヒーで」

別に何でもよかったんだが、あんまり待たせたくないから…。変な強がりです注目を済ませてあと残ったのはひよりだ。

メニューを一通り見たあと財布を覗く。

「はぁ…」

ため息を一回。そしてウエイトレスさんに、

「私も………… コーヒーで」

それぞれの注文はこれで終わりかと思っただが、

「あ、すいません、チョコパフェを一つ追加してください」

「……………」
梨原がなぜかチョコパフェ追加。
こいつパフェが好きだったのか。
なんか女みたいな奴だな…。

「お待たせしましたー。チョコパフェの方は…」
似合わないが梨原だ。

しかしその当の本人は、

「あ、チョコパフェはそっちの女の子です」

「…………え？」

ひよりの困惑顔になっているもウエイトレスさんは気付かずひよりの前に置く。

「ではごゆっくりどうぞ」

そう言つてウエイトレスは去つていった。

三人だけとなり、当然ひよりは梨原に問う。

「あ、あの…これはいつたい…」

「さっきこのチョコパフェをチラチラ見てたからさ欲しいのかなあつて思つて。それにお金にも困つてるみたいだから僕の奢り」

「そ、そんなの悪いツスよ！」

ひよりはパフェを梨原の方へ押す。

「いいから。気にすることなんか無いって」
対する梨原はひよりの方へ。

「で、でも…」

「それにつかささんのこと相談に乗ってもらつからお互い様だつて」
「……………」

まだ納得がいけないひよりはチラリと俺を見る。

助けを求めているのだろう。

「ひより、せっかくなんだし素直に貰ったら？　梨原だってそうしたいからしてるんだし」

と助言する。

「……じ、じゃあお言葉に甘えて…」

「うん、どうぞ」

梨原の無邪気な笑みがひよりにストライク。

顔を真っ赤にしてパフェをつまむひよりはなかなか可愛らしかった。しかし梨原のやつよく見てるな！。ひよりがチョコパフェを欲しがってたなんて横にいても気付かなかったぞ。案外こいつよく人を見てるんだなあ…。

「味の方はどう？」

「あ、美味しい…です」

「それはよかった」

またしても笑顔の矛先が向けられる。

あ、爽やかな笑顔にひよりまた赤くなってる…。

「つかさ先輩は少し大人しいところがあると思うんす」

一息ついたところで本題に入った俺達は、まずつかさについて話し合う。

「それは俺も思ったな。あとけっこう死語が多いかも」

「むむ、そうなのか。メモメモ……」

梨原が小さい手帳に聞いたことを書いていく。

その一生懸命な姿はひよりにとってどれだけの苦痛になるか…。だがひよりが望んだ結果なんだからそんなことを気にしてもしょうがない。

割りきるしかないんだ…。

「つかささんの好きな食べ物とかわかる？」

「好きな食べ物か……。そういえばつかさって果物好きだったな」

「あー、メロンとか美味しそうに食べてたところは見たことあるっすね」

「じゃあ苦手なものとかは？ 特にこれはダメツみたいな」

「うーんと……。貝類だったっけ？」

「椿先輩、それはかがみ先輩の嫌いな物ツス。つかさ先輩はたしかピーマンとか苦い物ツスよ」

「ピーマンかあ…。なんかそれ分かるかも。僕もあんまり好きじゃないからな」

梨原がクスリと笑う。

共通点ができたことで嬉しさを感じているのだろう。

「それとひより誕生日の時に行ったホラー映画、ああいうのも苦手だったな」

あの時の怯え様は今でも覚えている。

腰が抜けたつかさを俺がおぶってやったっけ。

でもこれは言わないでおこう……。

「ホラーが苦手……。と。んじゃそういう話題は禁止だな」

いつの間にか手帳にはつかさのことにすることがびっしりと書かれていた。

「そこまで好きだったらもっと早く告ればいいのに」

頭にちらついた言葉が出る。

それに対して梨原は曖昧に答えた。

「それはそうなんだけどさ…。何て言うか勇気が出なかったんだよ。でもこのまま終わるのも嫌だからさ、バレンタインを機に変わろうかなって…。」

「……………」

実際……すごい奴だと思うよ…。

他人からしたらさっさと告れとか言っただろうけど、その時の勇気

は半端なものではない…。

誰にでもできそうであまりできないこと。口ではなんとも言えるが実際やろうとするとに難しいこと。

それをにこいつはちゃんと言おうとしている…。

中身はバカなのかもしれないが、ここの一番の勇気を振り絞って…。その勇気は……尊敬に値すると言ってもいい。

「よし、ひより、それと桃原、今日はありがとな。おかげでつかさんのこと大分知ることができた」

「い、いえ、私たちにできることでしたら何でも言うてくださいッス」

そしてひよりも…。

俺に自分の気持ちを明かすことがどれほど勇気が必要だったか…。

“誰にも言えなかったけど実は前からつかさんのことが……”

“私、梨原先輩のこと一目惚れしたかもしれないッス!!”

二人のこの強い言葉…。

俺ができることはただこうして横にいることしかできないのだろうか……。

第47話 離れていく君の手

つかさと梨原がカラオケに行く土曜日。梨原は11時に駅前集合とつかさにメールで伝えたらいいのだが、その本人は約束の時間10分前というベタな行動を取っていた……わけでもなく、梨原は11時から10分過ぎたくらいにやってきた。

つまり遅刻だ。

ちなみに俺とひよりは梨原の指示でつかさに見つからないように執事服とメイド服に変装して尾行。

言っておくが断じてコスプレではない。

……たぶん。

「ご、ごめん！ ちょっと横断歩道で荷物をたくさん持ってたお婆ちゃんを助けてたら予想以上に時間がかっちゃってさ！」

うわ出た。つかさに好印象を与えるために考えたうちの一つ。

梨原が名付けた“お婆ちゃんを助けてヒーローになっちゃおう作戦”。

いかにも人助けしてますという良い子ちゃん振るつもりらしい。

俺はやめとけって言ったんだけどなあ……。

だって今時それはないだろ……。

お婆ちゃんを助けて遅れたって昭和の時代じゃねえか。

「椿先輩……」

「……？」

「椿先輩、私達こんな格好してたら逆に目立つんじゃない……」

「言えてる…」

その証拠に俺達を指差したりする奴等がちらほら。素直に着てるのもどうかしてる…。

つてかもうすぐ受験だつてのに何やってんだ俺は…。

「最初はお昼を食べに行く見たいツスね」

「そうみたいだな」

どこにでもある一般的なレストラン。

俺達は二人がよく見える位置に座る。

当然向こうからはバレないように注意を払いながら覗き見るのだが、執事服とメイド服を着た若者がこんな怪しい行動をしているのは世間からしたら痛い子だと思われるだろう…、いや思われるに違いない…。

早く帰って受験勉強したいなあ…。

そんなことを考えながら二人の様子を窺う。

「今日……の奢り……何でも……いいよ」

「え、そん……いよ」

「いって、僕……誘った……気に……で」

僅かだか二人の会話が聞こえてくる。

しかしこれじゃ何言ってるかわかんないな。

「ひより、もう少し近づかない？」

「……………」

「……………ひより？」

「…え？ あ、な、なんスか？」

「いやだからもう少しだけ近づかないかって…」

「私は……今のままでいいッス」

「でもここからじゃ会話が聞き取りにくいだろ」

「それでもいいんスよ…」

「……………」

そこまで言うのだったら引くしかない。

黙って同じ席から二人を眺め続けることにした。

このあとはレストランを出て、予定通りカラオケ、そして映画とメジャーなルートを辿っていく。

映画館で上映している中、ひよりは映像ではなくずっと梨原達を見る。

「……………」

つかさ先輩は梨原先輩のことどう思ってるんだろ…。

つかさ先輩が時折見せる笑顔は本当に楽しそうだった。

もしかしたら今はなんとも思っただけでもいつかはつかさ先輩が梨原先輩のこと好きになるってことも…。

そうなるのも仕方がない。

仕方がないけど私は……。

「やっぱり……無理だったんスね…」

「えっ？」

ボソッと呟いた言葉が椿に届いてしまった。

「あ、いえ、何にもないッス」

「……………ひより…」

椿先輩の真っ直ぐと向けられた眼は何もかも私のわかっているよう

だった。

「私って最悪ツスよね…」

つかさ先輩は今、梨原先輩の隣を歩いている。それがどうしようもないくらい歯がゆかった。

「私、今つかさ先輩のこと……」

「ムツとした？」

「……………」

静かに頷いた。

梨原先輩はつかさ先輩ということで笑顔になる。幸せになる。それなのに私は何を考えているんだ…。

応援するって言ったのに…。

梨原先輩が幸せになるところを見たいって言ったのに……。

「でもそれは仕方がないだろ。恋ってそんなもんだから」

「……つかさ先輩は何も悪くないのに……。すごく優しい人なのに…。

なのに私は……」

溜まった涙がシートに落ちる。

「もお…やだツス…。こんな自分……」

簡単に諦めがつけばいいのに…。

あの人のこと…簡単に忘れることができたらしいのに……。

日は沈み辺りは完全に闇に染められてきた頃、漸く駅に着く。

「いやーつかささん、今日はありがと。とても楽しかったよ」

「あ、うん、私も楽しかった」

「えっと…もしよかったらまた誘ってもいいかな……？」

「うん、いいよお」

「ホ、ホントに!? よっしゃー!」

梨原は一人勝手に盛り上がってガッツポーズを取る。
能天気でいいねえ…。

こっちはいろいろと問題を抱えてるつてのに……。

「……梨原先輩、今すぐ素敵な笑顔ッス」

「浮かれてるだけだろ……」

「それでも…幸せそうッス」

確かに今のあいつは幸せなんだろう…。

好きな奴と時間を過ごせて、また会う約束もして…。

「なあひより……」

「…?」

「お前今…幸せか?」

「……………」

「ただ見ているだけでホントにいいのか?」

「分かんないッス…。分かんないッスけど梨原先輩の笑顔が見れたら心が和らぐんスよ」

「……………そうか」

「でも……やっぱりその隣にすることができないと……嬉しさより悔しさの方が……」

なんとかしてやりたい。

でも何もできない。

俺はひよりを黙って見守ることしかできなかった……。

第48話 瞳の奥に宿した愛

「ひより」

「あ、な、梨原先輩…」

一年生の教室の前にまた梨原が来る。

「土曜はありがとな」

「い、いえ、そんな…」

心の内を隠すようにひよりは手を振る。

私にとってはあの日はいい日ではなかったけど梨原先輩は楽しかったんだろうな…。

「それでさ、また聞きたいことあるからこの前三人で話し合った喫茶店に来てくれないか？」

「え？ 今日ツスカ？」

「あ、何か用事とかあった？」

「い、いえ、そういうのはないツス」

「よかった。じゃあまた放課後に喫茶店で」

「あ………」

引き留めようとしたが、途中で思い止まってしまふ。

本当はもう…堪えることができない…。

だって……、他の人と仲良くしてるところなんて見たくないから…。

「それじゃ第二回作戦会議を行う」

前と同じ喫茶店で梨原が指揮をとる。

しかし前回とは何かが違う。

「…あれ？ でも椿先輩来てないッス…」

メンバーが足りないことに気づいたひより。

「ああ、あいつは受験勉強に集中したいって」

「えっ…!？」

ガタンッ、とひよりは思わず立ち上がる。

「だから今日はひよりと二人で会議になる」

「……………」

開いた口が動かなかった。

う、うそ…。マ、マジッスか…？

梨原先輩と二人きり…？

「ご注文はお決まりですか？」

「コーヒー二つで」

「かしこまりました」

ひよりが動揺している間にスムーズに注文を済ませる。

こうなっちゃったらもう中断なんて無理だね…。

梨原先輩に嫌われたくないし……。

諦めたひよりは伸びた足を曲げて大人しく座った。

「それにしてもつかさ先輩って以外と天然なんだなあ。この前話し

てたらさー」

つかさ先輩の話題を中心とした会話が行われる。

会話といっても私はただ梨原先輩の話に

「うん」とか

「そうッスね」とか合わせる程度にしか話さなかった。
いや…多分話せなかったんだと思う。

他の人の話なんて梨原先輩の口からあまり聞きたくない。

だから聞いているフリをして適当に返答していた。

こんなこと…梨原先輩のためにならないって分かっているのに…。

「そっついえばさ、ひよりってつかさ先輩からネタとか提供してもら
ってるんだって？」

「…え？」

自分の名前がポツリと出てきてつい反応してしまう。

「どういうのなの？　つかささんが創作したネタは」

「あー…、正直言うとなん難しいんスよね…。どう使ったらいいか逆に
分からなくて…」

「どんなのどんなの？」

興味津々に聞いてくる。

ひよりはつかさ先輩が言った言葉を書いたネタ張の一部分を指で示
す。

「ここなんスよ」

「何々……。“みかんの皮を剥いてたら手が黄色くなっちゃった”」

「……………」

「……………」

気まずい無言の空気…。

「ほ、他にもあるんスよ。例えば…これッス」

「えーっと……“夜遅くまでゲームしてたらいつの間にか力尽きて

眠ってた”」

「……………」

「……………」

「まあつかさ先輩が言うことは分かるんスけど使い道が…」

「な、なるほど。確かに僕もどういう場面で使えばいいかミステリ
ーだ……………」

「ま、まあそれが普通ツスよ」

「そっか、ありがとなひより。教えてくれて」

「あ、いえ……」

好きな人からのお礼。

本来なら嬉しい筈なのに素直に喜べなかった。

なぜならまた梨原先輩がつかさ先輩の方に一步近づいた気がしたからだ…。

「あのさ、ひより」

「…なんスか？」

「もしかして…なんか悩んでる？」

「えっ？」

「なんか、自分のことで忙しそうだ…」

「そ、そんなことないツスよ」

「それならいいんだけど…」

心配してもらってつい顔が赤くなる。

それがバレないようにサッと視線を外に向けた。

ダメだ…。やっぱり私はこの人のことどうしようもないくらい好きなんだな…。

自分の恋について話してるのにちゃんと私のこと見てくれて…心配してくれて…。

どうして私はこんなことしてるんだろ…。

応援なんて……できるわけないのに勝手に強がって…。

しかもつかさ先輩と仲が上手くいかなきゃいいのにとか……最低なことばかり考えて……。

ホントに最低だよ……私……。

でも……。

「梨原先輩」

「ん？」

梨原先輩にだけは嫌われたくない……。

「私、祈ってますから。二人が上手くいくこと」

「あ、うん」

せめて表面だけは良い子っぽくしてもいいよね……？
だって……心の中は自分だけの世界なんだから……。

このあと二人は梨原の家がどういう家か、黒井先生の授業についてとか、椿の情けないところとか、そんな普通の会話をした。所々に共感できたり笑いあったりで盛り上がった。

だからこそひよりは思う。

私が梨原先輩の彼女だったなら毎日が笑いあえるんだろうな……と。

とある晴れた日。

受験が近くなってきたのでお詣り、そしてお守りを買おうとこなたがかがみのとこの神社に来る。

「ねえかがみー」

「なによこなた」

「前から思ってたんだけどさー、何でオタクってバカにされるっていうか差別されるんだろうね」

「知らないわよそんなの。どうせアニメばっか見てるから現実逃避してると思うれてるんじゃないの？」

「知らないと言ったときながら答えるんだね……。でもさ、なんか酷いよね。恋愛アニメとかは恋愛ドラマより感動するときあるのにアニメは見る前からキモいとか言う人がいてさ」

「……………」

そういえばそうね……。

「んー……まあでもそれは仕方ないんじゃない。いずれ世間も認めると思うわよ」

「やっぱりかがみはいい人だーっ！」

「いちいち抱きつくなっ」

「というわけで神様。どうかアニメが全人類に認められますように」

「受験のお詣りに来たんじゃないんかい！」

「えー。だって受験は神頼みじゃなくて実力で取るもんじゃん？

ほらかがみも一緒に祈ろう」

「帰れっ」

第49話 君がいた

次の日、ひよりと梨原はまた喫茶店で話し合う。

梨原が念には念をと言って誘ったのだ。

椿はやはり勉強で抜けられないらしく今日もない。

「んー、やっぱりつかささんホラー無理なのかなあ」

「それはさすがに無理ツスねえ…」

實際目の前でつかさ先輩のホラー嫌いを見た私だから分かる。

あれだけは見えてはいけない。

つかさ先輩の高感度が下がること間違いないと言える。

「ああくそつ、ホラー見たいなあー」

「え、梨原先輩ってホラー好きなんスか？」

「ああ大好きだよ。あのハラハラ感がたまらないんだよなあ」

「へー…」

なんか意外だなー…。

梨原先輩って普通の男の子だからもつとアクション系が好きかなって思ったんだけど。

あ、けど普通の男の子でもホラーとかよく見たりするのかな。考えたら私男子のことあんまり理解してないなー…。

情けないことに分かってるのは漫画の中の男子だけだし。

「ひよりはさ、漫画以外に興味とかないの？」

「わ、私ツスか？」

つかさ先輩について今日は集まったはずなのにいいのかな…。

私の話なんかして…。

ひよりは多少躊躇したが、待っていてくれる梨原を見て思いが決まる。

「…えと、私の趣味は……………ってあれ？」

「…？　どうかした？」

「…そういえば…………、私の他の趣味ってアニメ関連しかないじゃん…。」

もし梨原先輩がアニメとかあっち系が嫌いだったらどうしよう…！

いやそもそも漫画じゃなくて同人誌だってことも伝えてないのに…！

「ひより？」

とにかくなんか言わなきゃ！

嘘でもなんでもいいからなにか！

「わ、私の趣味は……………妄想ツスね」

「……………」

「……………」

「……………なんて？」

まさかの聞き返し！

もうこれ以上は苦しいよー！

ってか何で趣味が妄想なんて言うかな私はー！

しかし言ってしまったことは訂正できない。

してしまったら逆に引かれてしまうので、ひよりは恥ずかしくももう一度言う。

「も、妄想…ツス」

声のトーンが半減したが、梨原はようやく意味を理解した。

「あ、ああ、妄想。妄想か…。はは…、妄想……………ね…」

「変な子ですいませんツス……………」

「あ、いやいいんじゃないか？　妄想」

……………何が？

「こ、こんな話するの恥ずかしいんだけどさ…、ば、僕も妄想したり……………するし…」

「……………」

あれあれ…？　なんか話が思ってた方向とは違くない？

「僕さ、実はアニメ好きでさ、よく見るんだけどこんなキャラがいたらなあとか…思ったりするし…」

「な、梨原先輩アニメ好きなんスか！？」

「そ、そうだけど……………やっぱり気持ち悪い…よな？」

「そんなことないツス！　私もアニメ大好きなんで！」

「えっ、マジで！？　ひよりも！？」

「はいっ！」

「じ、じゃあさ、一番気に入ってるアニメってなに！？」

「それはもちろんあれツスよ！　けっこう前にやってた」

妙な共通点を見つけた二人は本題を忘れて日が沈みかけるまで語り合った。

辺りがオレンジ色に染められた頃、二人は店を出て揃って大きな背伸びをする。

「くぁー、喋りすぎて疲れたー」

「あはは、私もツス。こんなに喋ったのは初めてかも」
そしてこんなに笑ったのも……………。

ひよりは顔がにやけてしまいうくらい嬉しい気持ちが抑えられなかった。

並んで歩けること、一緒に笑いあえること、そして……………梨原先輩だったなら素直な自分を出せること。

でも梨原先輩はつかさ先輩のことが好きだから……もうこんなことしてたらダメだね。

「じゃあ私コツチなんで」

ひよりは左右に別れる道の右を差して言う。

「…もう帰るの？」

「え？」

梨原が小声で言うが、ひよりはあまり聞き取れなかった。

「あ、そ、そうだよな。明日学校あるしそろそろ帰らないといけな
いよな」

「……？」

梨原先輩が慌ててるように見えるのは気のせい？

「じ、じゃあな。また明日」

「あ、はい……」

返事をしながらも様子がおかしい梨原の背をジッと見る。

「……………」

さつき梨原先輩は何て言ったんだろう。

よく分からないけどそれほど重要なことじゃないよね。

三年生大学受験終了日

会場ではところどころにやりきった感のため息。
それは俺も同じだった。

「ふう……」

俺は自分の右肩を揉んで労ってやる。

受験終わったしこれでしばらくはゆっくりできるな……。

そついえば梨原のやつ、大学受験終わったらつかさの家に行くって
言ってたけど大丈夫かな……。

「椿っちー、早く帰ろうよー」

「あ、おう」

たまたま（？）俺の彼女の由佳が同じ大学を受けていたので並んで
帰る。

「……………」

「あの、梨原君、さつきから外ばっかり見てどうしたの？」

「い、いや、なんでもないよ」

「でもビックリしたよお。まさか梨原君が遊びに来るなんて思わな
かったもん」

「ご、ごめん。前以て連絡してればよかったのに」

「ううん、別に気にしてないよ」

「……………」

梨原はまた外を見る。

…………… いったい僕は何を気にしているというんだ。

目の前に好きな人がいるのに外ばかり見て……。

「そついえば受験はどうだったの？」

「ああ、まあまあかな」

受験日近くは全く勉強していなかったのだが、元々頭が良いため少しおさらいしただけでほとんど暗記に成功。この辺はさすが梨原会社の息子である。

「そういえばつかさんってひよりと知り合いなんだよな？」

「うん、そうだけどどうして？」

「……………前に喋ったことあるんだけどひよりってさ、なんか不思議な感じがして……………」

「ふ〜ん……………」

「それにあいつ絵がめちゃくちゃ上手くてさ。初めて見たときはホントに驚いた。あとさあとさ、ひよりってば……………」

「ふふ……………」

つかさがクスツと微笑する。

「ど、どうかした？」

「うっん、梨原君さつきからひよりの話ばかりだったから……………」

「あ、ごめんっ……………」

全く気付かなかった……………」

最近ひよりと一緒にいるからか……………」

梨原は別の話題を持ってこようとする。

だがなぜかひより還暦の話題しか出てこなかった。

「なんか梨原君変わったね……………」

「え……………」

僕が変わった……………」

「それと敬語じゃなくなってるね……………」

「……………あ……………」

言われてから気付く……………」

確かに前まではつかさんに対して敬語だったのにいつの間に……………」

……………。くそっ、わからない……………」

「それが素の梨原君なんだね……………」

「……………素の僕……………」

「うんっ、前よりもすごくイキイキしてる……………」

……イキイキしてる。

それはつかささんのおかげじゃない。おそらくはひよりの……。

「……………」

妙に胸がモヤモヤする……。

なんなんだいたい……。

僕はつかささんのことが好きな“はず”んだ。

今、僕はつかささんの家にいて、つかささんの部屋で一人きりになつて、そしてつかささんと会話をしている。

それは僕にとっては幸せなことだ。

なのに……。

「なんでこんなにも落ち着かないんだよ……………」

このぼつかりと空いたような空間はなんだ？

そばに誰かがいてほしい。

そう思うのは何でだ？

つかささんならそこにいるじゃないか。

目の前にちゃんというじゃないか。

なのに何で僕は今、つかささんを求めているんだ……？

つかささんじゃなかったら他に誰がいる？

つかささんよりも気になる人なんかいるのか？

いるんなら誰か教えてくれ……。

誰か……。

“もう……あなたは気づいてるはずよ”

「え？」

「梨原君？」

「つかささん、今……声が……………」

「声？」

つかさは物音を静めて耳を澄ます。

「……………。何も聞こえないよ？」

「……………」

いや、確かに聞こえた。

女の人の声が。

しかもこの声は前に聞いたことがある。

桃原がゲームで意識をなくして蒼い光が出た時に聞いた声だ…。

“いつも近くにいてあなたのことを見守っていたあの子のこと……もう一度よく考えてみて”

あの子…？

“それがあなたの幸せに繋がるから……………”

ちよっ、待っ。

「……………」

突然声が途切れたと思ったら梨原の携帯が鳴りだす。

送信者の名を見ると梨原の身体が一瞬硬直する。

その刹那、心の穴が塞がった…。

「ごめんつかささん、これまでのこと忘れて！」

「えっ？」

「俺、あいつのところに行かなきゃ！」

人様の家にも関わらずどたばたと廊下から玄関を走り抜けた。

そしてそのまま道路を突っ切り風のようにつかさの家から去っていった。

第50話 私は幸せです

学校の帰り道にある喫茶店。

その中には先程梨原に呼ばれたひよりがいた。

「……………」

まだかな…。梨原先輩。

今どこにいらっしゃる…。

携帯を開くが電話、メールの類いは来ていない。

外を見ても知っている影はない。

それどころかカップルやら家族がたくさんいて、どこか孤独を感じる。

「……………」

10分、20分待っても梨原は来なかった。

何かあったんだろうか…。

やっぱり気になってしょうがない。

ひよりは携帯から電話をしようとする。

その時、自動ドアが開く音がした。

「ひよりっ」

同時に名を呼ぶ声。

ひよりはバツと入り口のほうを見る。

そこには汗だくになった梨原の姿。

「ど、どうしたんスカ!? そんなに汗かいて!」

「いや…、ゲホッ、ちよつと距離があったから急いで来て…」

息を切らしながら苦しそうに話す。

「それで…ハアハアッ…、あんまり待たせるのも悪いからさ…」

「べ、別に少しくらい遅れても良かったのに…」

ひよりは大分待ったのだがその事に関しては伏せておく。

「それで話っているのは…？」

「……ちよつとビツクリするかもしれない…。それでも聞いてくれるか？」

「……？」

何の話をするのか検討がつかない…。

もしかしてつかさ先輩との関係が進んだとか？

「僕さ、つかささんのこと好きだったんだ」

それはもちろんひよりも知っている。

なにしろ二人がうまくいくように手伝ったのがひよりだから当然だ。
「つかささんっていかにも女の子っぽい感じでさ。趣味とかは料理だし容姿も可愛くて一目惚れした…。僕にとってこれ以上ないタイプの女の子だったんだ…。それにたまに危なっかしいところもあったから僕が守りたいって思った。言い過ぎかもしれないけど…ずっと一緒にいたいって思ったんだ」

ひよりはチクチクと胸に刺さる感覚を味わう。

分かつてはいることだけど本人から言われるとやっぱり傷つくなあ…。

「でも気付いたら…違う女の子ばかり考えてた…」

「……………え？」

それは突然の切り返しだった。

梨原先輩はつかさ先輩のことが好き。

それだけは変わらないって思っていた。

この先二人で思い出を作っていくんだらうと。

でも梨原先輩はそれを覆すようなことを言った。

それは何でだ？

予想範囲外の言葉にひよりは混乱する。

「その女の子はとても絵が上手くて……明るくて……他人の僕に積極的に協力してくれて……」

そしてその気になっていく女の子っていうのはまさか…。

「最初は絵が上手いとしが印象になかった。ハッキリ言って容姿もあんまりタイプじゃない…。性格だつてよく分からなかった。

でもこの喫茶店で話していると、いつの間にかその女の子の笑顔が好きになっていった…。一日の中で二人で話す時間が一番幸せに思えるようになって…。

つかさんという時間よりずっとずっと……楽しくて……。もつとこの時間をその女の子と過ごしたかった。だから今、僕は自分に正直になる。僕は君と歩いていきたいから……」

「……っ！」

「僕は“ひより”をいつの間にか好きになってたんだ」

ひよりは言葉にならないほどの鳥肌が立った。

長かった夢の願い…。

それが今……叶っている……。

“僕、君を応援してるからな”

“別にいいんじゃないか？ 妄想”

“ひよりはさ、漫画以外に興味とかないの？”

正直もう諦めかけていた…。

でも奇跡は今ここで起こった…。

「僕と……付き合ってください」

それはずっと待っていた言葉だった。

梨原先輩が私にずっと言っていた言葉…。

梨原は真正面から頭を下げて手を伸ばす。

この手を握ればひよりの願いは叶う。

ただ握るだけで……。

でも……。

「……………」

怖い……。

私なんかがこの手を握っていいのかな……。

向こうは大企業の子息、こっちは平凡な女子高生……。

釣り合わないのはわかってる。

それにつかさ先輩と梨原先輩は悔しいくらいお似合いだった……。

それに梨原先輩だったら他の人と一緒にいたほうが幸せになれるんじゃないだろうか……。

なーんて、前の私だったらそんなバカなことを言ってたんだろうな……。

“その気持ちは分かる……。けどそれでひよりは幸せになれるのか？”

自ら夢を壊すようなこともしてたと思う……。

この手を握らずに立ち去って……。

でも私は変わった……。

少しくらい恋に我儘になってもいいよね……？

「私なんかで……良ければ」

梨原の手を握り返す。

もう私の目には梨原先輩しか映っていなかった。

周りの客やウェイtresが消えたように視界からなくなり、ただ一点、梨原先輩だけしか見えなかった……。

二日後、梨原がB組に暇潰しに来ていた時のこと。

「何でまたこっちのクラスに来てんだよ」

「今日はひより風邪で休みだって……」

相当落ち込んでいるのか、梨原から全く元気が感じられなかった。

……「ったく。大の男が一日会えないくらいで……」

俺はこいつがひよりとくつついたことを受験終了日に知った。

二人から同じメールが来たからだ。

内容は同じだがとても幸せな雰囲気からでも伝わった。

そしてそれはこなたたちにも送られた。

「会えないのが嫌なら今から早退してひよりに会ってきたいのに。もうすぐ卒業なんだから今のうちに会つとかないと後悔するわよ？」

会いに行けと提案したのは隣のクラスから来たかがみさん。

しかしかがみさんも暇だなあ……

それにこっちのクラスよりも自分のクラスの方が落ち着くだろうに。

あ、まさか友達がいらないとか？

そういえばかがみさんが他の友達といるとこなんかあまり見たことがない。

ということとはかがみさんは孤立状態か。

三年間俺達以外に友達ができなかったとは……。なむ……

「椿君、今私に対して変なこと考えてたでしょ……」

「えっ！？ や、ち、違う！ 考えてない！ ……たぶん」

「ほらやつぱり！」

「う、ごめんなさいーいー！」

追いかけてくるかがみさんに反射で逃げる。

いやそもそもあんな怖い顔してたら誰でも逃げなきゃって思うに決

まってる！

「はぁー……」

何で私…風邪なんか引いちゃったんだろ……。

ひよりは自分の部屋で頭に冷えたタオルを置きながら仰向けに寝転んでいた。

中々寝付けず視界には白い天井が延々と映っている。
こついう時つてやることないから暇なんだよねえ…。

ああ…梨原先輩今ごろ何してるんだろ…。

「ひよりー」

あ、ヤバイ……。梨原先輩の幻聴が聞こえる…。

私そんなに重症だったんだ…。

これは早く寝なきゃな…。

「ひーよりー！」

「……………」

あれ？ 幻聴じゃない…？

ひよりは布団を剥ぎ取り窓まで行く。

そしてカーテンを開けて、次いで窓を開けるとそこには……、

「おーひよりー、大丈夫かー？」

「な、な、な…、梨原先輩…！？」

目を擦り、瞬きを何度も繰り返して見たがその姿は幻ではなく、本物の梨原だった。

「なな、何で梨原先輩が私の家に！？　っていつか学校はどうしたんスカ！？」

「あー、サボった」

梨原はサラツと言うが一応校則違反だということを忘れていた。

「サ、サボった！？ 何でそんなこと……」

「そりゃまあ……ひよりに会いたかったから」

ボンッ！！

ひよりの頭が爆発して髪の毛がチリチリになる。

梨原も自分で言っときながら相当恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にしていた。

「え、えと、今から下に行くんでちょっと待っててくださいス！」
玄関を開けに行こうと動いた時、自分が風邪だというのが嘘みたい
に身体が軽かった。

梨原先輩と話せたからかな…。

今は嬉しさの感情が無限に広がるような気分になっていた。

もうなにも心配することもない。

なにも不安がることなんかない。

だって、私のそばには……。

「梨原先輩！！」

勢いよく開かれたドア。

そして温かい光がひよりを包み込んだ。

椿先輩、前に私に言ったよね…。

“ お前今… 幸せか？ ”

あの時の私はホントに辛かった…。

もうこの街にいるのが嫌になるくらい……。

でも今は違う……。

今なら……胸を張って言える……。

私は幸せです　　って。

第51話 HAPPY STONE

もうすぐ桜が咲く…。

始まりと終わりが交わる季節…。

思えば入学式にこなたに出会いきっかけができた。

そして約一年前に再びこなたに出会ってつかさ、かがみさんと知り合い一緒に暮らす生活が始まった。

バレたら退学。

正直何も起こらず静かに過ごしたかった俺にとってはこの生活は重荷だった…。

だってそうだろ？

そんな危なっかしい綱渡りなんか三年になってやりたくなんかなかった。

俺はそんなワクワクなんか望んでいなかった。

平和に。

それが俺の高校生活。

でも……。

“おい、椿君ー”

俺は変わった…。

いや、戻ったんだ。

あいつらのおかげで。

両親が亡くなってから光を失ったように生きてきた。

だからしばらく忘れていた。

友達と一緒にいる楽しさを。

卒業式が近づく度に俺は願った。

いつまでもこの瞬間が続けとは言わない。

でもこの高校生活で起きたことを忘れずにずっと覚えておきたい。

それで大人になってまた会った時には昔話をして

「ああ、そういうこともあったな」って笑いあうんだ。

この生活が終わるのは寂しいけど……、俺は自分の意思で歩き続ける。

また俺の名を呼んでくれると信じているから……。

「ほーい、席つけー」

黒井先生が出席簿を片手に教室へと入ってくる。

「えーと、あと一週間くらいで卒業式やけどあんなもん適当にしたらええわ。どうせあんたらもしんどいやろ」

「……………」

教師の言う言葉じゃない…。

「大事なんは式なんかとちゃう。そのあとの皆でさよなら言う時や。その時だけはいっぱい泣いていっぱい笑っていっぱい話し合え。そしたら絶対にええ思い出になるから」

「……………」

「まあウチの卒業式ん時は全く記憶にないけどなさっきの言葉台無しだ。」

放課後になり俺とこなた、かがみさん、つかさ、みゆきさんはケーキバイキングに寄っていく。

「いやー、しかし黒井先生相変わらずだったねー」

こなたがケーキをつまみながら言う。

「私時々思うんだけど黒井先生ってよくあんなんで教師になれたわよね」

あんなんでって…。

かがみさんさすがにそれは失礼なんじゃ…。

「学校の七不思議に入れてもいいくらいだねえ」

つかさそれは言い過ぎだ…。

そろそろ皿に盛ったケーキがなくなってきたから席を立とうとしたらふと視線がこなたに向く。

別に特別な訳があるわけでもない。

まあ強いて言うなら長い髪の毛がたままたま目に入っただけだ。

「こなたって髪の毛切らないのか？」

「うーん、私はどっちでもいいんだけどね」

こなたは髪をいじりながら言う。

「ん？　じゃあなんで切らないんだ？　長かったら重たいしシャンブーするときに鬱陶しいと思うんだが」

「それがさー、前にギャルゲーしてたらショートカットの可愛い子がいてさ、こんな髪型に一回してみよっかなーって言ったらお父さんが

「こなたあああああー！！！！　髪型だけは変えないでくれえええええええー！！！！」って必死に泣きついてきてさ」

「……………」

あの人はホントに娘命だな…。

「でも私もこの髪型はけっこう気に入ってるんだよね。コスプレするときに合わせられるし」

「ああそう…」

結局お前はそういうことしか考えてないんだな……。

「髪の毛といえばゆきちゃんは切らないの？」

つかさはウェーブの桜髪を見る。

「いえ、私は短いのは似合わないの」

「……あ……」

最もな意見に全員納得。

みゆきさんはお嬢様イメージがあるから活発なイメージを持たせる短髪は想像がつかない。

それに髪を切らない方がかなり美人だと思う。

何だかんだで今の髪型が一番似合っているということだ。

「かがみさんは髪の毛をお切りにならないのですか？　だいぶ伸びてらっしゃるみたいですけど」

「え？　私？　私はその……昔可愛いつて言われたから……」

「「えっ！？」」

俺とこなたが異常に反応する。

俺達は揃ってかがみさんから一步退いて話し合う。

「ちよつと聞きましたか桃原の奥さん」

「ええ聞きましたとも泉の奥さん。まさかあのかかがみさんに昔彼氏がいたなんてねえ」

「しかも可愛いだなんて……」

「かがみさんにそんなこと言ったら……ツンデレが発動しちゃう！」

「そして発動したら相手は萌え萌えな気持ちになってかがみを……」
一瞬沈黙。

「「いや〜ん！！」」

そしてやらしい声を出す。

「かがみさん……そんな人生を歩いてきたなんて」

「なんていうかもう……」

「「可哀想よね……」」

最後は二人でハモって綺麗に終わった。

「え、私ってそんなに可哀想なの……？　っていうか彼氏なんかいないんだけど」

かがみさんは俺達の妄想についていけなかったみたいだ。

「椿君」

ちよっと幼い声が廊下から聞こえる。

「ん？ おー皆どうしたんだ？」

一年生の四人がウチのクラスに入ってきた。

俺の名を呼んだのはその中で一番背の低いゆたからしい。

「いえ、もうすぐ卒業なんで少しでも多く会っておこうかなって皆で決めて」

「そ、そっか…、なんかそんな嬉しいことを堂々と言われると恥ずかしいな……」

「それでこれ……受け取ってください」

「？ なにこれ？」

ゆたかから渡されたのは星形の小さな透明の石が入った小瓶。

正面には幸せの石と刻まれてあった。

「その…椿君の石の色違いを持つてる人が他にいるんだけどその人達の心が一つになると幸せになれるっていう言い伝えがあるんだって」

マジかよ…。

ゆたかつてやっぱり純情な女の子だな…。

しかし幸せの石か…。

明らかにうさんくさいけど断ると失礼だ。

それにこういうのを信じるのもたまには悪くないし素直にもらっておこう。

「ありがとう、ゆたか」

礼儀として礼を言う。

しかしこなたとパティが、

「椿君、今ごろフラグ立てても意味ないよ？」

「そうデス。ユタカをネラうならチガウセンタクシをクリックするべきデシタ」

いや別に狙ってねえよ……。

「あと先輩達にもあるんすよ」

ひより、みなみ、パティはこなたたちに石の色違いを配っていく。
こなたは蒼色、かがみさんは紫色、つかさは空色、みゆきさんは桜
白色。

そして一年生組も持っているという。

ゆたかは桜色、みなみちゃんは緑色、ひよりは灰色でパティは暁色
だった。

しかしこれだけあってもまだ九個。

しかもゆたか達は石をもう持っていないらしい。

早くも幸せが遠退いている予感だな…。

ま、信じてはないんだけど。

第52話 悪夢はここから

ゆたかから幸せの石を貰ったあとにこなたが下駄箱で話しかけてきた。

「椿君、このあと暇？」

「ああ、暇だけど」

家に帰っても特別やることはないからそう答える。

「じゃあゲーセンに行かない？」

「ゲーセン…か」

懐かしい響きだなあ。

最近金に余裕がなかったから行けなかったけど、今月は少し貯金がある。

「久々に行こつかな」

「んじゃ早速行こう！ 椿君の奢りで」

「ふざけんなっ！！」

とある商店街の裏。

若者と五十代の男性が肩をぶつけ、若者の方が一方的に脅しをしていた。

「おいこらっ、ぶつかっというて謝りもしねえのか？」

グイッと服を掴んで喧嘩口を吹きかける。

この攻撃的な若者はかつての椿の先輩、坂上だった。

「ひっ！ あ、あの…す、すみません…」

五十代の男性は恐怖のあまり目さえ合わせられなかった。

その時、謝ってばかりでキリがないと判断した坂上の友人の桜場が動く。

「謝って済めばこの世は腐ってんだよ」

「ゆ、許してください…。なんでもしますから…」

「なんでも？」

坂上はその言葉を利用してこんなことを言い出す。

「じゃあ金よこせよ。有り金全部ここに置いていけ」

「えっ!?!」

坂上と桜場の狙いはそこにあった。

恐怖に支配された人間は未来ではなく今の自分の方を安全にと優先してしまう。

だから坂上達はそれを利用して相手を恐怖の谷へと追い詰めある言葉を書わせる。

それが先程の“なんでもしますから”だ。

そこからは簡単だ。

こちらが要求を出して、それを満たすまでは解放させない。

もし反論の一つでもしたら力づく。

二人がかりだから負けるわけがない。

そして一対一でも坂上は相当強いので鬼に金棒状態だ。

二人は金を受け取ったらさっさとその場から立ち去る。

「ひゃっはー！ 金だ金だー！ ……ってたったの三万かよ」

「……ちっ、しらせさせやがってあのじじい」

坂上は其処らに設置してあったゴミ箱を派手に蹴り散らす。

「たったの三万じゃ何もできないな。坂上、どうする?」

「……………とりあえずゲーセンが目の前にあるんだ。少し遊んでくか」

「でも二人きりでゲーセンなんてまるでデートみたいだね
何がデートだよ…。」

「それよりお前引っ付きすぎだ。もう少し離れろよ」

校門を出てからこなたがやたらピタリと肩を並ばせるから歩みにく
いったらありやしない。

それに知り合いにあって変な誤解でもされたら…。

「あ、そうだ椿君。UFOキャッチャーで勝負しない?」

「勝負?」

いきなり何を言い出すんだこいつは。

「そ。持ち金は千円でどちらが多く取れるか勝負」

「……………」

こいつのことだ。

ただで勝負とは言わないはず。

どうせ負けたら恥辱の罰ゲームがあるんだろう。

「あ、ちなみに負けた人にはキスすること」

「……………」

その罰ゲームは理不尽すぎる…。

「そんな勝負付き合ってられないから俺は降りるぞ。そもそもその
罰ゲームは」

「あれ？ 怖いのか？」

ピクリと俺の耳がこなたの言葉に反応する。

「……なに？」

「そりゃ椿君に勇気がないってのは知ってたけどそっか！。女の子相手に背中向けるんだ！」

「……………」

挑発。

それは相手を言葉や行動などでそそのかして動き出させること。意味は知っていた。

そしてこなたが今それを行っていることも。

だが、

「……いいだろ。受けてたつてやる」

我慢できるほど俺は人間できてないんだよ！

「ここらでは“アルティメットUFO”とまで言われた俺の実力を魅せてやる！！」

こなたがどれほどの腕かは知らないが一時間後に笑うのは俺だということを身に染ませてやる！

一時間後。

こなた三個、俺零個。

完敗だ……。

「アルティメットUFOさん調子でも悪いのかな？ かな？」

ニヤニヤしながらこなたが言う。

「二度とその名で呼ばないでくれ……」

まさかUFOキャッチャーごときに

っていうかこいつはなんで三個も取れてんだよ…。

「ねえねえアルティメットUFOさん」

「……………」

一種の拷問だった…。

「ねえってば」

「なんだよ……………」

「や・く・そ・く」

こなたが唇を前に出す。

そうだった…。

アルティメットUFOより最悪な恥辱が待っていたんだ…。

「おい…、ここでは聞いてないぞ」

「じゃあここで」

「今言うな!!」

「いいからはやく」

くっ…やらしい声出しやがって…。

だが俺は男だ。

ならば卑怯者と言われようと由佳という彼女がいるかぎり俺は裏切る訳にはいかない!

「悪いがこなたよ……………さらば!!」

その場から走り去る。

セコい? んなもんお互い様だ! 向こうだって変な罰ゲーム勝手に決めたんだからな!

「おい坂上」

「んあ？ どうした桜場」

「あそこで騒いでるのって…」

坂上の友人である桜場が示した人物。
それは、

「っ！！」

も、桃原椿！！

「……どうする？ やるか？」

桜場が不気味に笑いながら拳を鳴らす。

しかし坂上は、

「いや待て」

アイツを直接傷つけるのも悪くない。

だが間接的にしたほうがより効力がある。

だから……、

「やるなら……アツチだ」

坂上の視線は椿には向けられていなかった。

坂上の瞳に映っている人物、それはこなただった。

第53話 討たれた翼

「どうだ桜場。桃原達はゲーセンから出る気配はあるか？」

「いや、まだカーレースで遊んでる」

「……………」

気楽な奴等だ。

これから惨劇が待っているというのに…。

まあせいぜい今のうちに楽しんでおくんだな。

「そっぴゃ桜場、例の仕掛けはできてるのか？」

「ああ、さっきダチと連絡して陵桜の生徒一人連れてこさせたつてよ」

「クク…、そうか」

これで準備は整ったな。

後はあの二人を誰にも見つからずどうやって拉致するかだ。

ゲーセンの前じゃ人が多すぎる。

だが他に方法がない以上やるしかないか……。

「おい桜場」

「ん？」

「一瞬で決めるぞ」

「了解…。しくじんじゃねえぞ」

「お前もな」

二人は入り口近くに待機して待ち伏せをする。

その位置は十分桃原達を監視できる場所だ。
「さあ覚悟しろよ…桃原椿」

「……っ」

こなたがいきなりゲーセンの中をキョロキョロと見渡す。

「どうかしたのか？」

こなたの異変に気付いた俺は足を止める。

「う、ううん、なんか誰かに見られてたような気がして……」

「誰かに？」

辺りを見ても変な奴はどこにもいなかった。

強いて言うならさき　すたLOVEと書かれたTシャツを着ている
奴ぐらいだ。

「……気のせいだろ」

「うゝん…、それならいいんだけど……」

「それよりそろそろ帰らないか？ けっこここに長居してるし」

時刻は七時を回っている。

俺は大丈夫なのだがこなたはそうもいかないだろうからな。

そうじろうさん今ごろ泣いてんじゃないか？

「そだねー。んじゃ罰ゲームはまた今度ってことで」

早く忘れてくれたらいいのに…。

俺達は再び足を動かしてゲーセンから出る。

しかしその瞬間視界が揺らいだ。

「ぐっ！？」

激痛が首元に伝わる。

そして足元がふらついて踏ん張ることができずその場に倒れ込んだ。

「……っ」

なんだ…！？ 殴られたのか…！？

でも誰に…！？

「椿君！？ う…！」

見上げるとこなたがサングラスをした男にハンカチのような物で鼻と口を押さえつけられていた。

そしてこなたの目がゆっくりと閉ざされていった。

「こなた…！？」

ま、まさか睡眠薬か！？ でもそんなものを持つてる奴なんてこのどいつだよ！？

「くそっ！ なんだお前！！ うぐっ…！？」

俺も同じようにハンカチを押さえつけられる。

目の前の敵に注意がいき、背後から仲間の接近に気が付けなかった。

「……っ」

くそっ…たれ……。

抵抗しようとしても眠気が一気に襲いかかってくる。

「こな…た……」

最後に少女の名を呼ぶが届くことはなかった…。

やがて俺の意識は薄れていき目の前は真っ暗に染められた。

「……………」

遅いなこなたは。

そうじろっはチラチラと時計を何度も見る。

全く…、遅くなるなら電話しろといつも言っているのに。

「もしかしたら椿君の所にお邪魔になっているかもしれない」
椿君の携帯に電話してみるか。
受話器を取って番号を押していく。

.....

.....

..。

「？」

コールが鳴るだけで応答はなかった。
椿君もでない…？

二人揃っていったいどういうことだ…？

「おじさん、お風呂あがりましたよー」

パジャマ姿になったゆたかが居間に来る。

「ゆうちゃん、こなた今どこにいるか知らないか？」

「お姉ちゃんなら椿君とゲーセンに行きましたけど」

ゲームセンター…。

まあ椿君と一緒にいるなら安全か…。

そうじろうはずっと握っていた受話器を置いて仕事の方へと集中する。

「……う」

ここは……どこかの倉庫か…？
俺はいたい……。

“くそっ！　なんだお前！！　うぐっ…！？”

そ、そうだ。俺は誰かに後ろから…。

どのくらい眠らされたんだろう…。

とにかく状況を把握しないと…。

「…っ」

くそっ…足が動かない…。

頭がふらつきやがる…。

睡眠薬のせいか…。

“椿君！？　うっ！”

俺はさっきまで隣にいた人物を思い出す。

「そ、そうだ！　こ、こなた！？　こなたどこだー！？」

………

………

………。

呼んでもこなたの反応はなかった。

だが別の返事に背筋を凍らせた。

「久しぶりだな、桃原」

ドックン

……え？

「ずっとこの時を待っていた」

この声……まさか……。

「復讐するこの時を……」

「さ、坂上先輩……！」

小さな窓から差し込む光がその名を持つ者を照らす。
間違いなかった。

あの眼光、あの殺気、坂上先輩だ……。

「ど、どうしてあんたが……！？」

「ヤッホー桃原……！」

坂上の横からもう一人がひょっこりと顔を出す。

それは俺が知っている顔だった。

「……う、嘘だろっ！？ さ、桜場先輩までなんで……！？」

元サッカー部先輩の一人、桜場先輩。

この人に個人的恨みは買われていない。

だが坂上先輩とよく一緒にいるところを見たことがある。

「ほら、お友達もここに」

桜場先輩がグイッと青い髪を引っ張る。

「っ、椿君……！」

「こなた……！」

見ると両手を縛られていてまるで人質扱いだった。

「くっ！ お前らいつたいどういふつもりだ！？」

怒りを二人に剥き出し怒鳴り散らす。

「言っただろ……」

「なにっ！？」

「俺はあんときの恨みを絶対にわすれねえからなつてよ……」

第54話 あの花の日

あれは中学三年の頃だ。

俺、坂上剛は最後の夏の大会に向けて必死に練習をしてきた。その頃はまだ道を外していなかった。

まともな人間だったんだ。

最後まで残って練習をして、暇さえあればボールに触って。

バカみたいにサッカー一筋だった。

「おう坂上、今日の新人部員ですげえ奴がいるって噂だぞ」

「すげえ奴？」

「ああ、なんでも天才とか言われてるらしいぜ。クラブチームからの誘いもあったみたいだけどなぜかそっちは断ったらしい」

「ふーん…」

クラブチームからの誘い蹴るなんてやっぱ天才ってなに考えてんのかわかんないもんだな。

「でも戦力アップには期待できるぞ。これでウチもついに全国の仲間入りだ」

「調子に乗りすぎだろ…。それでキャプテン、そいつのポジションってどこだ？」

「えっと、確かトップ下じゃなかったっけ」

「トップ下？」

俺と同じポジションじゃねえか。

俺達のチームじゃそのポジションで出られるのは一人だけ。

つまり俺かその天才のどちらかってわけだ。
「おもしれえ…。キャプテン、そいつの名前は？」

「えー、では一年生の実力テストを行う。内容は対一からのシュート練習だ。これは個々の力を見るものであつて失敗しても構わない」

キャプテンがグラウンドで一年生達に説明している途中、俺は天才とやらを見極めようとしていた。

「……………」

どいつだ…。

どいつがこの俺とポジション争いするんだ…。

ジツと睨んでいると一年生達がゴール前に移動する。どうやらキャプテンの説明が終わり早速テストをするようだ。

「ではまずお前からだ。名前は？」

「あ、はい！ 一年E組、小林聡史です！」

一年生は元気よく名乗り、テスト開始。

ドリブルを始めて立ち塞がるディフェンスを抜いてシュートを放つ。しかしボールは大きく右に。

「ちっ…」

なんだあのシュートは。

見たところ経験者っぽいが全然じゃないか。

俺はこんな奴等に用などない。

早く出てこい、天才。

「次はお前だ。名前は」

「は、はい！ 一年A組守矢智之です！」

「……………」

大丈夫なのかよこの年代は…。

さつきからシュートはずまくってドリブルもまともにできない下手くそばかりじゃねえか。

今年の一年は元気だけでハズレだな…。

ド素人が多すぎる。

この調子じゃ天才なんて噂はガセだったようだな。

「次で最後だな、お前名前は」

一人の少年がゆっくりと配置について言う。

「一年B組、桃原椿」

「…っ！」

“キャプテン、そいつの名前は？”

“名前は確か……桃原椿だったか”

桃原…椿…。

こ、こいつが…。

「よし、じゃあ始め」

合図と同時に桃原はドリブル。

それは素人でもわかるほど綺麗なドリブルだった。

「おお！ あいつ一瞬で先輩を抜いたぞ！」

一年生サイドがざわめきに包まれる。

無駄のない動き。

そしてあのテクニク。

「……そんなバカな…！」

天才といってもまだ一年生だろ！？　なのになんだあの實力は…！
体はまだできていないがボールタッチは俺より圧倒的に上じゃない
か…！

桃原はディフェンスを軽々と抜いた後、シュートも落ち着いて決めた。

その姿は坂上にとって嫌みにしか見えなかった。

「くっ…！」

あれほどの實力をどうやって身に付けたんだ…！

こっちは必死になってるっていうのになんでこんなに差が出るんだ
よ…！

「もつと練習するしかない…！」

俺の居場所を守るためにももつと練習を積んで上手くなるしかない

…！

「ようし、じゃあ一年生は向こうで別メニューするぞー」

キャプテンが一年生を引き連れグラウンドの隅へ。

「あ……」

そうか…。よく考えたら一年生はどんなに上手くても二年、三年の
サポートに回らなきゃならないから過去に一人もレギュラーになれ
たやつはいないんだ。

桃原が試合に出る頃には俺は引退してすれ違う。

別に俺に危機はないじゃないか。

まったく、無駄な心配だったぜ……。

実力テストが終了して一年生組が合流して人数が多くなったサッカー部は一軍であるAチーム、二軍のBチームに別れて練習を始めていた。

今まで一年生は必ずBチームからのスタートが当たり前だったのだが、特例として即戦力となる桃原椿はAチームに混ざることになった。

しかもそのAチームでも桃原椿の実力はトップレベルに達していた。

「……………」
奴は何の努力もせずただ才能だけでココにいる。
それが少し憎たらしかった。

試合に出られるのはAチーム。
Bは公式試合には決して出ることはない。

その中には今年で最後の三年生も何人かいた。
来年、再来年とチャンスがある一年生とは違う。

なのになんであいつらがAにいないくてこんな奴が…。
なんなんだよ特例って…。

「坂上…先輩ですよね？」
「っ！？」

いきなり後ろから声をかけられ身構える。
「えっと、俺のこと知ってます？」

「……………桃原椿だろ」
「はい、坂上先輩ってトップ下なんですよね？」

「……………それがなんだよ」
素っ気なく聞き返すと桃原が、

「あそこは誰にも譲らないですから」
「……………」

耳を貸す気などなかった。
「悪いですけどあなたには控えに回ってもらいます」

だがあまりの挑発的な言葉にイラッとする。
「あ、じゃあ一年生は集合かかってるんでこれで」

桃原は一礼して立ち去る。

その後ろ姿を俺は怒りに満ちた目で睨む。

「あのやろー…！！」

ふざけやがって…！！

“あなたには控えに回ってもらいます”

上等だあ…！！

その自惚れた自信を蹴落としてやる…！！

第55話 過ちの色

五月後半

今日はAチームとBチームで練習試合をすることが決まった。キャプテンの話だと大会が近いからそのためのレギュラー、控え、補欠を選び直す最終チェックのようなものをかねていているとのこと。つまりこの試合で俺か桃原か、たった一つしかないポジションに入るのはどちらか決まるというわけだ。

「絶対にあいっただけには負けねえ……」

“あなたには控えに回ってもらいます”

その台詞、そのまま返してやる……！

俺がこのチームの司令塔だ……！！

「Aチーム、集合」

軽くアップを済ませると監督がベンチにAチームのみを集合させる。勿論桃原もいた。

「えー、全員知つての通り一年生の中には即戦力になる人物が入ってきた。そして今までBチームにいた二年や三年も成長してきている。だから全員の力を今一度確認をしたい。そのための試合だ。良い結果が出せるように頑張ってくれ。まずスターティングメンバーを発表する。キーパー金沢、ディフェンス尾上……」

監督が淡々とメンバーを言っていく。

いずれ全員メンバー交代で試合には出れる。しかし名が呼ばれたのものは監督の信頼を受けているという証だ。

俺は一体思われているのか。

新しく入った桃原を監督はどう見ているか…。

「そしてトップ下、ここは……」

俺か、桃原か。

監督はどっちを…。

「桃原、お前からやってみろ」

「なっ…！？」

「はいっ」

「以上だ。それじゃレギュラーはフィールドに行け」

呼ばれた選手達はユニホームに着替えて各々ポジションに着く。

呼ばれなかった俺達はベンチスタート。

屈辱だった…。

「くそっ…」

まだだ。

まだあいつに負けたわけじゃない。

この試合で良いプレーをすればいいだけだ。

焦ることはない。

俺はこのチームの司令塔なんだ！

「前半終了」

審判はハーフタイムの笛を吹く。

選手達はまたベンチに集合した。

「メンバーはさっき出れなかった者全員を出す。ポジションは各自分かってるだろ」

……つまり俺は桃原と交代。

さっきのあいつはスーパープレーの連続だった…。

悔しいが桃原は予想以上にサッカーの才能がずば抜けている。

あいつがボールを持つと何をしてくれるんだろうという期待感を持つてしまう。

「でも俺だって負けてない…！」

チームの心臓として頑張つて来たんだ！

これから俺はここに居続けてやる！

「後半開始」

笛が鳴り、味方は早速俺にボールを預ける。

ここからどうゲームを組み立てていくか全員が注目しているはずだ。

「ふうー…」

落ち着け…。

結果を出すんだ…。

あいつに奪われないように監督の信頼をもつと得るんだ…。

その為には……結果を出すしかないんだ…！

俺は一人でドリブルを仕掛ける。

意表を突かれたBチームは二三人の突破を許してしまった。

「よし…！」

当たり前だがサッカーでは中央からゴールまで行くのが最短距離だ。しかしその分突破は至難の技となる。

すぐに坂上の前にディフェンスがゴールとの間に立ちはだかった。

「く、くそっ…！」

「坂上！！一人でいくな！！パス回せ、パスだ！！」

「ぐっ…！うるせー！」

こっちはお前らみたいに悠長にプレーしている余裕はないんだ……！！
アピールしなきゃダメなんだよ……！！

俺のポジションを守るためにも……！！

司令塔が誰か分からせるためにも……！！

坂上はその後何度も一人でドリブルをしに行くが、ゴールまで行かず結局相手にボールを渡してしまう。

この繰り返しに堪えられなくなった味方のディフェンスが坂上に当たる。

「おい坂上！ お前何でパス出さないんだよ！！ 味方呼んでんのわかんねえのか……！！」

「うるせー！ 邪魔するな……！！ 俺はあいつに勝たなきゃならないんだ……！！ お前らはただ走ってりゃいいんだよ……！！」

「こ、このやる……！！」

自己中心的な態度に血が上った仲間は俺の胸ぐらを掴む。

「やめる二人とも……！！」

しかし一騒動起きる前にベンチからキャプテンが走り寄る。

「キャプテン……」

「坂上」

「なんだよ……？」

「桃原のことを気にしているのか？」

「……」

当たっていたが顔きはしなかった。

それを察したキャプテンは小さなため息をつきながら言う。

「はあ……バカかお前は……」

「なっ……？」

「桃原がなんだ！ お前の持ち味は中央をドリブルするような自殺行為じゃない！ 糸を通すようなパスとファンタジックなテクニクだろ……！！ いちいち桃原を気にして自分を忘れるな……！！ 仲間を忘れるな……！！」

「……」

「今は桃原じゃない。お前が俺達の司令塔なんだ。しっかりしろよ」

……」
キャプテンは俺の胸に拳を軽く当てる。

「仲間を信じる。サッカーはそこから始まるんだろ」

「……………」

根本的なことを忘れていた。

サッカーはマラソン等とは違いチームプレー戦だ。

一人で戦っても十一人対一人、勝てるわけがない。

だから仲間がいるんだ。

そして信じた分だけ十一人は二十人分、三十人分の力が発揮できる。

「俺はどうかしてたんだな……………」

桃原桃原って…。

あいつに勝つことしか考えていなかった。

チームプレーで勝つことが何より大事だというのに。

「みんな……………すまん」

深々と頭を下げた。

申し訳ないと本気で感じながら…。

するとさっきまでキレていた味方が落ち着いた声で、

「……………もういいよ」

あっさりと言う。

「…え？」

俺は思わず顔をあげた。

「だからもういいって言うてんだよつ。ほら、さつさと“みんな”

で勝ちに行くぞ」

みんな……………。

「あ、ああ……………!!」

みんなの……………チームの心が初めて一つになる。

最後の夏の大会。俺はこいつらと一緒にサッカーをしたいと願った。

現代

坂上先輩の話聞いていたら俺はどこか懐かしい気持ちになったのと同時に大きな罪悪感に包まれた。

その理由はすぐにわかる…。

「あのあと監督はトップ下のポジションをずっと俺に任せてくれた。俺は桃原に勝ったんだ」

坂上先輩が小さく微笑む。

まるで今自分がその瞬間を噛みしめているように。

「凄く嬉しかった。ずっとこの幸せが続けばいいって思った……。でもそれは一瞬で壊れた」

「ど、どういうこと？」

こなたが聞くと坂上先輩の表情が急に険しくなった。

「こいつはレギュラーになれなかった腹いせに……。昼休みに俺を階段から突き落としたんだ!!」

「う、嘘だよそんなのっ！ 椿君がそんなことするわけない！」

「嘘じゃない!! こいつもそれは分かっているんだからな!!」

「そ、そんな…！」

「信じられないなら聞いてみる!! そこにいる本人に!!」

坂上先輩にあそこまで堂々と言われてこなたは動揺していた。

震える口で恐る恐る聞く。

「……………ホ、ホントなの？ 椿君…」

「……………ごめんこなた……、ホントなんだ……」

俺は坂上先輩を階段から突き落とした…。

その感触が今でも蘇ってくる。

「だが俺は皆にこいつがやったって言っても信じてもらえなかった

…！！ その時の孤独感がお前に分かるか！？」

孤独感……。

「……………昔は分からなかった。でも今なら分かる」

父さんと母さんを亡くして生きてきた俺なら……。

「嘘つけ！！ お前みたいな悪魔に分かるわけがない！！ そして何よりム力つくのが俺の居場所をあんなやり方で奪ったことだ！！」
確かにあの時の俺は悪魔だった…。

自分がレギュラーになるために何でもした…。

「冗談じゃないぜ…！ 才能があり優遇されながらも卑怯な手を平気で使い人を不幸へと陥れる！！ この最低ヤローが…！」

「で、でも椿君はもう変わった…！」

「それでもこいつが俺を突き落としたことに変わりはない…！」
分かっている…。

俺が悪いつていうことも……。

昔と変わっても許してもらえないのも……。

「俺が……どんな思いでサッカーをやってきたか……！！ あのポジションを守るためにどれだけ練習に練習を重ねてきたか……！！

みんなで全国行きたいってどれだけ願ったか……！！」

「……………」

ホントに俺は……最低だ……。

「桃原……！ お前だけは地獄の底まで落ちてもらうぞ……！！」

第56話 両親（前書き）

先に言っておきます。

今回は読者さんにとって文章がけっこうややこしくなってます……。質問あったら構わずに言ってください。

第56話 両親

「これで分かっただろ？ 俺の怒りが」

「……………」

もう何も考えられなかった。

恐怖だけしかそこに映っていない。

俺はなにをされても文句の言えない立場だということが今さら分かるなんて……。

「お前は俺の居場所を卑怯な手を使って奪ったんだ！」

なんてバカだったんだろう……。

俺は一人の努力を粉々に潰してしまった……。

「で、でも椿君は変わった……！」

こなたは涙ぐみながら叫ぶ。

「こなた……」

「確かに椿君がしたことは許されないけど、でも椿君はもう昔の椿君じゃない……！」

この訴えに桜場先輩が言う。

「それでもこいつのやったことは許されない。罰は受けなきゃダメなんだよ」

罰……。

その言葉にビクンと怖じけついでしまう。

「そついうことだ桃原。覚悟はできてんだろうな」

坂上先輩が拳を鳴らす。

もう俺には何も言う資格はない…。

間違いを起こした俺は……罰を受けなきゃならない。

「おらあっ！！」

「ぐっ……！」

坂上先輩のパンチが頬に。

あまりの威力に倒れ込む。

しかし坂上先輩は止むことなく次々に蹴りを繰り出してきた。

「お前のせいで俺は！！」

「……っ！！」

拳が腹にめり込んで胃の中のもの逆流しそうになった。

次いで坂上先輩の回し蹴りが腰に喰らい、そして左のストレートが顎に当たる。

ふらついた俺に容赦なく坂上先輩はトドメの拳を握った。

「死ねえええええ！！！！！！」

「ちっ、もう動かなくなっちゃった」

「っ、椿君……！」

「が……ぐ……」

苦しい……。

腹が……おかしくなりそうだ……。

それにもう……身体が……。

目がおかしくなったのか、それとも身体が限界まで来ているのか、床や壁が揺らいで見えた。

突然光が失われる。

坂上先輩が俺と光の間に割って入ったのだ。

坂上先輩はグイッと俺を掴んで言う。

「良い様だな。卑怯者」

「……………」

「クク…、なんだ喋れないくらいダメージ受けたのかよ」

そう言うのと坂上先輩は俺を投げ飛ばす。

「…っ！！ ゲホツ…ゲホツ…！」

痛みが身体を蝕んで堪えることが尋常じゃないくらい辛かった。

「この際だから教えといてやるよ。お前の両親のこと」

「な……………に…？」

り、両親だと…？

こいつは俺の両親のことなんか何も知らないはずだ…。

「お前の両親は死んだ。それはお前も知っているよな？」

「…？」

坂上先輩はいつたいなに言うつもりなんだ…？

全く推測がつかないまま話は進められる。

「だが死因は知らねえだろ？」

し、死因だと…？

「父さん達は…ゴホツ…、飛行機の墜落で死んだんじゃ……………」

「飛行機墜落？　んなわけあるかよ」

「…！？」

ひ、飛行機墜落事故で死んだんじゃない…！？

いったいどういうことだ…！？

「両親が死んだ日にお前はそのショックで気を失ったらしいがお前は

その時記憶をなくしたんだよ。両親が死んだという記憶をな」

「なっ…！？」

そ、そんなわけない…！

確かにあの時ことは全然覚えていないし両親の死因は自分で知った

んじゃないく親戚から教えてもらった…！

でもそれだけで記憶喪失なんて…！

「う、嘘を言うな！　だって親戚が俺の両親は飛行機墜落事故で死んだって言っていたぞ……！！」

「どうせお前は両親が飛行機事故で死んだと親戚が言ったからそれを真に受けて自分で確かめてないんだろ？　両親が飛行機に乗っていたことを親戚に言われるまで知らなかったんだ？　当然だ。お前は記憶喪失だったんだから。記憶があつたら飛行機事故で死んだなんて不思議に思うだろうからな。その日両親は自宅にいたんだから」「な、なんだよ！　それじゃまるで親戚が嘘ついてるみたいじゃないか……！」

「……ああ、そのとおりだ。お前の言うその飛行機墜落事故。それはな、お前の親戚が誤魔化してんだよ。死んでないって誤魔化し方もあつたんだろうが、さすがに何日も連絡がつかなかったらいずれバレる。そこでたまたま同じ時期にテレビで報道されていたから嘘ついたんだろ」

「う、嘘……！？」

そんなはずがない……！

現に俺のことを調べたと言っていた店長は　。

“ 四年前だろ？　両親が他界したのは…… ”

“ 両親が他界したのは…… ”

“ 他界したのは…… ”

「……ま、まさか……」

今思えば店長と話をしていた時、店長は一言も飛行機で死んだなんて言わなかった……。

あの時店長は真実を知っていたのに俺は勘違いしていたのか……！？　じゃあまさか坂上先輩が言っていることは……！

「い、いやでもなんで嘘なんかつく必要がある……！？　死んだこと

を言っただつたら真実のほうを言えばよかったじゃないか!!」

「ところがそうはいかない。お前知らないだろ? どれだけ冷酷でえげつない事件だったか」

「な、なに!?!」

「喉をナイフで切り裂かれて舌を斬られて、そして最後には目玉を串刺し。さすがにそういう死に方をしたっていうのが親戚も辛かったんだろうなあ」

「…………!!」

じゃあ…………親戚のみんなは俺を気遣ってくれたのか?!

残酷な死を言うより飛行機墜落事故って言った方が心が濁らなくていいように……

ニュースでも俺は飛行機墜落しか見ていない……

両親が死んだと信じたその事故しか興味がなかったから……

だが妙だ……

なぜ坂上先輩はこんなに知っている?

俺に親戚がいること……俺が記憶喪失になったこと……

詳しく話す坂上先輩に俺は問いかける。

「なんで…………さ、坂上先輩がそんなことを……?」

すると坂上先輩はとんでもないことを言い出した。

「なんで? そんなの決まってるだろ……。俺が知り合いに金払っ

て殺させたからさ」

第57話 憎しみの矛先

「今……なんて……？」

坂上先輩の言葉が理解できない俺はもう一度聞く。

「俺が大量の金を知り合いに渡して殺してもらったんだよ。まあそいつは最後にドジ踏んで事件起こした二日後に警察に追い詰められて自殺したけどな」

答えが変わることを祈った…。

今のは冗談だつて言ってくれるのを信じた…。

だが坂上先輩の言葉に変わりはないかった…。

「どうしてだよ……！！」

「ああ？」

「どうして父さんと母さんを殺したんだ……！ 俺を殺せばよかっただろうが……！！」

「はんっ！ お前も俺と同じ目に遭ってもらったんだよ」

「ふざけんなあ……！」

「てめえだけにはなあ！ 居場所がなくなる辛さつてのを味わってもらったために殺したんだよ……！」

「……っ……！」

たった……、たったそれだけのために父さんと母さんは……。

“ 凄いいじゃないか椿 ”

父さん……！

“ おかえり、椿 ”

母さん……！！

「 ひ、酷い！ 椿君の両親を殺すなんて……！ 」

こなたが坂上に向かって言うが、

「 女は黙ってる……！ 」

桜場がそれを制した。

「 桃原、よかったじゃねえか。 真実を知ることができて。 ちゃんと感謝しろよ 」

「 …………… 」

父さんと母さんは他殺だった……。

事故じゃなかったんだ……。

そして実際に殺した奴は自殺……。

じゃあ俺は誰を恨めばいい……。

この憎しみの矛を誰に向ければいい……。

「 …………… そんなの決まってる 」

それは坂上……！ あんただ……！

「 よし、桜場。 ちゃっちゃんとやらなきゃならないことするか 」

坂上がグツと背伸びをする。

その時こなたのそばにいた桜場が叫んだ。

「 つ……！ 坂上……！ 後ろ……！ 」

「 ああ？ ぐあっ……！ 」

大きな図体が宙を舞う。

俺の飛び蹴りが綺麗に決まったのだ。

「 て、てめえ……！ 」

桜場が殴りにかかるうとすると、

「待て桜場!!」

坂上が待ったをかける。

「こいつは……俺がやる!」

そう言うと同時に坂上は思いきり飛び蹴りをかます。

俺はそれを受け流したのと同時に着地を狙う。

「はあああつ!!」

「うおおおつ!!」

両者のノーガードによる殴り合いが始まった。

殴る拳が痛くなっても、殴られる顔が痛くなっても止まらない打ち合い。

だが向こうのほうが背も力も上だ。

こちらに分がないと思った俺は蹴りをど真ん中に入れる。

パンチ力は自信がないが蹴りのほうには些か自信があった。

まともに蹴りを喰らった坂上だが、怯みはしなかった。

「うおおおおおつ!!」

坂上は蹴りに使った俺の足を掴んで動きを封じ、渾身の正拳を放つ。

「ぐふうっ……!!!!」

破壊力は今までのパンチとは別格だった。

俺は意識が飛びそうになるが、辛うじて堪える。

だがそこからさらに回し蹴りが俺を襲う。

「ぎっ……!! だあああああ!!」

負けじとこちらもまた蹴り返すが簡単にガードされてしまう。

そして坂上の左からのストレート。

俺はそれを流して即座にカウンターをする。

しかしそのカウンターが届く前に膝蹴りをもろに喰らってしまった。

「あ……がっ……!!」

「死ね!!」

怯んだ俺をチャンスと見て坂上は踵落としを脳天に繰り出した。

「椿君!!」

「……………」

こなたの叫びがとても遠く聞こえる。

力が入らない…。

やっぱり無理なんだ…。

俺がいくら本気になろうと坂上には勝てない…。

両親がコイツラに殺されたって知っても俺は敵討ちもできない…。

だけど……！！

「う……ぐ……」

「まだ立つのか、この死に損ないがぁー！！」

鋭い蹴りが俺の身体を打ち砕く。

ぶつ飛んだ俺は壁に背中を強く打つ。

痛みが響いて全身が死んだ感覚に包まれる。

それでも俺は立った…。

「なっ！？ こいつまだ……！？」

「……………」

身体が重い…。

血で前が見えない…。

それでも俺は……。

「このクソヤロー！ いい加減にいいー」

坂上からまたあの正拳が放たれた。

立つだけで動けない俺はただ受けるしかなかった。

鈍い音が俺の身体に危険の警鐘を鳴らす。

踏ん張りが効かない足はついに跪いてしまう。

だけど……。

「それでも俺は……！！」

血だらけになりながらも真っ直ぐ坂上に向き合う。

「立たなきゃならないんだよ……！！ 母さんと父さんを殺したこ

いつだけは許せないから……！！」

「だったら……！！」

坂上は大きく構える。

「これで終わらせてやるよ……！！」

風を切る勢いで向かってくる。

そんな時俺は夏に坂上とプールで会ったことを思い出す。

“ ケンカが強かったらビビることなんかないのに ”

俺はあの時勘違いをしていた…。

ビビっていたのは俺に力が足りないからじゃない。

「 桃原ああああーっ！！！！！ 」

こいつと立ち向かう勇気が欠けていたんだ！！

「 うわああああああーっ！！！ 」

第58話 復讐の叫び

「椿君!!」

「坂上!!」

……声が聞こえる。

こなたと……桜場の声……。

身体が動かない……。

どうなったんだ……。

坂上は……?

「ぐ……う……!」

坂上の声……。

そうだ……俺は坂上と相打ちになって……。

くそっ……あいつまだ動けるのか……。

ここで逃がしちゃダメだ……。

こいつだけは……。

カランカラン

「……?」

足に何かが当たった……。

見れば先の尖った鉄の棒だった。

これがあれば……両親の敵を……!

「……っ」

くそっ……身体中がギシギシと軋む……! けど振り絞るんだ……!

最後の力を…！

鉄の棒を片手に取りうつ伏せに倒れている坂上に近づく。

坂上の息は大きく乱れていた。

それほど体力を失っているということだが、それはお互い様だ…。だからこそ…こいつを殺すチャンスは今しかない…！

「よくも父さんと母さんを…！！」

「こ、こいつまだ…！？」

俺に気づいた坂上は少しでも遠くへ逃げようと試みる。

だがそんなことさせるわけがない。

俺は坂上の背中を踏みつける。

「殺すんだ…。殺すんだ…！ 殺すんだ…！！」

ここで…！！ この悪魔を…！！ 両親を殺した悪魔を…！！

「殺さなきゃ…だめなんだああああああああー！！
ーっっ！！！！」

振りかざされた鉄棒は坂上の頭を貫こうとしたその時、

「だめえ！！！！」

「…っ！？」

誰かが俺に体当たりをしてくる。

だがそのぶつかった身体と衝撃は小さいもので簡単に予測できた。

「こ、こなた…！？」

「椿君が殺しちゃ…ダメだよ！」

「の、退けよこなた！ こいつを殺せないだろ…！」

「退かない！！」

「こなたっ！！！！」

「絶対に退かない！！！！」

何度言ってもこなたは坂上と俺の間に割って入ってくる。

「どうして……！！ どうして邪魔をするんだあ……！！」

「椿君のその手は…… 人を殺めるためにあるんじゃない……！！」

「坂上は……！！ 俺の両親を殺したんだぞ……！！ 俺の大事な家族を

…… あいつは……！！」

「それでも……！！ 椿君は人殺しになっちゃだめ……！！」

「こいつには死ななきゃならない理由があるんだよ……！！」

「でも椿君の両親はそんなこと望んでない……！！ 椿君のそんな姿
きつと見たくない……！！」

「うるさいっ……！！ 俺はこいつを殺すんだ……！！」

「目を醒まして……！！ 一度“そっち”に行ったら……椿君はもう二
度と戻れない……！！ この人を殺しても椿君は幸せになれない！
！ 殺してしまったら……！！ 椿君は二度と本当の幸せを掴むこと
ができない……！！」

「それでもいいんだよ……！！ どのみち家族を失ったあの時から俺に
幸せなんてないんだよ……！！ だから……」

「まだ私達がいるっ……！！……！！」

「なっ……！！？」

ポロリとこなたの涙が落ちる。

「お前……… なんで泣いて……！！？」

「お願いだから……… 椿君はそんなことしないで………！！ 椿君はこの
手でゆうちゃんやかさ、かがみを救ってきた………！！ 私も椿君に救
われた………！！ 他のみんなも………！！ だから……… そんな椿君の手を……… 血
の色に染めないで………！！」

「………」

「お願い……… だから………！！」

俺は……… 間違っているのか………？

両親を殺した奴が目の前にいるのに………。

父さんと母さんを奪った奴が……… そこにいるのに………！！

一振りすれば終わる………！！

でも同時にこの手は憎しみに染まる………！！

だがしょうがないだろ…！

こいつが両親を殺したんだから…！！

だから俺はこいつを……！ 坂上を殺さなきゃならない……！ ならないのに……！

「……なんでこんなに手が震えるんだよ……！！」

早く殺せよ……！！

じゃなきゃ逃げられちゃうじゃねえか……！！

「くそっ！！ なんて最後の一振りができないんだよおおおお
ーっ！！」

こんなこと望んでないのに！

こんな結果は望んでないのに！

「椿君……」

こなたは優しい温もりで俺を抱きしめた。

「く、くそがあ……！」

倒れていた坂上はフラフラと覚束無い足取りで出口に向かう。

そこにはさっきまでこなたを拘束していた桜場がいた。

そしてもう一人……。

「……？」

陵桜の制服……？

なんでこんなところに……。

「はあっ……はあっ……こ、これで終わると思うなよ……！ お前の最後の居場所をぶち壊してやるからな……！」

坂上をそれを捨て台詞とし、桜場に肩を借りる形でこの場から去っていった……。

「私達も…帰ろう…？」

こなたが手を差しのべる。

両手を縛っていた紐はどうやら自分でほどいたらしい…。

「殺せなかった……」

「うん……」

「両親を殺した奴なのに……」

「……椿君は道を外しちゃダメなんだよ……」

「……」

「みんなが泣くよ…？ 特に由佳ちゃん…」

由佳…。

そういえば由佳も知ってるだよな…。

俺の両親が殺されたこと…。

いや……中学の知り合い全員が知っているのか…。

ニュースでやってたみたいだし…。

「……俺は……なにやってんだろ……」

さっきまで俺を支配していた殺気が少しずつ身体から抜けていく。

俺は坂上を殺そうとした…。

我を忘れるくらい恨んだ…。

だが今は憎しみじゃなく別の気持ちが大きかった。

これがなんなのかわからない…。

悲しさなのか…、悔しさなのか…。

とにかく涙が溢れ出てきた。

「と…うさん……かあ…さん……！！」

俺のせいで死んだ…！！

俺が坂上を階段から突き落としたから…！！

「俺のせいで父さんと母さんは……！！」

「大丈夫だよ……椿君……」

「俺の……せいで……！！」

「大丈夫……大丈夫……」

こなたはそれだけしか言わなかったが、その言葉がとても優しくかった…。

柔らかい顔で俺を抱きしめてくれた…。

そんなこなたに俺は甘える。

「う、うああああああああああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

なりふり構わず泣いた…。

その場で……こなたにしがみついて……。

どうしようもないくらいずっと泣き叫んだ……。

近くのベンチに座り込んだ坂上は相当息を切らしていた。

「おい大丈夫かよ坂上」

桜場が心配して手をかけようとするが坂上はそれを払い除ける。

「う、るせー…。それより桜場…ちゃんと撮っただろうなあ………」

「もちろんこのとおり。二人が喧嘩してるとこ、特に桃原が殴りに行つてるとこは完璧に写真に残したぜ。」

「陵桜の生徒は…?」

「ここに」

桜場の後ろには陵桜の生徒が一人ビクついていた。

「…おいお前」

「は、はい…」

「この写真を明日学校に提出しろ…。それでこう言え」

坂上は陵桜の生徒にゴニョゴニョと小さな声で言う。

「いいな…。もし言う通りにしなかったら……」

坂上は横に置いてあった空き缶をグシャリと潰す。

「どうなるか分かってんだろうなあ……？」

「は、はいっ!!」

ククク……、これで完璧だ…。

大人しく卒業できると思うなよ…桃原……。

俺はお前を絶対に地獄に落としてやるからな……。

第59話 闇に染まる夢

翌日、俺は学校へ行く前に父さんと母さんの墓へ来ていた。

「父さん……母さん……二人は飛行機事故で亡くなったんじゃないかな……」

俺知らなかった……。

二人があんな酷い殺され方されたのなんて……。

昨日の晩、俺は両親のことについて親戚に電話をした。

二人は本当は殺されたんだろって聞いたしたら泣きながら

「そうだよ……」って言った。

そして親戚は殺害が休みの日に俺が部活に行っている途中で行われたことも、俺が帰ってきたら二人は殺されていてその時のショックで記憶をなくしたことも、その記憶喪失を利用して嘘の死に方を俺に教えたことも、それが俺のためだということもちゃんと話してくれた。

思い出したくない過去を伝えるために……。

だけど今俺は精神が壊れるほど心は狂ってはいなかった。

むしろいつもより落ち着いているくらいだ。

多分両親が死んでいることに変わりはないから。ただ死に方が変わったただだからだと思う。

二人を殺した奴も殺してはいないけど俺がぶっ飛ばした……。

「ホントは殺してやりたかった……。道を外してもいいからこの手で坂上を葬り去りたかった……。でも二人とも自分の敵討ちをしてほしいなんて思ってないって昨日こなたに言われてさ……。ああ……確かにそうだよなって思った。多分父さんや母さんだったらそんな

復讐するために悪魔に魂を売った息子よりも、友達と幸せそうに笑っている息子を眺めている方がいいんだって……」

その一秒一秒が長く感じた。

それがとても優しい気持ちにさせてくれる。

今こうして両親と俺、家族三人が揃っているからだろうか……。

「……あ、そろそろ学校に行かなきゃ」

俺は鞆を持ってゆつくりと立ち上がる。

「俺が死んだら天国で会いたいな……」

それでまた三人で一緒にご飯でも食べに行こ……。

いいよね……父さん……母さん……。

学校へ行く途中にこなたとゆたかに会った。

こなたは昨日遅く帰ったことをこっぴどく叱られたらしい。

だが俺のせいだというのに全く気にしてないとほんわり顔で言ってくれた。

ホントこなたには世話になりっぱなしだな。

「こなた、卒業した後パフェでも奢ってやるよ」

「い、いきなりどしたの椿君？　昨日殴られ過ぎて頭おかしくなっちゃったの？」

なんたる言われようだ…。

俺という人物はこなたの中ではそこまで冷たい人間っていう設定になっっているのか…。

「お礼だよ、お礼。お前には世話になってばっかだったからさ。ゆたかもパフェ好きだろ？」

「あ、うん…、それよりその…椿君」

「ん？」

「だ、大丈夫？」

「……何が？」

妙にゆたかが探りを入れるように心配することに疑問を抱く。

「だからその……怒ったりはしてない？」

怒ったりって……。

俺はこなたをチラッと見ると小さく頷かれた。

「…ああ、そういうことか」

そういえば昨日こなたが俺に起きたこと皆に伝えておくねってメルが来たつけ。

確かに皆にも泊まりに来ていた時に誤解を招いたからもんな…。

「大丈夫だって。俺はもうあんなバカなこととはしないよ」

ゆたかの頭を撫でながら言う。

「そ、そっか。よかった」

それを聞いたゆたかは可愛い笑みを見せて安堵した。

ああ…ロリって最高………じゃなかった！

何を考えているんだ俺は！由佳に殺されちまうじゃないか！

深呼吸を一二回していると前方からかがみさんとかさを見かける。向こうも俺達に気づいたらしく走ってこっちまで駆け寄った。

「おはよ、こなた、ゆたかちゃん、それから椿君」

いつもみたいに挨拶をしてくれるかがみさん。

それが不思議と嬉しかった。

「おはよ…」

つかさも相変わらず眠たそうだ。

せつかくなので五人一緒に登校する。

しかしかがみさんはチラチラと俺を盗み見していた。

おそらく昨日のことを心配しているんだろう。

顔も傷だらけだし包帯してるし仕方ないか…。

けどかがみさんのことだから気を遣ってくれてあえて聞かないでい

るんだろっな。

「あ、そうだ。卒業したらさ、かがさんとつかさも俺の奢りでパフェ食べに行かない？ あの駅前にあるジャンボパフェ……ってあれ？」

あの、かがみさん……？ どうしてそんな怖い目で俺を睨むの……？

「椿君……それはダイエット中の私に対する挑戦状？」

「えっ……！」

ま、まだダイエットしていたのかこの子は！

「いい度胸してるじゃないの……」

「い、いや別にそういうわけじゃ……！」

必死に否定するとかかがみさんはコロリと表情を変えて、

「なーんてね、冗談よ。ありがたくいただくわ」

「そしてかがみはブクブクと太っていったとさ」

「……………」

あ、こなたの一言でまた顔が険しくなった……。

「ん？ なんだろあれ」

ゆたかが校門前を差して言う。

そこに普段いない生徒指導の先生が四人いた。

「な、なんかの取り締まりしてるのかな……？」

つかさが怯えながら言つとその姉は、

「ま、私達には関係ないでしょ」

と、正反対の気持ちで向かう。

だがそれはたつた一言で碎かれた……。

「おい、桃原椿。ちょっと来い」

「え？」

急に呼び出されたかと思うと他の先生三人が俺を囲む。

「なっ……！？ なんだよこれ……！」

「そ、そうですよ！ いきなり椿君に何を……！」

「うるさい……！ いいから黙って来い……！」

強引に俺の右腕が引つ張られる。

後ろを向くとこなたたちが不安な顔で見ている。

連れてこられたのは生徒指導室。

ここでは問題児がよく出入りする場所だ。

「さあ入れ！」

「……………」

黙って指示に従って扉を開ける。

そこには担任の黒井先生、そして校長がいた。

黒井先生はなぜか光のない目をしていた。

「桃原椿君ですね？」

「……………はい」

初めてだな……。校長に名前言われたのなんて……。

「何故君がここに呼ばれたか知っていますか？」

「……………いえ」

そう答えると校長は一人の生徒を奥から呼んだ。

そしてその生徒はとんでもない物を机の上に出した。

「っ！？」

「この写真に写っているのは君ですね？」

校長が差す数枚の写真。

それは俺と坂上が殴り合いをしているときの写真だった。

しかも俺が殴っている場面しか撮られていなかった。

「ち、ちよつと待ってください……！」

まさかあの時誰かが居合わせたというのか……！？

俺は一度話を止めようとしたが校長は構わずに述べる。

「君は前も喧嘩して停学になりました。そして今回二度目の喧嘩。これは本校側としては見逃す訳にはいきません。よって相応の処分を受けてもらいます」

「そ、相応の処分？」

「はい」

話についていけない俺に校長は睨み付けるような目を向けた。

「桃原椿、君を退学処分とします」

第60話 日だまりみたいな日常は夢のように消えていく

「た、退学だと!？」

「ええそうです。退学です」

校長は面と向かって残酷な決断をサラリと言い切った。その顔に迷いなど感情は見られない。

ただ決められた台詞を言うようなものだった。

「そ、そんな……!」

退学……!?

ここまで来て退学なんて……!!

「言い訳は聞かんど。ここに喧嘩をしたという証拠があるんだからな。そしてその傷だらけの顔では言い逃れできない」

生徒指導の一人が写真突き出す。

坂上を殴る自分の写真。

その顔は鬼のような殺意に満ちた顔をしていた。

確かに俺が坂上を殴ったのは事実だ…。

でもあの時は仕方がなかった。

父さんと母さんがあんな殺され方を…、しかもそれを指示したのが坂上だつて知ったんだから…。

まさかその時写真を撮られているなんて……。

「写真……?」

俺はそれを見て気づく。

「そ、そうだ、おいお前! この写真撮ってたんなら知ってたんだろ

！？　ここで何があったのか！　坂上が俺に何をしたか！」

「……………」

「答えてくれ！」

少々怒鳴り気味に言うത്そいつは僅かに口を開いて喋る。

「こ、この人が……………」

よし、そうだ…！　言ってくれ…！

「か、身体の高い人を一方的に殴ってました……………」

「なっ…！？」

俺が想定していたことと全く当てはまらなかった。

俺はこの時偽りの答えを言ったそいつもグルだつてことによつやく
気づく。

ああ…そうか…………。俺の周りにはもう敵だらけなんだな…………。

「決まりだな。何か言いたいことは？」

校長がこれが最後だというような口調で尋ねてくる。

反論してもきつと聞いてはくれない…。

言いたいことはたくさんあつても言うことができなかった…………。

「何もないようだな。では黒井先生、後は任せましたぞ」

俺は力なく指導室を出た。

その後ろには黒井先生が付きそっている。

「黒井先生……………」

「なんや…………？」

「ホントなんですか…？　俺を退学つて……………」

「……………」

黙る黒井先生に俺は力ツとなる。

「なんとか言ってくださいよ……！！ 黒井先生！！」

すぐるように黒井先生に言った。

すると黒井先生は直視せずに俯いたまま答える。

「…… ああ、退学や」

「そんな……！！ だってもうすぐ卒業なんですよ！？」

「桃原……」

「それなのになんでこんなところで退学ならなきゃならないんですか！？」

「桃原……！！」

「俺は認めないぞ……！ 絶対にみんなと卒業してやる……！ 誰がなんて言おうと俺は！」

「桃原っ……！！」

「……っ……！！」

叱られるように名前を呼ばれて驚いてしまう。

一瞬場は静まり返り沈黙と化した。

そんな中、黒井先生は声を歪ませながらも言う。

「…… もう決まってもたんや……！！ あんたは……退学なんや……！！」

「……」

「……」

苦しそうな声だった。

まるで自分のことのように辛そうに聞こえてくる。

黒井先生は力が抜けたように膝をつく。

そして決して見ない黒井先生の涙が流れているのを目の当たりにした。

「すまん……！！ ウチはあんたを守れんかった……！！ 担任やのに退学防げんかった……！！」

「く、黒井先生……」

「何度も言ったんや……！！ 桃原はこんなことせえへんって……！！ 何かの間違いやって……！！ でも聞いてもらえへんかった……！！ どうしようもなかったんや……！！」

「……………くそおおっ！！」

まだ味方はいた。

それは嬉しいことだ。

だけど俺はもうここに居ることは許されない。

その現実が俺を苦しめた。

「夢だったのに……！！ みんなと今を最高に笑うことが俺の夢だったのに……！！」

最後の最後になんで退学なんだよ……！！

こんなの酷すぎる……！！

「……………理事長も校長も他の先生もほとんどが賛成側におる……。どないすることもできへん……」

嫌だ……！！

“こなた、卒業したあとにパフェでも奢ってやるよ”

俺はまだここにいたい……！！

“い、いきなりどしたの椿君？”

退学したくない……！！

“かがみさんとつかさも俺の奢りでパフェ食べに行かない？”

俺は……！！

“椿君……それはダイエット中の私に対する挑戦状？”

最後まであいつらと笑っていたのに……！！

「そう願うのは……そんなに贅沢なことなのかよおおおーっ
！！！！」

「椿君遅いねー」

こなたは机の上に座り足をぶらぶらさせる。

「そうですね。それに黒井先生も朝のホームルームの時間ですのに
まだ来ていませんし……」

「どうしちゃったんだろうね……」

みゆき、つかさも不安な表情になる。

「もしかして……」

昨日のことが知られて処分を受けているのかもとこなたの頭に浮かぶ。

いや……まさか椿君に限ってそんな……。

いつもしぶといくらい私達は一緒にいた。

だから今回も何事も起きずに一緒にいられるよね……？

結局黒井先生と椿が来ないままチャイムが鳴る。

その時、B組の一人の男の子が慌てて教室に入ってくる。

「大変だっ！！ 桃原退学になるかもしれない……！！」

荒々しい声が廊下にまで響き渡る。

当然こなたたちにも聞こえていた。

「……え？」

「さっき生徒指導室の前で黒井先生と桃原が話してた……！！」
この言葉でこなたの感情がクリアになる。

たいがく……？

椿君が……？

そんなのあり得ないよ…。

だって今まで一緒にいたじゃん…。

卒業まであと一週間なのに退学なんてないない……。

ざわざわとクラスが落ち着かない状況の中、C組からかがみがやってくる。

先程の声が聞こえたのだろう。

「ち、ちよつと！ それってホントなの！？」

「あ、ああ、間違いない。この耳で聞いたんだ。桃原は退学って」

「そんな……！！」

かがみはペタンと腰を抜かす。

「椿君が退学……！！ 椿君が……！！」

「お姉ちゃん！」

「かがみさん！」

つかさとみゆきが泣き崩れるかがみに近寄る。

つかさとみゆきも泣いていた。

その様子を眺めていたこなたはようやく脳が働き始める。

「つ、椿君がホントに退学する……？」

う、嘘でしょ……？

だって今朝は一緒に登校したのに……。

卒業したらパフェ奢るって言ってくれたのに……！

「……ん？ ねえあれって……」

女子生徒がふと窓際に視線を移すと校舎から校門に向かう生徒を一人見つける。

「あ……」

椿君…。

もう何度も見た後ろ姿だった。

そしてその姿が去ろうとする光景にこなたはとんでもない程の寒気を覚える。

「っ、椿君っ！！！！」

思わず叫ぶ。

あのまま行かせたら二度と会えない気がしたからだ。
距離はあるが十分届くボリュームだった。
クルリと椿は反転して自分のクラスを見つめる。

「椿君……！」

ここからでもはつきり見えた。

椿君の目が。

椿君の指が。

椿君の鼻が。

ジッ見つめていた椿君の口が開いた。

何か言っている……。

常人では分からないがこなたにだけははつきりと聞こえていた。

ごめん、みんな ……と。

「なに……？ ごめん……って……」

なんで謝るの……？ 私には分かんないよ……。

椿はそれだけを言ってまた校門へ歩く。

「っ！！ 行かないで椿君！！ 椿君っ！！！！！！」

応答はない。

それでもこなたは叫び続ける。

「お願いだから何処にも行かないでよぉ……！！」

椿を止めるためにも。

「嫌だよ退学なんて……！！」

椿と一緒にいるためにも。

「こんな……別れ方なんて……！！」

しかし椿の足は進んでいく。

まるであの校門が自分の高校生活のゴールだと言っかのよう。

「待ってよぉ……！！」

一歩…。

「ねえ…椿君っ…!!」

また一歩とこなたから離れていく…。

「椿君つてばあああああああつ!!!!!!」

必死に喉を枯らしながらも呼び掛ける。

しかし椿は振り返ることはなくそのまま視界から消えた……。

第61話 明日への歩き方

「…っ!!」

椿が校門を抜けたのを合図にこなたは弾けるように教室を飛び出す。

「こ、こなた!？」

かがみは小さな背中を向けた少女を呼ぶ。

「止めなきゃ!! 椿君を止めなきゃ!!」

そう言い残して持ち前の運動神経を活かし一気に廊下を駆け抜ける。

「わ、私も行く!!」

かがみも自分の力で立ち上がりこなたを追いかける。

「ゆきちゃん! 私達も行こ!」

「は、はいっ!」

次に天然娘のつかさと委員長のみゆきが走り抜けた。隣のクラス、C組ではそれに続こうとする者が二人。

「……あやのっ」

「分かってるよみさちゃん。私達も行くんでしょ?」

あやのは準備万端と言うかのようにすでに席を立っていた。

「さすがあやのっ! んじゃ椿を止めに行くぜ!」

「うんっ!」

「…ゆたか、今の声って……」

「……お、お姉ちゃんだ……！ それに……！」

椿君が退学……！？

なんでそんなことになったの……！？

混乱しているとみなみが冷静な口振りでゆたかに告げる。

「…ゆたか、私達も行こう」

「え？」

「…私達は自分のできることをしなきゃ」

自分のできること……。

それは椿君をよく知っているからできること……。

「さ、ゆたか」

「………うんっ」

椅子から腰を上げて教室を出る。

そのまま二人は下駄箱まで行こうとすると一時間目の先生が呼び止める。

「こ、こらっ、小早川と岩崎！ 授業始まっとするのにどこに行くんだ！」

「すいません、気分が悪いので保健室に行つてきます！」

「う、嘘つけ！ そんな元気に言つても説得力ないわ！」

しかし次に時計の秒数針が動いた時、二人の生徒が先生の横を通り抜けた。

「た、田村！？ パトリシアもどこに……！？」

「あ、先生、私達も気分悪いツスから保健室に！」

「そういうコトネ！」

それだけを言つて二人はさつさとこの場から消える。

「なっ！？ ち、ちよつと待てえー！！」

先生が四人にストップを掛けてもその程度では止まらなかった。

「……………なにやってんだろ……………」

卒業間近に退学なんて……………きっと父さんと母さん怒ってるんだろうな……。これからどうしたらいいんだ……。

働くか……？ でもどこに……？

いや……でも親戚の会社にコネで入るっていう手もあるよなあ……………こんなことを考えていると改めて実感してくる。

「俺……………ホントに学校辞めさせられたんだ……………」
もう通えない母校……。

そこで俺はたくさんの友達ができた。

たくさん強い絆が生まれた。

そして……………たくさんの幸せを見つけた。

だからこそ陵桜学園をちゃんと卒業したかった。

その大切な幸せと一緒に……………
だけ……………。

“ 桃原椿、君を退学処分とする ”

「くそつ……………」

なんて情けないんだ……………！ これじゃ由佳に会わせる顔がない……………！

「いたっ！ 椿君ーっ……………」

「……………えっ……………」

こ、こなた……………！？ なんでここに……………！

河川敷の向こうから一人の女の子がものすごいスピードで走ってくる。

その後ろには複数の影があった。

「椿君ー！」

「ツバキー！！」

かがみさん……！！ それにパティ達も……！！
なんで……なんで来るんだよ……！！？

「ハアハアツ、つ、椿君……！」

「……っ！！ こつちに来るなああーっ！！」

足音が近づいて来たら俺は怒声を空に向けて放った。

「……っ、椿先輩！？」

ひよりは驚いて動きを止める。

「頼むから今は来ないでくれ……！！」

ひよりだけじゃない。他のみんなも困惑の表情を浮かべていた。

「こんな情けない姿…… お前らに見せたくないんだよ……！！」

退学になり、どうすることもできない無力な自分。

そんな惨めな姿を晒したくない。

「頼むから……俺を一人にさせてくれ……」

だから最後くらいは強がらせろよ……。

「……情けなくなんかないよ！」

……え？

「情けなくなんかない！ だって椿君は私が記憶を奪われた時、優しくしてくれたじゃない！」

“俺ってお人好しだから……”

「ゆうちゃんを助けた時も！」

“ゆたかにもあるよ、いいところ”

「つかさがいじめられてた時も！」

“お前ら！　つかさがどんな気持ちでいるのか！　わかってんのかよ！”

「かがみがダイエットしてた時も！」

“憧れているから頑張ってるかがみさんを止めるなんておかしいだろ”

「椿君はいつもそばにいた……！　いつも私達を助けてくれた……！　でも今度は私達の番だから……！　私達が椿君を助ける番だから……！！！」

「こなた……」

「だからお願い……！　一人で泣かないで……！　私達にも恩返しさせてよバカーッ……！」

「……………」

こなたの思いはわかった。

だけど現実と理想は違う……。

「お前らに何ができるんだよ……………」

こなた達も結局は何もできない無力な人間。
俺とそう変わりはない。

だからもうできることなんてないんだよ……。

「えと……それは……………」

こなたが案に困っていると八重歯娘のみさおが助け船を出す。

「そんなの決まってるんだろ！ 椿をもう一度陵桜の生徒にすりゃいいだけの話じゃねえかっ」

みさおはこれしかない判断したのか、自信満々に言う。

「…それってつまり……」

「退学を取り消してもらってことですな」

あやのさんが考えているとみゆきさんがみさおの言ったことを簡単に発言した。

「そんなの無理に決まってる……」

退学の取り消しなんて聞いたことがない…。

それにこの処分の決定にはほとんど先生が賛成している。

黒井先生やみんながいくら頑張っても不可能だ…。

「……それでも私達は諦めません。絶対に」

みなみちゃん……。

彼女がここまでハッキリと言うことはあまりなかった…。

俺が見てきた限りではちよっと口下手で思っていることは心の中に閉まっておくタイプだから……。

それだけに今のみなみちゃんに俺は驚かずにいらなかった。

「椿君、みんなはやる気満々だよ」

つかさは両手に拳を作ってそれを胸の前に出して気合いをいれる。

「あとは椿先輩の気持ちだけッス……」

「俺の気持ち……？」

「そうよ」

かがみさんが一歩前に出る。

そしてもう一歩。

だんだん近づいて来た。

そして俺との間を一メートル程の距離を取る。

人は普段他人とこれだけの距離を置いて生きている。

手を伸ばせばすぐに届く距離。

だがお互いに興味がないのか、それとも意識しているが勇気が出な

いのか、他方が手を伸ばさなければ一メートルが埋まることは難しい。

そして今、かがみさんはスツと右手を握手する形で伸ばしている。道から外れた俺に向けて。

「この手を握れば私達は本気で椿君の退学を取り消してもらおう」

「……………」

こいつらには危険なことはしてほしくなかった。

もし夢中になりすぎて先生達に食って掛かったらそれなりの処分が待っている。

このまま現実的に望ましいのはみんながこのまま無事に卒業すること。

「…………この手を…………握らなかったら？」

「さあ？」

かがみさんはニツコリと笑う。

それはとても強気で…………でもどこか辛そうな笑顔だった…………。

「けどもし握らないのらこれだけは言えるわ」

「…………え？」

「椿君にとって私達と卒業できないことはどうでもいいことだったって…………」

「……………」

握れば僅かな確率で退学が取り消せるかもしれない。

握らなかつたら多分かがみさん達とは二度と笑う日は来ない。だが逆を言えば握ればみんなを巻き込んでしまう。

握らなかつたら無事に卒業させることができる。

「何も考えなくていいの。椿君の本当の気持ちを教えて？」

本当の…………気持ち…………。

「俺……………」

もう願ってはいけないことだと思っていた…………。

叶うことは絶対にないってわかっているから…………。

でも…………もしその願いがまだ叶う可能性があるなら俺は……………！

「皆と…卒業したい……！」

俺はしっかりと差し出された手を握った。

みんなと一緒に卒業するまで離れないようにと想いを込めて……。

第62話 ヘタレ

一人家に帰った俺は自分の部屋に行きベッドにパタリ。
とりあえず今は何をすればいいかわからなかった…。

ここ最近いろんなことがありすぎたせいだからかな…、頭がうまく働かないや…。

「あ、そうだ」

これまでのこと由佳に全部話さなきゃ…。

電話帳から由佳を引き出し発信する。

コールが一回終わった頃に、

「もしもし」

「あ、由佳…？ あのだ、ちょっと話があんだけど……」

「話？」

これまでのことを全部話すのは難しかったが主体を分かりやすく絞ったから大方話は伝わったと思う。

坂上をケガさせたこと、俺が退学になったことを聞いて由佳は驚いていたが、何より由佳がビックリしていたのは坂上が俺の両親を殺

せと頼んだことだった。

「そっか、あの坂上先輩とそんなことが……」

「ああ……」

由佳は中学時代、一年からサッカー部マネージャーとして近くにいたから坂上のことは知っていた。

「……それでさ、由佳」

「やだ」

ええ……。

「まだ何にも言っていないのに……」

「わかるよ、椿っちが言おうとしてること。“別れよう”でしょ」

「……うん」

由佳は見事に的中させた。

「椿っちって単純だから“こんな情けない自分と付き合ってる由佳が可哀想”とか“高校を辞めて安定してない自分といても幸せにはできない”とかそう思ってるのはバレバレだよ」

「うつ……」

まさかそこまで見透しているのか……。

てか俺の声真似して言うなっ。

「だったら話は早いな。由佳、別れよう……」

「だからいやだってば」

「……だからなんでだよ」

もうこんな男といたらこの先ろくなことになるないしきつと幸せなんかない。

それはお互い分かってるのになんで由佳は……。

「あ、お前まさか俺に同情してるのか？」

「違うよ」

俺が唯一たどり着いた答えを即座に否定された。

「じゃあなんでだよ……」

「椿っちは私の気持ち全然分かってない」

「お前の気持ちって……」

それが分かんないからこうやって訊いてるのに…。

「仕方ないから言っておげる。いい？ 私は椿っちが大好きなの」
「……………」

改めて言われるとなんか恥ずかしくて、ついどこかに隠れなくなつた…。

それは言っている由佳も同じくらいというか俺以上に恥ずかしいって思ってるんだろうな…。

「その気持ちは椿っちだって一緒でしょ」

「え、あ、うん…、まあ…」

「一緒でしょ！」

「……………」

こいつさては好きと言つまで訊いてくるな…。
恥ずかしいけど言っしかあるまい…。

「…好きだよ」

「よしっ」

由佳は満足げな声を出す。

「つまり私達はお互い好きってこと。相思相愛。だから別れる必要なし！」

「……………」

「……………」

「……………え？」

途中までは理解できたんだけど最後の言葉が引つ掛かる…。

「えと、由佳…最後の別れる必要なしってどういう意味…？」

「そのまんまだよ……………」

声のトーンが微妙に低くなる。

「好きな人と一緒にいるのってけっこう難しいんだよ…？」

「うん…」

好きな人と一緒にいたくてももられない。

そしてそこまで達するのに長い時間と苦悩が必要となる。

それはこなたやひよりを見ていて分かった…。

「だから私は今の関係を簡単に壊したくない…。可能ならずっとうちの彼女でいたい…」

「由佳…」

別れる必要なし…か。

由佳といいこなた達といいなんでコイツらはこんなバカなんだよ…。

俺のことなんか見放せば楽になれるのによ…。

ホントに…。バカすぎてこっちが救われる…。

「ありがと…由佳…」

翌朝、目覚まし時計の代わりに俺を起こしたのはみゆきさんからのメール。

内容は今日の朝に校長のところへ行き、俺の退学を取り消すように抗議すること。

「……正直言うとこんなことはしてほしくないんだがな…」

でもみんなが力を貸してくれるなら俺も全力で戦う。

俺は昨日の夜に机の上に置いた紙を手にとった。

表面には退学届とある。

もし抗議が認められなかったらこれを出さなければいけない。

「あと一週間もなかったのになぁ……」

カレンダーは三月、今日が金曜日で土日を挟み月曜日が卒業式だから今日を入れたらあと四日…。

でも仕方ないよな…。

きっと大丈夫だ。

そう自分に言い聞かせて俺は家を出た。

「き、緊張するね…」

タイミングを計っているのか、こなたはグツと校長室のドアを握ったまま動かない。

「そ、そうですね。校長室は入ったことないですし…」

さすがのみゆきさんも余裕がないらしく苦笑い。

「つ、つかさ、さつきからおろおろしすぎ！」

「だ、だってえ…校長室って腐ったバナナみたいに異様なオーラ出してるから怖くて…」

さすがに大人数は迷惑だから抗議に来たのはお馴染みの四人。

だがつかさはすでに逃げ腰だった。

「よ、よし…、行くよ」

こなたは二回ノックをしたあとに失礼しますと言って四人全員が中へ入った。

第63話 交渉

こなた達は校長室で横並びになる。

「何か用ですか？」

正面には校長がぎっしりと山積みになった書類に目を通していた。

「はいっ。桃原椿君の退学についてお話をしに」

みゆきさんが先頭を切って言う。

「こういう時のみゆきさんはとても頼もしかった。

「ああ…あの問題児のことですか」

校長の言葉にかがみがピクリと怒りの糸が切れかかる。

「君、名前は？」

校長は書類から目を放してみゆきさんを凝視する。

「高良みゆきです」

「桃原君とはどういう関係ですか？」

「ただのクラスメートです」

「ふむ、そのただのクラスメートがあの問題児について何を話し合
うのです？」

「……っ」

かがみが一步前に出ると咄嗟にこなたが止める。

「ダメだよかがみ。今は耐えて…」

こなたが宥めたことによりかがみは動きを止める。

しかし先程からの椿に対する言葉にかがみは怒りが収まらなかった。

「椿君の退学を取り消すことをお願いしに参りました」

「……残念ですがそれを聞き届けることはできません」

「どうしてですか？」

みゆきさんはあくまで冷静に対処する。

「当たり前ですよ、問題児ははつきり言つて邪魔です。だから即刻辞めてもらわなければならない。それが卒業直前でもね」

ムカツ！

今のでかがみの頭に怒りマークが出現。

「椿君は問題児なんかじゃない！」

「問題児だから我が校から消えてもらつたんです」

「なっ！？」

かがみが興奮しているのとは対照的に校長は冷めた口調で言う。

「いいですか、あなたがたがいくら彼を問題児じゃないと言つても、私が問題児だと判断すれば問題児なんです。現に彼は二度も喧嘩を起こしている。これで退学にしないでどうすると逆に聞きたい」

「あんたは椿君のことを何も知らないから言えるんでしょ！」

「ちよつとかがみ……！」

「お姉ちゃん落ち着いて……」

荒れ始めるかがみの言葉遣い。

その様子を観察するかのように見る校長は、

「礼儀を知らないあなたと一緒にいたところを見ると、桃原君がどういう人間性が底は知れてますな」

ブツチン！！

ついにかがみの堪忍袋の緒が切れた。

「えっと、確か校長室はこっちだったかな…」

もうすぐ一時間目が始まるくらいに俺は学校に着いた。

鞆の中には封筒が一枚。

退学届だ。

俺の退学が取り消されなかったらこれを出さなければならない。

しかしこなた達が上手くやってくれていたらこの紙も必要ないんだが…。

とりあえず早いとこ俺も行かないと。

あいつらばつかに任せてちゃダメだ。

「……！」

「……ん？」

なんか激しい言い争いが聞こえるな。

どつかのクラスが喧嘩でもしてんのかな。

気にせず下駄箱から靴を取り出して校内へ。

しかし言い争いは俺が目的地に近づくにつれて聞こえてくる。

「おい…まさか…！」

廊下を駆け抜けて一気に校長室前に来る。

「……して椿君　のよ…！」

途切れて分かりづらいけど間違いない！　かがみさんの声だ！

一大事と判断してノックをせずに急いで入る。

「……っ…！」

な、何だよこれ…！！

怒りに満ちたかがみさんを必死に抑えようとする三人がいた。

「お姉ちゃんやめて！」

しかしかがみさんは妹のつかさの言葉を一切聞かなかった。

「椿君はあんたと違ってとても優しい人なんだから！！ 椿君に謝りなさいよ！！」

「っ！！」

まずい！

かがみさんの怒りが頂点に達してる！

それ以上言ったらダメだ！

「あんななんか校長を辞めればいい」

「やめるかがみさん！！！」

俺は校長とかがみさんの間に入りかがみさんを正面から受け止める。しかしかがみさんは止まらなかった。

「離せえ！！」

じたばたと暴れる腕が俺の頬に当たる。

それでも力づくでかがみさんを止めて言い聞かせた。

「かがみさん、もういいから……！」

「よくない！！」

「かがみさん！！」

「だって……！！ あいつは椿君をバカにした……！！ お人好しすぎるくらい優しい椿君を……！！」

「分かってる……！！ でももうやめるんだ……！！」

「だけどこのままじゃ椿君退学になるじゃない……！！」

「大丈夫……！！ 俺は大丈夫だから……！！」

「そんなの……！！」

「分かってる……！！ かがみさんの想いはちゃんと伝わってるから……！！」

「……っ！ づばぎぐん……」

かがみさんの目には涙が溜まっている。

それほど真剣に俺のために言ってくれたことが凄く嬉しかった。

「ありがとつかがみさん、でももう……十分だよ……」

「う、うう…ひぐつ…」

かがみさんは力が抜けて泣きだす。

俺は立ち上がって校長にペコリと頭を下げる。

「お騒がせして申し訳ありませんでした…」

そしてこなた達の方を向いて、

「すまん、こなた、つかさ、みゆきさん。かがみさんを教室に連れてつてくれないか？」

「え？」

これ以上騒ぎを大きくしたらかがみさんが危なくなる。

それだけは避けないと…。

「頼む」

「……………わかりました」

みゆきさんは俺の気持ちを察してくれたらしく、こなた、つかさと協力して校長に牙を向けていたかがみさんを取りあえず廊下に。

「……………」

つかさがドアをゆっくり閉めるときに俺を心配する様子が見られたが、俺は笑って四人と別れた。

「ま、全く、なんて娘だ！」

校長はさっきのかがみさんの態度に激怒していた。

「すいませんでした…」

「君が謝って済む問題じゃない！」

息を荒くしながら椅子に腰をかける。

「それで君は何しに来た！？ 退学届でも出しに来たのか！？」

「……………」

交渉は決裂してしまった以上ここで出さないというわけにはいかな
い…。

鞆の中から昨夜書いた退学届を値が高そうな机の上に置く。

それを校長は確認して懷に閉まった。

これで俺はもう後戻りはできなくなった。

「用は済んだだろ。君は早くこの学校から立ち去れっ」

「……………失礼しました」

一礼してドアノブに手をかけると校長の独り言が耳に入る。

「あんな礼儀知らずがこの学校にいるなんて陵桜の恥だな…。採用
方法を改めなければあんな生徒ばかりになってしまっ…」

「……………」

陵桜の恥……………か。

「校長先生」

「ん？ なんだまだいたのか。君はもう生徒じゃないんだから早く

」

「それ以上俺の友達を悪く言うなら許しませんよ」

校長が言い切る前に俺が忠告を済ましてドアを強く閉めた。

「はあ……………」

軽くため息をついて下駄箱へ戻る。

「……………終わっちまったなあ……………」

やっぱり無理だった…。

退学は絶対に避けられない立場だってことをちゃんと理解しとくべ
きだった。

そしたらかがみさんやみんなをあんな目に合わずにすんだのに……………。

「ホント…、俺って情けないなあ……………」

第64話 ヒューマノイド・インターフェイス

放課後、こなたの携帯がポケットの中で震える。

差出人は椿君だった。

退学を取り消すのはやっぱり無理だったという報告。

それを見てまた涙が出そうだったけどなんとか堪える。

「辛いのは椿君なんだもんね」

私が泣いてたら情けない…。

それより明日は土曜日で休みだ。

高校を卒業したら私達は散り散りになってしまう。

だから今の内にみんなで目一杯楽しまなきゃ。

こなたは知り合いに片っ端からメールを送信する。

土曜日の朝、俺の睡眠を奪ったのはまたしても目覚まし時計ではなかった。

ツンツンツンツン。

「う…ん…ぐう…」

ぶにぶにぶにぶに。

「んー……くかー……」

ツンツンツンツンツンツンぶにぶにぶにぶにぶに。

「……っ……だーもう！ さっきから頬をつつくな！ ……っ
こなた！？」

「やほー」

起きればこなたが俺を股がっていた。

「お前なんで…！」

「せつかくの土曜日なんだし椿君と遊ぼっかなあって」

「鍵は！？」

「無理矢理開けた」

「どうやって！？」

「禁則事項です」

いやそんな笑顔で言われても！

「とにかく早く起きて。下でみんな待ってるよ」

みんなまで来てるのか

「グッモーニン、ツバキー！」

「椿先輩おはようッス」

「お、おう」

リビングには見事に陵桜三年生六人、一年生四人、そしてやまと、八坂さんが集合していた。

そして…

「おはよ、椿っち」

「由佳…、お前もか」

「当たり前でしょ。私は彼女なんだから」

いやそういうことは照れくさいから堂々と言わないでほしいんだが……。

「ん？」

由佳の胸ポケットからキラリと小さな金属が見える。

あれってもしかして…。

「ちよつと椿っち、胸ばっかり見ないでよ」

「つるぺったんな胸なんか見てない」

「な、なんだとーっ!？」あー、今で変に火がついちゃった…。

「それよりお前か。俺の合鍵でみんなを招き入れたのは」

「あ、つ、椿っちプロテイン飲む？」

「どんな話の逸らし方だ!　ってかお前は俺に筋肉ムキムキになってほしいのか!？」

「ていもて、ていもて、ていもてー」

「いやだから話を逸らすなっ!」

「この銀河を統括する情報統合思念体によって造られた対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェイス、それが私」
うわぁ…。

なんで宇宙人の正体をメモとか見ずにスラスラと言えるんだろ…。
まさか徹夜で頑張ったとかじゃないよな…。

「えと、ん」と…

由佳は頭を抱えながらネタに悩む。

そろそろこいつがボケるのも限界だろ…。

そのヒューマノイド……ええい、覚えられるか!

とにかく、その宇宙人に免じて許してやるか。

「はあ……わかったわかった。今回は見逃してやるよ……」
とりあえず帳消しに。

由佳はへ口へ口と全体力をさっきので使ったかのように疲れはてていた。

「んでみんなはなんでここに？」

『思いで作り！！』

「……………」

はい？

「つまり卒業前にみんなで遊びたいと、そういう訳か」

「そういうこと。今拳がっている案としてはボーリング、カラオケ、映画とか妥当なものが」

「ちよつと待て」

こなたが楽しそうに説明している途中でやめさせた。

みんなはおそらく行く気満々なんだろう。

だが俺は違った。

「悪いが俺はパス……」

「ええー！　なんでだよー！」

みさおが口を尖らせてブーブーとブーイング。

だがどうしても行く気にはなれなかった。

「すまん、まだ心が落ち着いてないんだ……。退学になったばっかで

遊び気分にはなれない……」

「椿君……」

「今は家でゆっくり過ごしたいんだ……」

言いたいことを終わるとみさおは諦めムードで、

「うー……そういうことなら」

「却下よ」

「……………へ？」

かがみさんが俺の意見を退ける。

つてか却下なんかあり？

「今日行かなかったら椿君絶対に後悔する。みんながこうやって集まる機会なんか卒業したらほとんどないのよ？」

「……………」

「私達が悩んでた時は椿君づかづかと割り込んで話してきたじゃない」

「いや割り込んではないけど……………ただほっとけなかっただけで……………」

「それよ！」

かがみさんが霹靂のように声をあげる。

「私達も椿君のことほっとけないの。だからみんなと遊んで悩みなんか吹っ飛ばせばいいのよ」

「……………」

悩みなんか吹っ飛ばせばいいってんな無茶苦茶な……。でも……………、あのツンデレのかがみさんにここまで言われちゃ仕方ない……。

「分かったよ……、みんな遊びに行こう」

ゲーセン

とりあえず誰でも知っている定番カーレースで四人対戦。

「あー！ 椿が仕掛けたバナナでかなり抜かれちゃったじゃねえか
く！！」

みさおの順位がどんどん下がっていく。

「はっはっはっ。勝負とは非情なものなのだよ……ってぐわっ！？」

あかこうらが命中した！

俺の車が激しく宙を舞う。

その間にこなたが一位の座を取る。

「くそっ、犯人はあいつか……ってほげっ！？」

「ご、ごめんなさい椿君！」

後ろからスター状態のあやのさんに接触。

またもや車がぶっ飛ぶ。

それを見たゆたかが、

「ふわぁ……こんなのが現実にあつたら車一発で壊れちゃうねえ」

「……た、確かに……」

映画館

なぜかよりによってホラー……。

「か、階段から足音が聞こえる……！」

女の子が階段を指差しながら怯える。

「だ、誰だ……！」

そばにいた男の子が階段の奥を覗いた瞬間、後ろから女の子の腐った腕が……。

「ぎゃあああああああ……！」

「きゃああああーっ!？」

「ぐふう…!？」

ちよっ、つかさ、抱きつくな…! 首、絞めてるから…!

「わーい!」

流れに乗じて由佳まで抱きついてきやがった!

「は、早く退けて…! 胸とか色々当たってるから…!」

「…こなたたちのように小さい胸なの?」

ま、まだ根に持ってやがったか!

カラオケ

「みなみちゃん一緒に歌おう」

ゆたかが二本のマイクのうち一本をみなみちゃんに渡す。

「…で、でも私あんまり曲とか知らない…」

「大丈夫! 絶対に知ってるから」

流れる曲はアン・ンマンのマーチ。

確かにこれは誰でも知ってる曲だな。

「私も歌うツス!」

「ワタシも!」

ひよりはみなみちゃんのマイクと、パティはゆたかのマイクを半々にして四人で元気よく歌う。

この時のみなみちゃんの少し照れ気味な表情がとても印象に残った。

「椿君、もしよろしければデュエットでもいいかですか?」

「あ、うん、俺でよかったら」

みゆきさんが歌う曲か…。

いったいどんなんだろ。

「風の中のすーばるうー」

『し、渋い』

ボーリング

ここではかがみさんが連続ストライクを出してダントツ。

「ボーリング上手いんだねかがみさん」

「マ、マグレよマグレ。私なんか全然下手だもん」

こういうところで謙遜するところがかがみさんの魅力の一つだよな。

「あ、次は私の番だ」

かがみさんが終えた後にゆたかがボールを持って構えようとするが、

「お、重いー！ー」

八号級のボールを両手で持つので精一杯だった。

ああいうのも魅力の一つに入るんだよねあ…。

「フッフッフ。とくと見よ！ 私の必殺技、フレイバーボール！」

直訳すると匂う玉だな…。隣のレーンで八坂さんが豪快に転がすが、

「ああ！ 右に反れた！？」

見事にピン一個…。

八坂さん撃沈。

「全く…こうは変な名前付けすぎだから力むのよ。ここはシンプルに……」

やまとがキツとピンを睨む。

そして美しい投球ホームからのボールは！

カッン。

これまた左のピン一個。

二人とも器用なんだか不器用なんだか……。

「そんなっ……！？ 私のノーマルボールが……！」

直訳すると普通のボール……。

…結局名前は付けるんだね……。

「ふあああー、つかれたー」

みさおが大きな背伸びをする。

つかさやみゆきさんも朝から騒いでたから眠たそうだ。

今日はこの辺でお開きかな……。

「みんな今日はありがと」

俺は改めて礼を言う。

「どう？ 今の気分は？」

かがみさんが笑顔で調子を窺う。

「めっちゃくちゃ楽しい」

「そう、よかった」

やっぱりみんなといるときが一番楽しかった。

かがみさんの言った通り悩みなんか吹き飛んでしまった。

ただどまた一人になると考え込みそう……。

駅まで来るとみんなはまたねと言ってそれぞれのホームへ行く。

俺は電車じゃないから由佳と二人で帰ろうとするとこなたが、

「じゃあ椿君、また学校でね」

「え？」

学校って俺はもう……。

「卒業式、観客席になっても来てほしいな」

「……………」

たぶん辛いだろう。

知り合いは一步前に進み自分は置いていかれる。

それはとても孤独だ。

でも……、みんなが笑って卒業できるように観客席から見守って
よう…。

「……………うん、見に行くよ。みんなの晴れ舞台」

そう答えてこなたとも別れた。

第65話 一緒に

土日があつという間に過ぎて月曜日を迎える。

この日は卒業式、今日で高校生活の全てが終わる。
もうどうすることもできない。

変えることもできない。

それがもどかしかった…。

「そろそろ行かなきゃ…」

目を逸らしそうになるかもしれない…。

でもちゃんと見てやらないと…。

アイツラが飛び立つ姿を…。

「ホントにこの日が来ちゃった……」

珍しく早めに起きたあなたは窓から晴れた空を覗く。
清々しいはずなのに後悔が残る。

そんな気持ちを抱えながら制服に着替える。

コンコン。

「お姉ちゃん、入っていい？」

「いいよー」

許可が降りてゆたかはこなたの部屋に入った。
すでにゆたかは制服に着替えていたところを見るとさすがだとか
言いようがない。

「どしたのゆうちゃん」

「うん……椿君のことなだけどね……」

ここで椿の話をするのはこなた自身あまり喜ばしくなかったが、
ゆたかの伝えたいことを知るために話させる。

「ホントに……どうしようもないのになって……」

「ゆうちゃん……」

「だって……悪いのはその坂上って人なのに……！」

「うん……でも椿君はもう……」

こなたの目はすでに諦めている色だ。

しかしそれもしようがない。

「だって……私の力じゃ……」

「お姉ちゃん……」

ゆたかはギュツとこなたにすがるように抱きつく。

「私、椿君の卒業するとこ見たいよぉ……！」

「うん……。うん……」

私も同じだ……。

椿君の卒業する姿を見たい……。

そして……。

「一緒に卒業したい……！」

現在午前八時四十分。

卒業式は午前九時から始まる予定となっているから二十分ほど暇が

できた。

俺はうろつろと裏庭など歩き回る。

「ここに来るのもこれが最後だな……」

校舎の匂い、見慣れたグラウンド、毎日授業を受けた教室、それら全部が名残惜しくなる。

体育館に行くとも一年、二年が入り口から一直線の道を開けて既に着席していた。

ゆたか、みなみちゃん、ひより、パティ、八坂さんの姿は簡単に見つけることができたが声をかけるのも恥ずかしいから何もしていないでいた。

するとパティが後ろを振り向いて友達と喋っている時に偶々俺と目が合う。

パティはブンブンと必要以上に手を振ってくれた。

パティは俺が来たことをゆたかやみなみちゃんに伝える。

そしてゆたかが手を小さく振る。

この時ゆたかの顔はどこか悲しそうに見えた。

おそらくあの元気の無さは俺が関係しているんだろうな……。

「あれー？　そこにいるのはもしかして？」

まだ幼い声が聞こえてくる。

振り向くと見知った人物が二人。

「おや、お前はいつぞやの……」

「ゴットウーザ様、それに小神さんも……」

何でアイドルなんかがここに……。

あ、白石の卒業でも見に来たんだろうか。

ってゴットウーザ様よくそんな不良みたいな格好で学校に入れたな。

「あんたなんでこんなところにいるんだい？　卒業生じゃなかったのか？」

「あ、ちよつと訳ありで……」

苦笑いで済まそうとするとゴットウーザ様は何かを見極めた様子で、
「ふむ……。言いたくないならあたいは無理には聞かないよ。だが困

ったことがあつたら何でも言ってくれ。あんたには借りがあるからね」

と、言つて小神さんを連れて少し前の席に行く。
きつと小神さんが小さいからという配慮だろう。

「隣、いいかな」

ボーッと二人を見つめているとまたしても声がかかる。

そしてまた見ない顔とは言えない人物だった。

「そうじろうさん……」

「久しぶりだな。元気してたか？」

「まあ……はい」

「ここにいる理由はこなたから聞いたよ……。大変だったみたいだな……」

大変……。そんな言葉とは比べ物にならないくらい辛かった……。

憎しみに身体中を支配されて理性の欠片なんか完全に消えてしまい、坂上さえ殺せれば後はどうなってもいいと捨て身の考えを持っていた。

その時の俺はきつと鬼のような形相だったに違いない。

でもこなたが止めてくれた。

涙を流して必死に身を呈して……。

「こなたがいなかったら俺はここにさえいることはできなかった……」
血に染まった手は二度と落ちない……。

だから俺はこなたに感謝している。

道を外しそうになった俺を修正してくれたから……。

「ホントに俺は……情けない男です」

「………そういえばまだ君に礼を言っていなかったっけ」

「礼？」

見に覚えがない……。

俺は何か感謝されるようなことをしたのか……？

「こなたが記憶を奪われた時に君は自分の未来と引き換えにこなたを救ってくれた……。その時の君はとても勇ましかった」

「そんなことないです……俺はただ友達が傷つくのが嫌だっただけで……」

「その気持ちがこなたを救ってくれた。本当にありがとう」

「……………」

「忘れないでほしい。君がこなたに感謝してるように、俺も君に感謝してるんだ。そしてこなたもきつと君に感謝しているはずだ……」

「あいつが……?」

「おっと、そろそろ始まるな。俺はこなたの顔を間近で見たいから前に行くが君はどうする?」

「そうじろうさんは一番前の席を差す。」

「あ、いえ、自分はここでいいです……」

さすがに退学したやつがあんな前にいたら気まずい……。

そうじろうさんは別れの挨拶をして堂々と前席に座った。

「……あいつが俺に感謝か」

感謝するのは俺の方だよ……。

あいつからはたくさんの幸せをもらった。

かけがえのない思い出をもらった。

それは一生の宝物になるほどの価値がある……。

「卒業生、入場」

アナウンスの声が体育館に響き渡る。

それを合図に卒業生が次々と花のアーチを抜けて入場する。

保護者や職員はそれを見て拍手する。

俺はその中で誰よりも大きく拍手をして卒業生を迎え入れた……。

「卒業したかったな……」

それだけが悔いに残る……。

だが仕方がない……。

今はアイツラを笑って見守ろう……。

「こなた……みんな……」

卒業おめでとう
...

第6話 呼ばれない名前

「これより卒業式を始めます」

「……………」

ついに始まった卒業式。

椿君は見に来てるんだろうか…。

こなたは観客席を覗くが全く見えない。

「卒業式、授与される者」

A組の先生がマイクの前に立ち、生徒の名前を呼ぶ。

「A組男子一番、有山一樹」

「はい」

呼ばれた生徒ははつきりとした声で舞台上の校長の前まで歩く。

そして一礼を終えて卒業証書を受け取った。

一歩下がりまた一礼をして階段を降りて自分の席へ向かう。

「二番、井上佐熊」

「はい」

A組の生徒が順調に呼ばれていく。

人数が異常に多いこのマンモス校で一人一人卒業証書を渡すやり方は時間がかかるので、卒業生代表がまとめて受け取とるやり方が普通である。

しかし伝統ということで陵校ではこの様子が毎年行われる。

「以上、A組全員起立、礼、着席」

A組の先生は一礼してB組の黒井先生にマイクを譲る。

「続いてB組男子一番、浅田拓也」

「はいっ」

「……………」

椿君が退学した影響なんだと思うけど黒井先生にいつもの覇気がなかった。

みんな気持ちは同じなんだ…。

椿君の卒業姿が見たい。

ただそれだけ…。

「女子一番、安藤笹美」

あ、次だ…。

そっか…もう私の番なんだ…。

椿君の名前を呼ばれずに男子終わっちゃったんだ…。

「女子二番、泉こなた」

「はい」

階段を上がって椿君を退学にした校長の前に立つ。

「卒業おめでとう」

「……………」

そんなことを言われても嬉しくない…。

椿君のいない卒業でおめでとうなんて言われても全然嬉しくない…。

ホントにこのまま終わっちゃうの？

椿君は卒業しないまま私達だけ卒業して高校生活は終わっちゃっていいの？

椿君はいつもそばにいてくれたのにこういう時は私達だけ先に一歩前に行つて…。

今まで私達は椿君に何度救われてきた…？

まだその恩返ししなきゃいけないのに…。

あの人と最初に会ったのは入学式…。

その時から少し気になってた…。

三年に進級した時は同じクラスになれて話をして…。

“何で小学生がここにいるんだ？”

“もー、私はちゃんとした高校生だってばー”

泊まりに行つて……。

“なんと私を泊めてくれるとな！？”

“言つてない！”

仲良くなつて……。

“これは私が小さいからつて馬鹿にしてるの？”

“い、いや違うよ！ ただなんとなく牛乳好きになつて思つただけで…ホントだよ？”

一緒にバイトして……。

“あじゅじゅじゅしたー”

プレゼントもらつて……。

“あのネックレス毎日付けていい？”

“ホ、ホントにつけるの？”

椿君の背中を押して……。

“行つてあげて……。それが私のためでもあり、由佳ちゃんのためでもあるから……。”

“……………っ！”

そして……みんなで笑つて……。

“椿君！！”

椿君と過ごした一年間、それはただの思い出だけど……私にとって
は一番の宝物……！

あの人は私の全てだった……！

椿君には笑っていてほしい……！

椿君には幸せの未来を歩いてほしい……！

このままでいいはずがない……！

椿君がいない卒業なんて……！

私は椿君と卒業したい……！最後はみんなで笑って卒業したい！

「き、君？ 早く席に着きなさい」

しかしこなたは動かない。

ざわざわと体育館から静寂が消える。

突然のことに校長や周りの職員達も少し混乱気味になる。

「……………」

ねえ……椿君。

椿君は私が今からすることをどう思うかな……。

やっぱり……怒るかな……。

でもごめんね……。

私にできることはこれぐらいしか思いつかないから…。

バカなことだって分かってるけど、これぐらいしか思いつかないから……。

だからもし見に来てるのなら見守ってて……。

私の人生最大の恩返しを……。

「校長先生……」

「な、なんですか？」

ずっと黙っていたこなたがようやく口を開いた。

だがその態度はとも威圧感があり校長はたじろいでしまう。

「椿君……いえ、桃原椿の退学は取り消してもらえないでしょうか……」

「そ、それは無理です。彼はもう退学しました」

「どうしてもですか……？」

再度こなたが聞く。

「どうしてもです」

しかし答えに変わりはないかった。

かがみやつかさ、みゆきたちは僅かな光を閉ざされたように俯いてしまう。

「……分かりました……」

やっぱり私が言ったって取り消してもらえない……。

こなたも諦めたように俯く。その様子を見た校長は安堵の息をつく。

しかしそれはつかの間のものだった。

「だったら……！」

こなたは顔を上げて校長を睨み付ける。

「私は……！！ 卒業なんかしないっ……！！！」

ビリーーーーッ……！！

全職員、全生徒、保護者の目の前でこなたは卒業証書を真っ二つに破った……。

第67話 君のために…

破られた卒業証書はふわりと空を舞う……。

それは自由に空を飛ぶ鳥のようだった……。

やがて紙切れは力尽きたように地へ墜ちる……。

その一切れが生徒達の前にヒラヒラと風に乗って流れていく……。

それは椿にも届いた……。

「……こ…なた…？」

距離が遠くあいつがどんな顔をしているかわからない。

だが穏やかな空気じゃない…。

それだけはわかった。

足下に墜ちた紙切れを手にとる。

“ 泉 こな ”

途中で切れていた。

それを見てようやく事態を把握した。

「う、嘘だろ…?」

心が壊れそうな気分だった。

退学になった時よりも息遣い荒くなる。

「と、止めなきゃ…!」

もう遅いかもしれない…! でも今止めなきゃこなたも卒業できなくなる…!

それだけはダメだ…!

あいつの三年間の最後がそんな残酷な終わりなんて…!

これ以上悲しい顔を見たくない…!

みんなが笑ってれば俺も幸せになれるから…!
だから…!

「こなたあああぁっ…!」

席を立つて卒業生が入退場に通る花のアーチへ行く。

舞台から一直線、そこからだとこなたの様子がはっきりとわかった。

向こうは俺に気付いたらしく視線を向けてくる。

「お、お前…なにやってんだよ…!」

「……………」

しかしこなたは見つめるだけで何も言わない。

「卒業式なんだぞ…? 高校生活最後の日なんだぞ…?」

「うん…」

「最後だからお前には笑って卒業してほしいのに……………」

「それは…椿君だけじゃない」

「…?」

「私だって椿君には笑っててほしい…!」

こなたは何を言っているんだ…。

「お、俺は笑ってるだろうが…」

「笑ってないっ…!」

「……………」

堂々と言い切られて目を逸らしてしまう。

「今の椿君……全然笑ってなんかないよ…!」

ここからでもよく聞こえる涙ぐんだ声。

もう何がどうなっているのかわからなかった……。

「な、何言ってるんだよ……。 お前もつわけわかんねえよ……！ なん

で……なんでそんな……！ 俺もつお前が分かんないよ……！ なあ

こなた、お前は何がしたいんだよ！」

「……………」

「こなたっ……！」

「……………っ！！ アホかあ桃原あああああーっ……！！
……！！」

「……っ！？」

黒井先生がマイクから離れて怒鳴る。

体育館に伝わっていくその声に一番驚いていたのは教職員だった。

その内の一人が慌てて止めに行く。

「く、黒井先生！ あなたまで何を……！！」

「じゃかましいっ……！ 黙っとらんかいっ……！」

「なっ……！？ 早くやめないとあなたがクビに……！！」

「じゃかましい言うとするやろっ……！ クビにしたかったら勝手にせんかい……！」

持ち前の器量で学年主任を一蹴した。

「桃原あああっ……！ あんたのためやないかあ……！ 泉がここま

でする理由なんかあんたのため以外あるわけないやろがぁ!!」

「お、俺のため…!!?」

「まだわからんのかぁ!! 泉はあんたに笑顔でおってほしいんや!! だからこないして戦つとるんやないか! これしか方法がないから…!! あいつ不器用やからこんなことしかできへんから…!!」

「で、でもこれじゃこなたが…!」

退学…、それは間違いなく降り注ぐ。

「泉は人生を無駄にする覚悟を持って戦つとるんや…!! それなのになんであんたが目を背けんねん…!! あんたが今立ち上がらんかったら泉はどうなんねん…!!」

「……………」

こなたを見るとやはり表情は悲しみに染められて変わりはなかった。

泣いている……。

こなたが今……

俺がそうさせた……。

笑ってない……。

そんな悲しそうな顔してたら俺まで悲しくなる……。

幸せじゃ……なくなる……。

「卒業するんや桃原!!」俺は……卒業しても……いいのか……？
夢を叶えることが……できるのか……？

「椿君つ!!」

こなた……。

向こうであいつが待ってる……。

行かなきゃ……。

俺は……行かなきゃダメなんだ……。

一歩踏み出して舞台に近づく。すると校長先生がマイク越しに、

「待て桃原椿!!」

「……っ」

「その虹のアーチは我が校の生徒ではない君が潜り抜けていい道ではない! 即刻立ち去れ!!」

「……」

“壁”によつて閉ざされた未来への道……。

それでも俺は乗り越えていく。

「と、止まれと言っているだろ!!」

ここで止まったら俺は一生後悔する……。

今行くよ……みんな……。

「と、取り押さえる!! 桃原椿を摘まみ出せ!!」
職員が両サイドから走って来る。

しかし……、

「き、君達何を！？」

「……？」

先生達が立ち止まっていた。

いや、誰かが先生を立ち止まらせていた……。

あのツインテール……。

まさか……。

「か、かがみさん……」

俺を守るようにかがみさんは先生の前に立ちふさがる。

かがみさんだけじゃなかった。

「椿君の卒業を邪魔させない！」

つかさも現代文の先生を……。他にもみゆきさん、みさおにあやの、ゆたか達まで各先生を止めに行っていた。

「か、かがみさん……！ みんな……！」

助けに行こうとするとかがみさんは激しく声を荒げながら言う。

「私達はいいいから早く行って！」

「でも……！」

このままじゃかがみさん達まで処分を受けてしまう……！

躊躇する俺にかがみさんは睨み付ける。

「早くっ……！」

「かがみさん……」

……この眼を俺は知っている……。

覚悟を決めた眼だ。

だったら俺はその覚悟を無駄にしたらいけない。

気持ちを抑えながら虹のアーチを抜けて一直線に舞台へ向かう。

第68話 虹の旋律

「と、止まらなないと本当に全員退学にするぞ!!」

「……………」

もう何を言われても止まることはできない…。

だって……コイツラが覚悟を決めたんだ。

だったら俺も進まなきゃ……。

「止まれと言つとるのが聞こえんのか桃原あ!!」

体育教師が真後ろから迫ってくる。

「くっ……!!」

めんどくさいのが来やがった……!

あともうちょっとだってのに……!

伸ばされた手が俺に触れようとしたときに、

「待ちな」

「……………え?」

どこか気の強そうな声。

「あいつは漢になろうとしてんだ。邪魔はさせないよ」

暴走族のような姿に竹刀。

それはとても頼もしい助っ人だった。

「ゴ、ゴットウーザ様……………」

「前にウチのバカ共が世話になった借りだよ。ほら、早く行きな」

「……………ありがとうございます」

この人はやっぱりいい人だな…。

俺はまた正面を向き足を動かす。

この場にいる全員からの視線が気になったがただ前だけを見た。
この道を通ることをどれだけ願っただろうか…。

みんなが卒業証書を受けとる光景を何回羨ましく思っただろうか…。

「校長先生」

父さん、母さん、俺絶対に卒業するから……。

だから安心して見守っててくれ……。

「退学処分を取り消してください」

深く頭を下げる。

今さらかもしれないが俺にはこれしかできないから…。

答えが返ってくるまで頭を下げ続けるしか……。

「……出ていけ！」

校長は俺の行動を一言で一蹴する。

「退学は取り消さん！！　せつかくの卒業式をむちゃくちゃにしお
つて！　その桃原椿に加勢した生徒達も卒業証書を破ったこの子
も全員退学だっ！！！！」

「ちよっ、待ってくれ！」

「黙れ！　あんな問題児だらけの落ちこぼれなど卒業生として認め
るわけにはいかん！！」

「……っ！」

問題児　……。

退学　……。

落ちこぼれ　……。

ふざけるなよっ！！！！！！

「だいたい君が　」

バーンッ！！

.....

.....

.....。

マイクを足で蹴り飛ばし壁にぶつかった衝撃で粉々になる。

それは校長先生を黙らすのにちょうどよかった。

「俺、前に言っただよな……。これ以上侮辱したら許さないって」

「な、なんだと……！！？」

「あんたは知らねえだろ……！？ コイツラがどれだけの幸せをくれたか……！ どれだけの思い出をくれたか……！」

「ふ、ふん、そんなくだらしない幸せなど知りたくもない！ おい！

早くコイツラ全員をここから摘まみ出せ……！！」

「だから待って……言っただけ……」

「待ってください……！！」

俺じゃない誰かが校長先生に言う。

今のは生徒側から聞こえた。

「あの……誤解なんです……！」

A組の男子がその場に立っていた。

そして意外なことにその顔を俺は知っていた。

「お前……俺の写真を撮った……」

そう、坂上を殴った写真を学校に提供した奴だ。

こいつのおかげで俺は誤魔化しようもなく退学となった。

こいつは坂上とグルなんだろう思ってたのに……。

「な、なんだ君は……！！？」

校長はあいつが何を言っているのか分からず混乱する。

「あの殴っていた男の写真は……確かに桃原です……。でもそれには理由があつて泉さんがあの殴られている男に拉致されたからなんです！ それで俺はもう一人の仲間に脅されてキレた桃原が殴っている写真だけを渡されて……！」

「お前……」

予想外のことだった。

真実を話してくれるなんて思つてもみなかつたから……。

それに前はびくびく何かに怯えていたかのようだったのに今は違う……。

こいつも覚悟を決めた眼をしている。

「本当はこんなことしたくなかつた……！ でも……！ やらなきゃ俺がやられるから……！ だから……！」

「……………」

心を開いてくれた……。

勇気を出してくれた……。

俺のために……。

自分のために……。

俺はA組側の舞台へ移動してそいつと向き合う。

そして一言贈つた。

「ありがとう……」

今さら真実を言われてもこいつの力はすでに小さいものだ。

だけど単純に嬉しかった……。

正直になるこいつを見て……。

「クククク……」

校長先生が腹を抱えていた。

そしていきなり大声をあげて笑い出す。

「ぶわっはっはっはっはっはっ！ あーはっはっはっはっはっはー！

！」

「な、何がおかしいんだよ……！？」

状況が緊迫している場面での校長先生の笑いはとても不気味なもの

だった。

「い、いやすまん。何を言い出すかと思えば…ククク」

ふらりと校長先生もA組側の舞台へ寄る。

「おい君、嘘はいかんよ嘘は」

「なっ!？」

校長とは思えない発言に衝撃を受ける。

「はあ、拉致だとか脅されたとかそんな下らない冗談は他所でやってくれ。それにどうせ君もコイツラに下らない嘘を言えって言われるからこんなこと言ってるんでしょ？　ったくなんでこんな生徒が入学してんだか」

「…っ!！」

こ、このやる…!！」

あまりの上からバカにした発言に怒りが込み上げてくる。

なんなんだよ…!

なんで現実を見ようとしなんだよ…!！」

あの生徒がどれだけ勇気を振り絞ったか分かってんのか…!？」

あんな発言をしたら自分が危なくなるのに…!！」

俺達より何倍も生きてきたこいつなら本当は分かっているくせに…!！」

何事もなかったかのように見てみぬフリかよ…!！」

「まったく、さあもうこの話は終わりだ。コイツラ全員退学にしてさっさと卒業式を進めるぞ」

こんな奴に…!！」

「おいお前ら、早くここから出てけ。我が校にいちいち問題を持ってきたイカれ者と一緒にな」

こんな奴にみんなが退学にされるなんて…!！」

「今日この場に出席されている皆様に多大な迷惑をかけたことを誠に申し訳なく思っております。今から卒業式を開催致しますので」
ちくしょー…!！」

“ 大丈夫 …… ”

……え？

声が聞こえた…。

何度か頭に流れた声だ……。

“ あなたにはまだ仲間がいる …… ”

「 なか…ま…？ 」

「 ふざけんなあああああああああああーっつつつ！
！…！ 」

「 ……っ 」

この声……。

まさか……。

入場門を見る。

そこには一番大切な奴がいた…。

「はは……」

なんだよ……あいつ来てたのかよ……。

「由佳っ……」

第69話 椿

「な、なんだあいつは…?」

「あの制服って聖フィオレナ女学院じゃない…?」

「マジかよ…。向こうだって卒業式だろ? なんで陵桜の卒業式に来てんだよ」

生徒らは由佳に注目してざわめき始める。

いきなりの参入により事態は悪化してしまった。

しかし、そんな中でも由佳は堂々として入場門に立つ。

「また邪魔か…。あー君、文句は後で聞くから今は静かに座って待つてなさい」

校長はこれ以上騒ぎを大きくしたくないため適当にあしらおうとする。

だがそれをキツパリと断った。

「嫌です」

「……私は待つてなさいと言っているんです」

「私は嫌ですって言うてんのっ」

「……」

由佳に引く気配は全くない。

「……はあ」

しばらく睨み合った後に校長が小さなため息をつく。

「これは他校のあなたには関係のないことだ。これ以上邪魔をす

るようだった君もつまみ出すぞ」

「……………」

由佳は黙りとなる。

これは脅しじゃない。

由佳もそのことは分かっているんだろう。

「たしかに私はこの学校の生徒じゃないから関係ない」
そうだ…。

この場じゃ由佳は直接俺の力になれない…。
だけど…。

「でも……………可哀想だったじゃんかつ！」

こいつは諦めるといふ言葉を知らない…。

「こなたっちや椿っちは必死に頼んでいるのに……………！」
そしてこいつはいつも俺のそばにいてくれる…。

「写真の子だって泣きながら自分のやったことを認めたのに……………！」
自分のことなんか構いもせず…。

「なのにあんたはそれを嘲笑って……………！！ そんなの酷すぎるじゃん
かつ……………！！」

間違っていることに真正面から否定して…。

「椿っちやみんなは何も悪いことなんかしてないっ……………！！ 正しいこ
とをしてるのになんで退学なのよっ……………！！」

こんなに心強い彼女がいるだろうか……………。

「椿っち達を退学にすることが正しいって思っているなら……………！！
そんなの私が絶対に許さないっ……………！！！！！！」

「……………っ」

やっぱり俺はあいつのことが好きだ……………。

「由佳も戦ってるんだ……………」

だったら俺も挫けるな……………。

みんなの覚悟を無駄にするな……………。

一度決めた覚悟…。

絶対に突き通すんだ…！

「校長先生…」

「な、なんだ。まだ言い残したことでも」

「俺を…！ 卒業させてくださいっ…！」

全てのプライドを捨てて土下座をした…。

ただ卒業したい。

それだけのために…。

この一年間苦しいことはたくさんあった…。

でもこなたたちがいたから…。

由佳がいたから俺はここにいられるんだ…。

最後は一緒にいたこなたやかがみさんたちと笑って卒業したいんだ…。

頼む…。

俺の願いをもう壊さないでくれ…。

これ以上俺達を傷つけないでくれ…。

「校長先生……、私達は……間違っているのでしょうか？」

「……っ！？」

バツと顔をあげると端の席に座っている年輩の女性が立っていた。

「り、理事長っ！？ 何を……！？」

理事長と呼ばれた女性はとても澄んだ眼をしていた。

「私は彼を退学させるのは陵桜学園の秩序を守るために仕方がない
と思っていました。だから彼の退学には賛成したんです。

しかし彼等を見ているとそれは間違っているんじゃないかって思う
んです」

「な、何を言っているんです！！ 彼らは相応のことをしてきたん
ですから退学など当たり前じゃないですか！！ 特に桃原椿は一度
ケンカで謹慎しているのにも関わらずまたケンカしたんですよ！！

それと同じ高校生じゃなく一般人を！！」

「……もしそうだとしても彼のために多くの方々が立ち上がりました。
卒業証書を破るという彼女の行為はいいとは思いませんがその強い

心…、私はとても羨ましいです」

「し、しかしですね…！」

「たった一人のために大勢が立ち上がる絆と覚悟、そして勇氣…。それらは決して簡単に手に入るものではありません。長い時を刻み、小さな幸せを少しずつ培ってようやく手にするものです…。それらの全て、そして相手を大切に思っ心を持つ彼らが我が校の生徒だということ私を誇りに思います ……」

「……………」

校長はもう何も言えなかった。

「彼の退学は取り消し、よって桃原椿の卒業を認めます。反論のある者は？」

「……………」

「……………」

理事長が全員に問いかけるが誰一人として手を挙げる者はいなかった。

退学に賛成していた職員も目を背けるように俯いている。

「ないようですね。では桃原椿君」

「え？」

急に自分の名前を呼ばれて驚く。

理事長は一枚の紙を手に舞台の真ん中へ。

「あなたの卒業証書よ」

俺の……卒業証書……。

差し出された紙には俺の名前がちゃんと書かれていた。

「卒業おめでとう ……」

「……っ」

「この言葉は今の俺には最高のものだった……。」

第70話 答辞

俺が卒業証書を受けとると式はまた再開された。
全クラスに渡った後に下級生からの送辞が行われる。
それを観客席じゃなく生徒に混ざって眺めていた。

「……………」

長かったようで短かったこの一年間……。
それももうすぐ終わる……。

「答辞、卒業生代表」

もうすぐ ……。

「桃原椿」

「……………え？」

不意打ちだった。

言い間違いじゃないのかと疑ったが教頭は明らかに視線をこっちに
向けている。

俺は知らせていなかったため無様にも焦り出す。

「俺……？」

答辞はA組の奴がやるってんじゃないのかったのか…？

なんで俺なんかが…

「桃原、前に」

教頭が指図する。

しかしいきなりそんなことを言われても素早く行動などできるわけなかった。

「い、いやでも俺が答辞なんて……」

「大丈夫だ……」

教頭は小声ながらも力強く言い放つ。

「お前の三年間を言うだけでいい……。この学校で過ごした時を俺達に教えてくれ」

「……………」

俺が過ごした三年間…。

そう考えると自然に拳が握られた。

俺はゆっくり席を立てて舞台前に行く。

階段を登って校長の前まで歩む。

正直内心ビビっていた…。

いきなり答辞をしろと言われたら誰だってそうなるだろう。

全員が俺に注目している。

そう思うとプレッシャーが重くのしかかった。

俺の手元にはあらかじめ用意された答辞用のメモなどない。

怖い…。

不安でたまらない…。

だけど…………。

「俺の三年間にメモ用紙なんかいらねえよ…………」

思い出はちゃんと心に残ってる…………。

いつまでも、ずっと…………。

「答辞……」

「三年前、俺……いえ、私は夢も希望も持っていないませんでした」

「やりたいことなど特になくただ学校が自宅から近いという理由だけで入学しました……」

「一年、二年と機械のように過ごしつつまらない時間を歩んできて……それは三年になっても変わらない……」

「そう思っていた矢先にこなたと出逢ったんです……」

“なんでここに小学生がいるんだ？”

“もー、私はちゃんとした高校生だってばー”

「私の本当の高校生活はそこから始まりました ……」

“桃原君さー、私のこと覚えてる？”

“え、いや……、名前は今知ったところだし……”

“そうじゃなくて入学式の時だよ”

“入学式？ わりいな、一欠片も覚えてない”

“そっか、覚えてないか……。じゃあしょうがないね。思い出してもらうために今日から君の家に泊まるよ”

「みゆきさんとも逢って……」

“あー……”

“どうかしたんですか？”

”

“ いや、なんでもないよ長野さん ”

“ 高良です ”

“ …… ”

“ …… ”

“ ごめんなさい ”

「 かがみさんにも逢って…… 」

“ あれ、こなた、こっちの人は知り合い？ ”

“ この人は桃原椿君、同じクラスの友達だよ ”

“ あ、あなたが桃原椿君か。私は柊かがみ、つかさとは双子で姉よ ”

“ ちなみにかがみは私のだから手は出さないでね ”

“ はっ！？ ”

「 そしてみんなと逢った…… 」

「 最初は鬱陶しくて仕方がなかった…… 」

「 いい加減にしてほしかった…… 」

「 俺に関わらないでくれって思った…… 」

「 でも…… 」

“ 本当のお前が…楽しんどるんやろな…友達と過ごす今を…”

“ …最初はそんなこと…”

“ ……それが…友達や。最初は気まずくても話しをするうちに、同じ時間を歩くうちにみんなの色を知り、想いが紡ぎ、かけがえのないものになっていく…”

“ …… ”

“ そしてそれは一生もんになる ”

「 俺は楽しんでた… 」

「 楽しんでいたんだ… 」

「 みんなという時間を… 」

「 でも楽しい時間ばっかじゃなかった… 」

「 時には喧嘩したり… 」

“ ……私はみんなにとっていない存在なんです ”

“ 違う!! ”

“ 違います!! ”

「友達の気持ちが分からなかったり……」

“や、やっぱり私は…自分を好きになれない…！たとえ椿君が許さなくてもこんな自分を好きになんてなれないよ……！”

“っ、つかさ！”

“椿君に私の背負ってる重さがわかるの！？ わからないでしょ！？ だったらもう…、自分を嫌いになるとか……勝手なことばかり言わないでよ……！！”

「思いが届かなかったり……」

“でもかがみさん、この状態じゃ”

“大丈夫だって言うてるでしょ……！！”

“…っ！！”

“か、かがみさん？”

“ごめん……。でもお願いだからほつといて……”

「人の道を外しそうになったりもした……」

“退けよこなた！ こいつを殺せないだろ……！！”

“退かない……！！”

“こなたっ……！！”

“絶対に退かない……！！……！！”

「だけでもみんなが俺の世界を変えてくれた……」

「こんな俺なのにみんなはそばにいてくれた……」

「それがどれだけ嬉しかったか……」

「どれだけ助けられたか……」

「どれだけ……でかいことだったか……」

「俺の世界は無色だったのに今は鮮やかな色がある……」

「大切なものを持つことができた……」

「一番大切なもの……」

「……………」

「もっとみんなと遊んでいたかったけど俺達は違う道を歩かなきゃならない……………」

「でもそれはきっと悲しいことじゃない……」

「悲しむ必要なんてないんだ……」

「俺達はまた逢えるから……」

「今日という一日……そして一緒に過ごした日々を忘れなかったら俺達はまた逢えるから……」

「違う道を歩いていても必ずどこかでその道は交差する……」

「それはきっと悲しいことじゃない……」

「とても……とても幸せなこと……」

「だから俺達は全力で笑うんだ……」

「今も……そしてこれから……」

「ずっと……」

「みんな……」

「幸せをありがとう……」

第71話 卒業

「んっ！ 肩いてー！」

みさおが道の真ん中で大きく背伸びをする。

「ホントに私達卒業したんですね」

「なんか実感わかないねえ」

みゆきさんやつかさの言う通りだった。

校舎を振り返っても誰もいない。

夕日に照らされた学校はどこか名残惜しく感じた。

また明日になればいつもみたいに学校に来て授業を受ける…。

そう思ってしまう。

だがそれはもう終わったんだ…。

俺は消えていく生徒達を黙って見つめる…。

「まるで夢のようだな……」

「うん……」

こなたは小さく頷く。

彼らは何処へ行くんだらう…。

どの道を歩くんだらう…。

なぜ……そんなに涙を流して帰っているんだらう…。

帰りたくないならずっとここにいた方がいいのに…。

またここに来て授業受けたらいいのに…。

「……………。そつか…、これが卒業ってことか……………」
戻ることは許されない…。

紙切れ一枚渡されて俺達は社会に出る…。

あの楽しかった学生生活は二度と繰ることはないんだ。

だから彼らは涙を流す…。

「椿うち…？」

「……………なんかやだなあ……………」

「え？」

最初はみんなと卒業したいって思った。

だからみんな必死に戦った。

でも今は違う。

「やっぱり……………卒業したくなかったな……………」

もう少し……………。

もう少しでいいからまだみんなといたい…。

そう思う自分がいた……………。

「こなた」

「あれ、お父さんどこ行ってたの？」

そうじろつさんが校舎から歩いて来る。

「ああ、ちよつと校長と話してきた」

校長と…。

そこだけが妙に引つ掛かる。

「大丈夫だよ椿君。卒業させてくれてありがとうと礼を言ったただだから」

「そ、そうですか」

その言葉を聞いて安心した。

そうじろうさんのことだからてつきり荒れ狂うかと思ったが、やらなかったところはさすが大人と言うべきか。

こなたがそうじろうさんの首からぶら下がる物を見て、

「そうだ、みんなで写真撮ろーよ」

「いいデスネー！ ミナさんでとりましょう！」

思い出を形にする…。

写真を撮るといふのはきつとそういうことだろう。

しかしみんな乗り気になつてゐるけどどこで撮ろう…。

「ここらでいいとこなんてあつたかな…」

記憶を頼りに探してみるがいまいちピツタリ来る場所がない。

「何言つてんのよ。写真ならあそこしかないじゃない」

「あそこ？」

「ねーこなた」

「そだねー、あそこしかないねー」

こなたとかがみさんが言う“あそこ”について俺は全く想像ができない。

しかしみんなは理解していたようだ。

「……………」

「さー着いたよ椿君」

「……そういうことか」

みんなに連れてこられた場所。

それは我が家だった。

俺達の思い出の大半が詰まった場所。

たくさん笑った場所……。

「ほら椿君」

「わっ！？」

かがみさんにポンと背中を押される。

「椿君は中心なんだから真ん中に立たなきゃ」

「え、お、俺：！？」

「そうに決まってるじゃねえか。お前がいたから私達はこうやって集まることができたんだから」

みさおは自信満々に言う。

「じゃあ私達も椿君を中心に入りましょう」

みゆきさんが俺の後ろに来る。

二列になるみたいだから俺は中腰気味になる。

みゆきさんの横にはみなみちゃんが。

さらに横にゆたかが来ようとするが、

「ゆうちゃんはい小さいからこっち」

こなたがゆたかを連れて俺の右側に来た。

そして左側には由佳、つかさ、かがみさんが。

パーティとひより、みさお、あやのさんもそれぞれ好きなように入っていく。

「おい、もつと詰めないと入らないぞ。それに縦もキツいな」

そうじろうさんがカメラを合わせながら言う。

「んなこと言われても……」

肩がぶつかって十分くっついてるつもりなんだけどなあ…。

「ゆきちゃん少ししゃがんだらどうか？」

「こうですか？」

ぷにゅ。

「うわぁっ!？」

みゆきさんのドでかいアレが頭にのしかかってくる。

「ど、どうしたんですか？」

みゆきさんは状況を理解していないみたいだった。

「あた、あた、あた……!」

「あた？」

みゆきさんはまだ気付かない。

「とと、とりあえずみゆきさんもうちょい腰を上……!」

「これ以上上げると私が入らなくなってしまうんですけど……」

こっちはこれ以上耐えられません!!

「むっ……、おりやつ……!」

おろおろと戸惑っている間になぜか由佳が俺に抱きついてくる。

さらにはこなた、パティまで寄ってきた。

「うわっ!？ ちょっ、お前らくっつきすぎだっ……!」

「だってさっきの椿っちめちゃくちゃいやらしい顔してた……!」

「し、してねえよ……! たぶん」

「ほらぁ……! やっぱ椿っちは貧乳なんかより巨乳の方がいいんだ……!」

「だ、だから違っ……!」

「じゃあ最後のたぶんはなんなのさ……!」

「お、男の本能……」

「なによ男の本能……!」

「まあまあ、いいじゃんいいじゃん」 こうしないとみんな入らないんだから」

こなたはそう言いながらさらに密着させてくる。

それに合わせて他のみんなも中心に寄ってきてしまった。

「みんな動くなよ。あー、もうちょい左に寄って」

そうじろつさんが指示して位置を調整する。

「よし、はいみんな笑ってー」

「……………」

横をチラリと見るとみんな笑っていた…。

ああ……、ホントに最後なんだよな……。

高校生活も……。

大丈夫……。

また逢える……。

だから泣いちゃダメだ……。

泣いたら最後までみんなに迷惑がかかる……。

心配ない……。

笑顔で迎えよう……。

この時を……。

この幸せが集まる時を……。

いつも通りに過ごそう……。

そうやって自分に言い聞かせてきた……。

でももう一人の俺は……。

「椿君…？」

「椿うち？」

もう一人の俺は……泣いていた……。

「……あ、あれ？」

何度も拭う。

しかし涙は止まらなかった。

「ご、ごめん…！　すぐに……止めるから……！」

「椿君…」

ダメだ…！

泣いたらダメなんだってば…！

みんなが心配するだろうが…！

「な、何で…！」

落ちていく…。

一粒…、また一粒と……。

「……………」

むぎゅっ！！

「痛たたたたっ！？」

いきなり由佳に太ももをつねられる。

「な、何すんだよ！？」

「涙」

「へ？」

「止まったでしょ」

「あ、ホントだ……」

痛みのおかげで涙が引いた。

「しゃんとしなきゃ。集合写真で椿うちだけ泣いてるなんてことになったらカッコ悪いよ」

「ああ…わかってるよ……」

心から笑う時はきっと幸せなんだと思う。

そしてその幸せは未来にも繋がる。

みんなが俺を思い出した時、笑顔であってほしい。

それを見て、みんなが笑顔になって…。

ああ、こんなこともあったよねって、幸せな気持ちになってほしい。

「ようし、いくぞー」

そつじろつさんがシャッターに手を置く。

「……………」

長かったようで短かったなあ…………。

こなたと出逢ってからの最後の一年は特に…………。

散々トラブルに巻き込まれたけど、今はもう全てが思い出…………。

「もっと早く出逢っていたかったな……………」

もし過去に戻るなら…………。

俺はあの入学式に戻りたい……。

もう一度……。

何も知らなかったあの頃に……。

「はい、チーズ」

新しい春が迎えに来る今日……。

俺達の春は終わった

……。

最終話 新しい春

「……………」

卒業式が終わった翌日、目が覚めた俺は泣いていた……。
別に悲しいから泣いているのではない。

怖い夢を見たから泣いているのではない。
ただみんなと一緒に過ごした日々を夢で見て寂しくなった。
ただそれだけだ。

「……………これじゃまるで子供みたいじゃんかよ……………」
いい加減受け入れないと前に進めない…。

それは分かっている。

分かっているけど……………。

「……………はあ……………」

机の横に置かれた写真箱を見る。そこには卒業式の日にみんなで撮った写真が飾られていた。

みんな今ごろなにしてんのかなあ……………。

まずこなたとつかさ、あとみさおはまだ寝てるだろうな。

かがみさん、みゆきさん、ゆたか、みなみちゃんはっきりしてるからもう起きてるかも。

パティとひよりはどうなんだろ…。

「……………って何考えてんだ俺は」

アイツラのことばっか考えて変態かよ…。

ちなみに由佳は妹の唯や両親と共に家族旅行の真っ最中だ。
昨日いろんな写メを送ってきたけど全部唯が入っていた。

多分無理矢理入れさせられたのだろう、唯の迷惑顔が気になった……。

「……それにしてもやけに寒いな……」

春が近づいてきてるとはいえまだ三月。

冬の寒さがまだ残っているため体が冷える。

「コーヒーでも飲も……」

温かい飲み物を求めて一階へ。

しかし階段から降りてリビングに視線を向けた時、小さな影が動く。

「……あれ？」

なんだ？

誰かリビングにいるのか？

ジッと見つめる。

するとカタンツとリビングから音が漏れた。

やっぱり誰がいる……？

……いやまて、そんなはずはない。

鍵だっちゃんとは閉めたし卒業式終わったその日に由佳からも鍵は没収した。

だから誰かがいるはずがないんだ。

じゃあ今の影と音はなんだ……？

まさか泥棒か……？

嫌な空気が辺りを包む。

最悪な展開を想像したくはない。

だが先程見た人影が恐怖を与える。

太陽の光に照らされたリビング、それはとても不気味に見えてしまう。

息をできるだけ小さくしてリビングに近づいた。

「も、もし泥棒だったら俺はどうしたらいいんだ……？」

迷ってふと視線を下げると足元にゴボウが置いてあった……いや、転がっていた。

「……………」

なんでゴボウ？

真っ先にその疑問がきた。

い、いやでも何も無いよりかは多少マシだよな。

それにゴボウって美味しいし。

俺は片手でギュッとゴボウを握りしめ、もう片方の手でそっとドアノブに触れる。

大丈夫、向こうは多分こっちに気付いていない。

だったら俺は奇襲をかけて一気にたたく！

カタッ……。

「ん？ うわっ！？」

後ろから物音が聞こえて振り返ろうとすると、何者かがいきなり白い布のようなもので俺の目に巻き付けてきた。

「な、なんだ！？」

視界を奪われた俺はパニクる。

とりあえず視界を元に戻すために白い布を取ろうとするが、誰かが抵抗して取ることができない。

目の方に苦戦している間に複数の足音がやってきて、そいつらにより俺の両手、口が紐らしきもので素早く縛られてしまった。

「え！？ な、ちよっ！？」

ま、まだ仲間がいたのか！？

握っていたゴボウも落としてしまい反撃はできない。

視界も奪われて両手も使えない。

さらに泥棒は複数いる。

勝てる見込みなど微塵のかけらも感じられなかった。

このままじゃ俺は何もできずにお陀仏してしまう。

一瞬残酷な自分の未来が見えてしまう。

そのせいで手がガタガタとふるえだす。

「ふふ、怖いのか？」

「……っ」

女の声だった。

それもかなり幼い声。

「でも大丈夫、私達がすぐに楽にしてあげるから……」
楽にする……。

それは死を意味するのだと解釈できてしまう。

「んー！ んー！！」

こ、殺される……！

逃げなきゃ……！

じたばたともかくが紐がほどけることはなかった。

向こうはこっちが無力なのを確認して口を封じていた紐、そして目隠しをはずそうと白い布に手をかける。

ハラリと取られて視界が白からカラーになり目の前には小さな足。

み、見上げるのは怖い……。

でも見なかったらきつと後悔する……！

俺は勇気を振り絞って見上げた。

そこにいたのは……。

「ミッションクリアー」

「……こ、こなたあああああーっ!？」

青い髪にアホ毛、間違はなくこなただ!

じゃあ泥棒ってこなたのことだったのか!?

「いやあ、なかなかスリルあつたね」

「お、おまつ……! なな、なんで……!？」

頭がついていかずに言葉が途切れてしまう。

「ちよつと悪ノリし過ぎちゃったわね」

「椿君ごめんねえ」

「お怪我はないですか？」

気づけばかがみさんとかさ、みゆきさんが紐をほどいてくれた。
た。

「か、かがみさん達までどうして!？」

「私達だけじゃないわよ」

かがみさんは笑みを浮かべながらリビングのドアを開ける。

中には複数の人影。

「ハローツバキー!」

「おはよツス先輩!」

「パ、パティにひより!？」

さらに二人の後ろからも顔を覗かせる二人がいた。

「えへへ、ごめんね」

「……すみません」

「ゆたかにみなみちゃんも!？」

そして玄関からは背景コンビが。

「いやー、作戦大成功だったなー」

「ちよつとやりすぎたかもしれないけどね」

「み、みさおにあやのさんまで!」

どれも見慣れた奴等だった。

泥棒じゃないとわかってとりあえずひと安心だな…。

「ところでなんで縛ったりしたんだよ」

キツく閉められた腕には紐の跡がくつきりと残っていた。

「それなんだけど実は椿君を驚かせようかと思って」

かがみさんは苦笑いしながら言う。

「イツツドツキリ大作戦ネ!!」

「…………え、それだけ?」

「それだけだよ」

ゆたかがいつもの癒しの笑顔で答えた。

「それだけで俺は縛られたの?」

「そうツスね」

「…………な、なんだよビビらせやがって…………」

俺は安堵の息を漏らす。

しかしみゆきさんとあやのさん、みなみちゃんまで混じっているの

が意外だ。

こついうのは嫌がるかと思っただけだ…。

何はともあれ泥棒じゃなくてよかった…。

…………。

よかった?

「ち、ちよつと待て!」

「どうかしたんスか?」

「お、お前らどうやって入ってきたんだよ!? 鍵は閉まってたはずだぞ!」

そう、昨日の夜は確実に閉めた。

だから普通はこなた達が俺の家にいるなどあつてはならないことだ。しかしそれはすぐに種明かしされた。

「フッフッフ。こ・れ・だ・よ」

こなたが見せたのは一つの鍵。

ま、まさか…。

「お、おいそれつてもしかして…」

「うん、この家の合鍵」

「うそおおおおーっ!？」

「私だけじゃなくて皆もちゃんと一つずつ持ってるよ」

他の皆もポケットから全く同じ鍵を出す。

それは百パーセント我が家の鍵だった。

「い、いつの間にそんな量産されて…!？」

「いつだろうね」

こ、これって犯罪じゃないんだろうか…。

「まあいいじゃねえか。これで私達は自由に椿ん家に行き来できるんだからよ」

みさおは楽観的に言うがけっこうこれは問題だと思ふんだが…。

これじゃ俺が大学から帰ってきたらこの中の誰がいるかもしれないな…。

「だいたいなんで朝から俺の家に来てんだよ…」

卒業式は終わったんだしコイツラが俺の家に来る理由なんかはないはずだ。

なのになんで……。

「そんなの決まってるじゃん」

「え？」

「みーんな椿君が大好きなんだよ」

「……………」

は、はは…、ホント相変わらずだよな……。

こなたらしい答えだ…。

別にふざけてるわけじゃない。

こなたは自然に、そして素で言っている。

だからこそ嬉しさがこんなにも湧き出てくるんだ。

一年前の俺は多分こうなることは夢にも思わなかっただろう。

みんなといるのがこれほど楽しいとは思わなかっただろう。

辛かった時、俯いた時の方が多かったかもしれないが、みんなと一緒にいれて本当に幸せだった。

みんなみたいな友達がいて幸せでないはずがなかった……。

「こなた……、みんな……………」

「ん？ どしたの椿君」

「たまにでいいからさ、これから俺の家に来ていよな……」

「そんなの当たり前じゃん」

こなたの答えにみんなが頷く。

それを見て俺は本当に嬉しかった……。

「ありがとう……」

なあみんな ……

俺さ…めちゃくちや幸せだった ……

心からそう思うよ ……

人生の宝物を見つけた ……

みんなと過ごした日々 ……

たくさんの幸せを
……

「椿君遊ぼう!!」

ありがとう
……

最終話 新しい春（後書き）

今まで長い時間をかけて読んでいただき誠にありがとうございました
た m () m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5641g/>

らき すた 我が家に大集合!? “ 幸せをありがとう ”

2011年4月15日03時14分発行